桜井谷窯跡群２－17窯跡

－ 府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告 －

1982年12月

少 路 窯 跡 遺 跡 調 査 団

2-17窯　検出状況

桜井谷窯跡群２－17窯跡

― 府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告 ―

1982年12月

少 路 窯 跡 遺 跡 調 査 団

序　　文

豊中市の北東部は、千里山丘陵の名で呼ばれる丘陵地帯であり、すでに萬葉集に詠われる島熊山を頂点にして、なだらかな陵線がかさなる景勝の地である。

この地域が、かって長い年月にわたって、人びとを魅了してやまなかった美しい景観のもとに、より古い時代の人びとの生活の様子を物語る、多くの痕跡を今にとどめていることは、大いに興味深いことである。

西歴5世紀の頃、初めて朝鮮半島からわが国に伝えられた新しい土器生産技術は、登り窯とろくろの使用を特徴にして、品質の高い生活土器を大量に生産することができる画期的な技術手法であった。この新手法による土器の生産は、まず、大阪府下泉北丘陵地帯で始められ、やや遅れて6世紀頃には、豊中の旧桜井谷地区を中心とする千里山丘陵に伝えられることとなった。そしてその後、およそ150年間にわたってこの地は、登り窯から立ちのぼる煙の絶えることのない大工業地帯として栄えたところである。

イギリスのウィリアム・ゴーランドの摂津桜井谷古墳の研究によって、この地が海外に紹介されたのは明治20年代のことであった。しかしながら、昨今の土地開発の勢いが、ここ千里山丘陵に及び、かって名勝を誇り、古代遺跡を宿したロマンの地は、今や昔日のものとなりつつある。

今回の調査は、大阪府立高校建設地内に窯跡が所在していたことから、工事着手を目前にして、豊中市土地開発公社から委託を受け、急ぎ発掘調査を行なったものである。調査を終えた今、緑の野山はその姿をとどめないが、桜井谷窯跡群を構成する少路窯跡遺跡の歴史的・文化的価値をもつ貴重な資料を得ることができたのは、誠に意義あるものであった。

おわりに、本調査の実施にあたり、ことのほかお世話になった豊中市土地開発公社をはじめ関係各位、発掘調査を快よくお許しいただいた土地所有者の方がた、また発掘調査に終始努力していただいた調査員各位、並びに学生諸君多数のご努力に対し、心からの謝意を表して刊行のことばとする。

少路窯跡遺跡発掘調査団

団長　鳥　越　憲　三　郎

例　　言

1．本書は府立少路高等学校建設工事に伴う発掘調査報告書である。

2．調査は鳥越憲三郎が豊中市教育委員会より依頼を受け少路窯跡調査団を組織し、豊中市土地開発公社と委託契約を結んで、昭和56年12月７日から翌年１月31日まで実施した。

3．整理作業は昭和57年２月から同年12月まで豊中市郷土資料室において行なった。

4．本書の執筆は窯の構造を橋本正幸、出土遺物を厚美正子、その他を柳本照男が分担して行ない、また文責を文末に明記した。
なお三辻利一氏（奈良教育大学）には、今回の出土遺物および他の桜井谷窯跡群の出土遺物の胎土分析をお願いし、結果報告を寄稿していただいた。記して感謝したい。

5．本書の作成について、遺構・遺物の整図は各担当者が進行させたが、遺物実測は田上雅則、山元建、沖英治、森久美子の協力を得、遺物の整図は服部聡志、木下亘の協力を得た。写真撮影は園田克也が担当し、編集は柳本照男が行ない、上田桂子、大佐古真佐江の協力を得、団長鳥越憲三郎、調査委員田代克己の指導をいただいた。

6．発掘調査にあたっては、補助員として、小嶋久夫、阪本正幸、橋本郁也、佐藤義明、松島仁(大阪経済法科大学)、田上雅則、山元建、前沢郁浩(関西大学)、竹谷俊彦、高川義明、岡崎茂和、園田克也、槙田茂、足立友成、沖英治、新田哲也の協力を得た。記して感謝したい。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の契機……1

第Ⅱ章　位置と環境……3

第Ⅲ章　調査の経過

1　目的と方法……4

2　調査日誌抄……4

第Ⅳ章　調査結果

1　窯の構造……6

2　出土遺物……12

(1)　窯体内出土遺物……12

(2)　排水溝・前庭部出土遺物……17

(3)　灰原内出土遺物……21

(4)　ヘラ記号をもつ遺物について……41

第Ⅴ章　まとめ……72

付載1　摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年……74

付載2　桜井谷窯跡群出土須恵器の胎土分析……104

挿　図　目　次

第１図　現地設明会風景……1
第２図　桜井谷窯跡群分布図……2
第３図　調査前地形測量図……5
第４図　窯体平面・断面実測図……7
第５図　２次窯灰原地形測量図……8
第６図　窯体立面図……9
第７図　灰原縦・横断面図……10
第８図　１次窯灰原地形測量図……11
第９図　窯体内焚口出土遺物実測図……13
第10図　窯体内燃焼部出土遺物実測図……14
第11図　窯体内焼成部出土遺物……16
第12図　排水溝（１～９）・窯体内２次的堆積（10～59）出土遺物実測図……18
第13図　前庭部出土遺物実測図……20
第14図　提瓶口縁部形態略図……23
第15図　装飾人形・動物実測図……24
第16図　灰原出土遺物１実測図……25
第17図　灰原出土遺物２実測図……26
第18図　灰原出土遺物３実測図……27
第19図　灰原出土遺物４実測図……28
第20図　灰原出土遺物５実測図……29
第21図　灰原出土遺物６実測図……30
第22図　灰原出土遺物７実測図……31
第23図　灰原出土遺物８実測図……32
第24図　灰原出土遺物９実測図……33
第25図　灰原出土遺物10実測図……34
第26図　灰原出土遺物11実測図……35
第27図　灰原出土遺物12実測図……36
第28図　灰原出土遺物13実測図……37
第29図　灰原出土遺物14実測図……38
第30図　灰原出土遺物15実測図……39
第31図　灰原出土遺物16実測図……40

第32図　ヘラ記号拓影１……42
第33図　ヘラ記号拓影２……43

表　目　次

第１表　灰原内出土器種別総数表……21
第２表　ヘラ記号種別表……41
第３表　出土遺物観察表……45～71

図　版　目　次

図版１　ＴＮ２―17
(1)　調査地遠景
(2)　灰原斜面
２　ＴＮ２―17
(1)　灰原遺物出土状態
(2)　灰原遺物出土状態
３　ＴＮ２―17
(1)　灰原断面
(2)　灰原断面
４　ＴＮ２―17
(1)　窯跡検出状況
(2)　最終時期窯跡
５　ＴＮ２―17
(1)　最終時期遺物残存状態
(2)　前庭部断面
６　ＴＮ２―17
(1)　焼成部断面（ヨコ）
(2)　焼成部断面（タテ）
７　ＴＮ２―17
(1)　焼成部断面（ヨコ）
(2)　燃焼部窯体断面

図版８　ＴＮ２―17

(1)　１次窯跡全景

(2)　１次窯跡（断ち割り後）

図版９　ＴＮ２―17　窯体内出土遺物

図版10　ＴＮ２―17　窯体内出土遺物

図版11　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版12　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版13　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版14　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版15　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版16　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版17　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版18　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版19　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版20　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版21　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版22　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

図版23　ＴＮ２―17　灰原内出土遺物

第Ⅰ章　調査の契機

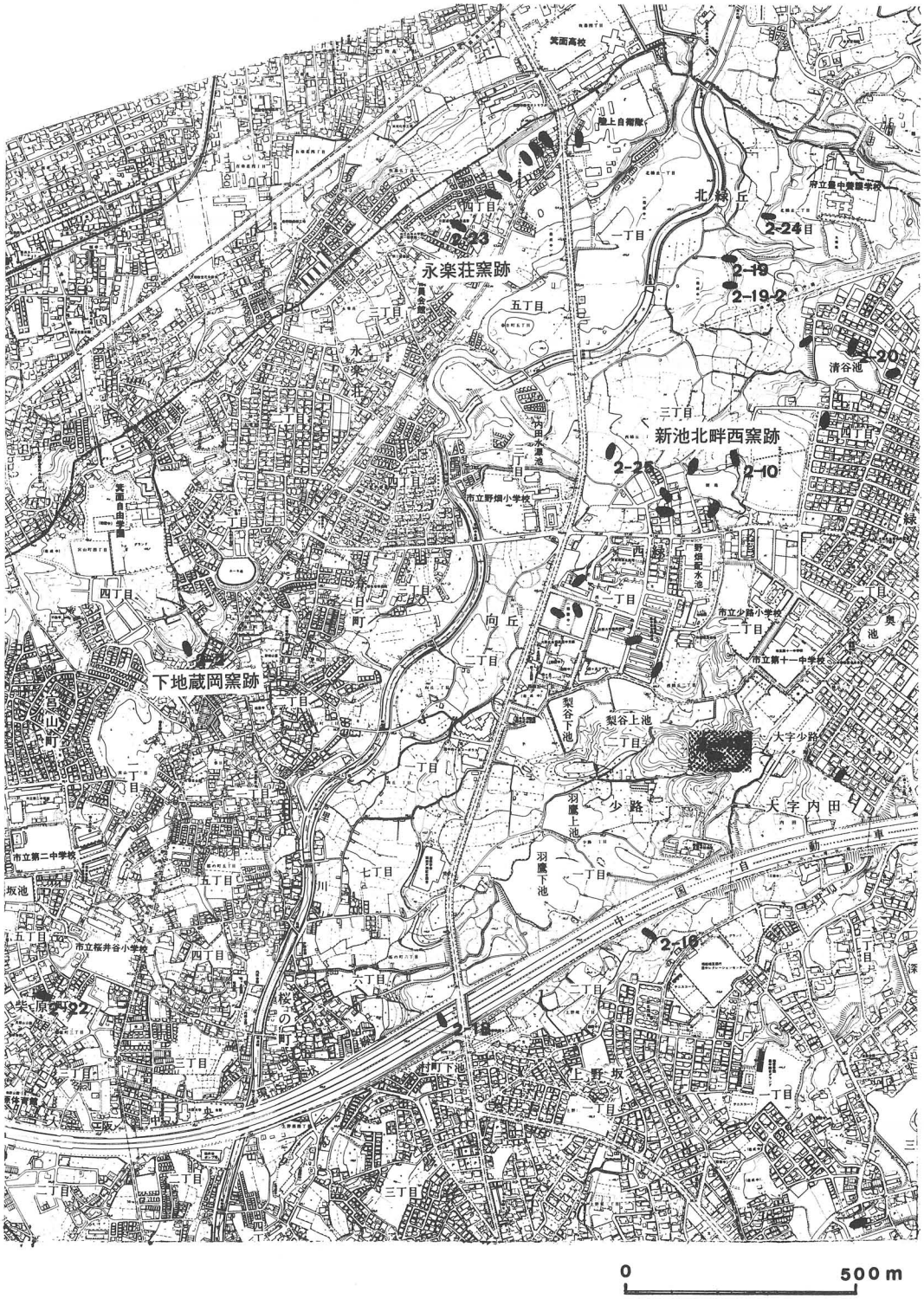
今回の調査は府立高校建設工事に伴って実施したものである。この地域一帯は古墳時代後半の須恵器生産地帯として著名な地域であるが、このたびＴＮ２―17（通称坊主山窯跡）として周知されている窯跡が府立高校建設予定地内に含まれるため事前協議を重ねた結果、当窯の東側を南北に走る都市計画道路、また造成工事等の関係も含め、保存処置はむずかしいと判断された。しかし、良好に窯跡が残存している場合は校舎の設計変更を行ない、保存を計るとの結論を得たので、とりあえず窯跡の範囲、残存状況等を調べるために実施したものである。

なお、調査は豊中市土地開発公社より委託を受けて、当調査団が昭和56年12月７日から昭和57年１月31日まで実施したものである。調査団の構成は下記の如くである。

調査団の構成

団長	鳥越憲三郎	文学博士・大阪教育大学名誉教授・大阪府文化財保護審議会委員・豊中市文化財保護委員会委員長
調査委員	田代克己	帝塚山短期大学教授
〃	山村　勲	豊中市教育委員会社会教育部長
調査員	柳本照男	豊中市教育委員会社会教育課員
〃	橋本正幸	豊中市教育委員会社会教育課嘱託
〃	木下　亘	国学院大学博士課程
〃	厚美正子	豊中市教育委員会社会教育課嘱託
事務局	富田　喬	豊中市教育委員会社会教育部次長

第１図　現地説明会風景



第２図　桜井谷窯跡群分布図

第Ⅱ章　位置と環境

ＴＮ２―17窯跡は豊中市少路２丁目、通称坊主山（標高約80ｍ前後）に立地する。この地域は千里丘陵の西側にあたり、万葉集にもすでにその名が見い出される島熊山を頂点として、なだらかな稜線が幾重にも交錯する風光明媚な景勝の地である。このような丘陵と谷地形によって形成された当地域は猪名川の支流・千里川の上流にあたり、特に桜井谷と呼ばれ、縄文時代以降散在的に遺跡が存在する地域である。

縄文時代の遺跡としては後期前半の中津式土器を中心として出土する野畑遺跡が千里川の左岸標高約50ｍの河岸段丘上に立地し、南方の上野町付近には石器散布地の上野遺跡などが所在する。弥生時代においては千里川の右岸標高約45ｍに中期の野畑春日町遺跡が所在する。市内の弥生時代遺跡の中で最も奥まった所に位置している。古墳時代の集落は猪名川の左岸に前半期が、豊中台地の縁辺部に後半期の遺跡が散在的に確認されている。古墳に目を転じると、窯跡の西方約２kmに待兼山古墳が旧山陽道を望むように箕面市側に面して築造され、千里川の右岸、平野部に移行する刀根山丘陵の先端に御神山古墳が位置する。その他、西摂平野を望む台地の縁辺部に新免上佃古墳、大石塚・小石塚古墳と続き、中期の桜塚古墳群を形成する。後期古墳は南方約２kmに新免宮山古墳群が所在するが、特に桜井谷古窯跡群と密接に関係する太鼓塚古墳群、春日宮山古墳群が北東約１km、千里川の対岸標高約60ｍに位置する。このうち太鼓塚古墳群は主に須恵質の陶棺を内部主体とする点に特徴があり、須恵器生産者集団の奥津城としてとらえられる。

ただ残念なことに調査された古墳は太鼓塚古墳群中数基にすぎず、あとはいつしか破壊されてしまったとのことである。ちなみに伝承によると、両古墳群あわせて30基以上存在していたといわれる。窯跡もこの桜井谷を中心に百基近く存在していたようであるが、確認されているのは28基、そのうち残存するのは10基たらずの状態である。また工房址も集落も未確認である。この桜井谷古窯跡群中の新しい時期の窯は瓦も焼いており、７世紀中葉創建とされる金寺山廃寺（新免廃寺）に使用されている。このように、この地域は奈良時代に至るまで土器生産地帯であることが窺われ、以後衰退していく地域である。この生産者集団を統率していた氏族として桜井宿禰が想定されている。

（柳本）

参考文献　豊中市史　第１巻

第Ⅲ章　調査の経過

1　目的と方法

窯跡は丘陵の頂部に部分的に焼土を露出させ、北斜面と西斜面に窯壁および多くの須恵器片が散乱しており、かなり崩壊が進んでいることを想定させた。したがって窯の残存状態、複数想定、方向、灰原の状態などを考慮しながら地形に沿って５ｍ方眼網を設け、基準杭を設定した。地区呼称は南北をアルファベット、東西をアラビア数字により、それらを組み合わせてＡ―１、Ｂ―２、…などとし、地区名称は北東杭を基準にした。

2　調査日誌抄

昭和56年

12月７日　本日より調査に入る。地形測量

10日　表土剝ぎ

11日　窯体検出、北側部分の側壁崩壊している。西から東方向に築造している。西側扇形に灰原がひろがる。

14日　北側斜面に焼土、窯壁流出している。焚口付近楕円形の落ち込み検出。

16日　焚口炭灰層精査、燃焼部埋土除去、南壁残存状態良好。

17日　焚口断面図作成、Ａ～Ｆ―８～11灰原削去中、灰層の下部に酸化層ある。

18日　燃焼部精査、灰原第２層より多量の遺物出土。

20日　第２次窯の平面実測、最新使用の焼成部床面出土の遺物実測。

23日　窯体写真撮影のため清掃、灰原を削除。

24日　窯体の写真撮影。

25日　平面実測のために遣り方設定。

26日　第２次窯の最新使用面、平面実測、地形の測量開始。

28日　窯体平面の実測完了、灰原削除中、前庭部精査、仕事納め。

昭和57年

１月４日　初出、灰原削除中。

６日　Ｄ・Ｅ―９～11地山面検出中、焚口の南北断面図を作成。

８日　燃焼部、焚口の灰層を削除。

10日　焼成部床面の削除を始める。

12日　焼成部精査中。

14日　第１次窯の灰原検出中、焼成部北断面の実測。

1月17日　第1窯まで完掘、灰原面の検出完了。

18日　第1窯体清掃、写真撮影。

19日　平面実測。

20日　窯体断ち割りを行なう。

22日　最終的な地形測量を行なう。

24日　断ち割り完了。地形測量完了。

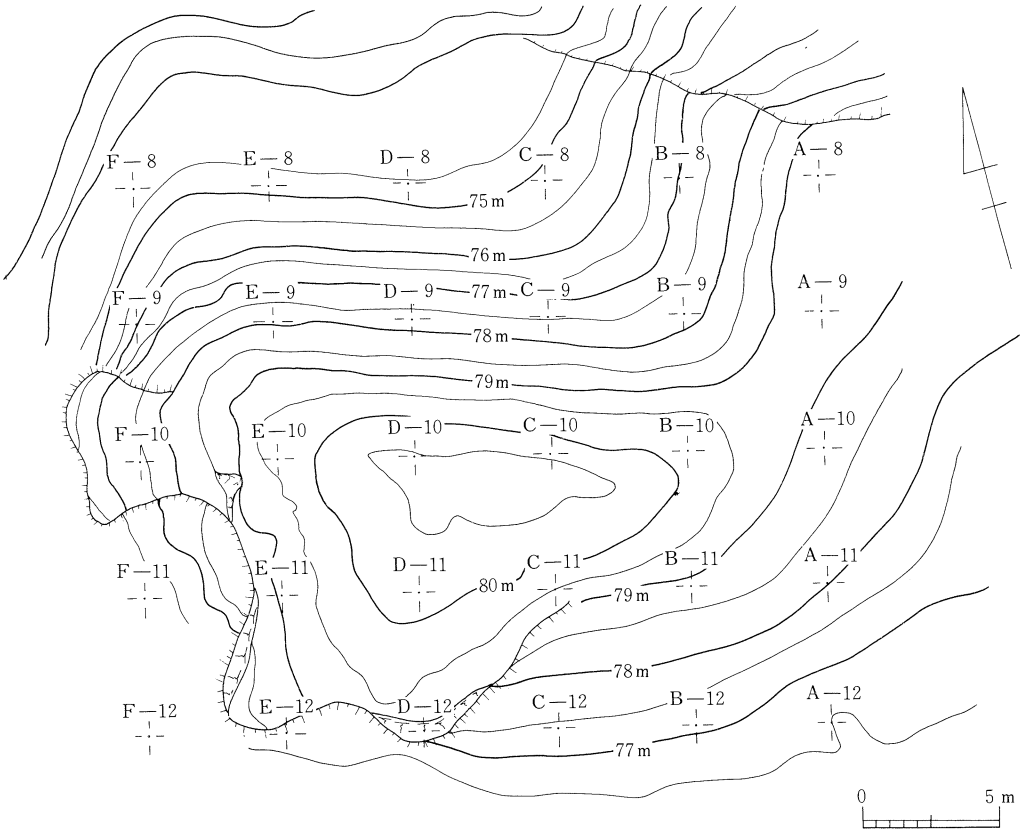
25日　窯体断ち割り断面図実測。

26日　補足作業、外業調査完了。

31日　現地説明会。

2月4日　現地引越。

以後整理作業、報告書作成作業に入る。　（柳本）



第3図　調査前地形測量図

第Ⅳ章　調査結果

1　窯の構造

坊主山窯跡（ＴＮ２―17）は、尾根部末端の西斜面に立地している。窯体は東西方向に位置しており、上位大阪層群を基盤とする洪積層を掘り込んだ半地下式構造の窖窯である。

窯体の遺存状態は極めて悪く、軟弱な丘陵斜面に構築されて、窯体の大部分は流失、および開墾により北側斜面に窯壁が散乱していた。窯体は主軸ラインにより南側下半部の焚口から燃焼部・焼成部へ移行する変換点にかけて残存していた。窯体の主軸方位は、Ｎ―73°―Ｅ、主軸ラインでの現存長 6.2m、床面現存幅 2.2m、床面傾斜角20°前後、焚口床面標高77.4m を測る。

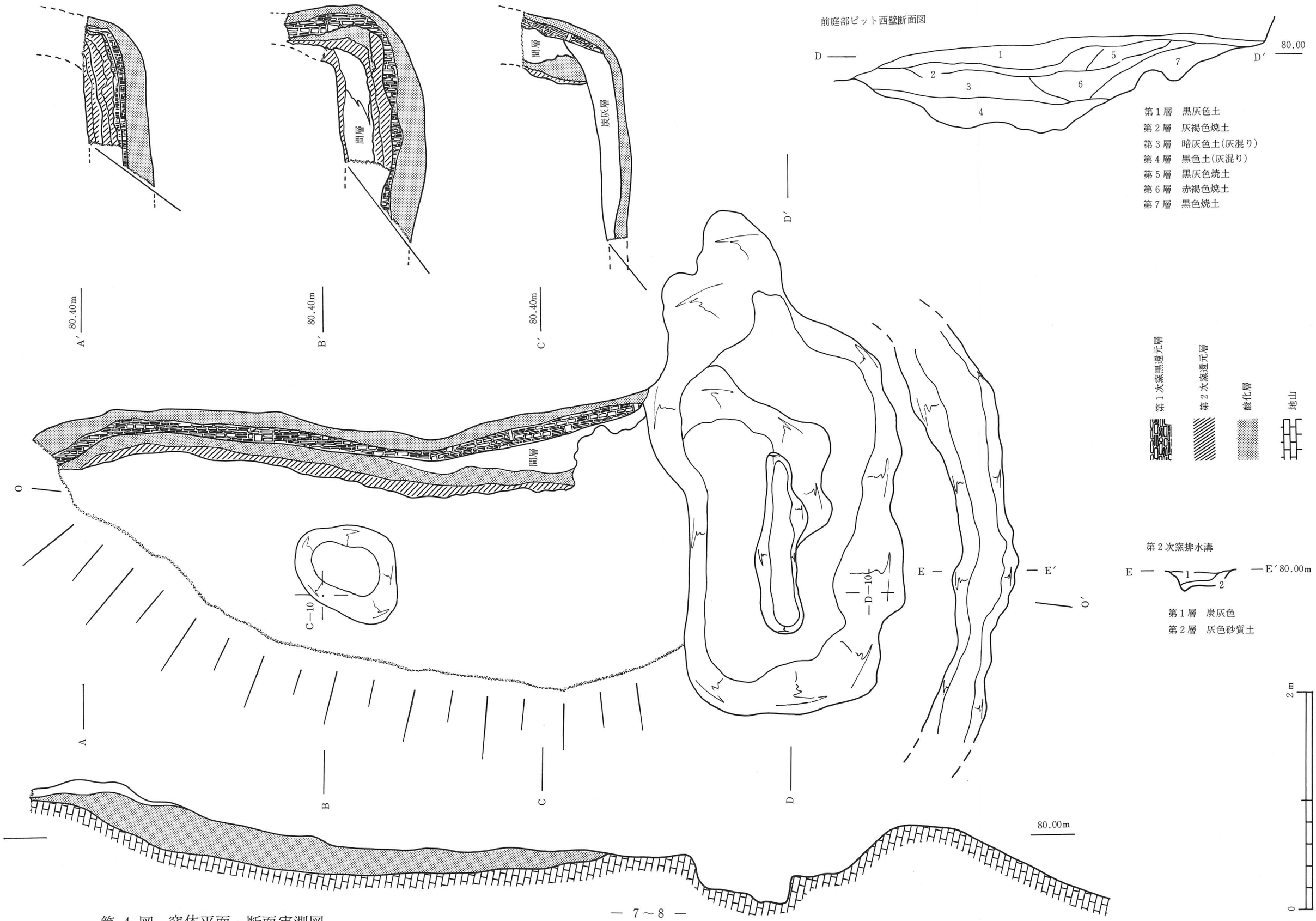
焚口・燃焼部

焚口から燃焼部にかけて南側壁は残存しており、北側壁は崩壊している。第１・２次窯の焚口壁は赤褐色に焼固する。第１次窯の焚口は、やや南側に傾斜し「ハ」字形に開口する。残存壁高 0.8m、焚口復原幅 3.0m を測る。Ｃ―Ｃ′ラインの燃焼部の側壁は、第１・２次窯の還元焼固したスサを混じえる粘土を２枚貼付けた還元壁である。還元壁間には、酸化層（ 0.2m）、間層（ 0.3m）が重複する。第１次窯の残存壁高（ 0.8m）、貼壁１枚（ 0.1m）床面は還元焼固した地山面で、焚口から燃焼部にかけて水平な床面を呈する。燃焼部の中央で床面は赤褐色に焼固化し、焼成部の変換点付近の床面に、小規模なピット（直径 0.9m、深さ 0.1m を測る浅いピット）を検出した。

第２次窯期は残存高 0.6m を測り、貼壁１枚で床面は第１次窯の堆積層からなる軟質性の炭灰層（ 0.2m）で構成されたベースである。ベース上面には、窯体崩壊土による焼成土・還元ブロック、須恵器などが混在する２次的な崩壊土が残存壁上面まで堆積していた。

焼成部

焼成部の残存状態は悪く、若干残存するのみであった。残存長 2.0m、最大幅 1.6m、床面の第１・２次窯傾斜角４～10°を測る。Ｂ―Ｂ′ラインでは、燃焼部から焼成部変換点付近で、第１次窯繰業期の残存壁・床（ 0.1m）にかけて１枚で構成され還元焼固する。第２次窯繰業期段階には、２～３枚の還元焼固した貼壁・床が認められる。Ａ―Ａ′ラインの南側還元壁はほとんど流失し、床面と側壁の接点に薄い酸化層を若干挟んでいる。第１・２次窯期のベースは、還元焼固した粘土と微細砂を５枚程度床に貼り付けている。第１次窯繰業期段階のベース面で、Ⅱ―３・４型式[註1]段階の須恵器を包含していた。第２次窯期のベース面では、Ⅱ―４～６型式段階の須恵器生産を行なっており、Ⅱ―６型式段階において廃窯したと考えられる。

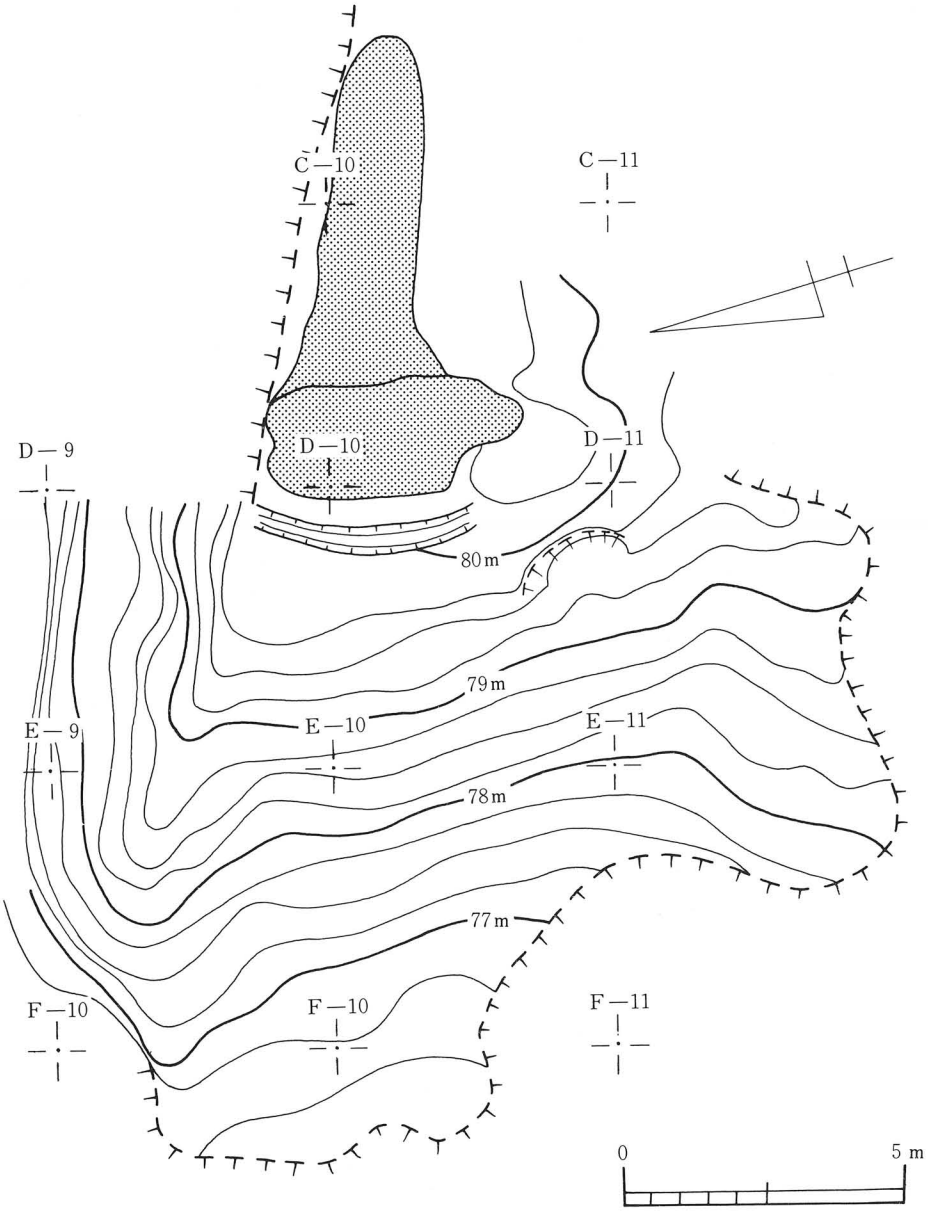


第 4 図　窯体平面・断面実測図

前庭部

窯体主軸ラインで残存状態の良い前庭部、楕円形ピット（長さ 2.0m、幅 4.6m、深さ 0.3m）を検出した。

第１次窯繰業期の前庭部は、地山上層斜面に１m前後の客土を盛り上げてテラス面を形成している。第２次窯繰業期段階の前庭部は、第１次窯期の２次的堆積土によって緩やかなテラス面で区画されている。前庭部ピットは焚口の両端から地山を掘り込んでいる。ピットの南肩には、１本の細杭が斜め方向に打ち込まれていた形跡を残すが、性格については明確ではない。埋土



第５図　２次窯灰原地形測量図

は、ブロック状に堆積する焼土、炭灰層からなる埋土である。

溝状遺構

前庭部（テラス）の第１次窯繰業期の堆積層上面を切り込んだ第２次窯繰業期段階の溝状遺構[註2]を検出した。溝幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。埋土は黒色砂質灰層からなる。溝の両端は遺存状態が悪く、溝の性格については明確ではない。焚口後方に設定された排水溝的な施設の可能性が強いと考えられる。

灰原

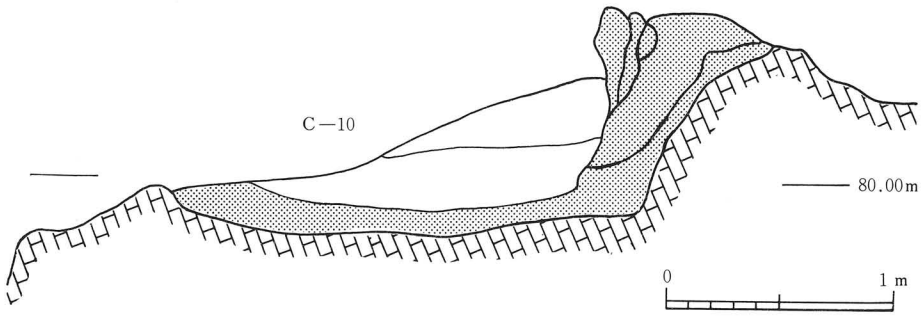
黒色砂質灰土層（灰原）は、主軸ラインより焚口から西側面にかけて扇形を呈しながら、第１・２次窯繰業期の灰原は分布していたと考えられる。西部地域のＥ～Ｆ－９～11地区は攪乱、自然流失によって灰原全域の分布範囲は明確ではなかったが、主軸ライン付近が比較的に厚く堆積する傾向であった。

第７図のセクションに図示したが、第４層までに大別される。表土層、第２層、黒色砂質炭灰土層（ 0.9m）は、主軸ライン付近に１m前後の燃焼土、剝落した還元壁が混在するブロック層からなる第２次窯繰業期段階の堆積層である。出土する大部分の須恵器は、Ⅱ－４～６型式段階の須恵器であるが若干、第１次窯期の須恵器も混在している。第３層、赤褐色砂質焼土層（ 0.5m）、黄褐色砂質土層(0.5m)、暗灰色砂質灰層（0.2m)の互層で構成された第１次窯繰業期段階の堆積層である。

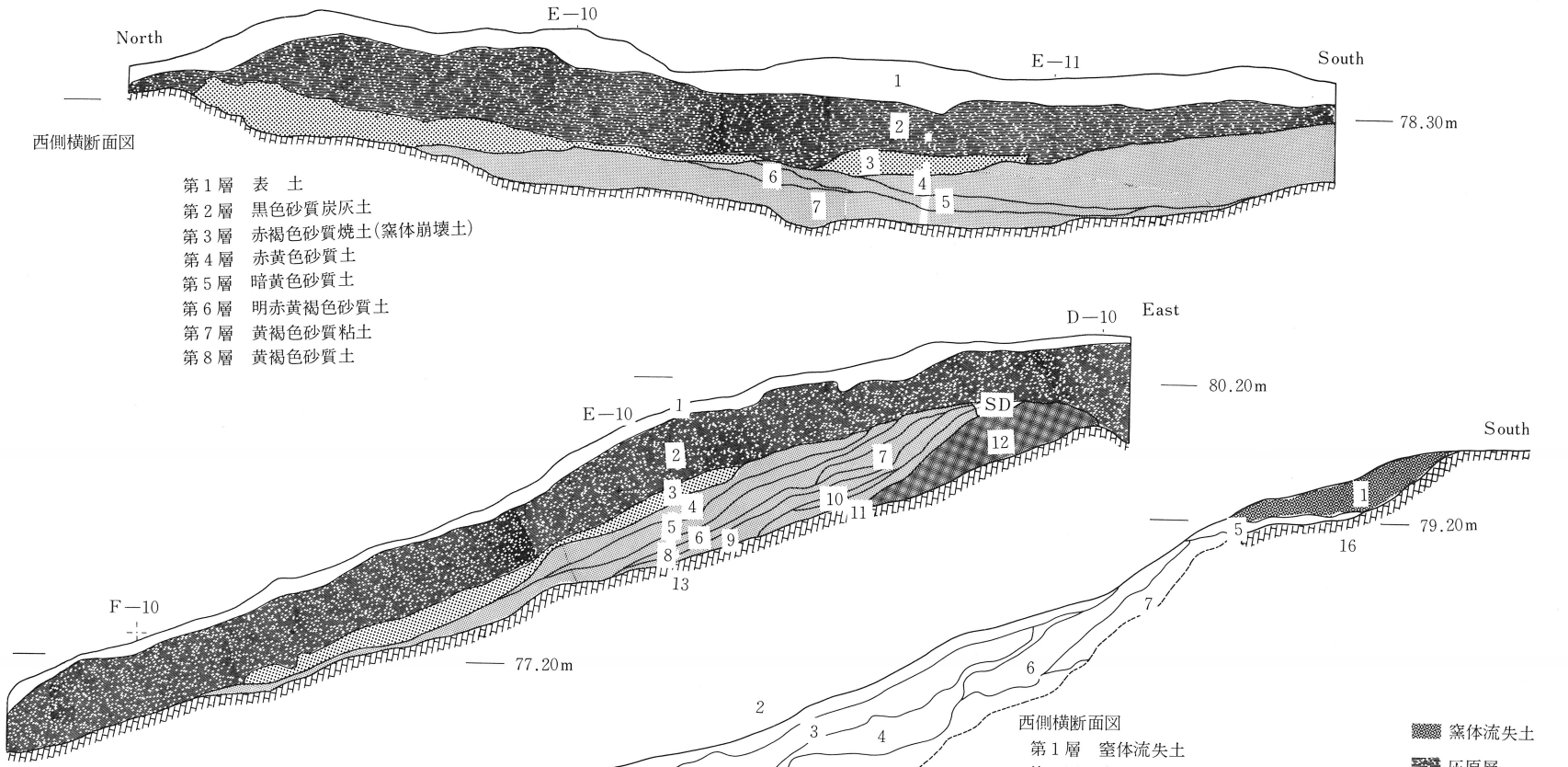
第１次窯繰業期段階の前庭部の傾斜面に堆積する須恵器は、Ⅱ－３～４型式段階の須恵器を包含する。したがって第１・２次窯繰業期段階の堆積層内では時期的な型式差が認められた。しかしながら、傾斜面に堆積した須恵器なので自然の流出や人為的に遊離している可能性も強い。第４層、黄褐色砂質土層からなる。（橋本）

註１　中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　1978

註２　前庭部後方に排水的な施設を伴う溝は、和泉陶邑古窯跡群、摂津千里古窯跡群などで多数の排水溝が検出されている。



第６図　窯体立面図



西側横断面図

第１層　表　土
第２層　黒色砂質炭灰土
第３層　赤褐色砂質焼土(窯体崩壊土)
第４層　赤黄色砂質土
第５層　暗黄色砂質土
第６層　明赤黄褐色砂質土
第７層　黄褐色砂質粘土
第８層　黄褐色砂質土

南側縦断面図

第１層　表　土
第２層　黒色砂質炭灰土
第３層　赤褐色砂質焼土(窯体崩壊土)
第４層　赤黄色砂質土
第５層　明赤黄褐色破質土
第６層　黄褐色砂質粘土
第７層　黄色砂質土
第８層　黄色砂質土(木炭混り)
第９層　明黄色砂質土
第10層　黄色砂質土(木炭混り)
第11層　暗灰色砂質灰土
第12層　黄色粘質土(白灰色粘土ブロック混り)
第13層　黄褐色砂質土

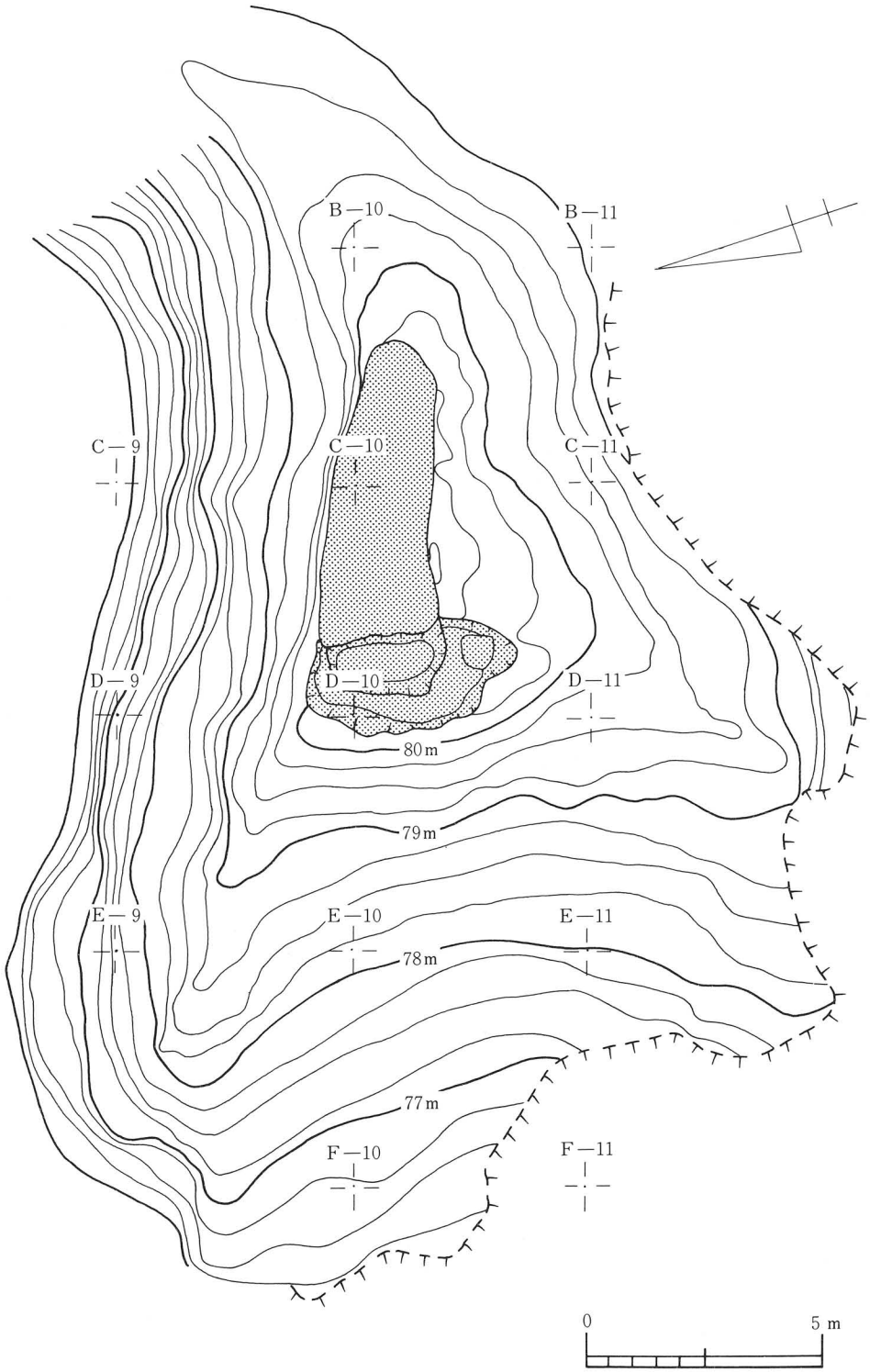
西側横断面図

第１層　窯体流失土
第２層　表　土
第３層　黄白色砂質土
第４層　暗赤色砂質土(酸化ブロック混り)
第５層　酸　化　層
第６層　赤茶色砂質土(酸化ブロック混り)
第７層　赤色砂質土(酸化ブロック混り)
第８層　赤褐色砂質土
第９層　黄灰褐色砂質土
第10層　黄灰色砂礫土
第11層　黄灰色微砂土
第12層　黄白色微砂土
第13層　赤灰色微砂土
第14層　赤灰色微砂土
第15層　赤褐色砂礫土
第16層　黄褐色砂質土

窯体流失土
灰原層
第１次窯堆積層
盛　土
地　山

0　2 m

第７図　灰原縦・横断面図



第８図　１次窯灰原地形測量図

2　出土遺物

出土遺物は、窯体内床面（各層）および埋土と排水遺構埋土、また前庭部、灰原から出土したもので、大量の須恵器と窯壁、土師器の細片１点である。須恵器の器種は杯蓋、杯身、高杯、瓿、短頸壺、甕、提瓶、摺鉢などがあるが、杯が多く、次いで甕が圧倒的多数を占める。

以下、遺物は出土位置により、窯体内、排水遺構、前庭部、灰原に分けて述べることにする。なお、個体数が多いので、個々の法量、特徴などは観察表に記した。

(1) 窯体内出土遺物（第９・10・11図、第12図10～59）

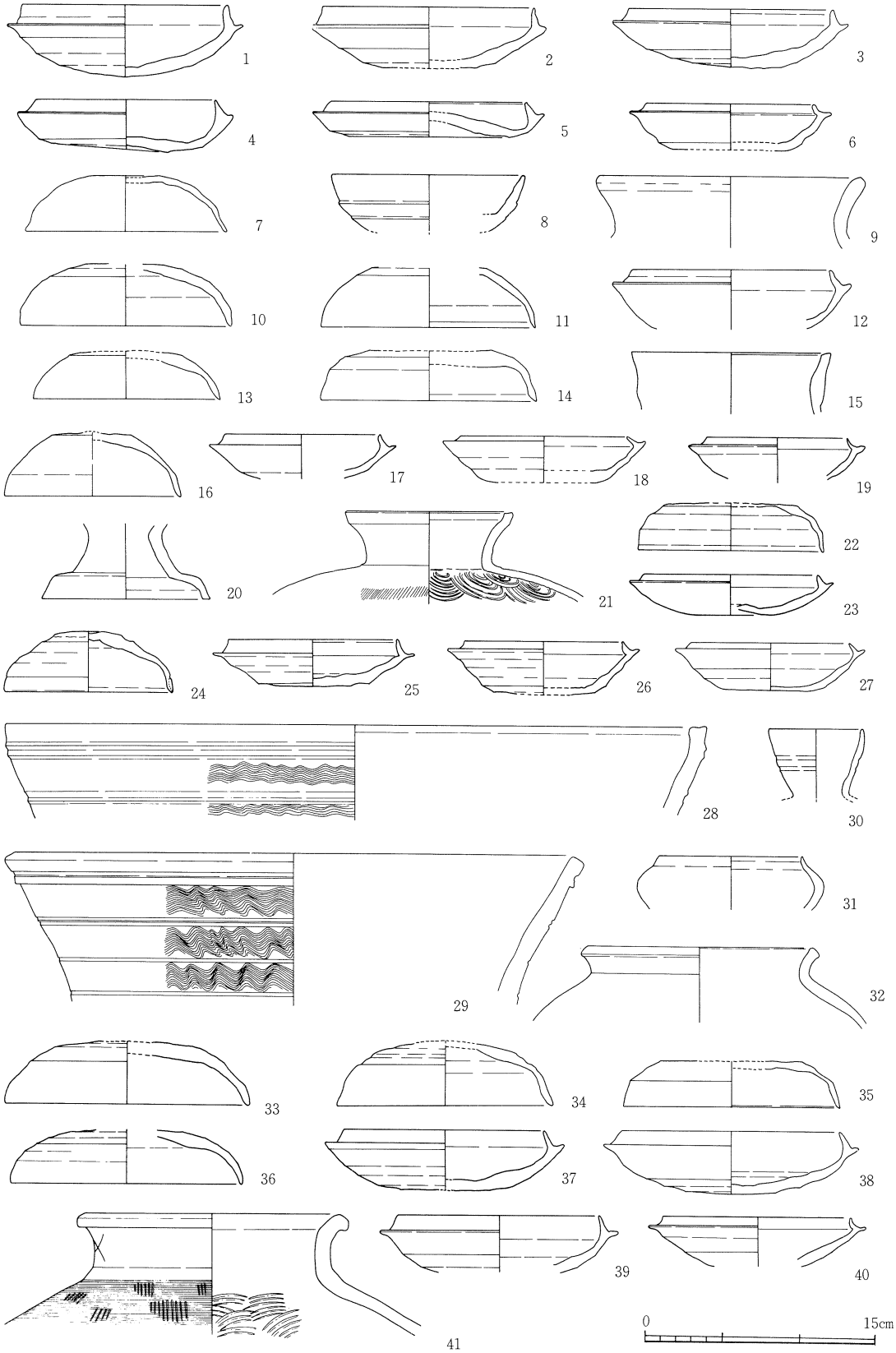
窯体内に関しては、焚口、燃焼部、焼成部、窯体内２次的堆積（主として燃焼部）に分け、各々下層のものから図示した。ただし、器種の判別できるものは、可能な限り図示したので、焼け歪んでいたり、破片のため計測値に若干の誤差が生じているものがある。

焚口（第９図）　１～９は炭灰層、10～12は中層、13～15は焼土、16～21は上層、22・23は黒茶色砂質土層、24～32は黒色灰層、33～41は２次的堆積層から出土している。

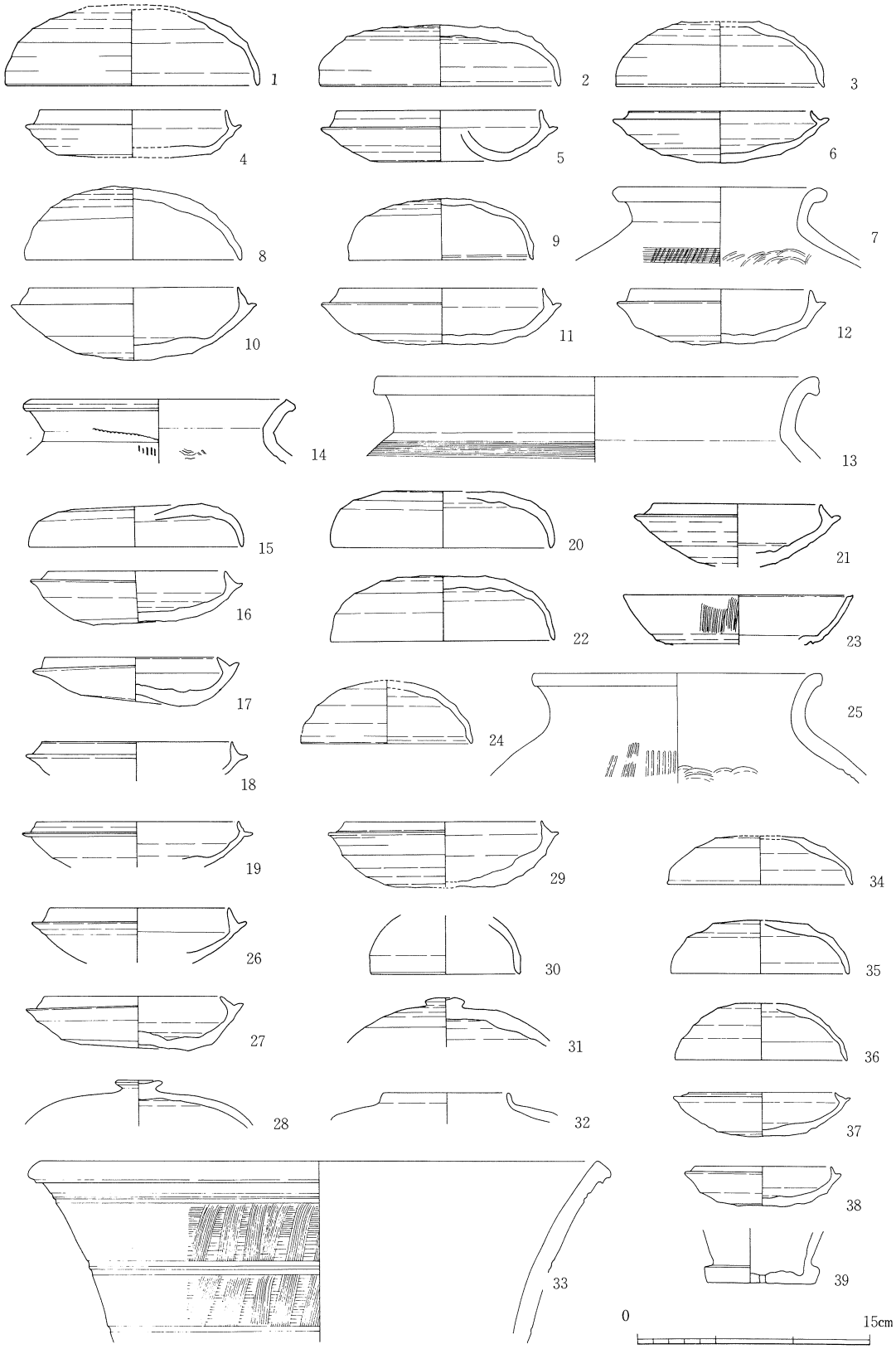
杯蓋は、出土層位によって多少の差が出ている。２次的堆積層を除き、口径は13.5cm前後のものと、11～12cmの小型のものに大別され、おおむね下層のものほどやや古い様相を示している。前者は器高が 3.6～ 4.0cmを測り、天井部にヘラケズリ調整、他面はナデにより仕上げが行なわれている。後者は器高が約３cmと約４cmに分かれ、器高の高いものは、天井部中央が高く盛り上がり未調整である。また24は、一旦成形後、天井部と口縁部外面にうすく粘土を貼付し、器形を整える方法をとっている。２次的堆積層中のものは口径が14～16cmあり、焚口内では古い段階の様相を示している。杯身は口径が13～14cm程度で、たちあがりがわずかに内傾しながら上方にのびるものと、口径が10～11cm程度で、たちあがりが 0.8cm以下で内傾する小型のものに大別される。高杯は２点で、総じて窯体内からの出土は少ない。８は無蓋高杯で浅い杯部外面に２条の凹線が巡る。20は脚部であるが、内傾したのち下外方に下り、裾部付近で外方へ開き屈曲して下方に下る。端部は接地する面を成す。甕は口径が15.4～17.6cmを測るものと、40cm前後の大型が出土している。前者は外反気味の口頸に端部が肥厚する口縁部がつく。大型甕は上外方にのびる口頸部に凹線によって区分された文様帯に波状文を施し、口縁部は断面四角形で端部は平面をもって終わる。その他に、提瓶の口頸部と短頸壺、横瓶が各１点出土している。

燃焼部（第10図）　燃焼部は細かく分層されていたものを６層にまとめ、焚口と同様に下層に近いものから順次図示した。１～７は黒色灰層、８～13は酸化層、14～19は第１～第３床面、20～25は灰層、26～28は上層、29～39は覆土の第１層と第２層からの出土である。

杯蓋の口径は11～16.5cmの間であるが、14～15cmと11～12cmに偏っている。前者は天井部の



第９図　窯体内焚口出土遺物

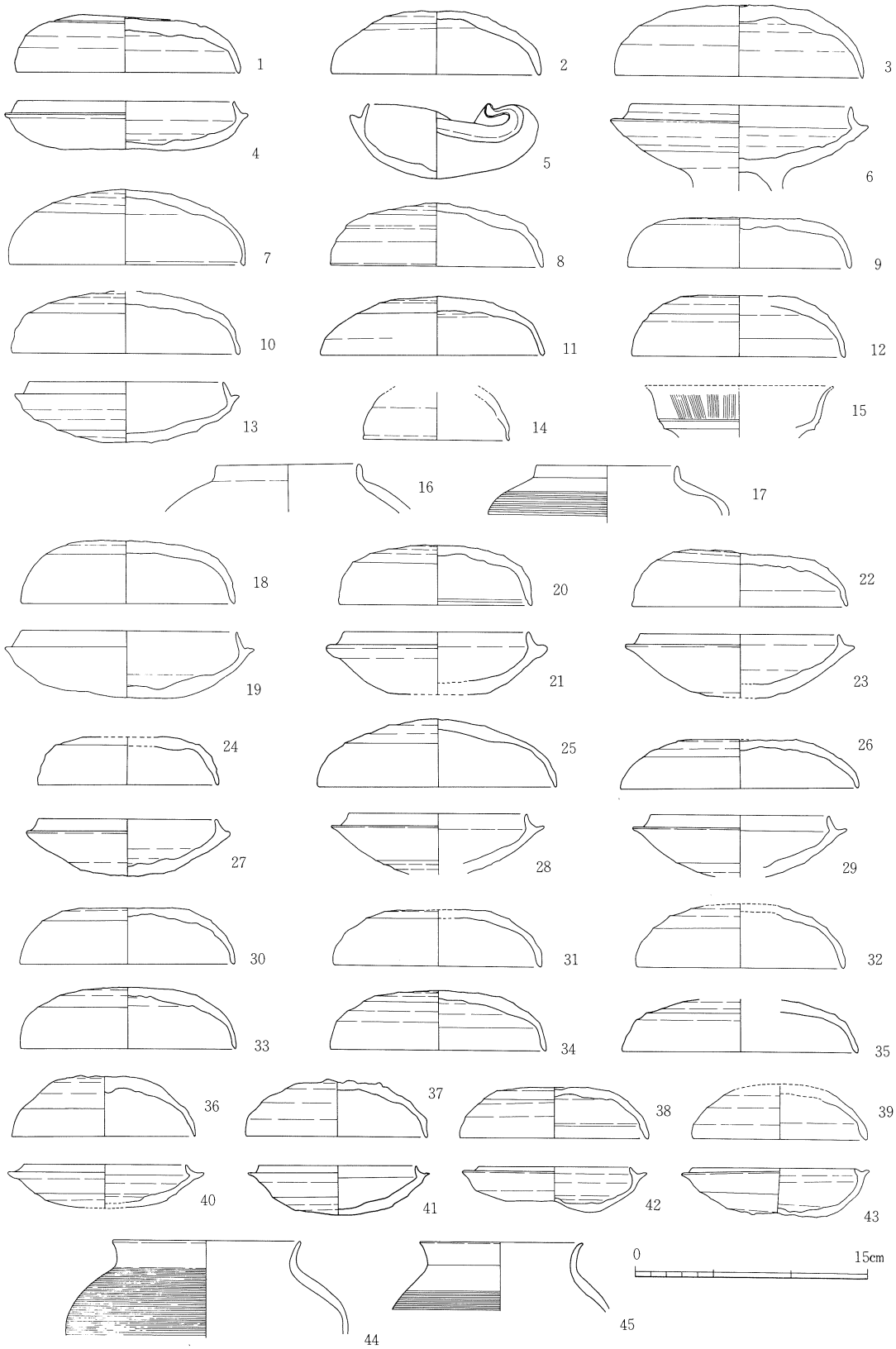


第10図　窯体内燃焼部出土遺物

平らなものと丸いものの２種類がある。口縁部は高さが２cm前後で内弯気味に下るものが多い。調整は天井部外面の⅔からほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行ない、他は内外面ともに回転ナデ調整である。後者は口縁部高が 1.2cm前後で、口縁部はわずかに外方に開き気味に下る。天井部は高く丸く盛り上がるものと、中央が盛り上がり平坦になるものがあるが、天井部にヘラケズリはみられない。その他の調整は前者と同様である。胎土は細砂粒を多く含む。杯身の口径は、下層から出土したものでは13.5cm程度が多く、中層では11～12cm、上層では９cm前後である。口径が比較的大きいものは 1.2cm程度のやや内傾するたちあがりを有し、底部にはヘラケズリを左まわりに他面には回転ナデ調整を行なう。中層のものはたちあがりが下層のものに比べやや短くなり、１cm前後で内傾度が増す。口径の小さな杯身はたちあがりが強く内傾するものと、短いが上方にのびるものがある。底部は成形後未調整である。上層から出土した高杯蓋を２点図示した。２点とも天井部のみで口縁部が欠損しているため、口径および器高は不明である。天井部中央に扁平で中窪みのつまみがつく。中層で甕の口縁部が１点出土している。上外方にのびる口縁部外面に細かい縦方向の櫛目が施されている。短頸壺も口肩部までの破片が１点上層でみられる。 0.7cm程度の短い口頸部と外方に張り出す肩部を有する。甕は口径が14cm弱の小型から36cmの大型まで比較的多くみられる。小型から中型の甕は口縁端部が外方に玉縁状、又は断面三角形に肥厚する。肩部外面には縦方向のタタキか、さらにタタキの上にカキ目を施し、内面は円弧タタキを行なう。上層で大型甕の口頸部が１点出土している。口縁端部は外方にやや肥厚し、凹線が巡る。口頸部は凹線帯の間に縦方向の櫛描き文帯が入る。その他に、壺などの蓋と小型のねり鉢が１点ずつ出土している。蓋は復元口径が 9.8cmの小型で、体部は口縁から丸く高く盛り上がる。ねり鉢はヘラケズリを行なった扁平な底部中央に穿孔しており、底径が７cm弱の小型品である。

焼成部（第11図）　第１次窯に伴う遺物を出土したのは焼成部のみで、側壁焼土層に若干の遺物が残っていた。その他は、全て第２次窯に伴う酸化層と焼土層、床面と間層である。１～６は第１次窯に伴う遺物、７～17は第２次窯・酸化層、18～23は床面、24～26は焼土層、27～45は床面各間層からの出土である。

第１次窯に伴う杯蓋を３点図示した。３点ともほぼ完形である。口径13.6～16.1cm、器高は 3.7～ 4.6cmとやや幅があり、同一層内の出土でありながら器形に統一性はみられない。第２次窯の杯蓋は第１次窯に伴う遺物と重複する時期のものもあるが、大きく３タイプに分類できる。口径は11.4～15.5cmであるが、15cm以上の口径の大きいものは天井部が比較的高く盛り上がるものが多く、天井部外面のほぼ全面にヘラケズリ調整を行なっている。口縁部は下外方に下り、端部は丸い。口径が13.5～14.5cmのものは、器高が 3.5～４cm程で、下外方に下る口縁部から天井部は鈍く屈曲してやや平坦気味になる。天井部外面の⅔～⅖にヘラケズリ調整を行ない、他面は回転ナデ調整と内面中央にはナデを行なう。口径が12.6cm以下の杯蓋は器高が 3.1～3.9cmで、天井部が高く盛り上がるものと、やや低く平坦になるタイプがあり、口縁部は



第11図　窯体内焼成部出土遺物

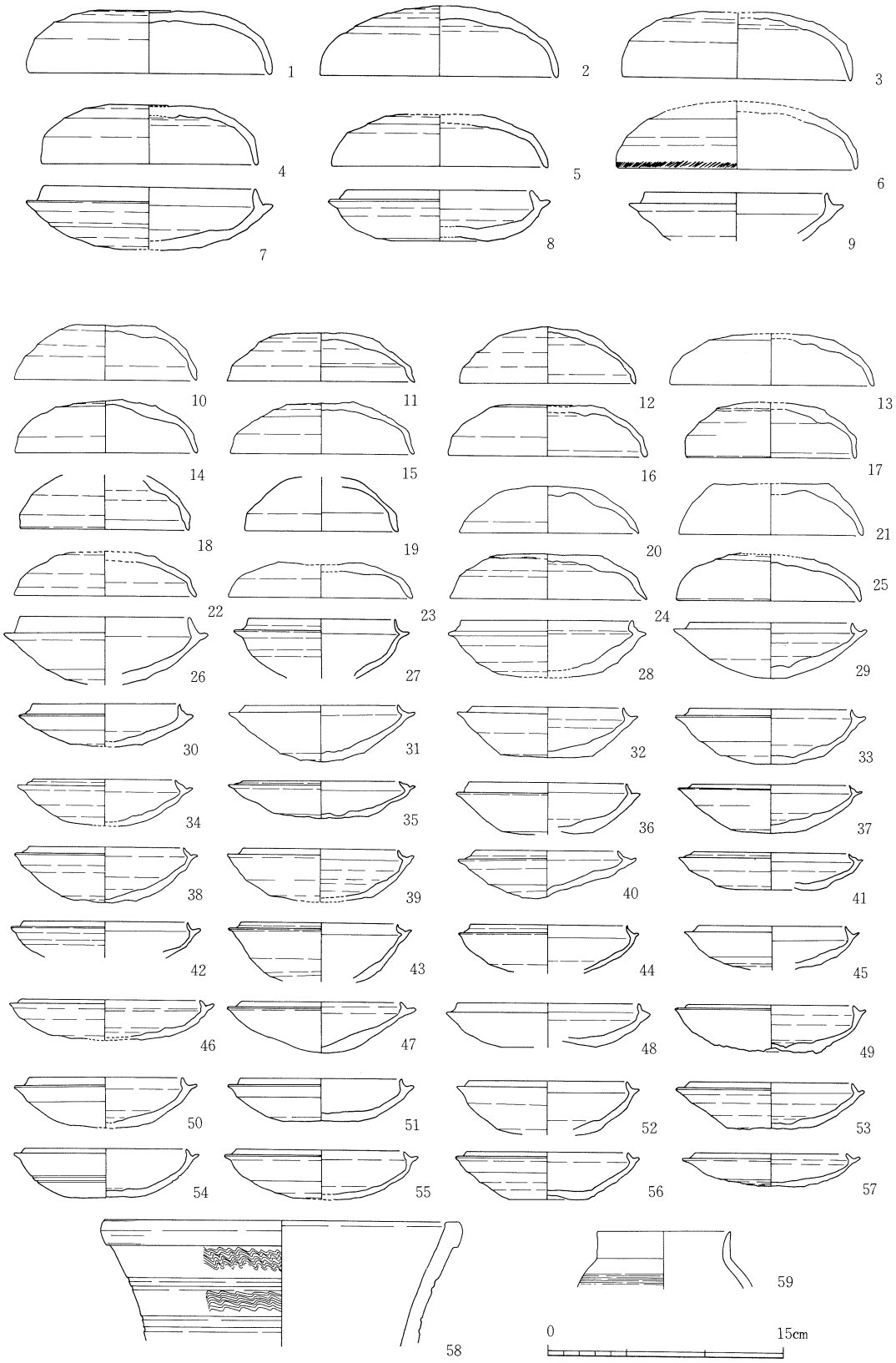
下外方に下る。天井部外面は雑なヘラケズリか未調整である。内面は回転ナデの後、中央部にナデ調整を行なう。第１次窯の杯身はほとんど破片か焼け歪みが著しく、良好な資料は第11図４の１点しかない。４の口径は14.2cmで、たちあがりは長さ１cm程で内傾しながらのびる。受部はやや上向きに外方にのびる。底部は浅く平らである。第２次窯の杯身はたちあがりの長さが１cm程で内傾気味に上方にのびるものと、たちあがりが 0.8cm前後とやや短くなり、受部以下が底部まで下内方になだらかに下るもの、口径が極めて小さくなり、たちあがりが受部とほぼ同じ長さで内傾するタイプに分かれる。

第２次窯の中で古い形態を示すものは第１次窯に伴うものと近似する。第１次窯では杯の他に脚柱部の一部が残る有蓋高杯の杯部が１点ある。杯部の形態は長くのびたたちあがりと、口径の大きさ、杯部内面の円弧スタンプなどから考えて、本窯では最古の形態を示すものと思われる。瓶の破片が１点出土しており、口頸部に７本１条の細かい櫛描き文を施している。その他には壺類がある。短頸壺は直立する短い口頸部をもち、肩部は外下方に張り出す。床面間層の壺はわずかに外反するやや短い口縁部と下外方に下る肩部をもつ。肩部にはカキ目を施している。

窯体内２次的堆積（第12図10～59）　主として焚口から燃焼部にかけて堆積したものである。ほとんど杯で本窯においては新段階の形態を示す。杯蓋の口径は 9.8～12.8cmで、11.8cm前後に偏りがみられる。器高は 3.3cm 前後が多い。形態は口縁部が開き気味に下り、天井部は高く盛り上がるものが多く、他は低い天井部の中央が平坦になるものがある。内面は渦巻状に凹凸を操り返している。天井部外面は未調整の場合が多く、中央部にうすく粘土を貼り付けたり、整形後粘土の小さな固まりを数ヶ所に貼付している例もある。杯身は口径が 9.1～11.6cmまであり、10.0～10.4cmを測るものが半数近く占める。たちあがりは長さ１cm前後で内傾しながら上方にのびるものが若干あり、他は長さ 0.7cm前後で内傾したのち中程で角度をやや上向きにかえてのびるものと、長さ 0.5cmで受部とほぼ同じ長さで内傾気味に上方にのびるものが、同程度の割合を占める。器高はたちあがりの比較的長いタイプが４cmを越えるほかは 2.1～ 3.6cmを測る。受部は外方または上外方にのび、受部以下は下内方に下り、丸く浅い底部に続くタイプと、中央が平坦気味の底部に続くタイプがある。器壁は総じて薄く、底部は成形後、未調整のものがほとんどである。杯以外の器種は少なく、短頸壺と甕を図示した。甕は上外方に長くのびる口頸部をもち、口縁端部は外方に肥厚し、断面四角形を呈し、上面は平坦な面を成す。口頸部には波状文と凹線文が入る。短頸壺は長さ約 1.8cmの上方にたちあがる口頸部がつく。肩部はなだらかに丸味をもって下外方に下り、カキ目調整を施している。

(2) 排水溝・前庭部出土遺物

排水溝（第12図１～９）　排水溝の覆土中より出土したものである。総じて量は少ないが、杯以外は細片のため図示できるものがない。



第12図排水溝(1～9)窯体内2次的堆積(10～59)

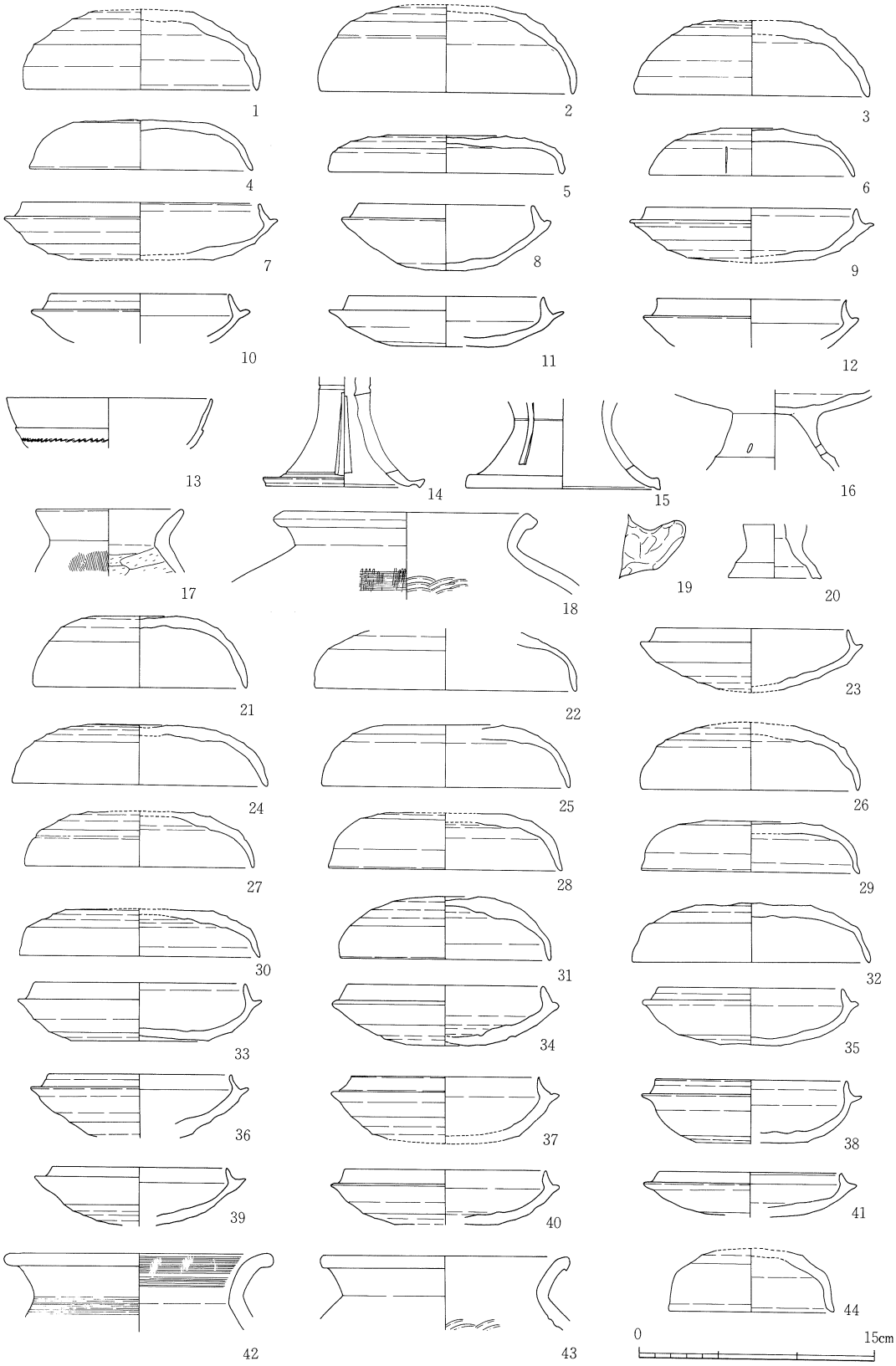
杯蓋は口径が約16cmあり、口径に比して器高が比較的低く、天井部中央がやや平坦になるもの、口径が15cm前後で、高く丸く盛り上がる天井部をもつもの、口径が約14cmで天井部はあまり高くないものがある。すべて口縁部は開き気味に下方に下る。天井部外面は左まわりヘラケズリを、他面は回転ナデ調整を行なう。第12図６のみ、口縁端部外面に櫛状のもので斜線を入れている。杯身は３点図示したが、他の２点に比して口径が大きく、たちあがりも1.1cmとやや長く内傾気味にのび底部も深いものと口径が小さくなり、たちあがりも長さ 0.8cmとやや短くなる杯身がある。前者は底部外面のヘラケズリの範囲は広く、後者は狭い。

前庭部（第13図１～44）　前庭部の灰層中より多数の遺物が出土した。１～20は下層、21～23は中層、24～44は上層で、３層に一応区分し図示したが、層位の上下による明確な差はみあたらない。

杯蓋は本窯における新段階に属する資料はなく、総じて口径が大きい。中でも大きいものは16cmを越えるが、15～16cmに集中しており、天井部は５cm前後で高く丸く盛り上がるものと、３cm前後の低く平坦なものがほぼ同じ割合である。天井部の盛り上がるタイプは口縁部が内弯気味に下る。天井部の低いものは開き気味に口縁部は下るが、両者とも天井部外面の⅗以上に左まわりヘラケズリを行ない、他は回転ナデ調整で内面中央にナデを行なっている。口径がやや小さいものは14cm前後に集中するが、これも天井部が高く丸いものと、平たくなるものがある。杯身は口径が11.3～15.4cmを測るが、ほとんど破片からの復元数値なので、口径によるタイプ分けはできない。たちあがりをみると長さ 1.2cm程度で内傾気味に上方にのびて端部の丸いもの、たちあがりがやや短くなり内傾したのち上方にのび端部の鋭いもの、たちあがりが１cm前後で内傾しながら上方にのびるものがある。いずれも底部外面にはヘラケズリ調整が行なわれている。

灰層の下層から高杯が数点出土している。無蓋高杯の杯部は体部から段をもって、口縁部はうすくなり上外方にのびる。外面には櫛描きの波状文を１条（３本）施している。高杯の脚部を３点図示（14～16）したが、14は長脚２段透しで細い脚柱部から下外方に下り、脚裾部は外方に開く。15は太い脚柱部で下外方に開く。長方形の透しが入る。16は杯部の底部から太い基部で、下外方に下り、円孔を有する。円孔下から段をもって下外方に下る。

甕は口径が16cm前後で、口頸部は外反し、口縁端部は外方に肥厚する。タタキとカキ目調整を単独または重ねて行なう。19は甑の把手であるが上向きに屈曲し、接合部からはずれている。20は壺などの脚台と思われる。44は復元口径10.5cmの蓋で、下方に下る口縁は端部付近でわずかに開き、内傾する面を成す。天井部は高く盛り上がり、ヘラケズリ調整がみられる。17は本窯出土遺物中唯一の土師器である。復元口径は 9.3cmを測る小型の甕で、「く」の字形に外反する口頸部をもち、肩部外面は右下がりの細かい刷毛目調整を、内面はヘラケズリを行なっている。赤橙色を呈する。



第13図　前庭部出土遺物

(3) 灰原内出土遺物（第16図～第31図）

灰原からは大量の須恵器が出土している。本窯での出土遺物は整理箱約450箱であるが、そのうち約400箱が灰原からの出土である。器種と数量は下表のとおりであり、杯と甕が圧倒的多数を占めるが、高杯に次いで提瓶が多いのが本窯の特徴の１つといえる。また極くわずかではあるが、灰原から陶棺と装飾人形・動物、土鈴などの出土もみられる。

灰原は10数層に細かく分層されており、土器の数量も多いため、窯体内とは異なり、器種別に分けて完形に近いものを主に図示した。

杯は灰原出土遺物総数の60％近くを占め、実測可能なものも多々あるが、そのうち杯蓋は52点、杯身は47点図示した。

杯蓋（第16図・第17図１～８）で、本窯で古段階の形態を示すものは天井部と口縁部の境にわずかに稜らしきものか、ほとんど形だけの鈍い凹線を残す。口縁端部は内面に段を有するものもある。天井部は口径に比して低く、やや扁平な感を与える。外面のヘラケズリは、天井部の⅗以上に左まわりに施されている。次段階の杯蓋は口径が総体的に小さくなっている。口縁部は内弯気味に下り、内面に段を有するものはなくなる。口縁部と天井部の稜は消失する。天井部はやや高く丸味を帯びて盛り上がる。外面のヘラケズリの範囲はやや狭まり、やや雑なものが目立つようになる。さらに次段階のものは、口径が次第に小型化しつつあるが、形態的には前段階と大きな相違はみられない。天井部外面のヘラケズリはやや広い範囲に行なうものと、中央部のみに雑に荒く行なうものがある。本窯での最終段階の杯蓋は器形が著しく小型化する。口径は11cm前後を測る。器形の小型化に比例して器壁もうすくなり、口縁の端部はやや鋭くなる。天井部外面は未調整か、極めて雑なヘラケズリをするものが多い。

杯身（第17図９～43・第18図１～12）はたちあがりの長さが 1.5cm程でわずかに内傾しながらのびるものと、内傾したのち中程で上方にのびるものが本窯での古段階に属する。ヘラケズリは底部外面の½～⅔に左まわりに行ない、他面は回転ナデと内面中央にナデ調整を施している。次段階では口径がやや小さくなり、たちあがりも短く内傾している。端部は丸く仕上げているものが多くなる。底部外面のヘラケズリの範囲は前段階と大差ないが、やや雑な感を受ける。

器　種	杯　蓋	杯　身	杯	甕	有蓋高杯	無蓋高杯	高　杯	高杯蓋
数　量	19,133	13,661	22,637	34,573	142	287	2,324	205
器　種	壺	短頸壺	蓋	器　台	脚　台	ねり鉢	甑	埦
数　量	538	278	59	43	42	27	7	6
器　種	提　瓶	平　瓶	横　瓶	瓶　子	鉢	陶　棺	不　明	総　数
数　量	1,240	7	5	4	1	7	964	96,190

第１表　灰原内出土器種別総数

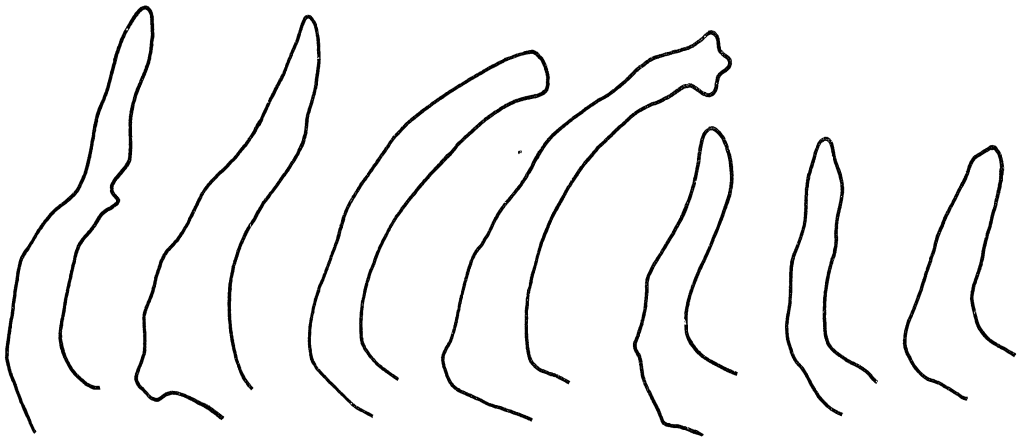
さらに次段階では口径が小型化し、たちあがりは短くなる。たちあがりの基部が太く先細り状にのびるものが目立つ。底部は浅く扁平なものが多い。調整はヘラケズリの範囲も狭くなり、内外面のナデも雑なものもある一方、幅広くヘラケズリを行ない、他の調整も丁寧なものもみられる。本窯での最終段階の杯身は口径が前段階よりさらに小型化し、10cm内外となる。たちあがりは内傾度を増し、受部と同程度の長さのものもある。底部外面は未調整のものが多い。

高杯（第18図13～34・第19図・第20図）は有蓋・無蓋ともある。前者は杯身をそのまま転用し、脚部を付けた形状をしている。有蓋高杯は杯部と脚部が、各々破片で出土しており、杯部から脚部にかけて全様のつかめるものは１例もないが、杯部の底部にわずかに残っている脚部から想像すると、基部の細い長脚になるものが多いと思われる。杯部の口径は12.9～14.7cmを測り、比較的長いたちあがりを有し底部にはヘラケズリを行ない、他面にも杯身と同じ調整を施した後、脚部を接合している。高杯の蓋は口径が14.7～16.8cmを測り、本窯での杯蓋の古段階の形態に類似している。口縁部と天井部の境に鈍い稜とも、凹線によって作られたとも考えられる稜が巡る。天井部はやや扁平で、中央につまみがつく。無蓋高杯は杯蓋を転用した如きのものと、全く異なる杯部をもつ２者がある。前者は短く外反する脚部が伴い、長方形または円形の透しが入るものもある。後者の杯部は平坦な底部から稜線を境に上外方に屈曲する口縁部をもつ。外面には２条の凹線を巡らしたもの、さらに凹線間に刺突文などの文様帯を施しているものがある。脚部は基部の細い長脚がつく。

瓶（第21図１～19）は口頸部が外反しながら長くのび、口縁部付近で段をもって外方に開いた後、再び上外方にのびる。口縁端部は内傾する面を成すもの、そのまま丸く仕上げられるものがある。口頸部には櫛または篦による文様が施されている。体部は球形またはやや肩の張る形を呈し、円孔は体部の中央よりやや上に上外方から内方へ斜めに穿孔されている。文様帯の入るものは円孔の上下に凹線とその間に刺突文が施されている。体部の下半はヘラケズリ調整されている。口径は小型のもので13cm弱、大きなものは17cm程あり、基部は細いもので約３cm、太いもので約4.5cmを測る。

壺（第21図28～33・第22図）は口頸部が約２cm以下の短頸の壺と、 2.5～４cmあるものに大別される。前者は頸部が短く直立し、肩部はやや張りをもち、つまみを伴わない口径の小さな蓋がつくものと、頸部が外反気味にたちあがり、球形またはやや扁平な球形を呈し、蓋のつかないものに分けられる。いずれも底部は丸く仕上げられている。後者は口径が8.5～10.5cmあり、やや長い頸部は直立またはわずかに外反し、端部はおおむね丸く仕上げられている。底部は丸く、脚台のつくものもある。その他に広口壺（第31図10）もある。口頸部のみであるが、大型で太い基部から内傾気味にたちあがった後、上外方に開く。口縁部は強く外反し、端部は下方に肥厚し、外面にカキ目調整をしている。

蓋（第21図20～27）は、８～12cmの小さな口径で、口縁部は下方に下り端部は内傾する段を有する。天井部はヘラケズリやカキ目を施しているが、手持ち静止ヘラケズリを行なっている



第14図　提瓶口縁部形態略図

ものが１点ある。

提瓶（第23図）は数量的には多く出土しているが、器形の全様をつかむことのできるものは少ない。大型のものは正面からみると球形またはやや縦に長い球形を呈し、側面からは背面中央が平坦な惰円形を呈する。体部には回転カキ目を施した後、口頸部を接合している。口頸部は直立した後、稜線を境に上方にのびるもの、わずかに外反しながらたちあがった後、丸味をもって上方にのびるもの、基部から外反しながらのびるもの、さらに口縁端部が上・下・外方に鋭くつまみ出されているものがある。肩部には正面の左右に口頸部の形態に関係なく、一応にカギ状の把手がつく。また環状の把手のみも出土している。小型のものは外反気味に上方にのび、端部は丸く仕上げられている。体部は正面からみると球形または楕円形を呈し、側面からは楕円形を呈し、回転カキ目あるいは回転ヘラケズリ調整をしている。肩部の把手はカギ状または環状把手がつく。以上のことから本窯においては、口頸部の形態、器形の大小による把手の形態の変化はみられない。

横瓶（第24図１～５）は俵形の体部に基部の太い口頸部がつく。体部外面は、タタキの上にカキ目を、内面は円弧タタキを施している。口頸部は直立または外反し、口縁部は外方に玉縁状に肥厚する。

ねり鉢（第24図６）は円板状の平らな底部で、中央に１孔を穿っている。外上方に広がる体部外面には回転ヘラケズリまたはカキ目を施している。

器台（第24図11～17）は復元口径が21.4～25.5cmとあまり大きくなく、外反もしくは内弯する口縁部を有する。口縁端部は外方に屈曲し肥厚するか、上方に肥厚し、凹線が巡る。外面にはタタキの上にカキ目調整をするものが多い。内面は円弧タタキが残る。脚部は長方形と三角形の透しの入る円筒形で、裾部付近で大きく外方に開くものと思われる。

甕（第24図19、第25図～第30図）は口径が約12cmの小型から約60cmの大型の甕まで大量に出土している。口径が26cm未満の小型から中型の甕は外反する２～５cm程度の短い口頸部がつく。口縁部は端部を外方に折り曲げて、玉縁状に肥厚する形のものが主流を占める。その他に、丸味をもった端部を上・下につまみ出したり、凹線を巡らすもの、外反する頸部をそのままのば

し丸く仕上げるものがある。また、長さ3cm前後で直立気味にたちあがり、上端は平面を成し壺風の口頸部を呈するものがある。口頸部はほとんど無文であるが、「＋」「‖」「｜」「×」「＼」などのヘラ記号がつけられているものがある。体部外面は平行タタキの後、カキ目調整をしているものが多い。内面は同心円もしくは円弧タタキがみられる。また1点だけであるが、肩部左右に上向きに屈曲する把手がつく中型の甕がある。大型甕は口頸部がゆるやかに長く外反し、口縁部は外方に屈曲し、さらに上・下方に肥厚させたもの、頸部から段をつけて上外方にのび上端が面を成すものがある。口頸部の外面には1本または2本からなる凹線帯を数条巡らし、凹線帯間には、櫛または篦による波状文や列点文などの文様帯が施されている。体部の内外面には平行および円弧タタキ調整を行なっている。

甑（第31図1～5）は上外方にのびる体部の中央からやや上に凹線が巡り、その凹線上に上向きに屈曲するカギ状把手がつく。底部は透しを入れた扁平な円板を貼付した後、内外面をヘラケズリ調整している。

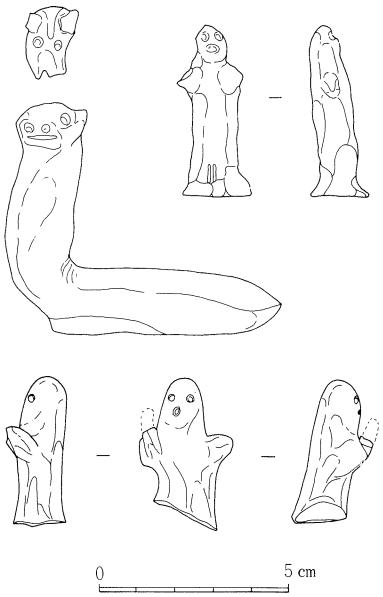
瓶子（第31図7～9）は体部の最大径が肩部付近にあり、外面は回転ヘラケズリもしくはカキ目調整をしている。口頸部は基部が細く上外方にのびる。

埦（第31図14・15・18～21）は、器高が高いものと、皿状または杯蓋を逆にしたような形をしたものがある。前者は体部に凹線が巡り、下方に屈曲する把手を貼付したものがある。後者は底部が平坦になり、体部には1～2本の凹線が巡る。口縁部は直立または外反気味にのびる。

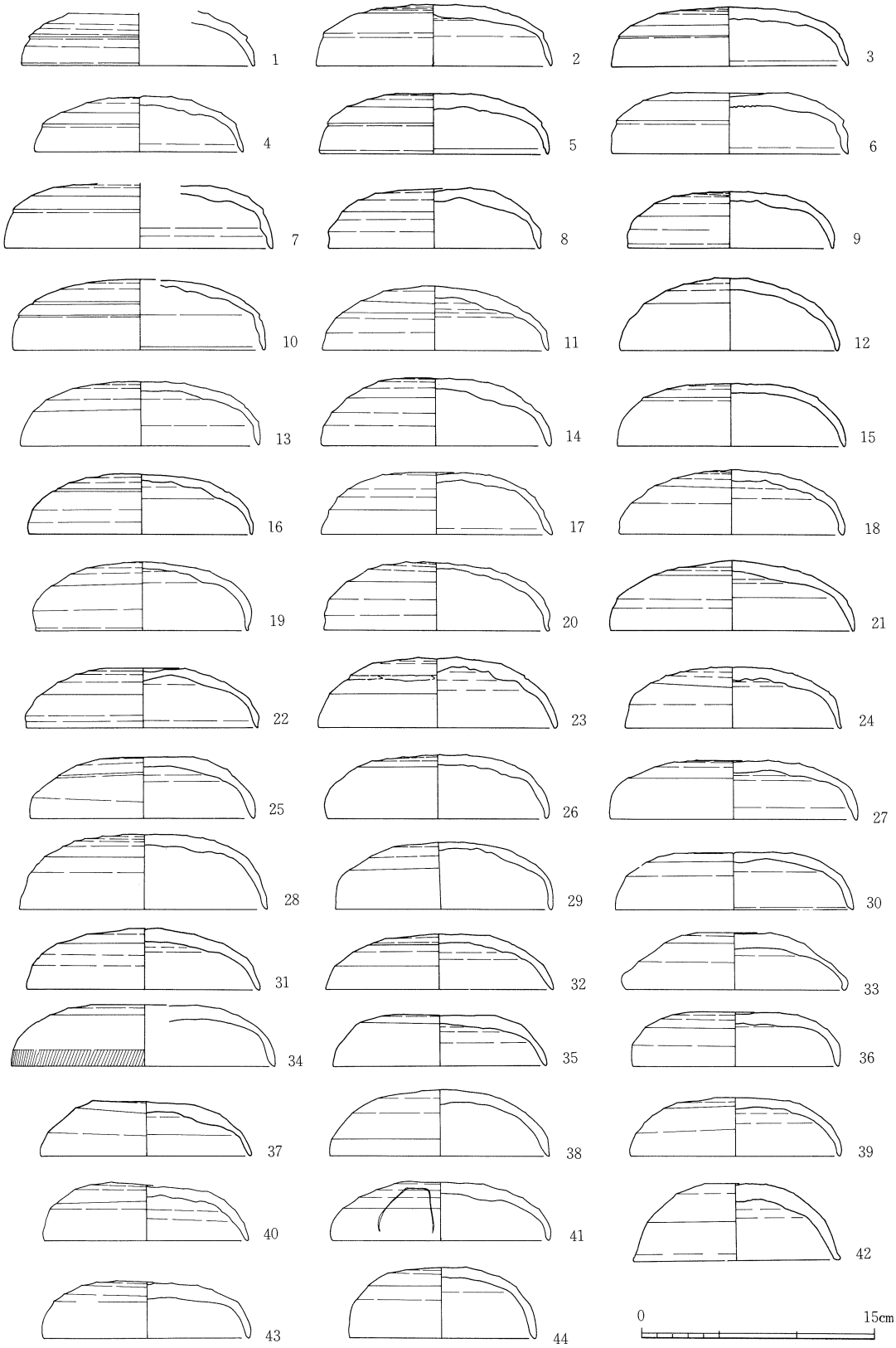
蓋（第31図22～28）は長頸壺などに使用された小型のもので、かえりは口縁端より 0.8cm前後下方にのびており、天井部は丸く仕上げているもの、天井部中央に扁平で中窪みのつまみがつくものがある。28は大型の蓋で高いつまみがつき、天井部内面に円弧タタキがみられる。

陶棺（第31図16・17）は身の側面の一部と思われる。縦横方向に凸帯を貼付している。

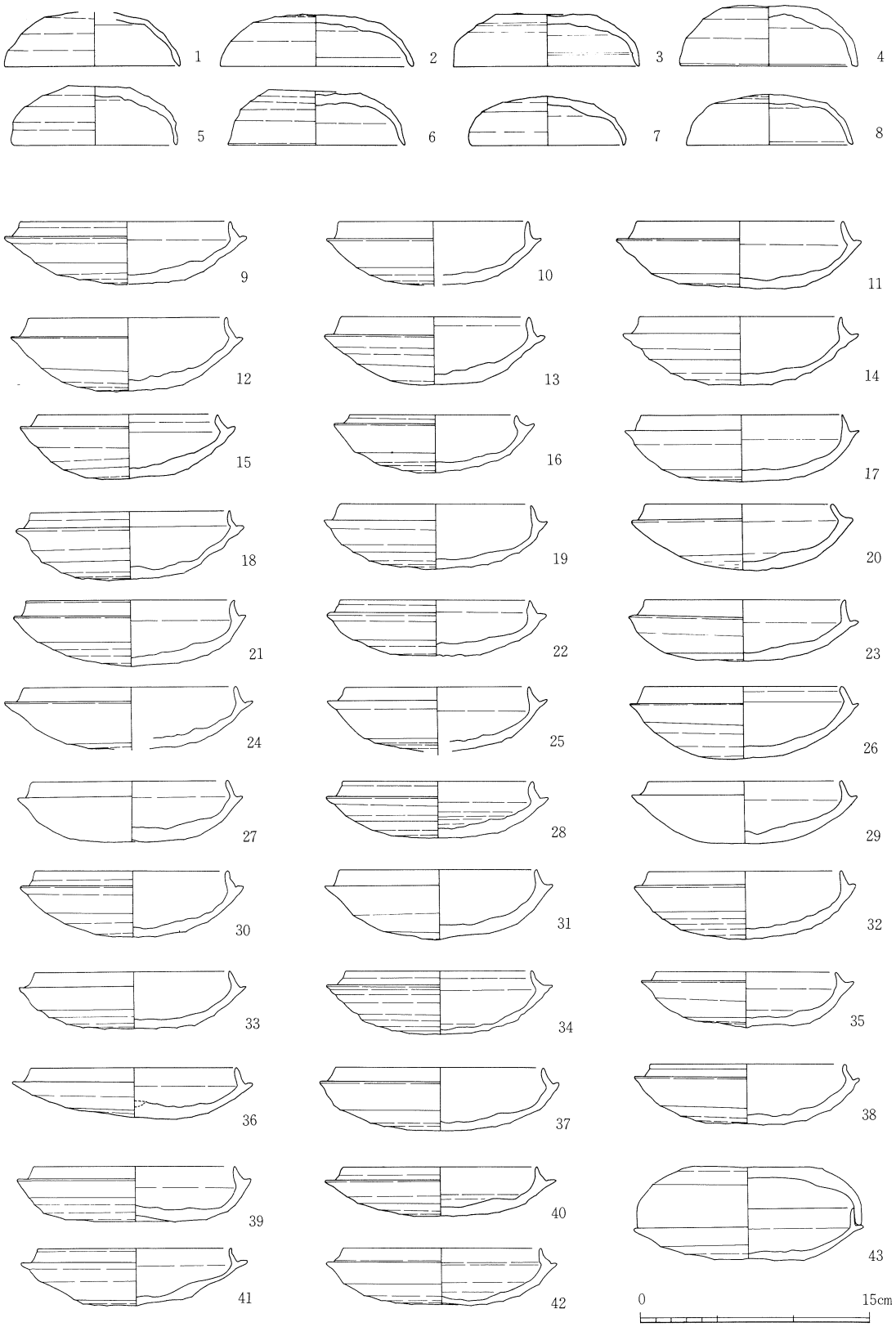
その他に鈴の破片が1点出土した。球形の体部の下方に小孔を穿ち、中央に切り込みを入れている。装飾人形は2点あり、1点は高さ4.5cmで上部の左右に短く三角形の腕がつく。頭部は小さく、刺突により目と口を表現している。下部は筒状で裾部は接合時の指おさえで外方に広がる。下端は平坦で、直立する。もう1点は高さが最長部で4cmあり、下端の接合部は斜めの平面を成す。頭部は体長の約⅓で目と口を刺突で表現している。腕は体部の左右中央に三角形に張り出しており、右手には何か持っている。動物は直径約 1.7cmの粘土紐の中央付近を直角に折り曲げ長い首にし、さらに先を曲げて頭部にしている。頭部左右に小さい耳をつけ、目と鼻孔は刺突で、口は切り込みを入れ表現している。顔面部の先は欠損している。胴部の端は尖がり、足はなく、胴部を直接取り付けている。



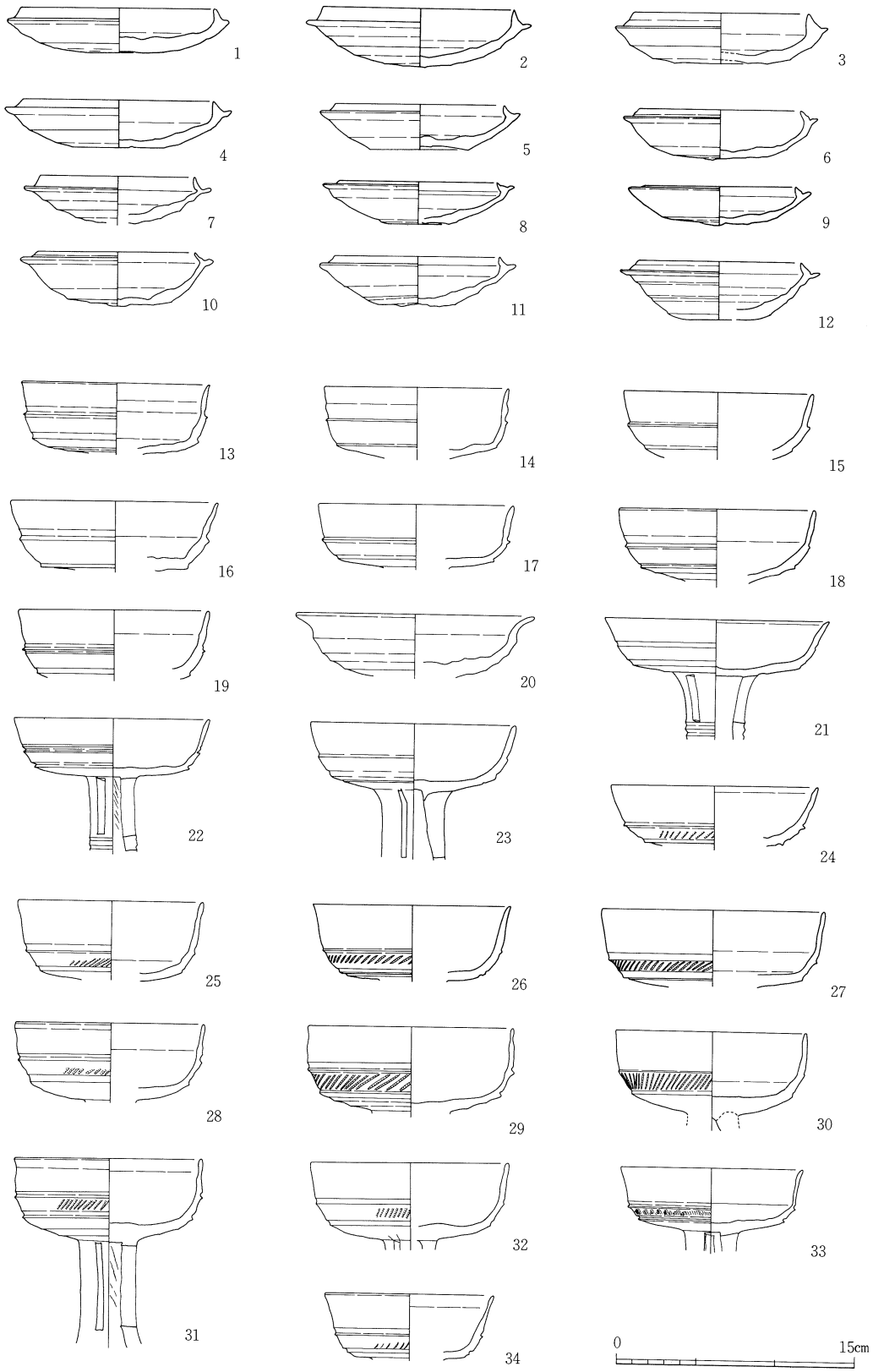
第15図　装飾人形・動物実測図



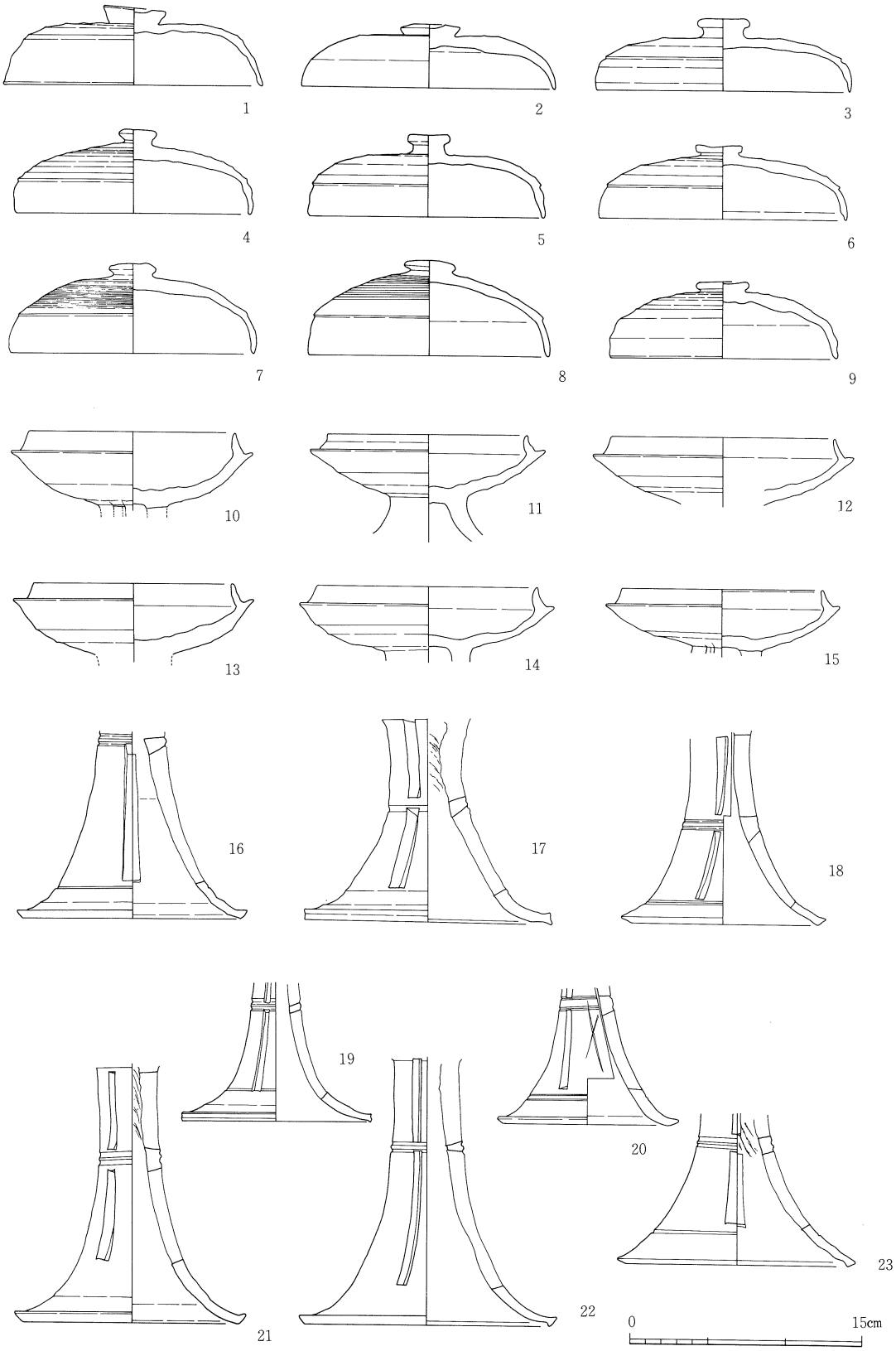
第16図　灰原出土遺物１



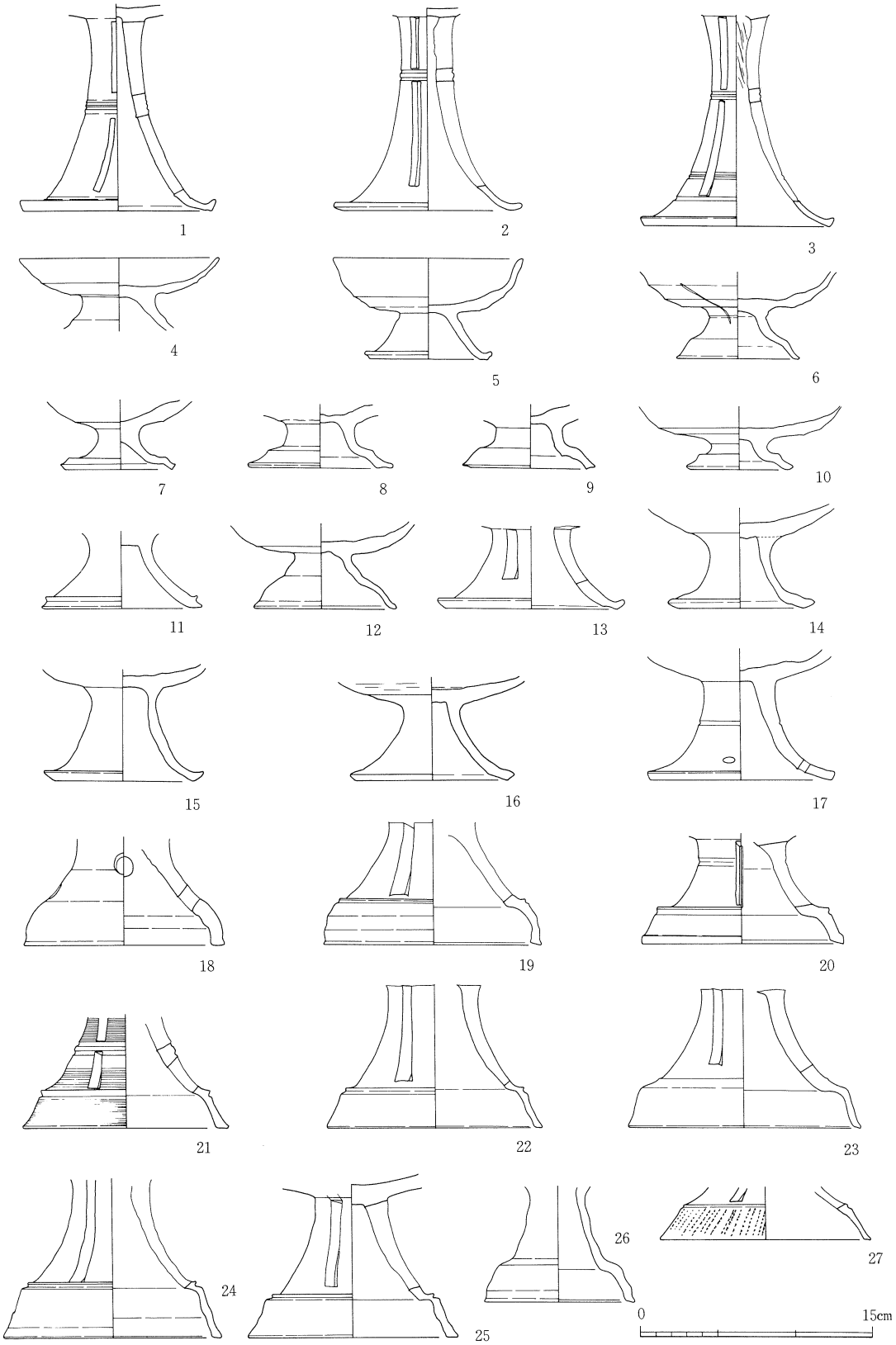
第17図　灰原出土遺物２



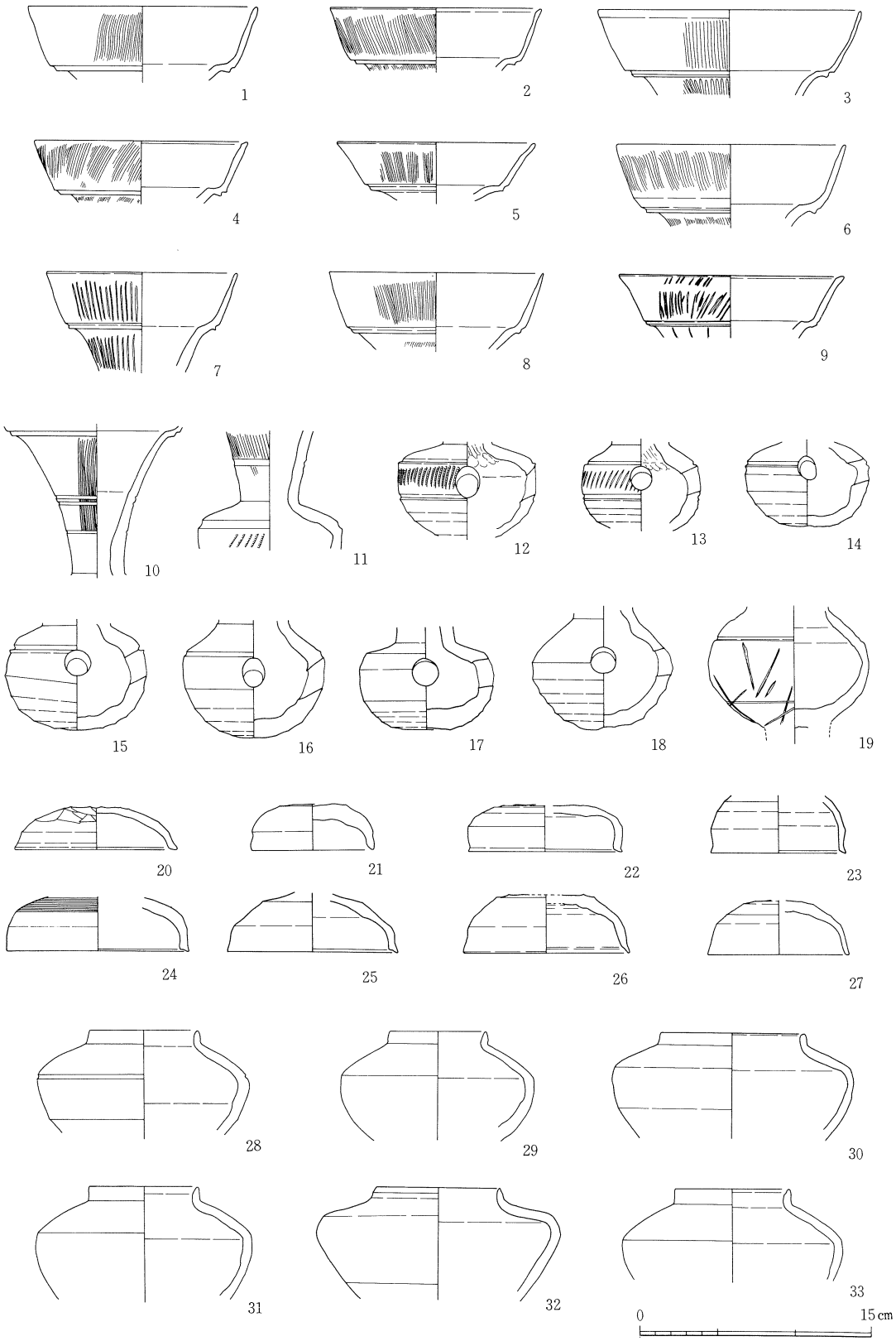
第18図　灰原出土遺物３



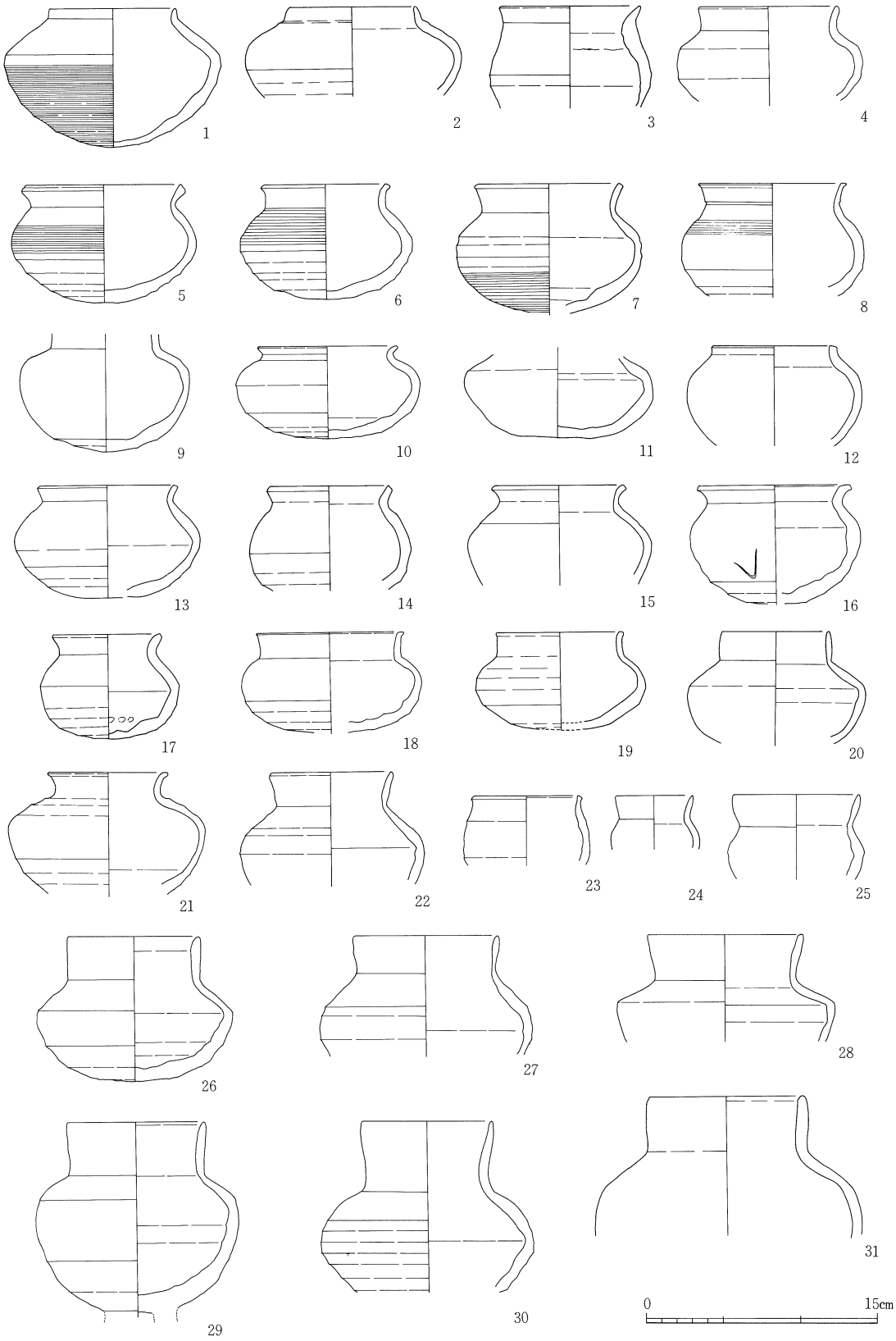
第19図　灰原出土遺物４



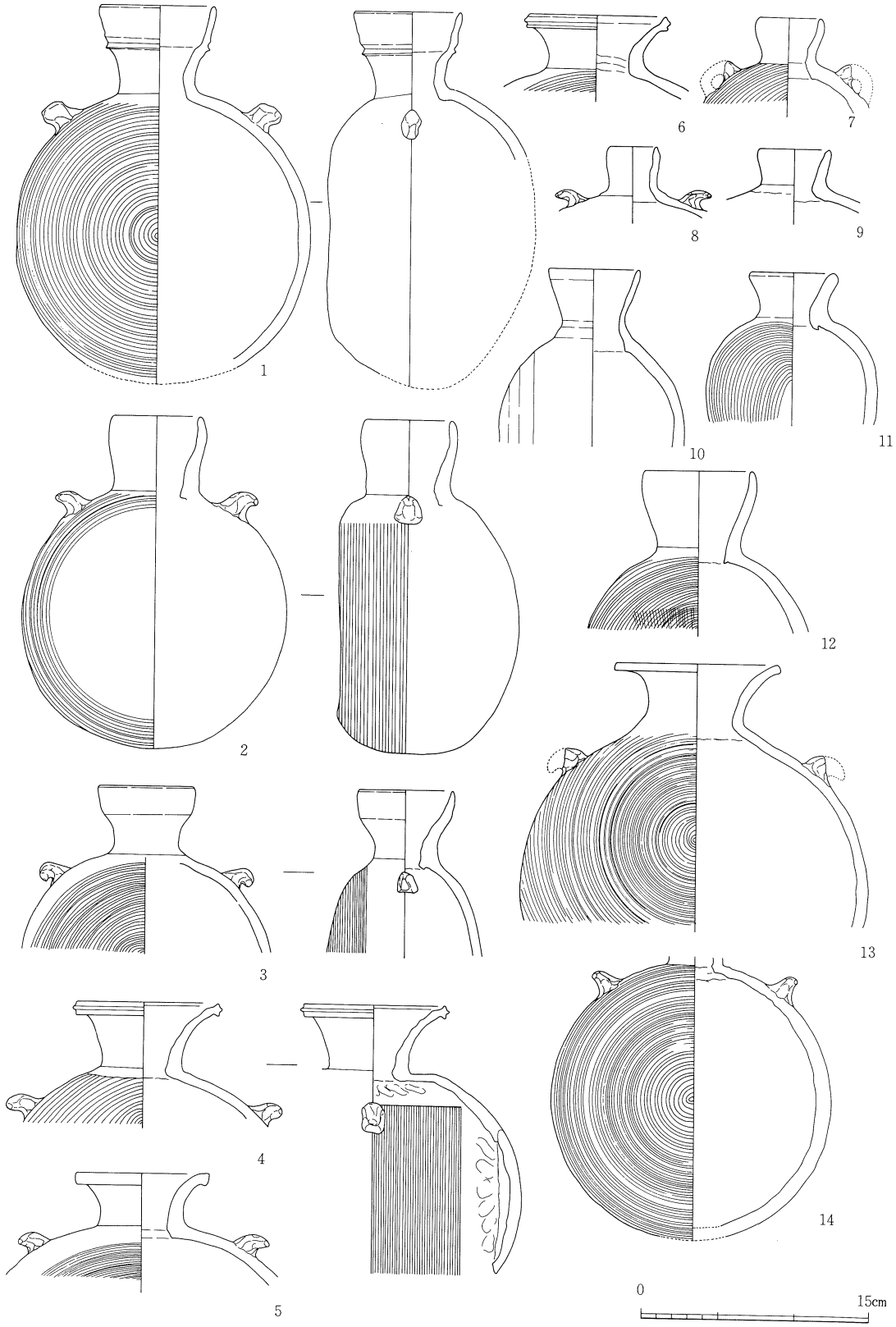
第20図　灰原出土遺物５



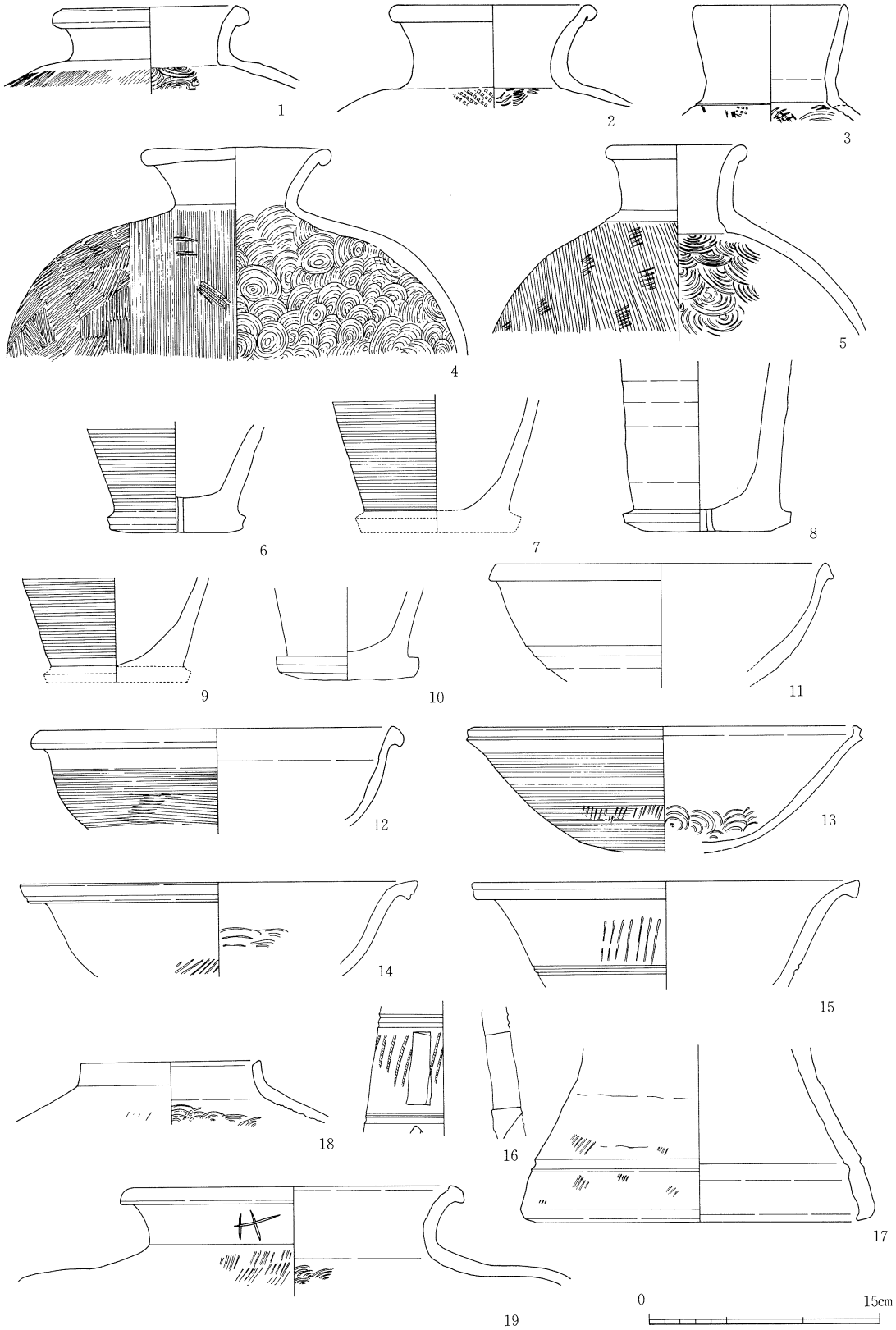
第21図　灰原出土遺物6



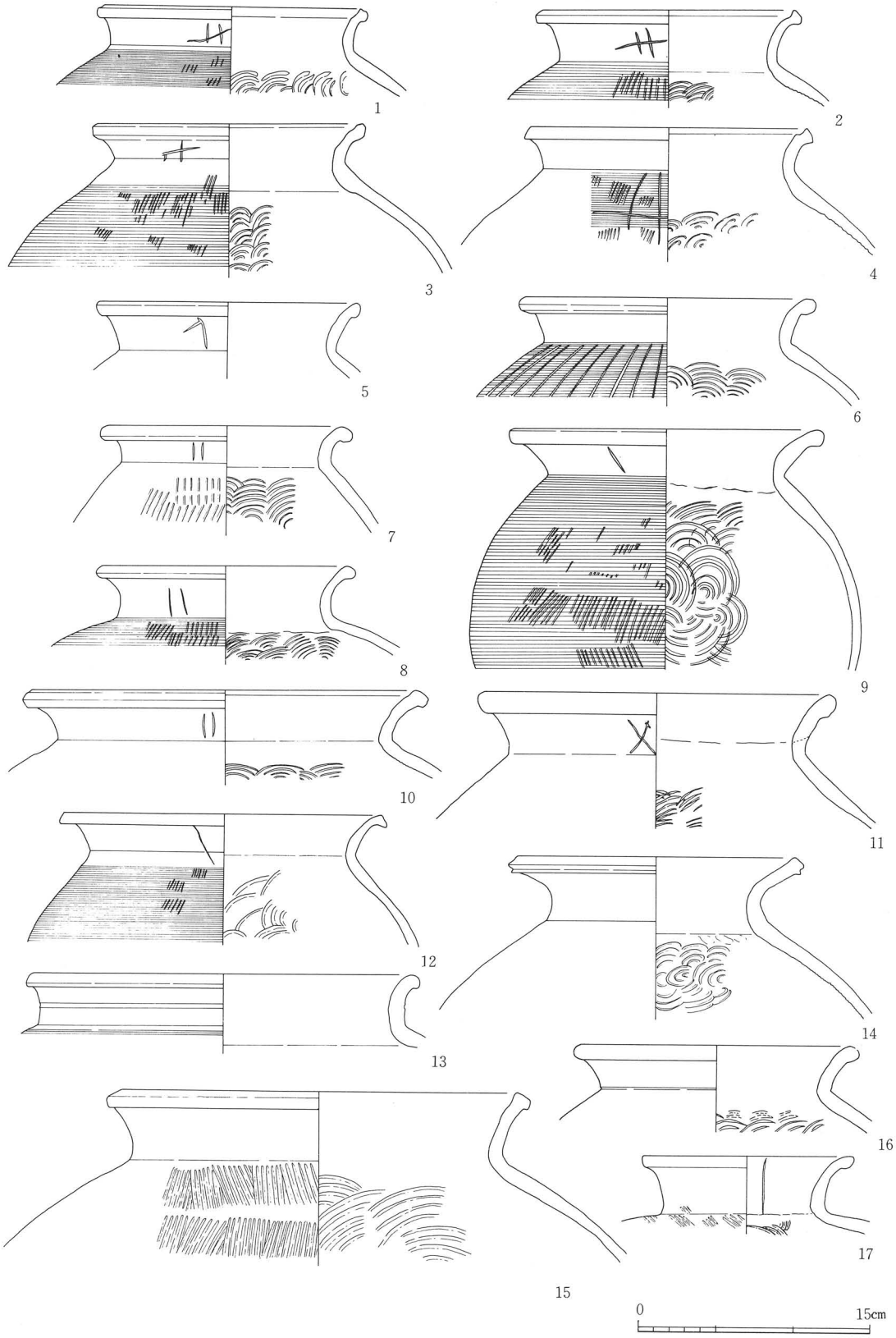
第22図　灰原出土遺物７



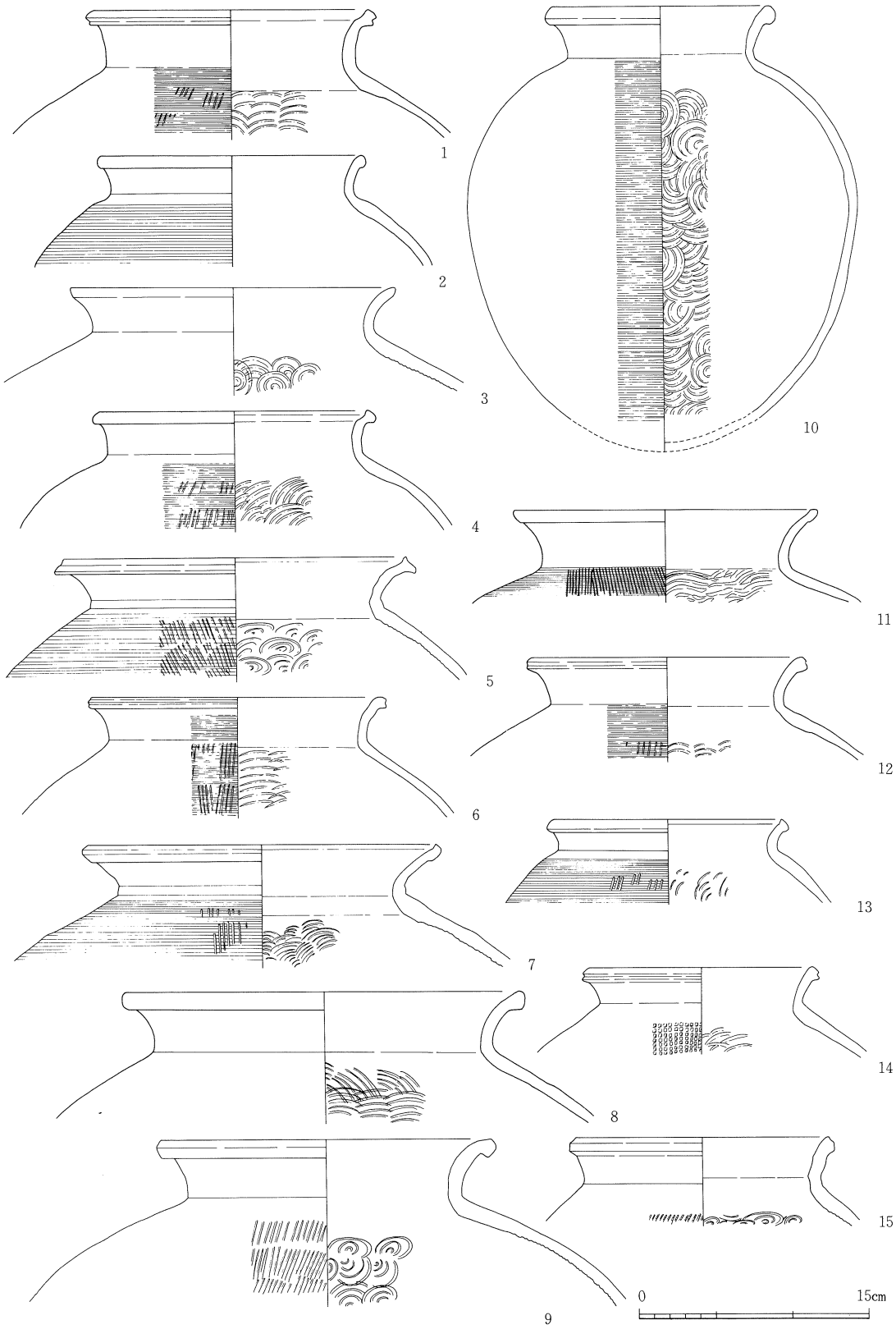
第23図　灰原出土遺物 8



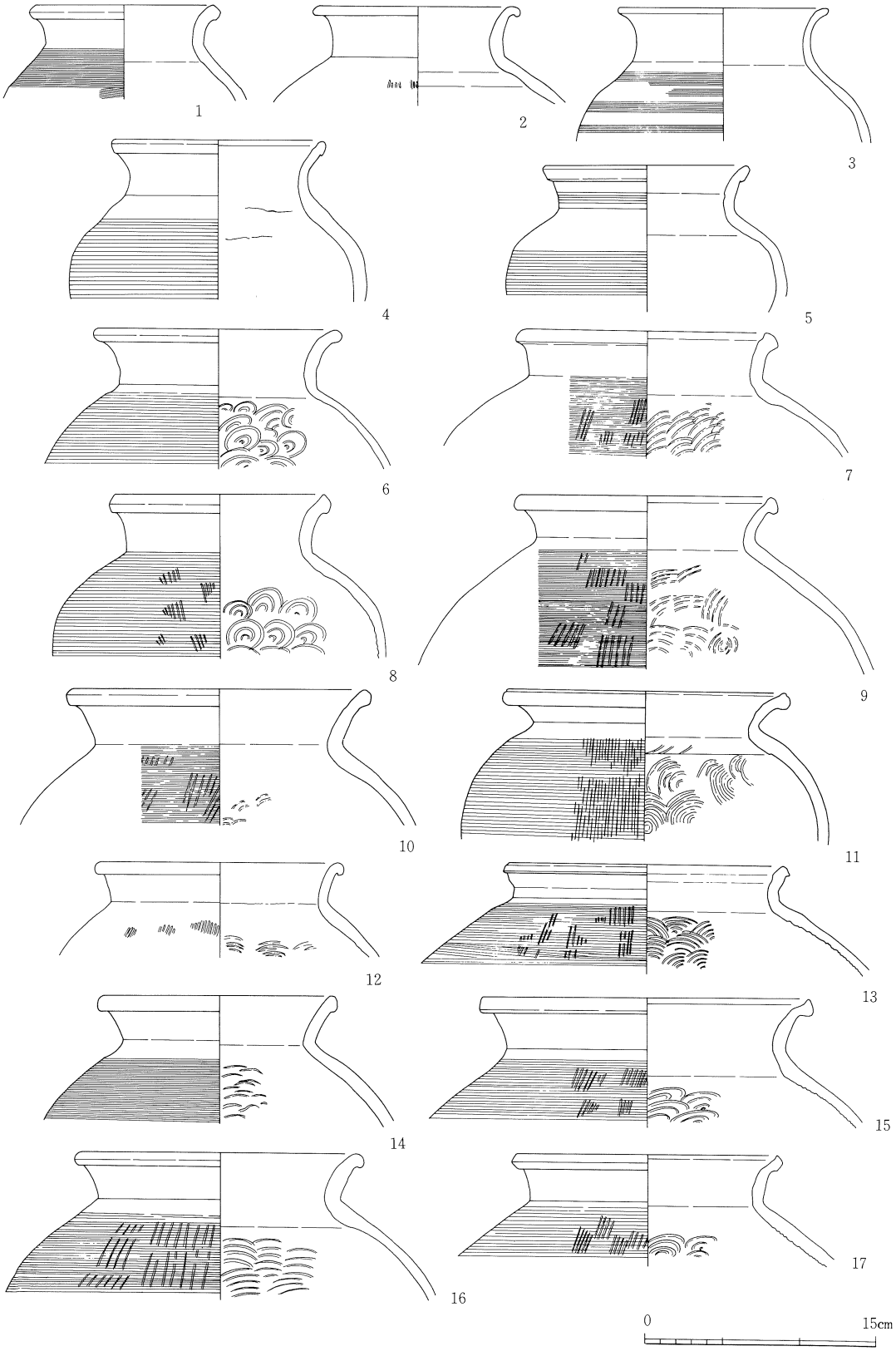
第24図　灰原出土遺物９



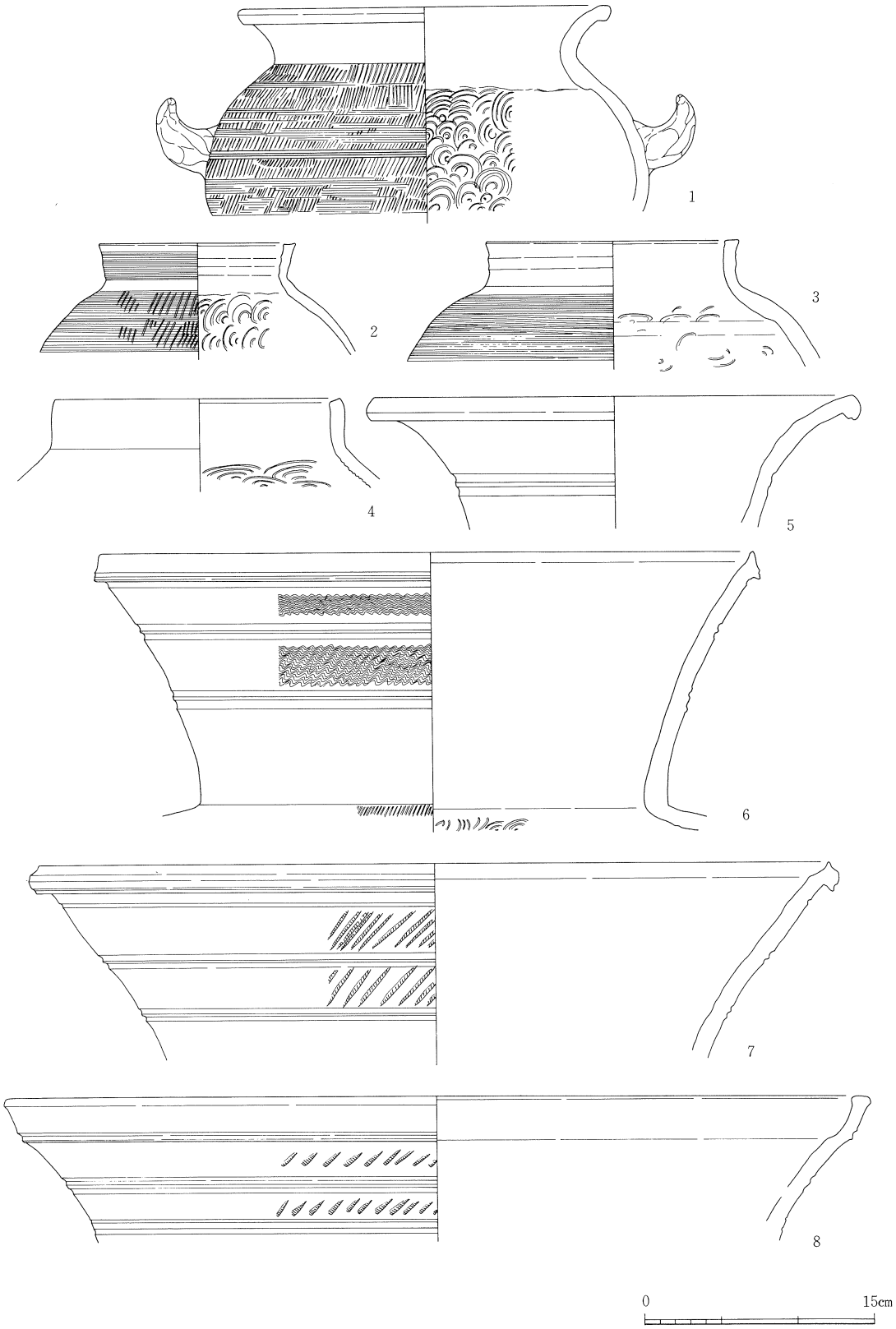
第25図　灰原出土遺物10



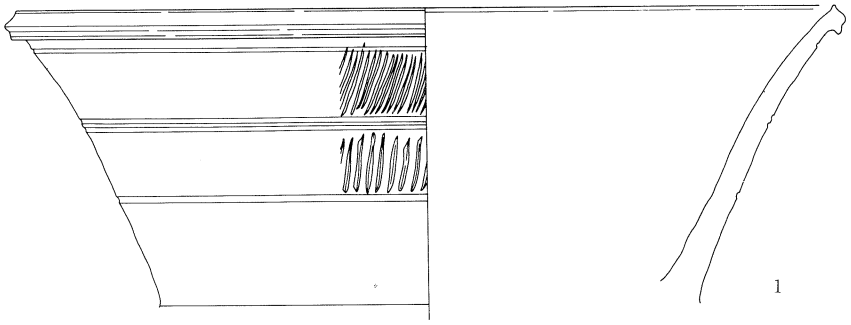
第26図　灰原出土遺物11

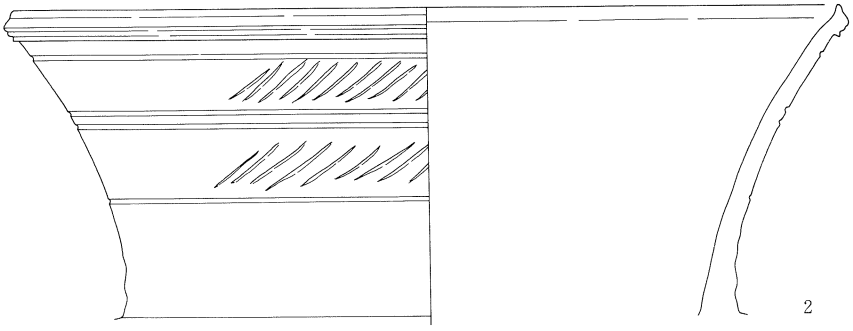


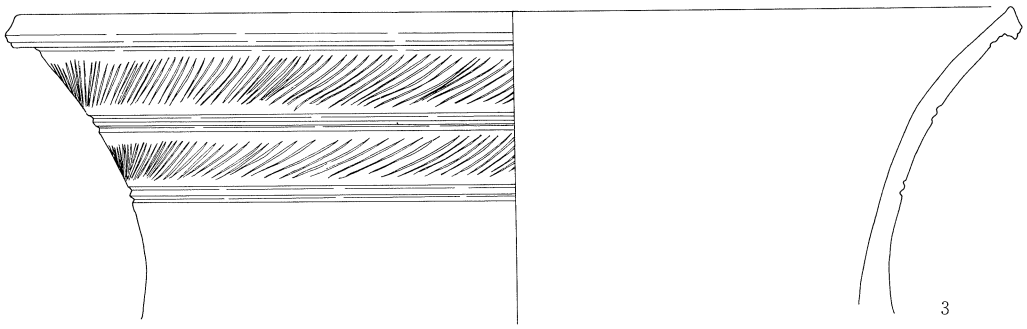
第27図　灰原出土遺物12

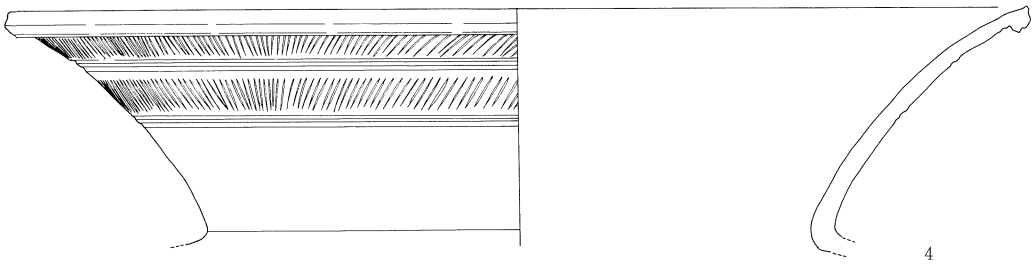


第28図　灰原出土遺物13



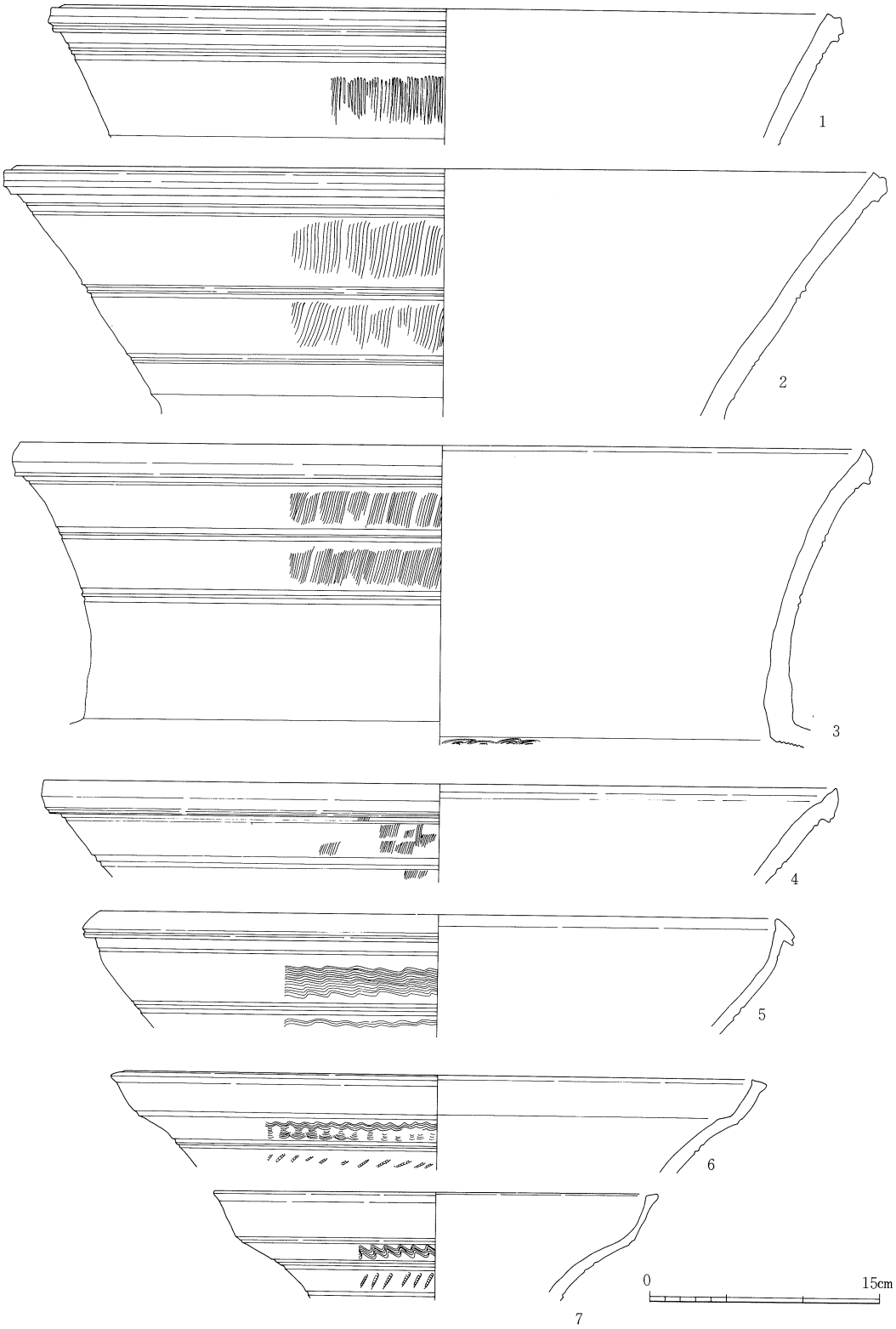




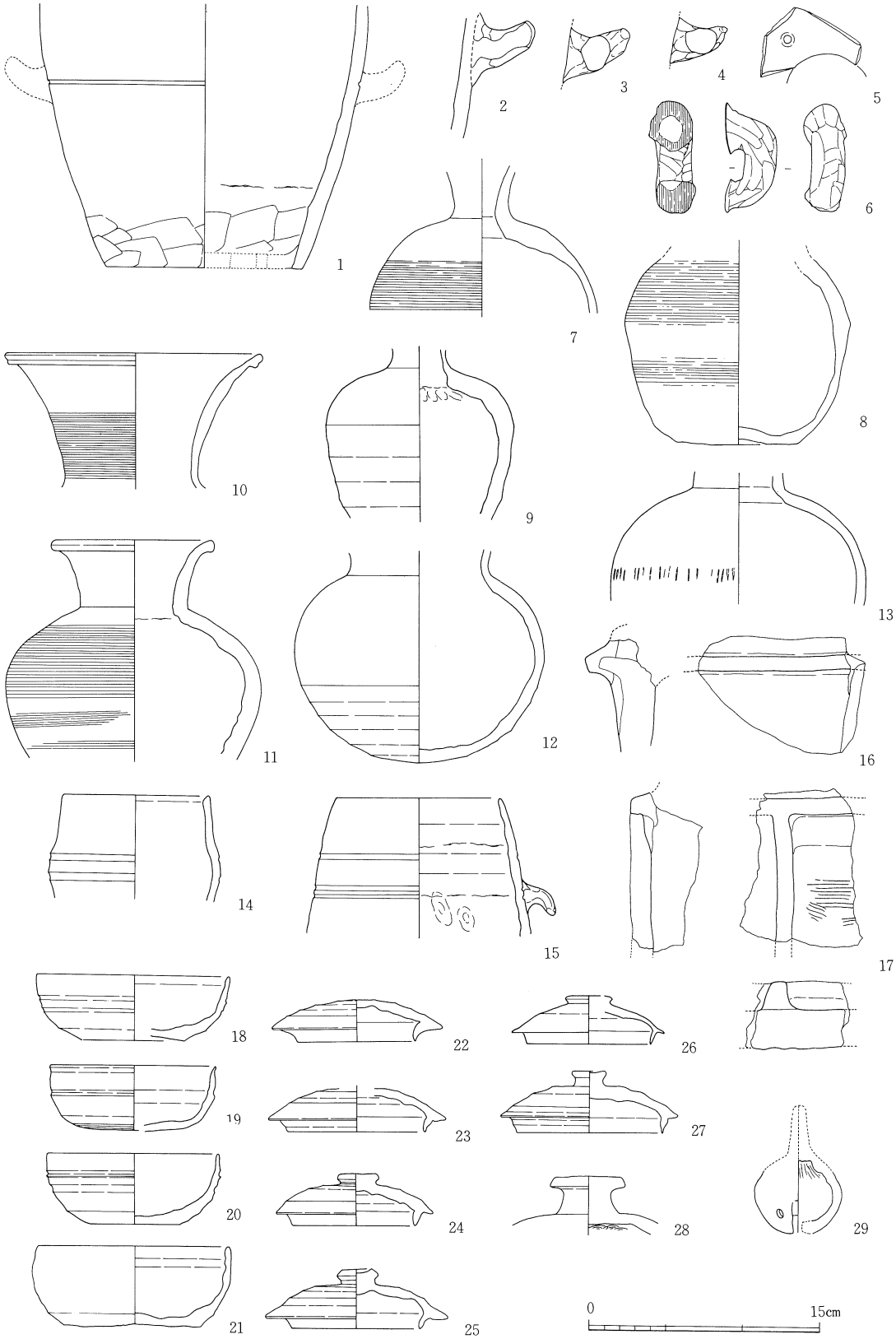


第29図　灰原出土遺物14

0　15cm



第30図　灰原出土遺物15



第31図　灰原出土遺物16

以上、本窯出土の須恵器を出土地点に分けて、特徴を略記した。最後に本窯の時期であるが、第１次窯は焼成部の遺物や灰原から出土している本窯での古段階の様相を示す遺物からみて、泉北陶邑の出土資料[註1]の編年に照らし合わせると、調整手法などに若干の相違はあるが、おおよそⅡ期―３・４段階の時期のものと考えられる。また第２次窯は第１次窯と重複する時期のものもあり、Ⅱ期―４段階から杯蓋の逆転直前のⅡ期―６段階にあたると思われる。

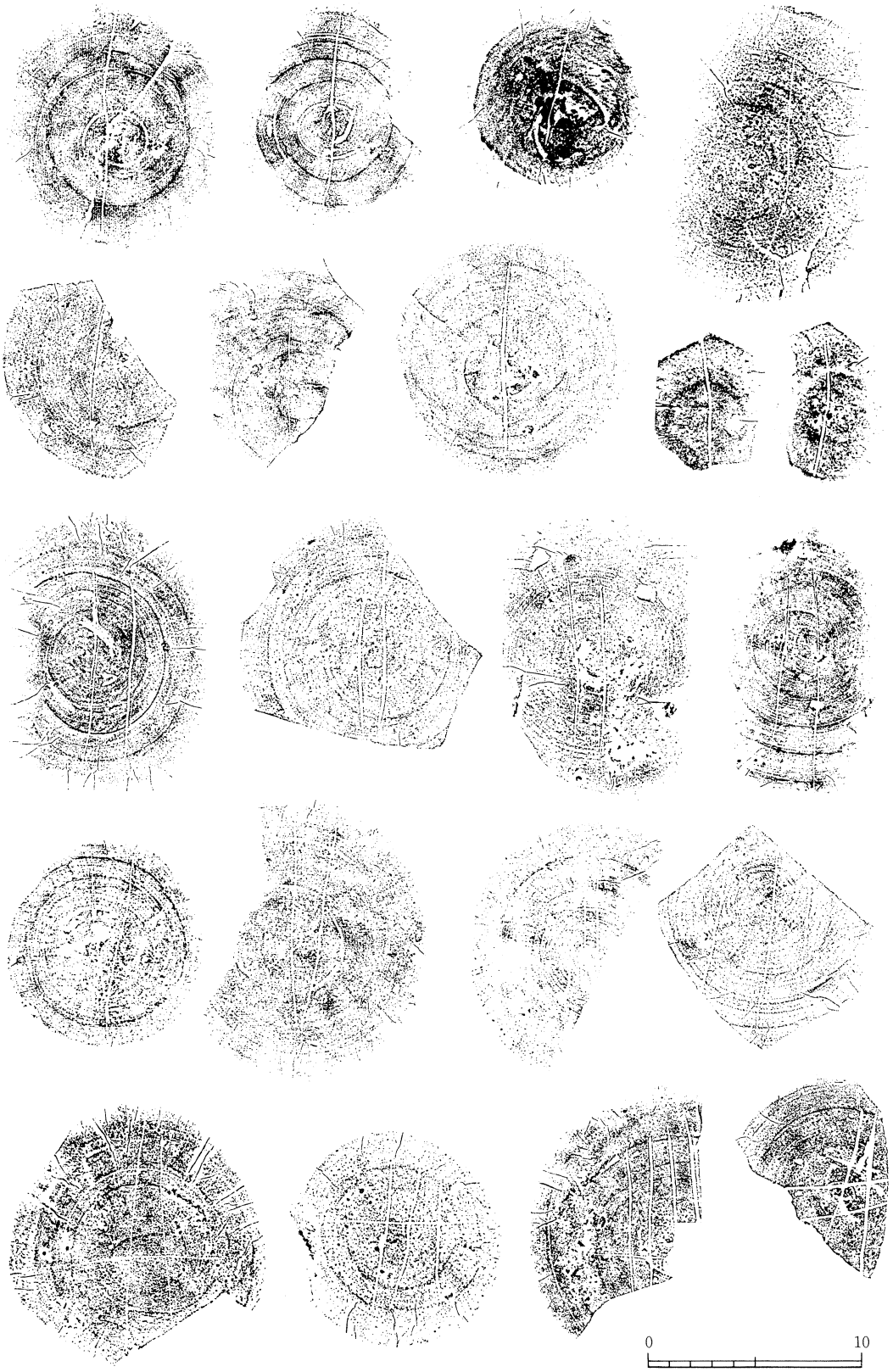
本窯の操業時期は、本窯の属する桜井谷窯跡群での最盛期にあたり、出土遺物は前述したように莫大な量にのぼり、その量とともに豊富な器種をもち、内容的に最も充実した資料を検出することのできた窯として位置づけられた。

(4) ヘラ記号をもつ遺物について

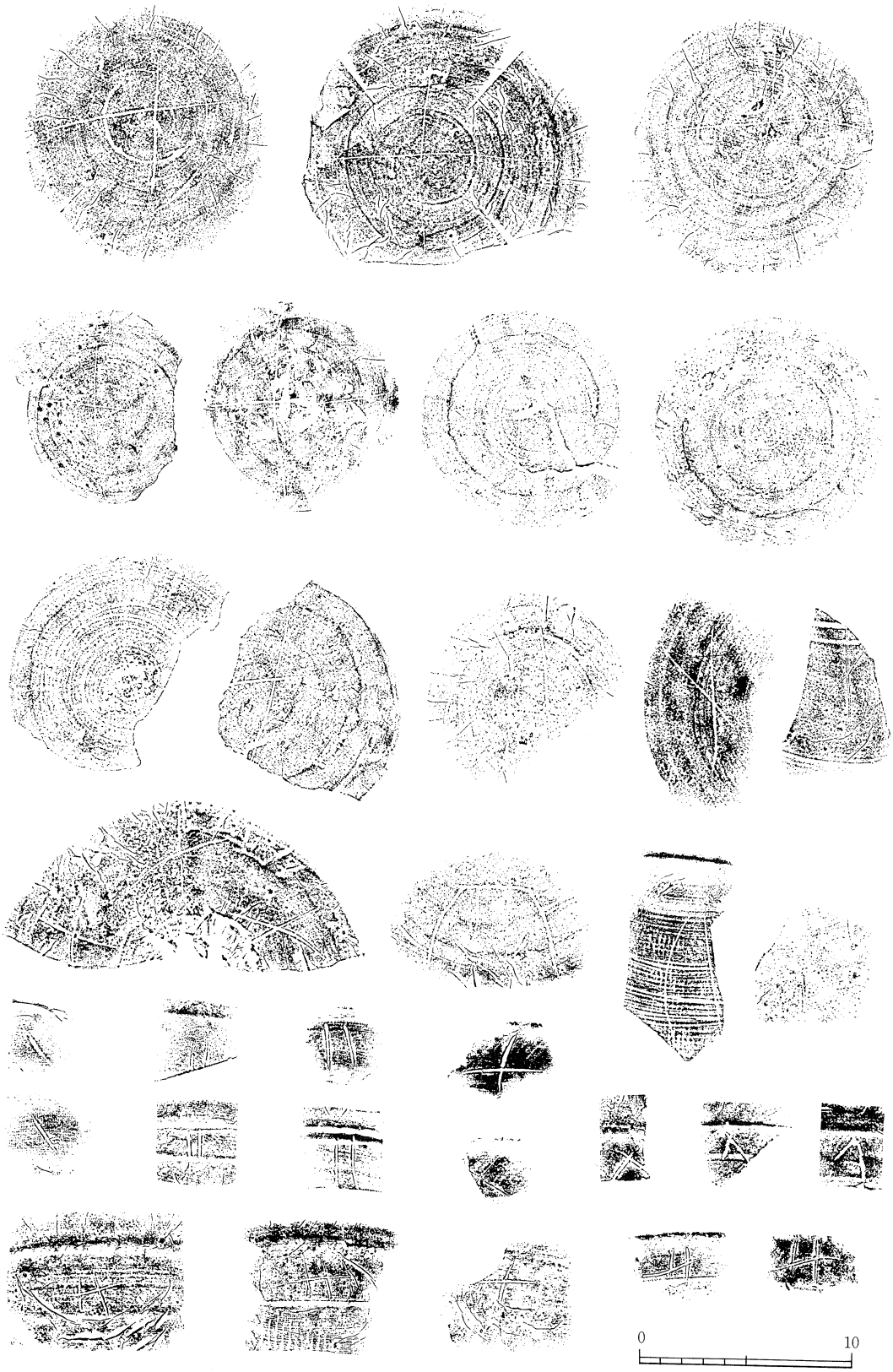
本窯においては、ヘラ記号を有するものが 102点出土している。そのうち窯体内からの出土例は13点、前庭部および排水溝内は８点、灰原では81点を数えることができる。器種別では杯が非常に多く全体のおよそ70%を占めている。次いで甕が多く20%近くあり、その他に高杯・短頸壺・瓲・瓶子などが若干みられる。杯は杯蓋が37点、杯身が22点、どちらとも判別のつかないものが11点ある。杯蓋では天井部外面に、杯身では底部外面のほぼ中央にヘラ記号がつけられるが、例外的に中央からはずれていたり（第13図31）、口縁部の外面につけられている（第13図 6）ものもある。杯蓋はすべての器種の中で最も多く、全体の37%を占めており、ヘラ記号の種類も最も多いが、その中でも「｜」「＋」「‖」の３例が多く、他の記号は各々１、

第２表　ヘラ記号種別表

	杯　蓋	杯　身	杯	高　杯	瓲	短頸壺	甕	瓶　子	壺	計
｜	10	3	1	3					1	18
‖	5	7	1				4			17
‖‖	1	1	1							3
＋	7	6	2		1	1	1			18
×				2			4			6
∧	2									2
∪						1				1
＼							2			2
＃	1		2				6			9
＃＃	2									2
＃＃＃			1							1
＝｜'	1									1
×̸	1									1
∧							1			1
∩	1									1
＋＃＃	1									1
不明	5	5	3	1		1	1	1	1	18
	37	22	11	6	1	3	19	1	2	102



第32図　ヘラ記号拓影 1



第33図　ヘラ記号拓影 2

2点みられるのみである。杯身は杯蓋に次いで多くみられるが、ヘラ記号の種類は限られており、部分的に残り全様がつかめないものを除けば、「‖」「＋」「｜」「‖‖」の4種類のみである。高杯は6点出土している。そのうち「｜」は3点で、すべて無蓋高杯で杯部の内外面につけられている。「×」は2点で有蓋高杯の脚部にみられる。甕は杯に次いで多く19点出土している。ヘラ記号のつけられている甕の口径は約16～24cmで、それ以上に大きい口径のものにはヘラ記号はみあたらない。記号はほとんどが口頸部の外面に強く彫り込まれているが、肩部につけられヘラ描き文と区別のつけにくいものもある。記号の種類は杯蓋に次いで多いが、杯と異なるのは「｜」や「＋」がほとんどみられないのに反し、「＋＋」が多いことである。そのほか壺などにもヘラ記号がみられるが、その例は少ない。

本窯のヘラ記号を同じ桜井谷窯跡群の他窯2―19・2―24窯での統計と比較してみると、各窯とも若干の時期差はあるが、各々共通点と相違点を見いだせる。

本窯での記号は、数例を除けばヘラによる直線を組み合わせたものである。これは2―24窯にもいえることであるが、2―19窯では直線に曲線を組み合わせた「Ⅾ」が半数近くを占めるという統計がでている。記号の種類としては2―19窯、2―24窯とも各々6例ずつをあげているが、本窯では「＋」と「×」を同一視するなど、似かよっているものを一括してもその数は10例を下らない。また各窯の種類別の比率をみると、各々不明分を差し引けば、2―19窯では「Ⅾ」が45%、「｜」が42%を占める。2―24窯では「｜」が45%、「‖」は33%を占める。本窯では「｜」が24%、「‖」は23%、「＋」は「×」を合わせると30%になる。2―19窯、2―24窯では各窯とも前述2例が圧倒的に多く、他は「＋」を含め非常に少なくなっているが、本窯においては、3例の合計が他窯の2例の合計に匹敵する。

各窯で共通してみられる記号「｜」と「＋」または「×」であるが、「｜」の占める比率は前述のようにたいへん高いが、「＋」または「×」に関しては、本窯では両者を一括すると最も多い記号であるが、他窯では各々3例ずつしか出ておらず、各々10%未満の数値を示す。2―24窯と本窯では「‖」も高い比率を占めているが、2―19窯ではこの記号はなく、かわりに「Ⅾ」が多い。その他のヘラ記号は2―19窯で出土しているものが、本窯においてもすべてみられる。以上のように、時期的に近い同窯跡群内の窯でも各々異なる数値を示すことがわかるが、上述の数値からはヘラ記号に関して提議されている、製造した工人または注文者側のサインetc.の解答は得られず、何を示すものなのかは残念ながら今のところ不明である。今後、古墳や住居址からの出土資料をもとに、ヘラ記号そのもののもつ意味をも含め、明らかにできる機会を待ちたい。

（厚美）

註1　中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　1978

註2　島田義明「桜井谷窯跡群2―19窯跡・2―24窯跡」桜井谷窯跡群発掘調査団　1977

出土遺物観察表

焚口

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
9－1	杯身	復元口径 13.5 受部径 15.3 器高 4.7	たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 受部は上外方にのびる。底部は丸く、なだらかに下る。底部外面はヘラケズリ、内面は、回転ナデと中央はナデ調整を行なう。胎土は細砂粒を多く含む。	
2	杯身	復元口径 13.8 受部径 15.3 残存高 4.0	たちあがりは、内傾気味に上方にのび、端部付近で、外反気味に上方にのびる。 受部は、太く短かく外方に張り出す。体部は、下内方に下って底部に至る。 外面は、暗緑色の釉がかかり、器形は若干焼け歪む。	
3	杯身	復元口径 13.2 受部径 15.2 残存高 3.9	たちあがりは、やや短く内傾する。 受部は上外方にのびる。体部は、なだらかに下り、底部に至る。底部外面は釉がかかり、少々焼け歪んでいる。内面は、回転ナデと中央にナデ調整を行なう。	
4	杯身	復元口径 11.7 受部径 14.1 器高 3.4	たちあがりは、内傾しながらのび、器壁は先細りとなり、端部は鋭い。 受部は、短かく太く外方に張り出す。体部は、下内方に下り、底部は中窪みである。 ヘラケズリの範囲は、やや狭く、その他の調整も粗い。	
5	杯身	復元口径 12.7 受部径 15.0 器高 2.3	たちあがりは、内傾しながらのび、端部は、内傾する狭い面を成す。 受部は、外方に張り出す。体・底部は、焼け歪んでいる。 内外面に、暗緑色の釉がうすくかかる。	
6	杯身	復元口径 11.0 受部径 13.1 残存高 3.0	たちあがりは、強く内傾した後、やや角度をゆるめて上内方にのびる。基部内面に沈線が巡る。端部は丸い。受部は、外方にのびる。体部は凹凸をもって下内方へ下る。 胎土は、砂粒を若干含む。焼成は良好で堅緻で黒灰色を呈する。	
7	杯蓋	復元口径 13.2 器高 3.6	口縁部は、下外方へ下りた後、外方へ開きながら下る。天井部は、やや高く、天井部中央は、雑なナデ調整を行なう。器壁は全体にうすい。胎土は細砂粒を多く含む。	
8	無蓋高杯	復元口径 12.6 残存高 3.7	口縁部は、外上方にのびる。体部は、下内方に下り、鈍い稜線が、口縁直下とさらに下ったところに巡る。胎土は、細砂粒を多く含む。	
9	甕	復元口径 16.9 残存高 4.6	口頸部は、内傾気味にたちあがり、口縁部は外反しながら上方にのびる。端部は丸い。 胎土は、微砂粒を含むのみで精良である。焼成不良で軟質、灰白色を呈する。	
10	杯蓋	復元口径 13.8 器高 4.0	口縁部は、わずかに外方へ開きかげんに下る。天井部は、やや高い。外面の約2／3に左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は、微砂粒を多く含み、やや粗い。	
11	杯蓋	復元口径 13.9 残存高 3.9	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。端部は、うすく下外方へ鋭く下る。天井部は丸い。 天井部の2／5弱にヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整を行なう。	
12	杯身	復元口径 12.8 受部径 15.4 残存高 3.8	たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。端部はやや鋭い。 受部は、上外方に丸く張り出す。体部は、下内方へ下る。底部は欠損している。 胎土は、砂粒を多く含み粗い。焼成は堅緻である。	
13	杯蓋	復元口径 12.2 残存高 3.0	口縁部は、下外方へ下り、端部はうすく鋭い。天井部は低く、器壁は厚い。 外面は、回転ナデの後、不整方向のナデを雑然と行なう。内面は回転ナデ調整をする。	
14	杯蓋	復元口径 14.1 器高 3.3	口縁部は、下外方へ下る。内面は端部付近で肥厚し、端部は内傾する面を有する。 天井部は、低く、器壁は厚い。天井部の2／3に回転ヘラケズリを行なう。	
15	壺	復元口径 12.8 残存高 3.7	口頸部は、基部より、ほぼ直立し、口縁部は、わずかに外傾し上外方にのびる。端部は内傾気味の平面を成す。内外面に釉が厚くかかる。	
16	杯蓋	復元口径 11.6 器高 4.1	口縁部は、下外方へ下り、端部は鋭い。天井部は、高く中央部で凹凸する面を成す。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は不良で軟質。器表は磨滅して調整は不明である。	
17	杯身	復元口径 10.2 受部径 12.1 残存高 2.8	たちあがりは、内傾しながらのびる。 受部は、外上方にのびる。体部は、内弯しながら下内方へ下る。外面は、釉がかかり、焼成による器壁の膨らみがみられる。	
18	杯身	復元口径 10.9 受部径 13.2 残存高 3.0	たちあがりの器壁はうすく、強く内傾しながらのびる。端部は鋭い。 受部は、外上方にのびる。体部は、下内方に下り、平坦な底部に至る。底部は、ヘラ切り未調整である。内面は回転ナデ・ナデ調整を行なう。	
19	杯身	復元口径 9.2 受部径 11.5 残存高 2.7	たちあがりの器壁はうすく、内傾した後、反りかえって上方にのびる。端部は鋭い。 受部は、外上方にのびる。体部は、内弯気味に下内方へ下る。 胎土は、細砂粒を若干含む。焼成良好で堅緻。灰色を呈する。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
9—20 10—3	高杯	脚裾径 11.0 脚高 4.9	脚柱部は、下外方に下り、裾部で外方に張り出した後、下外方に下る。端部の接地部は、平面を成す。胎土は、砂粒を適度に含む。器表付近は灰色、断面中心は茶褐色を呈する。	
21	横瓶	復元口径 10.7 残存高 5.9	口頸部は、上外方にたちあがった後、外反してのび、口縁部は、屈曲して上方にのびる。端部は、内傾する平面を成す。肩部は、大きく外下方に下る。外面にカキ目、内面に円弧タタキがみられる。	
22	杯蓋	復元口径 12.1 器高 3.1	口縁部は、下方に下り、端部はわずかに外方に開く。天井部は、内弯しながら、平坦な中央部に至る。天井部外面中央は、ヘラ切り未調整、内面は、強くナデ調整をしている。	
23	杯身	復元口径 11.3 受部径 13.2 器高 2.7	たちあがりは、先細りで、内傾しながらのびる。 受部の器壁はうすく、外上方に鋭く張り出す。底部は、内弯しながら下内方へ下り、中央は窪む。外面は、ヘラ切り未調整、内面は、強くナデ調整をしている。	
24	杯蓋	口径 11.0 器高 4.0	一旦、外弯気味にうすく作った口縁部に、粘土帯を貼付して、やや厚くしている。天井部中央は、高く、一旦成形後粘土を雑に貼って指おさえを行なっている。	
25	杯身	復元口径 11.1 受部径 13.1 器高 3.0	たちあがりは、内傾しながら上内方へのび、接合部には沈線が巡る。 受部は、外方へ張り出す。体部は、凹凸を有して下内方に下り、底部に至る。底部はやや平たく、ヘラ切り後、未調整である。	
26	杯身	口径 10.5 受部径 12.6 器高 4.0	たちあがりは、内傾した後、先細りとなり上方に鋭くのびる。 受部は、外上方にのびる。体部は下内方に深く下り、平坦な底部は雑然とナデられている。焼成はやや甘く、乳橙色を呈する。	
27	杯身	復元口径 10.3 受部径 12.3 器高 3.1	たちあがりは、内傾しながら短くのび、端部は鋭い。 受部は上外方に張り出す。体部は下内方に深く下る。底部は成形後うすく粘土を貼付し、平坦に整形している。内外面に、窯床の砂等が熔着している。	
28 10—7	甕	復元口径 15.3 残存高 6.1	口頸部は上外方にのび、口縁部は、一条の凹線を境に上方にたちあがる。口縁部上端は中央が浅く窪む面を成す。口縁部下に1条の凹線を挟んで波状文(10本)を2段施す。	
29 10—4	甕	復元口径 36.2 残存高 9.7	口頸部は、上外方にのび、口縁部下方に段面三角形の凸帯と凹線が巡る。口縁端部は外傾する平面を成す。口頸部には波状文帯と凹線を繰り返し施す。	
30	提瓶	口径 6.2 残存高 4.5	口頸部は上外方にたちあがり、口縁部は、内弯気味に上方にのびる。口頸部中央に2条の凹線を施す。肩部以下は欠損している。	
31	短頸壺	復元口径 9.3 胴部最大径12.1 残存高 3.4	口頸部は短く内傾し、口縁部は上方に鋭くのびる。 肩部は下外方へ下り、胴部は丸く屈曲し、内弯しながら下内方へ下る。 胎土は、砂粒を若干含むが精良である。 焼成はやや甘く、乳灰色を呈する。	
32	甕	復元口径 14.5 残存高 4.9	口頸部は、外反しながらのびる。口縁部は、わずかに肥厚し、外傾する面を成す。 肩部は、下外方へ下る。胎土は細砂粒を多く含む。焼成不良で軟質のため、器表磨滅する。	
33	杯蓋	復元口径 16.0 残存高 4.1	口縁部は、下外方へ下り、端部は丸い。天井部は、やや高く、なだらかである。天井部外面2/3に左回りヘラケズリを行なう。他面は回転ナデ調整を行なう。ヘラ記号の一部が残る。	|
34	杯蓋	復元口径 14.1 残存高 4.0	口縁部は下外方に下った後、外方へ開き気味に下る。天井部は、高く成形後、うすく粘土を貼り粗く整形をしている。胎土は砂粒を多く含み粗い。	
35	杯蓋	復元口径 14.0 器高 3.0	口縁部は下外方に下り、端部は鋭い。天井部は低く、中央は平坦に近い。天井部外面は、ヘラ切り未調整である。焼成は堅緻で黒灰色を呈する。	
36	杯蓋	復元口径 15.1 残存高 3.5	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部は低くなだらかである。天井部外面の2/3に左回りヘラケズリを行なう。他面は丁寧な回転ナデ調整を施す。	
37	杯身	復元口径 13.2 受部径 15.5 器高 3.9	たちあがりの器壁はうすく、内傾しながら上内方へのびる。 受部は外上方にのびる。底部はやや浅く、中央部は平坦である。 胎土は砂粒を含まず、精緻である。焼成は不良で軟質、乳白色を呈する。	
38	杯身	口径 14.4 受部径 16.5 器高 4.1	たちあがりは、内傾しながらのびる。器壁は先細りである。 受部は、外方にのびる。底部はやや深く、なだらかに丸い。 胎土は、砂粒を若干含む。焼成はやや甘く、淡灰色を呈する。	
39	杯身	復元口径 13.3 受部径 15.5 残存高 3.7	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。器壁は先細りで、端部は鋭い。 受部は外方に張り出し、たちあがりとの境に沈線が巡る。底部は、内弯しながら、下内方に下る。底部のほぼ全面に左回りヘラケズリ調整を行なう。	
40	杯身	復元口径 12.3 受部径 14.2 残存高 3.2	たちあがりは、内傾した後、中程で上方にのびる。端部は鋭い。 受部は、外方に張り出す。底部は下内方に直線的に下る。 胎土は、細砂粒をやや多く含む。焼成はやや甘く、乳灰色を呈する。	
41	甕	復元口径 16.5 残存高 7.9	口頸部は上方にまっすぐたちあがり、口縁部は、外反し、外下方に折れ曲がる。肩部は、下外方に下る。外面は平行タタキの上からカキ目、内面は円弧タタキ調整を行なう。ヘラ記号がある。	×

燃焼部

図面番号 図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
10－1	杯蓋	復元口径 16.4 残存高 4.8	口縁部は、下外方に下った後、下方に下り端部は丸い。天井部は高く丸い。内面は、マキアゲの痕跡の凹凸を残す。砂粒を若干含む。焼成不良で軟質、黄橙色を呈する。	
2	杯蓋	口径 15.6 器高 3.9	口縁部は、下方に下り、端部内面は先細りとなる。天井部は低く少々凹凸を有する平面に成る。天井部に重ね焼きの痕跡とヘラ記号の一部がみられる。	＋
3	杯蓋	復元口径 13.4 器高 4.3	口縁部は内弯気味に下方に下り、端部は外方に開く。天井部は、丸くなだらかである。天井部の3/5に左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は精良である。	
4	杯身	復元口径 12.2 受部径 14.0 残存高 3.1	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。受部は、上外方に張り出す。体部は下内方に下り、平たい底部は浅い。たちあがりと受部の器壁はうすい。胎土は、細砂粒を多く含む。	
5	杯身	復元口径 13.4 受部径 15.3 器高 3.3	たちあがりは内傾した後、中程で上方にのびる。受部は外上方に張り出す。体部は、内弯しながら下内方に下り、底部は焼け歪んでいる。焼成は堅緻で、外面には黒緑色の釉がかかり、内面は黒灰色を呈する。	
6	杯身	復元口径 11.8 受部径 13.9 器高 3.4	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびた後、端部は上方に鋭くのびる。受部は外上方にのびる。たちあがりとの境に沈線が巡る。底部は、整形後未調整である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は堅緻で灰色を呈する。	
7	甕	復元口径 13.0 残存高 5.2	口頸部は上外方にのび、口縁部は外方に丸く肥厚する。肩部は下外方に下る。外面は平行タタキの上にカキ目、内面は円弧タタキ調整を行なう。胎土は精良である。	
8 9－1	杯蓋	口径 14.1 器高 4.8	口縁部は、下外方に下る。天井部は丸く高い。天井部のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。内面は回転ナデと中央部は強くナデ調整をしている。	
9	杯蓋	口径 12.0 器高 4.0	口縁部は下方に下り、端部内面に沈線が巡る。天井部は高く丸い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻、淡灰色を呈する。	
10	杯身	口径 13.7 受部径 15.9 器高 4.1	たちあがりは内傾しながらのび、端部は、先細りとなり、鋭く上方にのびる。受部は外方にのびる。底部は深く丸い。底部の器壁は厚い。底部外面の2/3に左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は砂粒を含まず精良である。	
11 9－7	杯身	口径 13.3 受部径 15.4 器高 3.6	たちあがりは内傾しながらのび、端部は、先細りとなり、鋭くのびる。受部は上外方にのびる。底部は浅く、中央部はわずかに窪む。外面にヘラ記号がある。胎土は、5mmの白色小石粒をはじめ、若干の砂粒を含む。	｜
12	杯身	復元口径 11.8 受部径 13.4 器高 3.6	たちあがりは内傾気味に上方にのびる。器壁は先細り状態である。受部は外方にのびる。底部は、やや浅い。外面は釉がかかり、焼けただれている。胎土は1mm前後の砂粒を含む。	
13	甕	復元口径 28.1 残存高 5.5	口頸部は上外方にのびる。口縁部はわずかに外反し、端部は、下外方に肥厚する。肩部は下外方に下る。外面は平行タタキの上からカキ目調整を行なう。	
14	甕	復元口径 16.4 残存高 4.1	口頸部は一旦内傾した後、外反する。口縁部は外下方に肥厚する。頸部に櫛目の刺突痕がある。肩部は下外方に下り、外面は平行タタキ、内面は円弧タタキを行なう。	
15	杯蓋	復元口径 13.9 器高 2.8	口縁部は、内弯しながら下方に下る。天井部は焼け歪んでいる。天井部の2/3に左まわりヘラケズリを行なう。胎土は砂粒を多く含む。	
16	杯身	口径 11.5 受部径 13.7 器高 3.5	たちあがりは、内傾しながら短かくのびる。受部は外上方に張り出す。受部下外面に、杯蓋の口縁が黒緑色の厚い釉とともに、熔着している。底部は浅く、やや平たい。	
17 9－8	杯身	口径 11.2 受部径 13.4 器高 3.2	たちあがりは、内傾しながら短かくのびる。基部は太く、先細りとなる。受部は上外方にのびる。底部はやや浅いが、焼け歪みのため、中窪みとなっている。天井部外面のヘラケズリは2/5に行なっている。胎土は砂粒を多く含む。	
18	杯身	復元口径 12.4 受部径 14.4 残存高 2.2	たちあがりは、内傾しながらのびる。基部は太く、先細りとなり、端部は鋭い。受部は外方に張り出す。底部は欠損のため不明である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻である。	
20	杯蓋	復元口径 14.5 器高 3.6	口縁部は内弯気味に下方に下る。天井部は、やや低く、左まわりのヘラケズリを幅広く行なっている。胎土は砂粒をやや多く含む。	
21	杯身	復元口径 10.9 受部径 13.3 残存高 4.0	たちあがりは内傾しながらのび、端部付近は上方へのびる。受部は外上方にのびる。受部から底部までは、下内方に直線的に下り、底部は深い。右まわりのヘラケズリを強い調子で施す。胎土は砂粒を多く含む。	
23	甕	復元口径 14.7 残存高 3.2	口頸部は上外方にのび、口縁部付近で外方に張り出す。口縁部は上外方にのび、口縁端部は、内面する面を成す。口縁部には櫛描き文とその直下に1条の凹線を施す。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
10—19	杯身	復元口径 13.2 受部径 15.0 残存高 2.9	たちあがりは短く上方にのびた後、中程から内傾する。 受部は外方に張り出す。底部は浅くなるものと思われる。器壁は全体にうすい。 胎土は細砂粒を適度に含む。	
25 10—9	甕	口径 18.4 残存高 7.0	口頸部は上外方にのび、口縁部は外反し端部は外方に肥厚し、平面を成す。 肩部は下外方に下る。外面は平行タタキの上から弱いカキ目、内面は円弧タタキを施す。	
26	杯身	復元口径 11.8 受部径 14.0 残存高 3.6	たちあがりは内傾しながら上内方にのびる。器壁は基部が太く、先細りである。 受部は上外方にのびる。受部以下は底部に向って下内方に下る。 焼成は堅緻で、外面の受部以下は、暗緑色の釉が厚くかかる。	
27	杯身	口径 11.5 受部径 14.1 残存高 3.5	たちあがりは大きく内傾する。受部との境に沈線が巡る。 受部は上外方にのびる。底部は下内方に下り、中央部は平坦である。左まわりのヘラケズリを施す。胎土は、砂粒をやや多く含む。	
28	蓋	つまみ径 3.1 残存高 3.0	天井部は、なだらかに下外方に下る。外面は暗褐色の釉が厚くかかり、調整は不明である。 内面はナデ調整を行なう。天井部中央に中窪みの低いつまみが付く。	
22	杯蓋	口径 14.5 器高 4.2	口縁部は、わずかに開き気味に下外方に下る。天井部は中央が平坦で、なだらかに口縁部に続く。胎土は細砂粒を多く含む。	
39	ねり鉢	底径 6.9 残存高 3.4	体部は上外方にのびる。底部は外方へ張り出す。底面は平坦でヘラケズリをしている。 底部中央に円孔を穿っている。	
29	杯身	復元口径 12.9 受部径 14.9 器高 4.2	たちあがりの基部は太く上内方にのび、端部はうすく上方にのびる。 受部は、外方に短く張り出す。底部は内弯しながら下内方に下る。器壁は厚い。 天井部は外面の2/3に左まわりヘラケズリを行なう。	
30	蓋	復元口径 9.8 残存高 3.8	口縁部は下方に下る。天井部は高く丸い。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成は堅緻であるが少し焼け歪んでいる。	
31 10—1	蓋	つまみ径 2.7 残存高 3.2	天井部は中央が平坦になった後、下内方になだらかに下る。天井部中央に中窪みの低いつまみがつく。天井部外面に重ね焼きの痕跡が残る。	
32	短頸壺	復元口径 8.3 残存高 1.9	口頸部は、内傾気味に上方にたちあがる。端部は丸い。肩部は、外方に張り出す。 胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。	
33 10—6	甕	復元口径 36.0 残存高 11.7	口頸部は上外方にのびる。口縁部は外反し、端部は下外方に肥厚し、外傾する面と凹線の巡る面を成す。頸部には、櫛描き文帯と凹線帯が入る。	
34	杯蓋	口径 12.0 器高 3.1	口縁部は下外方に下る。天井部は口縁部から屈曲して、上内方にのびる。 天井部中央部は平坦になる。胎土は、細砂粒を多く含む。	
35	杯蓋	口径 11.6 器高 3.4	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。天井部は口縁部からなだらかに上内方にのび、中央は高く盛り上がる。胎土は、0.1～6mmの砂粒を多く含む。	
36	杯蓋	復元口径 11.2 器高 3.6	口縁部は下外方に下る。内面は先細りとなる。天井部は高く丸い。天井部には、ナデ調整をした後、小さな粘土の固まりを貼付している。	
37	杯身	口径 9.6 受部径 11.5 器高 2.9	たちあがりは大きく内傾した後、端部は先細りとなり鋭くのびる。 受部は上外方に張り出す。底部は低い。内面には釉や窯床等が熔着している。 胎土は、0.1～7mmの砂粒を多く含む。	
38	杯身	復元口径 8.9 受部径 10.1 器高 2.6	たちあがりは短かく上内方にのびる。器壁は他面に比して非常にうすい。 受部は外上方にのびる。底部は浅く、中央は平坦でヘラ切り整形をしている。 胎土は0.1～0.2mmの砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。	
24	杯蓋	口径 11.0 残存高 4.0	口縁部は下方に下った後、わずかに外方に開く。内面は内傾する段を有する。 天井部は高く、丸い。天井部外面は未調整である。胎土は細砂粒を多く含む。	

焼成部

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
11—1	杯蓋	口径 14.7 器高 3.7	口縁部は内弯気味に下る。端部は丸い。天井部は低く平坦である。天井部に1条の凹線が巡り、凹線を境に中央部は、ヘラケズリ調整、他は回転ナデ、ナデ調整を行なう。	
2 9—2	杯蓋	口径 13.6 器高 4.1	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部は、中央が高く、丸い。ヘラケズリは天井部の約1/2に施されている。胎土は砂粒を若干含む。	
3	杯蓋	口径 16.1 器高 4.6	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部は高い。天井部外面の3/5に左まわりのヘラケズリを行なう。他面は回転ナデ調整を行なう。内面の調整は丁寧である。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
11—4	杯身	口径 14.2 受部径 15.8 器高 3.2	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は丸く短く外方に張り出す。底部は浅く平たい。底部外面は釉がかかり、淡橙色に変色している。5mm程度の砂粒を若干含む。	
5	杯身		たちあがりは、内傾しながらのびる。器壁は他面と比べてうすい。 受部は太く外方にのびる。完形であるが、焼け歪みが著しく口形は楕円形を呈する。 胎土は、細砂粒をやや多く含む。	
6 10－2	有蓋高杯	口径 14.4 受部径 16.7 残存高 5.5	杯部たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部はやや深い。内面中央に円弧タタキが残る。 外面中央に、下外方に下る脚部がつく。	
7	杯蓋	口径 15.3 器高 4.8	口縁部は内弯気味に下方に下る。口縁端部は内面が肥厚する。天井部は高く丸い。 天井部外面の広い範囲に左まわりのヘラケズリを行なう。	
8 9—3	杯蓋	口径 13.8 器高 4.1	口縁部は、外面が凹凸を有しながら下外方に下る。天井部は強い調子で左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は8mmの小石2個を含め若干の砂粒を包含する。	
9	杯蓋	口径 14.5 器高 3.2	口縁部は下外方に下る。天井部は口縁部から屈曲して、低く平坦である。 天井部外面のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。	
10	杯蓋	復元口径 15.0 残存高 4.0	口縁部は、下外方に下る。天井部は、口縁部から屈曲して、やや上向きに中心に向う。 胎土は、砂粒をほとんど含まず、精良である。焼成不良で軟質、乳白色を呈する。	
11	杯蓋	口径 14.5 器高 3.8	口縁部は外方に開き気味に下る。天井部は低く、なだらかで、器壁が厚い。 天井部外面の3/5以上に左まわりのヘラケズリ調整を行なう。胎土は砂粒を多く含む。	
12	杯蓋	復元口径 13.8 残存高 3.9	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部はやや高く、左まわりヘラケズリ調整を行なう。他面は回転ナデと天井部内面中央のみナデ調整を行なう。	
13 9—9	杯身	口径 12.7 受部径 14.6 器高 4.0	たちあがりは、内傾しながら、上内方にのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は外上方に張り出す。底部はやや浅い。底部のヘラケズリの範囲は約1/2強で、回転ナデとともに、外面の調整は雑である。	|
14	蓋	復元口径 9.0 残存高 3.1	口縁部は、下方に下った後、端部付近で外方に開く。天井部は高く、丸くなるものと思われる。残存部は、内外面とも回転ナデ調整である。胎土は細砂粒を多く含む。	
15	甕	残存高 3.2	口頸部は口縁部付近で外反し、稜を形成する。口縁部は上外方にのびる。 7本1条の櫛描き文を施す。焼成良好で堅緻、黒色を呈する。	
16	短頸壺	復元口径 9.1 残存高 3.1	口頸部は、上方に短かくのびる。肩部は、下外方になだらかに下る。内外面ともに回転ナデ調整を行なう。胎土は精良である。	
17 10—8	短頸壺	口径 9.2 残存高 3.3	口頸部は、短かく、上方にのびる。端部は丸い。肩部は、内弯気味に下外方に下る。 肩部外面下半にカキ目調整がみられる。他面は回転ナデを行なう。	
18 9—4	杯蓋	口径 13.9 器高 4.1	口縁部は下外方に下る。天井部はやや低く平たい。外面に左まわりヘラケズリが巡る。 胎土は0.1～5mmの砂粒を多く含む。天井部にヘラ記号がある。	|
19	杯身	口径 14.2 受部径 16.2 器高 4.3	たちあがりは、内傾しながら上内方にやや長くのびる。 受部は外方に張り出す。底部はなだらかに中心に向うが、外面は剥離が激しい。 内面は、指頭押えによる窪みがところどころに残る。	
20	杯蓋	口径 12.6 器高 3.9	口縁部は下外方にわずかに開きながら下る。内面に1条の沈線が巡る。天井部は口縁部から屈曲して、丸味を有する中央に向かう。胎土は微砂粒を多く含む。	
21	杯身	復元口径 12.2 受部径 14.4 残存高 4.0	たちあがりは、内傾しながら、上内方にのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は太く、外方に張り出す。杯蓋の口縁部が熔着している。底部はやや浅く、器壁は厚い。外面には、乳白色の釉が厚くかかる。	
22	杯蓋	口径 13.9 器高 3.7	口縁部は下方に下った後、わずかに外方に開いて下る。天井部は、口縁部からなだらかに続く。胎土は細砂粒を多く含む。	
23	杯身	復元口径 12.9 受部径 14.8 残存高 4.1	たちあがりは短かく、上内方にのびる。器壁は他面に比して非常にうすい。 受部は外方にのびる。底部は深く丸い。外面は窯床の砂が熔着している。 内面は強く焼けている。	
24	杯蓋	復元口径 11.8 残存高 3.1	口縁部は下外方に下り、端部付近で器壁がうすくなる。天井部は、口縁部から屈曲して、平坦になる。胎土は砂粒を若干含む。	
25	杯蓋	口径 15.5 器高 4.5	口縁部は、下外方に内弯気味に下る。天井部は、中央が高く盛り上がる。天井部の外面のほぼ全面に左まわりヘラケズリを行なう。	
26	杯蓋	口径 15.4 器高 3.2	口縁部は、下外方に開きながら下り、端部で下方に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。 内外面の調整は丁寧で器面は平滑に近い。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
11—27	杯身	口径 11.8 受部径 13.3 器高 3.7	たちあがりは短く、内傾しながら上内方にのびる。端部は丸い。 受部は太く短く、外方にのびる。底部は中央が深くなる。底部外面は盛り上がり、内面はマキアゲの凹凸を残す。	
28	杯身	復元口径 11.7 受部径 13.8 残存高 3.9	たちあがりは内傾した後、中程で上方にのびる。端部は鋭い。 受部は外上方に鋭くのびる。受部以下は、下内方に直線的に下る。底部の回転ヘラケズリはなくなる。	
29	杯身	復元口径 11.6 受部径 13.8 残存高 4.0	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は外方に張り出す。底部は下内方に下り、中央は深い。底部外面の1/2にヘラケズリを行なう。胎土は、ほとんど砂粒を含まない。	
30	杯蓋	口径 14.0 器高 3.6	口縁部は内弯しながら下外方に下り、端部付近で、下方に下り接地する。天井部は、中央が平坦になる。外面には、左まわりのヘラケズリを4～5周巡らす。	
31	杯蓋	口径 13.5 器高 3.7	口縁部は下外方に下った後、下方に下る。天井部はなだらかに口縁部に続き、中央部で平坦になる。胎土は微砂粒を多く含む。	
32	杯蓋	復元口径 13.5 残存高 4.1	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部は、高く丸い。 胎土は、砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、乳白色を呈する。	
33	杯蓋	復元口径 14.1 器高 4.0	口縁部は、下外方に下る。天井部は、口縁部から屈曲して、やや低い天井部中央に向う。 胎土は砂粒をやや多く含む。焼成良好で堅緻、灰色を呈する。	
34	杯蓋	口径 14.0 器高 3.9	口縁部は下外方に下る。口縁部の器壁はうすい。天井部はやや低く、口縁部から鈍く屈曲する。外面の2/3強に左まわりのヘラケズリ調整を行なう。胎土は砂粒を多く含む。	
35	杯蓋	復元口径 15.2 残存高 3.4	口縁部は下外方に下る。天井部は口縁部から鈍く屈曲した後、浅い凹線が巡る。 凹線より上はヘラケズリ調整を行なう。焼成はやや甘く、乳白色を呈する。	
36	杯蓋	口径 12.0 器高 3.9	口縁部は下外方に下る。口縁部の器壁は天井部に比してうすい。天井部は高く盛り上がる。 天井部中央は、成形後未調整である。	
37	杯蓋	口径 11.7 器高 3.7	口縁部は下方に下る。天井部は高く丸い。外面は、釉と窯床が熔着している。 内面は回転ナデの後、中央部はナデ調整を行なう。	
38	杯蓋	口径 12.3 器高 3.3	口縁部は下外方に下る。内面は、内傾する面を有する。天井部外面の調整は雑である。 内面は渦巻状に凹凸が広がる。胎土は細砂粒を多く含む。	
39	杯蓋	復元口径 11.4 残存高 3.2	口縁部は肥厚し、下外方に下る。端部は先細りである。天井部は、高く盛り上がるものと思われる。胎土は細砂粒を多く含む。	
40	杯身	復元口径 10.6 受部径 12.8 残存高 2.9	たちあがりは短く、内傾した後、なだらかに上方にのびる。端部はうすい。 受部は外方に張り出す。底部は浅い。 胎土は砂粒を若干含む。	
41 9—10	杯身	口径 10.2 受部径 11.7 器高 3.2	たちあがりは短かく、内傾した後、口縁端部の器壁はうすく、上方に鋭くのびる。 受部は外方にのび、端部は非常に鋭い。底部は浅く成形後、外面中央に粘土をうすく貼り付けている。	
42	杯身	口径 9.9 受部径 12.0 器高 2.9	たちあがりは短かく、内傾した後、端部は鋭くのびる。 受部は上外方にたちあがりとほぼ同じ長さに張り出す。底部は、焼け歪みのため凹凸が著しい。胎土は微砂粒を多く含む。	
43	杯身	口径 10.6 受部径 12.2 器高 3.1	焼け歪みのため、器形が著しく変化している。たちあがりは短かく、内傾する。 受部はたちあがりと同じ長さで張り出し、両者の間は、鈍いU字状に溝が巡る。 天井部内面は、渦巻状に凹凸を繰り返す。	
44 10—5	壺	復元口径 12.2 残存高 6.2	口頸部は、上外方にたちあがり、口縁部は、先細りとなり、上外方にのびる。 肩部は、丸味を持って下外方に下り、胴部は内弯気味に下る。カキ目調整を施す。	
45	壺	復元口径 10.5 残存高 4.4	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。 肩部は下外方に下り、細かいカキ目調整を行なう。他面は回転ナデ調整である。	

排水溝　2次的堆積

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
12—1	杯蓋	復元口径 15.8 器高 4.0	口縁部は内弯気味に下方に下る。天井部は、中央部がやや平坦で、口縁部へなだらかに下る。胎土は、0.1～6mmの砂粒を含む。天井部にヘラ記号の一部がみられる。	川
2	杯蓋	復元口径 15.3 器高 4.5	口縁部は内弯しながら下外方に下った後、下方に下る。天井部は高く丸い。天井部外面のヘラケズリを始め内外面の調整は丁寧である。天井部外面にヘラ記号の一部がみられる。	×

図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
12—3	杯蓋	復元口径 14.7 器高 4.2	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は、口縁部から鈍く屈曲し、丸味をもって中心に向かう。胎土は、砂粒をほとんど含まず精良である。	
4	杯蓋	復元口径 14.0 器高 3.8	口縁部は、やや開き気味に下方に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。 天井部外面は、左まわりヘラケズリと回転ナデ調整、内面は回転ナデとナデ調整を行なう。	
5	杯蓋	復元口径 13.9 残存高 3.3	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部は、上内方にのびる。 胎土は、砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅緻、灰黒色を呈する。	
6	杯蓋	復元口径 15.4 残存高 3.7	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は、丸くなだらかである。天井部には、左まわりのヘラケズリ、口縁部は回転調整の後、端部に斜めに櫛目を施す。	
7	杯身	復元口径 13.7 受部径 15.9 器高 4.0	たちあがりは、ゆるく内傾しながら上方にのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は太く、外方にのびる。底部にヘラ記号の一部が残る。 胎土は、2mm前後の砂粒をやや多く含む。	╳
8	杯身	復元口径 12.0 受部径 14.3 残存高 3.3	たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は丸い。 受部は、上外方にのびる。端部は丸い。杯蓋の口縁部の一部が熔着している。 底部は浅く、外面のヘラケズリの範囲は狭い。	
9	杯身	復元口径 11.7 受部径 13.7 残存高 3.0	たちあがりは、やや内傾し、中程から上方にのびる。 受部は、外方にのびる。受部以下は下内方に下る。 焼成良好で堅緻である。灰色を呈する。	
10	杯蓋	口径 11.8 器高 3.5	口縁部は中程が肥厚し、端部は先細りとなり、下外方に下る。天井部は高く、中央は平坦になる。天井部外面中央は成形後、うすく粘土を貼り付けている。	
11	杯蓋	口径 12.0 器高 3.1	口縁部は、下方に下った後、外方に下る。天井部は、中央が盛り上がる。口縁部外面と内面全面に回転ナデ調整、天井部外面は未調整である。胎土は砂粒を多く含む。	
12 9—5	杯蓋	口径 11.3 器高 3.6	口縁部は下方に下る。天井部は高く、丸く盛り上がる。天井部内面は、渦巻状に凹凸を繰り返す。外面は、中央にうすく粘土を貼付しており、整形は雑である。	
13	杯蓋	復元口径 13.1 残存高 3.3	口縁部は、下外方に下る。端部は、内面でわずかに肥厚し丸い。天井部は低く、なだらかに口縁部に続く。胎土は細砂粒を多く含む。	
14	杯蓋	復元口径 11.8 器高 3.4	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。天井部は、中央が高く盛り上がる。外面に整形後胎土と同質の粘土の小さな固まりを数ヶ所貼り付けている。	
15	杯蓋	口径 11.8 器高 3.3	口縁部は、外方に開き気味に下る。 天井部は口縁部から屈曲し、高く盛り上がる。中央は平坦になる。天井部は、中央を除いた一部に回転ヘラケズリを行ない、他は全面回転ナデを行なう。	
16	杯蓋	復元口径 12.8 器高 3.3	口縁部は、下外方に下り、端部は肥厚して丸い。天井部は、丸く盛り上がり、中央は平坦になる。天井部外面中央は未調整で、内面はナデ、他は回転ナデ調整を行なう。	
17	杯蓋	復元口径 10.9 残存高 3.5	口縁部は下方に下る。天井部は丸い。器壁は凹凸を繰り返す。天井部中央に粘土をうすく貼り付ける。	
18	杯蓋	復元口径 10.9 残存高 3.5	口縁部は、肥厚した後、先細りとなり、下方に下る。天井部は高く、丸く盛り上がる。 外面は、回転ヘラケズリの後、粘土をうすく貼付して表面を平滑に調整している。	
19	杯蓋	復元口径 9.8 残存高 3.4	口縁部は、下方に下り、端部付近でわずかに外方に開く。天井部は、中央が高く盛り上がる。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。	
20	杯蓋	復元口径 11.5 器高 3.0	口縁部は、外方へ開きながら下る。天井部中央に粘土を貼り付け、段が付いて平坦になる。 胎土は、砂粒を多く含む。	
21	杯蓋	口径 11.8 器高 3.3	口縁部は、丸味をもって下外方に下る。天井部は高く盛り上がり、中央部は平坦になる。 平坦部は、ヘラ切り後粘土を貼付し、指及び、ヘラ状のもので押さえている。	
22	杯蓋	口径 11.8 器高 2.8	口縁部は、下外方に開き気味に下る。天井部は、口縁部から屈曲して、丸く盛り上がる。 胎土は砂粒を適度に含む。内面は、釉や異物を厚く熔着している。	
23	杯蓋	復元口径 11.8 器高 2.3	口縁部は、外方に開き気味に下る。天井部は低く、中央は平坦になる。内外面ともに器表は丁寧に調整している。	
24	杯蓋	口径 12.7 器高 2.9	口縁部は、外反気味に下外方に下る。天井部は低く、中央は平坦になり、未調整である。 内面は渦巻状に器表は凹凸を繰り返す。	
25	杯蓋	口径 11.8 器高 3.1	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部外面には、窯床が厚く付着している。 焼け歪みでやや平たくなっている。	
26	杯身	復元口径 11.0 受部径 13.2 残存高 4.3	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は深く、受部から下内方に下る。 胎土は、微砂粒を若干含む。底部外面にヘラ記号の一部が残る。	｜

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
12—27	杯身	復元口径 9.5 受部径 11.2 残存高 3.8	たちあがりは、内傾した後、上方に鋭くのびる。 受部は、外方に張り出す。底部は深く、受部から下内方に下る。器壁は全体的にうすい。 底部はヘラ切り未調整である。胎土は精良である。	
28	杯身	復元口径 11.1 受部径 12.7 残存高 3.6	たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。端部は丸い。 受部は外方にのびる。底部は深く丸い。外面中央は、ナデがみられるが、ほとんど未調整である。胎土は、砂粒を若干含むが精良である。	
29	杯身	口径 10.4 受部径 12.4 器高 3.6	たちあがりは短く、弯曲しながら上方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は、中央が深く丸い。外面は釉が厚くかかる。 内面は中央が窪み、ナデ調整をしている。	
30	杯身	復元口径 9.5 受部径 11.2 器高 3.8	たちあがりは短かく、端部は鋭く上方にのびる。 受部は外方にのびる。底部は浅く、釉が厚くかかる。内面は、中央にナデ、他面は回転ナデ調整をしている。	
31	杯身	復元口径 9.8 受部径 11.9 器高 3.6	たちあがりは、内傾した後、上方にやや鋭くのびる。 受部は外方にのびる。底部は、中央が深く丸い。外面中央は未調整である。 胎土は、砂粒を若干含む。	
32	杯身	口径 9.7 受部径 11.6 器高 3.1	たちあがりは、鋭く上内方にのびる。 受部は短かく、上外方にのびる。底部は中央が平坦になり、受部まで直線的にのびる。 底部の内面はなだらかに下る。	
33 9—11	杯身	口径 10.5 受部径 12.2 器高 3.5	たちあがりは短かく、内傾した後、上方に鋭くのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は、たちあがりとほぼ同じ長さで、上外方にのびる。底部は深く丸い。内面は中央が窪む。外面の大半に釉が厚くかかる。	
34	杯身	復元口径 9.3 受部径 11.3 残存高 3.0	たちあがりは、内傾して上内方にのびる。端部は先細りで鋭い。 受部は、上外方に張り出す。底部は浅くなだらかに丸い。外面は厚く釉がかかる。 内面中央はナデ、他面は回転ナデ調整を行なう。	
35	杯身	口径 10.9 受部径 11.9 器高 2.5	焼け歪んでいる。たちあがりは、内傾した後、端部は鋭くのびる。受部との境に凹線が巡る。受部は、上外方に張り出す。底部は浅い。中央部は平坦な面をなす。 胎土は、2～9mmの小石を少量と砂粒を多く含む。	
36	杯身	復元口径 10.1 受部径 11.8 器高 3.3	たちあがりは、内傾気味にのびた後、端部は上方に鋭くのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は外方にのびる。底部は、中央が平坦になる。底部外面中央は、ヘラ切り未調整である。胎土は、砂粒をやや多く含む。	
37	杯身	口径 10.1 受部径 12.0 器高 3.1	たちあがりは、内傾して、上内方にのびる。端部はうすく、鋭くのびる。 受部の器壁はうすく、鋭く張り出す。底部は、平坦な中央までなだらかに下る。 外面全面に釉が厚くかかる。胎土は、微砂粒を多く含む。	
38	杯身	口径 10.1 受部径 11.8 器高 3.5	たちあがりは、内傾した後、上方に鋭くのびる。受部との境に沈線が巡る。 受部は、短かく外方にのびる。底部は深く、丸い。外面中央は未調整である。 内面は、丁寧に調整している。	
39	杯身	口径 10.0 受部径 11.9 器高 3.3	たちあがりは、内傾した後、中程から上方にのびる。 受部は、上外方にのびる。杯蓋の口縁部の一部が熔着している。底部は、深く丸い。 胎土は、細砂粒を多く含む。	
40	杯身	口径 9.1 受部径 11.5 器高 3.1	たちあがりは、内傾した後、中程から鋭く上内方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は、部分的に焼け歪む。外面は、釉がかかった後、細かく剝離している。	
41	杯身	復元口径 9.9 受部径 11.8 器高 2.4	たちあがりは、短かく内傾した後、段を有して再び内傾する。端部は鋭い。 受部との境に沈線が巡る。受部は短かく、上外方に鋭くのびる。底部は浅く、中央付近で外側に肥厚する。0.1～4mmの砂粒を含む。	
42	杯身	復元口径 10.6 受部径 12.3 残存高 2.3	たちあがりは、内傾して上内方にのびる。 受部は、上外方にのびる。端部は丸い。底部は、下内方に下る。中央は欠損している。 胎土は、砂粒を適度に含む。焼成は、良好で堅緻だが、内面に窯床が熔着している。	
43	杯身	復元口径 10.0 受部径 11.7 残存高 3.8	たちあがりは、内傾した後、上方に鋭くのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は、深く丸くなる。底部外面は未調整と思われる。内面は横ナデと不整方向ナデ調整を行なう。胎土は、砂粒を多く含む。	
44	杯身	復元口径 10.1 受部径 11.6 残存高 3.1	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびた後、端部は鋭く上方にのびる。 受部は短かく、外上方にのびる。底部は、受部以下内弯気味に下内方に下る。底部中央は欠損している。焼成は堅緻で、外面は淡灰色を呈し、内面は釉及び異物が熔着している。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
12—45	杯身	復元口径 9.4 受部径 11.2 残存高 2.8	たちあがりは、上内方にのびる。受部との境に沈線を切り込んでいる。 受部は、上外方に鋭くのびる。底部は、内弯しながら下内方に下る。外面はヘラケズリ、内面は回転ナデ、内面中央にナデ調整を行なう。胎土は細砂粒を若干含むのみである。	
46	杯身	口径 11.6 受部径 13.3 残存高 2.5	たちあがりは短かく、内弯気味に上内方にのびる。 受部は、たちあがりとほぼ同じ長さで、上外方にのびる。底部は浅く、外面は未調整である。内面は、回転ナデ調整後、中央部のみナデ調整をしている。	
47	杯身	復元口径 10.2 受部径 12.1 器高 3.3	たちあがりは短かく、内弯気味に上内方にのびる。 受部は、たちあがりより大きく、上外方に張り出す。底部は、焼け歪んでいる。 胎土は、微砂粒を多く含む。	
48	杯身	復元口径 11.6 受部径 13.0 器高 2.8	たちあがりは短かく、上内方にのびる。 受部は外方にのびる。底部は、受部以下、内弯気味に下内方に下り、中央は、中窪みの平面を成す。底部外面中央は未調整で、内面は釉がかかる。	
49	杯身	口径 10.6 受部径 12.2 器高 3.1	たちあがりは、短かく内傾する。端部は丸い。 受部は、上外方にのびる。底部は浅い。底部外面は、窯壁その他異物がほぼ全面に熔着している。内面は、回転ナデ調整後、不整方向にナデを行なう。	
50	杯身	復元口径 10.0 受部径 11.8 器高 3.3	たちあがりは、短かく内傾した後、わずかに角度を変え上方にのびる。 受部は、上外方にやや長く張り出す。底部は、なだらかに下内方へ下る。外面は、釉がかかる。内面は、回転ナデと中心部にナデ調整を行なう。	
51	杯身	復元口径 10.3 受部径 11.9 器高 2.8	たちあがりは、短かく内傾しながら、上方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は浅く受部以下、下内方に下った後、底部中央は平たくなる。胎土は、微砂粒を多く含む。	
52	杯身	復元口径 10.2 受部径 11.7 残存高 3.5	たちあがりは、上内方にのびる。 受部は、上外方にのびる。底部は、下内方に下る。底部外面中央は、ヘラ切り未調整である。胎土は、砂粒を若干含む。焼成良好で堅緻である。	
53 9—12	杯身	口径 10.4 受部径 12.1 器高 3.0	たちあがりは、短かく内傾しながらのびる。 受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、受部以下下内方に下り、平坦な底部中央に至る。底部外面の平坦面に2mm前後の白色砂粒が点々と付いている。	
54	杯身	口径 10.4 受部径 12.0 器高 3.1	たちあがりは、短かく内傾する。基部がやや太く先細りとなり、端部はやや鋭い。 受部は、上外方にのびる。底部は中央が平坦になり、なだらかに受部につづく。 底部端付近に2条の沈線が巡る。	
55	杯身	復元口径 10.7 受部径 12.4 器高 3.1	たちあがりは、短かく内傾し、上内方に鋭くのびる。 受部は、上外方に張り出す。底部は、なだらかに下る。底部中央は未調整で、他面は全面回転ナデ調整を行なう。	
56	杯身	口径 10.4 受部径 11.8 器高 3.1	たちあがりは、短かく内傾する。 受部は、上外方に短かく張り出す。底部は、受部以下、下内方に下り、中央がわずかに窪む平面になる。底部外面は未調整である。胎土は細砂粒を多く含む。	
57	杯身	口径 9.7 受部径 11.4 器高 2.1	たちあがりは、短かく、受部よりわずかに高く、上内方にのびる。 受部は、たちあがりとほぼ同じ長さで、上外方にのびる。底部は浅い。底部外面は、左まわりのヘラケズリを行なう。	
58	甕	復元口径 22.6 残存高 7.9	口頸部は、上外方にのび、口縁部は端部が外方に肥厚し、断面は四角形を呈する。 口頸部には、波状文帯と2条の凹線帯が繰り返して施される。	
59	短頸壺	復元口径 8.5 残存高 3.7	口頸部は、上方にたちあがり、口縁部は、外反気味に鋭く上方にのびる。 肩部は、下外方になだらかに下り、細かいカキ目を施す。	

前庭部

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
13—1	杯蓋	復元口径 15.1 残存高 5.0	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は高く、丸く盛り上がる。天井部外面に広く、左まわりのヘラケズリが入る。胎土は、0.1～3mmの砂粒をやや多く含む。	
2	杯蓋	復元口径 16.0 残存高 5.5	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は、高く丸く盛り上がる。天井部外面の3/5に左まわりのヘラケズリを、やや粗い調子で行なう。内面の調整は丁寧である。	
3	杯蓋	口径 15.1 器高 4.8	口縁部は、なだらかに下外方に下る。天井部は高く盛り上がり、中央は、平坦な面が広がる。天井部外面のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
13—4	杯蓋	口径 14.2 器高 3.2	口縁部は、下外方へ開き気味に下る。天井部は、低く広く平面を成す。ヘラケズリの範囲は、天井部外面の3/5程度である。0.1～4mmの砂粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈する。	
5	杯蓋	口径 15.2 器高 2.4	口縁部は、短く下方に下る。天井部は、口縁部から屈曲して、低く広い平面を成す。左まわりのヘラケズリを天井部外面の4/5に行なう。	
6	杯蓋	口径 13.1 器高 3.0	口縁部は、丸味をもって下外方に下る。天井部は低く、内面は平面を成す。天井部外面の4/5に左まわりヘラケズリを行なう。口縁部外面にヘラ記号が入る。	|
7	杯身	復元口径 15.4 受部径 17.5 残存高 3.7	たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。受部は、外方にのびる。底部は、浅く広い。受部以下底部外面には、暗緑色の釉がかかる。胎土は、砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻である。	
8	杯身	復元口径 11.3 受部径 13.5 残存高 4.2	たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。端部は丸い。受部は、短く外方にのびる。底部は、深く丸い。受部以下の外面は釉が厚くかかり焼けている。たちあがりと底部内面は、回転ナデ調整である。	
9	杯身	復元口径 13.5 受部径 15.6 残存高 3.4	たちあがりは、内傾気味に上方にのびる。基部は太く、中程から先細りとなる。受部は、上外方にのび、下面に沈線が巡る。底部は、受部以下下内方に下り、中央は丸味をもって平面を成す。胎土は、砂粒を若干含む。	
10	杯身	復元口径 11.7 受部径 14.1 残存高 3.1	たちあがりは、内傾しながら長く上方にのびる。受部との境に沈線が巡る。受部は丸く、上外方に張り出す。受部以下は、内弯気味に下内方に下る。受部には、重ね焼きの痕跡が残る。胎土は、微砂粒を多く含む。	
11	杯身	復元口径 12.6 受部径 15.1 器高 3.2	たちあがりは、内傾気味に上方に長くのびる。基部は太く、端部は先細りとなる。受部は、上外方に長く張り出す。底部は浅い。受部以下、暗緑色の釉が厚くかかる。たちあがりの内外面は回転ナデ、底部内面は、回転ナデと不整方向ナデを行なう。	
12	杯身	復元口径 12.1 受部径 13.7 残存高 3.1	たちあがりは、外反気味に上方にのびる。基部は太く端部は先細りで鋭くのびる。受部は、短く丸く、外方にのびる。受部以下は下内方に下る。胎土は、砂粒をほとんど含まず精緻である。	
13	無蓋高杯	復元口径 13.2 残存高 3.2	口縁部は上外方にのびる。中程より、器壁の外面側が段をもってうすくなる。下方に波状文を施す。胎土は微砂粒を多く含む。	
14	高杯	復元脚裾径10.3 残存高 7.0	脚柱部に2条の凹線が巡り、凹線の上下に長方形透しが3方に開くと思われる。脚裾部は下外方に下り、端部付近は外方に開く。端部内面に幅広い凹線が入る。	
15	高杯	復元脚裾径12.5 残存高 5.1	脚裾部は下外方に下り、端部は外方に開き、下端部は下方に下り接地する。長方形の透しが入る。内面に暗緑色の釉が厚くかかる。	
16	高杯	残存高 5.2	杯部の底部は上外方にのび、外面はヘラケズリを行なう。脚部の基部は太く、下外方に下り、円孔を有する。脚裾部は、段を有して下外方に下る。	
17	甕	復元口径 9.3 残存高 4.1	口縁部は上外方にのび、端部は丸い。肩部は、頸部からなだらかに下外方に下る。肩部外面に刷毛目調整、内面はヘラケズリを行なう。	
18 10—10	甕	復元口径 15.5 残存高 5.1	口頸部は上外方にのび、口縁部は下外方に肥厚し、わずかに中央が窪み、外傾する面と、外面する平面を成す。肩部外面は、平行タタキとカキ目、内面は円弧タタキを行なう。	
19	把手		基部は太く、上面は中程で屈曲し、上方にのびる。	
20	脚台	脚裾径 6.0 残存径 3.4	低い脚台で、接合部からはずれている。脚柱部は短く、中程から下外方に下り、端部は、中央がわずかに窪む接地面を成す。胎土は精良である。	
21	杯蓋	復元口径 13.8 器高 4.6	口縁部は、内弯気味に長く下外方に下る。天井部は高く、中央がわずかに窪む平面を成す。天井部外面のほぼ全面に左まわりのヘラケズリを行なう。胎土は砂粒を多く含む。	
22	杯蓋	復元口径 16.8 残存高 3.7	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は上内方にのびる。胎土は、0.1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻、淡灰色を呈する。	
23	杯身	復元口径 12.3 受部径 14.2 残存高 3.9	たちあがりは、上内方にのびる。器壁は、他面に比してうすい。受部は、上外方にのびる。底部は、受部以下、丸く下内方に下る。底部外面のほぼ全面にヘラケズリを行なう。胎土は、1mm前後の砂粒を多く含む。	
24	杯蓋	復元口径 16.4 器高 3.8	口縁部は、下外方に下る。天井部はやや低く、外面のヘラケズリは、広い範囲に行なわれる。内面は、回転ナデと中央にナデ調整を行なう。	
25	杯蓋	復元口径 15.9 残存高 4.0	口縁部は、下外方に長く下る。天井部は、口縁部に比して器壁が厚くなり、口縁部から鈍く屈曲した後、平行にのびる。胎土は砂粒を多く含む。	
26	杯蓋	復元口径 14.0 残存高 4.1	口縁部は下外方に下った後、内弯気味に下方に下る。天井部は、左まわりの回転ヘラケズリを行った後、口縁部との境に凹線を巡らす。胎土は砂粒をやや多く含む。	

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
13—27	杯蓋	復元口径 14.7 残存高 3.6	口縁部は、内弯気味に下外方に下る。天井部はやや低く、幅広いヘラケズリを巡らす。 胎土は、微砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。	
28	杯蓋	復元口径 15.0 残存高 3.6	口縁部は、下外方に下る。天井部はやや低く、左まわりヘラケズリを丁寧に行なう。内面の調整も丁寧である。胎土は、少量の小石と微砂粒を多く含む。	
29	杯蓋	復元口径 13.9 器高 3.3	口縁部は下方に下った後、端部付近で内側が肥厚し、外方に開く。天井部は低い。 天井部外面には、砂質の窯床らしきものが熔着している。	
30	杯蓋	復元口径 15.5 残存高 3.0	口縁部は下外方に下り、端部付近でやや外方に開く。天井部は低く広い。ヘラケズリは、天井部外面の全面に巡る。中央は平坦になる。	
31 9—6	杯蓋	口径 13.6 器高 4.0	口縁部は、内弯気味に下方に下る。天井部は丸く盛り上がる。口縁部の器壁はうすく、天井部は厚く凹凸を有する。天井部の中央からはずれたところにヘラ記号がある。	‖
32	杯蓋	復元口径 15.2 器高 3.8	口縁部は、下外方に下る。天井部は、口縁部から鈍く屈曲して、上内方にのびる。 天井部外面には、左まわりヘラケズリを5周巡らす。胎土は砂粒を多く含む。	
33	杯身	復元口径 13.8 受部径 15.7 器高 3.7	たちあがりは、上内方に長くのびる。 受部は、上外方に張り出す。底部はやや浅く、中央は平坦になる。器形は、わずかに焼け歪んでいる。胎土は、微砂粒を多く含む。	
34	杯身	復元口径 12.9 受部径 14.6 器高 3.9	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。器壁は厚く、端部は丸い。 受部は、短く、丸く太く張り出す。受部以下、丸味をもって下内方になだらかに下る。 底部内面は、指頭による窪みが点々と残る。	
35	杯身	口径 12.0 受部径 13.7 器高 3.6	たちあがりは、上内方にのびる。器壁は基部では太く、端部に近づくにつれうすくなる。 受部は、外方にのびる。底部はやや浅く、丸く下内方に下る。器形は、やや焼け歪んでいる。胎土は、砂粒を多く含む。	
36	杯身	復元口径 11.9 受部径 14.0 残存高 4.1	たちあがりは、内傾しながら上内方にのび、端部付近で上方にのびる。受部との境に凹線が巡る。受部は、上外方にのびる。底部は、下内方に下る。底部の器壁は、たちあがりと受部に比して厚い。胎土は微砂粒を含む。	
37	杯身	復元口径 12.1 受部径 14.6 残存高 4.1	たちあがりは基部が太く、内傾気味にのびた後、中程より上方に鋭くのびる。受部との境に沈線が巡る。受部は外方にのびる。受部以下は、下内方に下った後、欠損している。 胎土は砂粒を含まず精緻である。	
38	杯身	復元口径 12.3 受部径 14.0 器高 4.0	たちあがりは、内傾気味にのびた後、中程より上方に鋭くのびる。 受部は、上外方に長く張り出す。底部は平坦で、受部まで内弯気味にたちあがる。 胎土は、微砂粒を多く含む。	
39	杯身	復元口径 11.5 受部径 13.6 残存高 3.7	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。端部は、先細りで鋭くのびる。 受部は、外方に張り出す。底部はなだらかに丸く、受部の少し手前で、外側の器壁が窪み再び肥厚し受部に至る。外面は左まわりのヘラケズリを行なう。	
40	杯身	復元口径 13.1 受部径 14.7 残存高 3.5	たちあがりは内傾しながらのび、端部は先細りで鋭くのびる。 受部は、外方にのびる。底部は、浅い。 胎土は、砂粒を含まず精緻である。焼成良好で堅緻、灰色を呈する。	
41	杯身	復元口径 11.6 受部径 13.6 残存高 2.9	たちあがりは、内傾しながら上内方にのびる。 受部は、外方に張り出す。底部は浅く、受部から下内方に下った後、丸味をもった平底になる。外面には、左まわりのヘラケズリを行なう。	
42	甕	復元口径 16.5 残存高 4.8	口頸部は上外方にたちあがり、口縁部は外反し、外方へのびる。肩部は下外方に下る。 肩部外面に、やや粗いカキ目調整がみられる。	
43	甕	復元口径 15.7 残存高 4.2	口頸部は、肩部からくの字状に外反してのびる。口縁部は外方に肥厚し、下端は鋭い。 肩部は下外方に下り、外面は暗緑色の釉が厚くかかる。内面は強く円弧タタキを行なう。	
44	蓋	復元口径 10.5 残存高 3.9	口縁部は、外方に開き気味に下る。端部は、内傾する平面を成す。天井部は、口縁部から鈍く屈曲して、高く盛り上がる。底部外面はヘラケズリ、内面はナデを行なう。	

灰原

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
16—1	杯蓋	復元口径 15.0 残存高 3.5	天井部と体部の境の稜線はやや鈍く突出し、口縁部は外方へ開きながら下る。 胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好である。マキアゲ、ミズビキ成形。	
2	杯蓋	口径 15.2 器高 4.0	天井部と体部の境は稜線に代って凹線が巡る。天井部の約3/4に左まわりのヘラケズリを行なう。他面は横ナデ調整で、天井部内面中央にナデ調整を行なう。口縁部内面は、わずかに段を有する。	｜

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
16—3	杯蓋	復元口径 15.3 器高 3.8	天井部と体部の境に凹線が巡る。天井部には雑なヘラケズリを行なう。 口縁部は下外方に下り、内面に段を有する。	
4	杯蓋	口径 13.4 器高 3.6	口縁部は外方に開き気味に下り、端部は内面で鈍く段をなす。 天井部にヘラケズリを左まわりに3周巡らす。天井部の中央よりはずれたところにヘラ記号。	×
5	杯蓋	復元口径 14.8 器高 3.9	天井部から曲線を描きながら、口縁部に下りはじめたところに凹線が巡る。 口縁部は焼け歪み、やや弯曲する。胎土はやや粗。	ニ
6	杯蓋	口径 15.3 器高 3.9	天井部は広く扁平で、体部との境に凹線が巡り、稜を形成している。 内面中央に円弧叩き目がスタンプされている。	｜
7	杯蓋	復元口径 17.2 残存高 4.0	復元口径は大きく、天井部との境に凹線が巡る。 胎土には2～5㎜の砂粒を含む。	
8 11—1	杯蓋	口径 13.6 器高 3.9	天井部と体部の境は浅く窪む。天井部は丸く、比較的高い。 焼成は良好で淡灰色を呈する。	
9 11—2	杯蓋	口径 13.3 器高 3.6	口径はやや小型化している。天井部の3/5以上に左まわりのヘラケズリを行なう。 口縁部は内弯気味に下る。適度に砂粒を含み焼成良好。	
10	杯蓋	復元口径 16.3 器高 4.5	胎土には、大きな砂粒を含まず精緻で、調整も丁寧に行なわれ、全面にヨコナデ・ナデ調整が施されている。焼成は良好であるが、赤味を滞びる。	
11 11—3	杯蓋	口径 14.5 器高 4.1	天井部の稜線および沈線、口縁端部内面の段も消失する。 天井部は丸く盛り上がる。口縁部は短く、下方に下る。	
12 11—4	杯蓋	口径 14.2 器高 4.7	天井部は丸く高い。口縁部は内弯気味に下る。天井部にはヘラケズリを荒く強いタッチで左まわりに幅広く行なう。内面はヨコナデとナデ調整を行なう。	
13 11—5	杯蓋	口径 15.3 器高 4.1	天井部から体部はなだらかにカーブし、口縁部は下方に下る。 胎土は1～2㎜の砂粒を多く含む。	/\
14 11—6	杯蓋	口径 14.8 器高 4.4	外面のほぼ全面に緑褐色の自然釉がかかる。口縁端部は丸く仕上げている。 内面は丁寧にヨコナデ・ナデ調整。	
15	杯蓋	復元口径 14.7 器高 4.0	口縁部は内弯気味に下り、端部は丸い。天井部は口縁部から段を持ち高くなる。 段より上の全面に左まわりヘラケズリを行なう。焼成良好で黒灰紫色を呈する。	｜
16	杯蓋	口径 14.4 器高 3.9	口縁部は内弯気味に下る。天井部はほぼ全面に左まわりヘラケズリを行なう。天井端部付近に浅い凹線が走る。内面はマキアゲ成形の凹凸を残す。	
17 11—7	杯蓋	口径 14.8 器高 4.0	口縁部は開き気味に長く下り、端部は丸い。天井部は高く丸い。ヘラケズリの範囲は広いが雑に行なう。胎土は粗。焼成良好で天井部の一部に自然釉がかかる。	
18	杯蓋	口径 14.6 器高 4.2	口縁部は、内弯気味に下る。天井部に左まわりヘラケズリ4回転。胎土はやや密である。 内面は回転ナデ調整の上から中央部付近にやや強いタッチでナデ調整。焼成不良で灰褐色。	
19	杯蓋	口径 14.0 器高 4.4	口縁部は内弯しながら下り、端部は外方につまみ出す。天井部は丸く、内面で器壁がうすくなっている。胎土は砂粒をあまり含まず密。焼成はやや不良で軟質。外面は乳褐色、内面は赤褐色を呈する。	
20 11—8	杯蓋	口径 14.5 器高 4.4	器形は19に類似。ヘラケズリは左まわりに幅広く行なう。 胎土はやや密、0.1～2㎜の微砂粒を含む。やや軟質で灰褐色を呈する。	
21	杯蓋	復元口径 15.8 器高 4.4	口縁部は外方へ下る。天井部中央にヘラケズリは見られない。 胎土は粗く、0.1～4㎜の砂粒を含む。焼成良好。	＋＋
22 11—9	杯蓋	口径 15.0 器高 3.8	器形は19・20に類似。口縁部は一旦肥厚した後、端部で狭小する。 胎土は、0.1～5㎜の砂粒を含む。焼成良好で堅緻。灰褐色を呈する。	
23	杯蓋	口径 15.4 器高 4.5	口縁部はなだらかに外方に下る。天井部は左まわりヘラケズリを幅広く行なう。内面はマキアゲ・ミズビキ整形が明瞭である。胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈す。	＋
16—24 11—10	杯蓋	口径 14.0 器高 3.9	口縁部は下方に下る。天井部は口縁部からゆるいカーブを描き、均整のとれた形となる。 マキアゲ・ミズビキ整形で天井部は左まわりヘラケズリで中心部分のみ未調整。	
25	杯蓋	口径 14.4 器高 3.9	口縁部は短く下方に下る。天井部中央は平坦である。 胎土は、0.1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成不良で軟質。赤黄色を呈す。	
26	杯蓋	口径 14.4 器高 4.1	口縁部は内弯気味に下る。天井部のヘラケズリの範囲はやや狭くなる。内面中央はナデで他面は回転ナデを行なう。焼成良好、灰色を呈する。	｜
27	杯蓋	復元口径 16.0 器高 3.8	口縁は外方に開き気味に下る。天井部の整形は雑で、ヘラケズリも荒い。内面は全面調整をしている。胎土は密で焼成も良好である。	｜

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
16—28	杯蓋	口径 15.9 器高 4.8	口縁部は外方に開き気味に長く下る。器高が高く、天井部にヘラケズリを左まわりにまんべんなく行なう。胎土は0.1～2mmの砂粒をやや多く含む。焼成はやや不良で赤褐色を呈する。	
29 11—11	杯蓋	口径 14.0 器高 4.3	口縁部は下方に下る。天井部は丸い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。外面は釉がかかり、部分的に黒く光る。	
30	杯蓋	復元口径 15.4 器高 3.7	口縁部は内弯気味に下る。天井部は中ほどから平坦になる。胎土は微砂粒のみを含み精良である。焼成良好で灰色を呈する。	
31	杯蓋	復元口径 15.0 器高 3.9	口縁部は外方に開き気味に下り、中位はナデによりわずかにくぼむ。天井部は左まわりに強いタッチでヘラケズリを行なう。	
32	杯蓋	口径 14.6 器高 3.6	口縁部は開き気味に下る。天井部は丸くカーブを形成する。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好で青灰色を呈する。	
33	杯蓋	口径 14.6 器高 3.7	口縁部は外方へ下り、端部付近で内弯気味に肥厚する。天井部は中央が高く、平坦である。胎土は、0.1～5mmの砂粒を含む。ヘラケズリは天井部の高く盛り上がったところのみ施されている。	
34	杯蓋	復元口径 16.9 器高 3.9	口縁部から天井部まで丸くカーブを描く。口縁端部付近に回転ナデ調整の上から斜めに刷毛目を施す。天井部の端にヘラ記号の一部がみられる。	
35	杯蓋	復元口径 13.7 器高 3.3	器形は少し焼け歪み、口縁内部に杯身のたちあがりが付着している。胎土は砂粒をあまり含まず緻密である。天井部にヘラ記号の一部がみられる。	
36	杯蓋	復元口径 13.5 器高 3.5	口縁部は下方に下り、天井部は中央付近でくぼむ。口縁部は少々焼け歪んでいる。胎土は、0.1～5mmの砂粒を含むが、全体的には密である。	
37	杯蓋	口径 14.0 器高 4.3	口縁部は器壁が薄く、天井部の内面はマキアゲの凹凸が残る。焼成は良好で一部釉がかかり黒色に光る。	
38 11—12	杯蓋	口径 14.1 器高 4.2	天井部から口縁部にかけて曲線を描きながら下る。歪みはなく均整のとれた器形をしている。内面中央はマキアゲ痕による凹凸が残る。	
39 12—1	杯蓋	口径 13.7 器高 3.8	焼成時によるものか口縁部が歪んでいる。ヘラケズリは天井部の約1/2に左まわりに行なう。胎土は0.1～5mmの砂粒を含む。焼成良好で堅緻。	
40	杯蓋	口径 13.2 器高 3.8	天井部のヘラケズリは雑で、未調整の部分が残る。内面の調整は他のものと同様回転ナデを行なった後、中央部にナデを施す。	
41	杯蓋	口径 14.1 器高 3.8	口縁部は比較的低く、天井部に行くにつれて丸く盛り上がる。天井部から口縁部にかけてヘラ記号がみられる。胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。	
42	杯蓋	口径 13.4 器高 5.0	口縁部は長く外方気味に下り、端部をつまみ出す。天井部は高く、丸い。器壁は全体的に厚く、口縁部はやや薄くなっている。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好。	
43	杯蓋	口径 13.4 器高 3.7	口縁部は下方に下る。天井部は強いタッチでヘラケズリを行なう。内面中央は、マキアゲ痕を明瞭に残している。天井部中央にヘラ記号がみられる。	
44 12—2	杯蓋	口径 12.0 器高 4.6	口縁部は下方に下る。天井部は丸く高い。調整は全面に丁寧に行なう。胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。外面赤灰色、内面灰色を呈する。	
17—1	杯蓋	復元口径 11.4 器高 3.4	口径・器高とも小さくなる。口縁部は外方に開きながら下る。内面は端部付近で肥厚するが、端部で狭小となる。天井部には回転ヘラケズリはみられない。	
2	杯蓋	復元口径 12.7 器高 3.4	口縁部はなだらかに外方に下り、端部付近で肥厚する。天井部はヘラケズリを雑に施す。胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成良好。	
3	杯蓋	口径 12.2 器高 3.3	口縁部はまっすぐ下方に下る。天井部は中央が平坦になる。内面の調整に変化はみられないが、天井部はヘラ切り未調整である。	
4 12—3	杯蓋	口径 11.7 器高 4.0	口縁部は下方に下り、端部は面をもつ。天井部は口径に比して高く、丸い。天井部全面に釉がかかり、調整方法は不明。	
5	杯蓋	口径 10.8 器高 3.9	口縁部の器壁はうすく、下方に下る。天井部の回転ヘラケズリは比較的広い範囲に行なわれている。整形は、マキアゲ・ミズビキである。	
6	杯蓋	口径 11.6 器高 3.6	口縁部は外方に開き気味に下り、端部は鋭い。天井部はヘラ切り未調整である。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
7	杯蓋	口径 10.3 器高 3.2	口径・器高とも小ぶりである。口縁部は内弯気味に下り、端部はうすい。天井部は全面に回転ヘラケズリを行なう。	
8 12—4	杯蓋	口径 10.9 器高 3.3	口縁部はやや開き気味に下る。天井部の約1/2に回転ヘラケズリを行なう。胎土は緻密で、焼成も良好である。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
17—9	杯身	口径 13.7 受部径 15.7 器高 4.1	たちあがりは内傾した後、端部は上方に伸びる。受部は外上方に伸びる。底部に幅広く左まわりヘラケズリを行なう。内面は回転ナデ調整で、中央部を強く指ナデする。焼成不良で軟質。灰白色を呈する。	
10	杯身	復元口径 12.4 復元受部径14.0 残存高 4.1	たちあがりは上方にのび、受部とともに端部は鋭い。器壁はほぼ均等の厚さに整えられている。胎土はあまり砂粒を含まず精良である。焼成は良好で堅緻である。青灰色を呈する。	
11 12—5	杯身	口径 13.5 受部径 16.0 器高 4.4	たちあがりは内傾した後、わずかに角度を変え上方にのびる。 受部は外方にのび、端部は丸い。 胎土は少量の砂粒を含む。焼成はやや甘く、赤灰色を呈する。	
12 12—6	杯身	口径 13.0 受部径 15.1 器高 4.8	たちあがりは内傾した後、直立気味にのび端部はやや鋭い。 受部は外上方にのび、端部は鋭い。底部は比較的深く丸い。 胎土は緻密で、焼成は良好。青灰色を呈する。	
13 12—7	杯身	口径 12.2 受部径 14.4 器高 4.4	たちあがりは内傾した後、中位で上方にのびる。受部は上外方にのび、一部に杯蓋の破片が付着している。底部中央にヘラ記号がある。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面に暗緑色の釉がかかる。	‖
14	杯身	口径 13.2 受部径 15.4 器高 4.5	たちあがりは、内傾した後、上方に直立する。端部は鋭い。 受部は上外方にのびる。底部は深く丸い。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成はやや甘く、暗灰色を呈する。	＋
15	杯身	口径 11.8 受部径 14.1 器高 4.3	たちあがりは短かく、内傾した後、端部で上方に鋭くのびる。 受部は外上方にのびる。底部は中央が平たい。ヘラケズリの範囲は狭く、底部の1/2弱である。焼成は堅緻であるが、少々焼け歪む。	‖‖
16 12—8	杯身	口径 10.8 受部径 13.1 器高 3.8	たちあがりは短かく、内傾した後、端部付近で直立してのびる。 受部は上外方にのびる。底部は浅い。底部のヘラケズリは幅広く左まわりに行なう。 胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で赤灰色を呈する。	
17 12—9	杯身	口径 13.2 受部径 15.3 器高 4.4	たちあがりは、内面側では直立し、外面側は端部にいくにつれ器壁がうすくなる。 受部は上外方に鋭くのびる。底部は中央で平らになる。全体的に調整は丁寧である。 胎土は緻密で、焼成は良好。灰色を呈する。	‖
18 12—10	杯身	口径 13.0 受部径 14.9 器高 4.5	たちあがりは、内傾した後、中位で上方にのびる。端部は鋭い。 受部は外方にのび、端部は丸い。器壁は凹凸を有する。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成時に一部割れ、歪んでいる。	＋
19	杯身	復元口径 12.5 復元受部径14.6 器高 4.3	たちあがりは、わずかに内傾する。端部は鋭い。 受部は外方にのび、端部は鋭い。底部は欠損しているが、丸みを有すると思われる。 胎土は緻密で、焼成は良好である。	＋
20 12—11	杯身	口径 12.3 受部径 14.5 器高 4.4	たちあがりは、内傾しながらのび、端部は丸い。 受部は丸く、外方にのびる。底部は丸く、外面は釉やその他異物がほぼ全面に付着している。胎土はやや粗い。	
21 12—12	杯身	口径 13.6 受部径 15.1 器高 4.4	たちあがりは、やや内傾気味にのび、端部で外方につまみあげている。 受部は短かく外上方にのびる。底部はゆるい曲線を描く。ヘラケズリの範囲は広く、外面の調整は丁寧である。焼成良好で堅緻。	
22	杯身	口径 12.4 受部径 14.3 器高 3.7	たちあがりは短かく、上方にのび、端部は鋭い。 受部は太く短かい。底部は浅く、内面は平らである。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻。淡灰色を呈する。	
23 13—1	杯身	口径 13.1 受部径 15.0 器高 4.0	たちあがりは、内傾しながらのびる。 受部は上外方にのび、中位がふくらむ。底部中央付近のみヘラケズリを行なう。 焼成は堅緻であるが、口縁の一部が歪み底部はひびわれている。	
24	杯身	口径 13.8 受部径 16.2 器高 4.1	器高に比して、口径が大きい。たちあがりは内傾しながらのびる。 受部は外上方にのびる。 胎土は砂粒を含むが内面は緻密である。焼成良好で、黄褐色を呈する。	
25	杯身	口径 12.0 受部径 14.3 器高 4.2	たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。端部は鋭い。 受部はうすく鋭い。内面の調整のヨコナデ、中央部のナデともに丁寧に行なう。 胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成良好で堅緻である。	‖
26 13—2	杯身	口径 12.9 受部径 15.0 器高 4.8	たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は丸い。 受部は、上外方へのびる。底部は深く丸い。 胎土は、微砂粒を多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。	

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
17—27	杯身	口径 13.8 受部径 14.7 器高 4.0	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受部は、短かく外上方にのびる。底部は浅く、器壁は厚い。 焼成は堅緻で、底部は釉が全面に厚くかかる。	
28	杯身	口径 12.4 受部径 14.5 器高 3.7	たちあがりは、内傾した後、端部付近で直立する。 受部は上外方にのびる。 胎土は、砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で、淡灰色を呈する。	
29 13—3	杯身	口径 12.6 受部径 14.7 器高 4.1	たちあがりは、内傾しながらのびる。 受部は上外方にのびる。端部は鋭い。底部は丸みをもち、暗緑色の釉が厚くかかる。 胎土はやや粗く、焼成は良好である。	
30	杯身	口径 12.6 受部径 14.6 器高 4.3	たちあがりは、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、厚く、外方にのびる。底部は丸い。 胎土は砂粒を含むが密である。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
31 13—4	杯身	口径 12.9 受部径 14.8 器高 4.6	たちあがりは、内傾しながらのび、端部は鋭い。 受部は上外方へのびる。底部外面はマキアゲの痕跡が残り、釉が厚くかかる。 胎土は、砂粒をあまり含まず緻密である。焼成は良好で堅緻である。	
32	杯身	口径 12.6 受部径 14.5 器高 4.4	たちあがりは、わずかに内傾しながら、端部にいくにつれて細くなる。 受部は、短かく太い。底部は、丸味をもつ。外面は緑褐色の釉がかかる。 胎土は、微砂粒を多く含むが密。焼成は良好で堅緻である。	
33 13—5	杯身	口径 12.7 受部径 14.8 器高 3.7	たちあがりは、内傾しながらのびる。 受部は外上方にのび、端部は鋭い。杯蓋の端部が付着している。底部は浅く平たい。 胎土は、緻密である。焼成は良好で堅緻である。	┼
34 13—6	杯身	口径 12.1 受部径 14.7 器高 4.1	たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。 受部は鋭く、外方にのびる。器壁は全体にうすく、一部焼け歪む。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は堅緻で、黒灰色を呈する。	
35 13—7	杯身	口径 11.8 受部径 13.9 器高 3.7	たちあがりは、短かく、内傾する。 受部は、上外方にのびる。底部のヘラケズリは雑で中央は削り残している。 胎土は、適度に砂粒を含む。焼成はやや甘く、青灰色を呈する。	
36	杯身	口径 13.5 受部径 15.6 器高 3.4	たちあがりは、内傾した後、わずかに角度を変え上方にのびる。 受部は、上外方にのびる。端部は丸い。底部は浅い。 胎土は砂粒を多く含む。焼成時にヒビが入り、器形が変化している。	
37	杯身	器高 4.3	たちあがりは、内傾した後、端部付近で細くなり、上方にのびる。 受部は、短かく、外上方にのびる。底部のヘラケズリは幅広く、内外面とも調整は丁寧に行なっている。胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。灰色を呈する。	
38 13—8	杯身	口径 12.8 受部径 14.7 器高 3.9	たちあがりは、内傾した後、外反気味に上方にのびる。 受部は、短かく、上外方にのびる。底部のヘラケズリは幅広く行なわれている。 胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成は堅緻であるが、部分的に焼け歪んでいる。	│
39	杯身	口径 13.1 受部径 15.2 器高 3.6	たちあがりは内傾し、基部は太く、端部にいくにつれて細くなる。 受部は、外方にのびる。 胎土は、砂粒を適度に含む。焼成は堅緻であるが、焼け歪む。	┼
40	杯身	口径 12.6 受部径 15.0 器高 3.2	たちあがりは、基部は太く、中位から上方に細くのびる。 受部は、細長く外方にのびる。端部は鋭い。底部は浅い。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
41 13—9	杯身	口径 12.6 受部径 14.8 器高 3.7	たちあがりは、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、大きく、外方にのびる。底部は浅く、中央部は平たい。ヘラケズリの範囲は狭い。 焼成は良好で堅緻である。赤灰色を呈する。	┼
42	杯身	復元口径 12.9 復元受部径15.0 器高 3.8	たちあがりは、内傾した後、中位で上方にのびる。 受部は、短かく外方にのびる。底部の器壁はうすい。ヘラケズリの範囲は広い。 胎土は緻密である。焼成はやや甘く、黄灰色を呈する。	‖
43 13—10	杯身	口径 12.5 受部径 15.0 器高 3.4	口径14.7、器高 4.0の杯蓋が接合している。蓋は器壁が厚く、端部は丸い。天井部は中央に粘土を継ぎ足し、平坦にしている。杯身は焼け歪み、暗緑色の釉が底部に厚くかかる。 胎土は、砂粒を適度に含む。	
18—1	杯身	復元口径 12.3 受部径 14.0 器高 2.9	たちあがりは、短かく、内傾する。 受部は、短かく、外方にのびる。端部は丸い。底部は浅く、滑らかに調整している。 胎土は微砂粒を含み、良好である。焼成は堅緻で灰色を呈する。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
18—2 13—11	杯身	口径 12.0 受部径 14.2 器高 3.8	たちあがりは、内傾した後、上方に鋭くつまみ上げている。 受部は、やや長く、上外方にのびる。底部は丸い。 胎土は0.1～4mmの砂粒を含む。焼成は堅緻で淡灰色を呈する。	
3	杯身	口高 11.0 受部径 13.4 残存高 3.2	たちあがりの基部は太く、内傾した後、中位で鋭く上方にのびる。 受部は、短かく、上外方にのびる。底部は中央で窪む。ヘラケズリの範囲は広く他の調整もすべて丁寧である。胎土は緻密で焼成も良好である。	
4	杯身	復元口径 12.1 復元受部径14.3 器高 3.0	たちあがりは、短かく、内傾気味に上方につまみあげている。端部は鋭い。 受部は体部から段を有し、上外方にのびる。底部は平らで、ヘラケズリ、内面の調整とも雑である。胎土は砂粒を多く含み粗い。	
5	杯身	口径 10.6 受部径 12.6 器高 2.9	たちあがりは、短かく、内傾した後、上方に鋭くのびる。 受部は上外方にのび、端部は鋭い。杯蓋の口縁が接合している。底部は中央が窪み気味の面を有する。外面は釉がかかり強く焼ける。	
6	杯身	口径 10.2 受部径 12.3 器高 3.2	たちあがりは、わずかに内傾した後、外側が段を有して、さらに内傾する。端部は鋭い。 受部は、鋭く、上外方にのびる。底部は浅く平たいが、中央が少し盛り上る。 胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成は堅緻である。外面は釉がかかった後、はがれる。	
7	杯身	口径 9.8 受部径 11.9 器高 3.0	たちあがりの器壁はうすく、内傾した後、上方に鋭くのびる。 受部は上外方にのびる。端部は丸い。底部の器壁は凹凸を有する。 胎土は緻密である。焼成は良好で堅緻。外面は全面釉がかかる。	
8	杯身	復元口径 9.9 復元受部径12.1 器高 2.7	たちあがりは、短かく内傾した後、鋭く上方につまみ上げられている。 受部は、上外方に短く厚くのび、端部は丸い。口縁部と受部の境に、1条の沈線を有する。 胎土は2mm程度の砂粒をやや多く含む。外面は釉がかかる。	
9 13—12	杯身	口径 9.6 受部径 11.6 器高 2.5	たちあがりは短かく内傾し、端部は鋭い。 受部は、上外方にのびる。端部は丸い。口縁部と受部の境に1条の沈線を有する。 底部は浅く、ヘラ切り後は未調整である。	
10	杯身	復元口径 10.0 復元受部径12.2 器高 3.4	たちあがりは、内傾した後、中位で器壁がうすくなり、端部は鋭い。 受部は、厚く丸い。底部は、ヘラ切り未調整。器壁は大きく凹凸する。 胎土は適度に砂粒を含む。焼成は良好。堅緻で灰色を呈する。	
11	杯身	口径 10.4 受部径 12.3 器高 3.2	たちあがりは、短かく内傾し、端部は鋭くのびる。 受部は太く、外方にのびる。端部は丸い。杯蓋の口縁部が熔着している。 底部はヘラ切り未調整。その他ヨコナデ・ナデ調整は丁寧である。	
12	杯身	復元口径 10.2 復元受部径12.6 器高 3.7	たちあがりは、短かく、内傾した後、端部は鋭くのびる。 受部は、細く長く外上方にのびる。底部は深く、中央部外面に粘土を継ぎ足し平坦にする。 胎土は適度に砂粒を含む。焼成良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
13	無蓋高杯	復元口径 12.0 杯部高 4.5	杯部のみ。平底に近い底部から少し上外方にのびたところに稜が張り出す。陵から上は外上方にのび、中位で再び陵が短かく張り出す。口縁部は器壁がうすくなり、端部は鋭く外反する。	
14	無蓋高杯	復元口径 11.6 杯部高 4.5	杯部のみ。13と同様の器形を有する。 内外面とも回転ナデ調整を行なう。胎土は緻密で焼成は良好。灰色を呈する。	
15	無蓋高杯	復元口径 12.0 残存高 4.1	杯部のみ。13・14と類似しているが、全体に丸味を有する。 胎土は緻密である。焼成は良好で黄褐色を呈する。	
16	無蓋高杯	復元口径 13.2 杯部高 4.4	杯部のみ。平底に近い底部端の稜から上外方にのびたところに再び稜が張り出す。稜から上は、器壁がうすくなり、角度を変えてやや上向きにのび、口縁端部に至る。内外面とも暗緑色の釉がかかる。	
17	無蓋高杯	復元口径 12.3 杯部高 4.1	杯部のみ。平坦な底部端の稜から、ゆるい曲線を描きたちあがり再び稜が張り出す。稜から上は長くのびる。胎土は4mm程度の砂粒を少量含む他は緻密である。	
18	無蓋高杯	復元口径 12.5 残存高 4.7	杯部のみ。底部はゆるく上外方にのび、端部に稜が張り出す。稜から上は角度を上向きに変え、再び稜が張り出し口縁部に至る。口縁端部は丸い。	
19	無蓋高杯	復元口径 12.2 残存高 4.3	杯部のみ。口縁部下と底部端の稜は鋭く張り出す。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。	
20	無蓋高杯	復元口径 15.0 杯部高 4.0	杯部のみ。底部は、内弯気味に外上方にのび、口縁部に至る。口縁部は大きく外反し、端部は丸い。内外面ともナデによる調整は雑である。	
21	無蓋高杯	復元口径 14.2 残存高 7.5	杯部は平坦な底部から、口縁部は外上方にのび、端部は鋭い。底部端と口縁部下に小さく稜が張り出す。脚部は、3方に長方形の透しが入る。長脚2段透しと思われる。	
22	無蓋高杯	復元口径 12.4 残存高 8.4	杯部は平坦な底部から、口縁部は上方にのびる。底部端と更にその上に鋭い稜が巡る。 脚柱部は、2条の沈線を挟んで上下に長方形の3方透しが入る。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
18—23	無蓋 高杯	復元口径 12.9 残存高 8.6	杯部の底部端には鈍い稜があり、口縁部中位下にも稜が巡る。 脚部の長方形の3方透しは、杯底部まで深く切り込む。	
24	無蓋 高杯	復元口径 13.1 残存高 3.9	口縁部は内弯気味にたちあがり、口縁端部まで外上方にのびる。口縁端部は内面がうすくなり鋭い。2条の稜線の間に列点文からなる文様帯が入る。	
25	無蓋 高杯	復元口径 11.8 残存高 5.0	長く上方にのびた口縁部の2条の稜の間に細かい列点文が施される。 胎土は緻密である。焼成は良好で堅緻。黒褐色を呈する。	
26	無蓋 高杯	復元口径 12.4 杯部高 4.8	底部端に2本の沈線に挟まれて稜が張り出す。口縁部下にも小さく稜が巡る。 稜間に文様帯が入る。口縁端部はわずかに外反する。	
27 23—6	無蓋 高杯	復元口径 14.1 杯部高 4.9	底部端の稜から、外上方にたちあがったところに斜に列点文の文様帯が入る。 文様帯の直上に鋭く稜が張り出し、口縁部は長く上方にのびる。	
28	無蓋 高杯	復元口径 12.1 杯部高 5.0	25・26・27と同様の器形を有する。胎土は砂粒を多く含む。 焼成は良好で堅緻であるが、杯底部内面に釉や異物が熔着する。	
29 14—1	無蓋 高杯	口径 13.0 杯部高 5.3	底部から内弯気味にたちあがり、文様帯を挟む稜の上から上方にまっすぐのびる。 胎土は砂粒を多く含む。脚部は3方透しと思われる。	
30	無蓋 高杯	口径 12.1 残存高 5.3	丸味をもった底部から口縁部は内弯気味に上方にのびる。脚部は3方透しである。 焼け過ぎで表面は剝離している。	
31	無蓋 高杯	口径 12.0 残存高 11.9	杯部の器形は28と類似している。脚部の透しは3方開きで細長い。 胎土は砂粒を多く含む。杯部内面に異物を多く熔着している。	
32 14—2	無蓋 高杯	口径 12.5 残存高 5.5	底端部の稜から内弯気味にたちあがったところに、列点文が施される。文様帯の直上に再び稜が巡り、口縁部は外上方にのびる。内外面ともに黒緑色の釉がかかる。	
33	無蓋 高杯	口径 11.5 残存高 5.2	平たい底部の端に鋭く稜が張り出す。2条の稜間は狭く、縦方向の櫛目が入る。 口縁部の器壁はうすく、端部は外反気味にのびる。脚部は2方透しである。	
34	無蓋 高杯	復元口径 10.6 残存高 4.2	少々焼け歪んでいるが、口径は小さく、器壁は全体的にうすい。2条の稜線は鋭く張り出す。胎土は緻密である。	
19—1	高杯 蓋	口径 16.8 器高 5.1 つまみ径 3.9	口縁部は、外方に開きながら下る。天井部はやや高く、中央部は平たい。 つまみは大きく、逆台形で中央が浅く窪む。器壁は全体にうすい。 天井部は左まわりのヘラケズリが行なわれ、他面はナデ・回転ナデ調整である。	
2	高杯 蓋	復元口径 16.3 器高 4.1 つまみ径 3.7	口縁部は、内弯気味に外下方に下る。天井部は浅く、回転ナデ調整を行なう。 つまみは平たい宝珠形で、中央がくぼむ。 胎土はあまり砂粒を含まず密。焼成良好で堅緻。灰色を呈する。	
3	高杯 蓋	口径 16.5 器高 4.7 つまみ径 2.9	口縁部は内弯気味に下る。天井部は浅く広い。口縁部と天井部の境に沈線が1条巡る。 つまみは小さく高い。調整は丁寧である。 胎土は砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。	
4	高杯 蓋	口径 15.4 器高 4.9 つまみ径 2.5	口縁部は、内弯気味に下る。口縁部と天井部の境に稜が鈍く張り出す。 天井部外面に、小ぶりで扁平なつまみがつく。 焼成は良好で堅緻。天井部端部付近から口縁部かけて黒色を呈する。	
5 14—4	高杯 蓋	口径 15.3 器高 5.3 つまみ径 2.6	口縁部は、下方に下るほど器壁がうすくなる。天井部との境に稜線が巡る。 天井部は、一旦丸く盛り上がった後、中央部は平坦になる。 天井部中央に小ぶりのつまみがつく。	
6	高杯 蓋	口径 16.0 器高 4.8 つまみ径 3.0	口縁部は、内弯気味に下方に下る。端部内面は、段を有し細くなる。 口縁部と天井部の境に稜線が巡る。内外面とも丁寧な回転ナデ調整を行なう。 天井部中央に中窪みの扁平なつまみがつく。	
7 14—3	高杯 蓋	口径 16.0 器高 5.8 つまみ径 3.1	口縁部は、内弯気味に下る。天井部との境に稜が張り出す。 天井部は高く丸い。天井部中央に扁平なつまみがつく。 胎土は適度の砂粒を含む。焼成良好で堅緻。灰色を呈する。	
8	高杯 蓋	口径 15.5 器高 6.1 つまみ径 3.2	口縁部は、内弯気味に外方へ下る。天井部との境に稜がわずかに張り出す。 天井部は高く丸い。中央につまみがつく。天井部外面にカキ目、他面は回転ナデ調整を行なう。胎土は砂粒を多く含む。	
9	高杯 蓋	口径 14.7 器高 5.0 つまみ径 3.0	口縁部は、外面が凹凸しながら下る。 天井部に幅広く、左まわりのヘラケズリを行なう。天井部中央に中窪みのつまみがつく。 焼成は良好で堅緻である。外面は暗灰色、内面は淡灰色を呈する。	

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
19—10	有蓋高杯	口径 13.4 受部径 15.6 残存高 5.0	たちあがりは、内傾しながらのびる。器壁は端部にいくにつれうすくなる。 受部は上外方にのびる。脚部は3方透しと思われ、杯底部に深く切り込む。 胎土は砂粒をあまり含まない。焼成はやや甘く、青灰色を呈する。	
11	有蓋高杯	口径 12.9 受部径 15.1 残存高 6.9	たちあがりは、内傾した後、上方につまみ上げている。端部は鋭い。 受部は外上方にのびる。底部の受部側に一ヶ所ヘラ記号有り。 脚部は外方に開く。焼成は甘く、灰白色を呈する。	×
12	有蓋高杯	口径 14.7 受部径 17.0 残存高 4.4	たちあがりは、内傾しながらのびる。端部は鋭い。 受部は上外方にのびる。端部は鋭い。全体に器壁はうすい。底部の回転ヘラケズリは幅広く行なわれ、調整はすべて丁寧である。	
13	有蓋高杯	口径 12.9 受部径 15.6 杯部高 4.6	たちあがりは、内傾した後上方にのびる。受部は外上方にのびる。端部は鋭い。 底部の器壁は厚い。脚部との接合痕が残る。 胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成は不良で軟質。黄赤色を呈する。	
14	有蓋高杯	口径 14.2 受部径 16.4 残存高 4.8	たちあがりは、内傾した後、上方にのびる。受部は外方にのびる。 底部は、浅く平たい。左まわりヘラケズリを幅広く行なう。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅緻。底部端から受部にかけて黒色を呈する。	
15	有蓋高杯	口径 12.9 受部径 15.0 残存高 4.3	たちあがりは、内傾した後、中位から上方にのびる。端部は鋭い。 受部は丸く短い。受部に蓋の口縁の一部が熔着している。脚部は3方透しである。 内面の調整は丁寧である。外面は全面に釉がかかる。	
16	高杯	脚裾径 15.0 残存高 12.0	脚柱部に2条の沈線が巡る。沈線の上下に3方開きの長方形透しが入ると思われる。 脚裾部には1条の凹線が巡り、そこから外方に大きく開く。	
17 14—6	高杯	脚裾部 15.9 残存高 13.2	長脚2段透しである。脚裾部は大きく外方に開く。端部は外方に面をもつ。 胎土は適度に砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。灰黒色を呈する。	
4—18 14—5	高杯	脚裾径 13.2 脚部高 12.5	脚裾部に1条、脚柱部に2条の凹線が入る。脚柱部の沈線の上下に長方形の透しが3方に入る。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。	
19	高杯	脚裾径 12.3 残存高 8.9	脚裾部は、脚柱部から大きく外方に開く。端部は下方に下る。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成良好で堅緻。外面は灰色、内面は黒灰色を呈する。	
20	高杯	脚裾径 11.8 残存高 8.8	脚裾部は、脚柱部からなだらかに外方に下る。端部は丸い。脚柱部と脚裾部に各々2条の凹線が巡る。透しは長方形で2段3方開きである。脚柱部にヘラ記号がある。	×
21	高杯	脚裾径 15.0 脚部高 16.3	長い脚柱部には、2条の沈線と3方開きの透しが2段入る。脚裾部は、外方に下り、端部は上方にのびる。	
22	高杯	脚裾径 16.6 脚部高 17.1	長い脚柱部の中央よりやや上に2条の凹線が巡る。透しは長方形で凹線を挟んで上下に入る。下方の透しは、長く切り込んでいる。脚裾端部は下方にのび、外側に面をもつ。	
23	高杯	脚裾径 15.3 残存高 9.8	脚柱部から脚裾部までなだらかに下る。裾端部は面をもつ。 胎土は砂粒を適度に含む。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
20—1 14—7	高杯	脚裾径 12.8 残存高 13.3	細い脚柱部中央に2条の凹線が入る。凹線の上下に長方形透しが3方に入る。下方の透しの下に1条の凹線が入る。裾端部は上外方に張り出す。	
2	高杯	脚裾径 12.2 残存高 13.1	脚柱部中央よりやや上に2条の凹線が巡る。透しは沈線の上下に長方形に入る。下方の透しは長い。裾端部は外上方にのび、端部は丸い。	
3	高杯	脚裾径 12.5 脚部高 13.6	脚柱部中央に2条、下方に2条さらに下方に1条の凹線が巡る。裾端部は上方に肥厚する。 胎土は砂粒をあまり含まない。焼成良好で堅緻。	
4	無蓋高杯	口径 13.1 残存高 4.7	杯部は強いタッチでヘラケズリをした底部から段を有して、口縁部は内弯気味に上外方にのびる。脚部は下外方に下る。胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成不良で灰白色を呈する。	
5 15—1	無蓋高杯	口径 12.3 残存高 6.5 脚裾径 8.2	杯底部は中央が平坦で内弯気味にたちあがる。口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 脚部は下外方に下り、端部は上外方にのびる。杯部内面に異物が熔着している。 胎土は精良である。焼成は良好で堅緻。黒褐色を呈する。	
6	無蓋高杯	脚裾径 8.0 残存高 5.6	杯部底部から口縁部は内弯気味に上外方にのびる。脚部は外弯後、下外方に下る。端部の接地部は平坦な面をもつ。杯部にヘラ記号が残る。	|
7	無蓋高杯	脚裾径 7.5 残存高 4.5	杯底部から口縁部に向い内弯気味にたちあがる。脚部は外弯気味に下り、端部付近で下外方に下る。焼成はやや甘く、黄灰色を呈する。	
8	無蓋高杯	脚裾径 9.4 残存高 4.1	杯底部は外上方にたちあがる。脚部は短かい脚柱部から外方に開いた後、下外方に下る。 端部の比較的広い接地面は中央が浅くくぼむ。	
9	無蓋高杯	脚裾径 8.7 残存高 4.2	脚部は短かい脚柱部から外方に開いた後、下外方に下る。端部は面を成し鋭い。 胎土は微砂粒を多く含む。	

図面番号 図版	器種	法　量 (cm)	所　　見	ヘラ記号
20—10	無蓋高杯	脚裾径 6.9 残存高 4.1	杯底部は、内弯気味に外上方にたちあがる。脚部は短かく、脚柱部はほとんどなく、裾部は外下方に下る。端部はわずかに上外方につまみ出されている。	
11 15— 2	高杯	脚裾径 10.5 脚部高 4.8	脚部は外反しながら下る。端部の直上に稜が巡る。 胎土は砂粒をあまり多く含まない。焼成は良好で淡灰色を呈する。	
12	高杯	脚裾径 9.2 残存高 5.7	杯底部は、内弯気味に上外方にたちあがる。外面はカキ目風にヘラケズリを行なう。 脚部は外下方に下り、中位で内弯気味になり、端部で再び外方へ下る。	
13	高杯	脚裾径 12.2 脚部高 5.4	脚部は外反しながら下り、端部は上方に張り出す。長方形の透しを２方以上に入れる。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。黄灰色を呈する。	
14 15— 3	高杯	脚裾径 9.5 残存高 6.5	杯底部は、上外方にたちあがる。脚部は外下方に下り、裾部で器壁が厚くなり、外反する。 杯底部外面はヘラケズリ、内面は回転ナデとナデ調整である。	
15 15— 5	高杯	脚裾径 10.4 残存高 7.5	杯底部は、内弯気味に上外方にたちあがる。脚部は外下方に下り、端部は上外方に張り出す。細砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻、黒緑色の釉がうすくかかる。	
16 15— 4	高杯	脚裾径 10.6 残存高 6.6	杯底部は外上方にのびる。脚部は外下方に下り、裾部でさらに外方に下る。 脚部は内外面とも丁寧な回転ナデ調整を行なう。焼成良好で堅緻。	
17 15— 6	高杯	脚裾径 12.1 残存高 8.2	杯底部は外上方にのびる。脚部は外下方に下り、裾部で大きく外反する。裾上部に円孔を３方に穿つ。焼成は良好で堅緻、黒褐色の釉と異物が熔着している。	
18	高杯	脚裾径 13.1 脚部高 7.0	脚部は外下方に下り、裾部で内弯気味に曲った後下方に下る。端部は外方にわずかに肥厚する。上下２段に円孔が交互に穿たれている。	
19	高杯	脚裾径 14.0 脚部高 7.9	脚部は外下方に下り、裾部は内弯気味に下方に下る。脚柱部と裾部の境に稜が巡る。長方形の透しが入る。３方開きと思われる。	
20	高杯	脚裾径 13.1 脚部高 6.9	脚部は外反しながら下り、裾部で角度を変え外下方に下る。脚柱部と裾部の境に稜が巡る。長方形の透しが入る。胎土は精良である。	
21	高杯	脚裾径 13.4 残存高 7.2	脚部は外反しながら下る。裾部は外下方に下り、端部は平坦な接地面をもつ。 脚柱部に２条の凹線とその上下に長方形透しが入る。裾部との境に鋭い稜線が巡る。	
22	高杯	脚裾径 13.9 脚部高 9.2	脚部は、外反しながら下る。稜線から下の裾部は外下方に下る。裾部の器壁はうすく、稜線は鋭い。長方形の透しが入る。胎土は精緻である。	
23	高杯	脚裾径 15.0 脚部高 8.9	脚部は外反しながら下り、裾部で角度を変え下方に下る。脚柱部下方に、わずかに稜が張り出す。焼成は良好で堅緻。外面にうすく釉がかかる。	
24	高杯	脚裾径 14.2 残存高 10.2	脚部は外反しながら下る。裾部は稜線を境に長く外下方に下る。長方形透しの切り込みは長く、稜線に達する。胎土は精良である。	
25 15— 7	高杯	脚裾径 13.6 残存高 10.6	杯底部は上外方にのびる。脚部は外下方に下り、稜線が巡る。裾部は、脚柱部より一旦外方に張り出した後外下方に下る。長方形透しが３方に入る。	
26 15— 8	高杯	脚裾径 9.8 脚部高 7.5	脚部は外下方に下り、一旦外方に張り出した後、下方に下る。内外面とも回転ナデ調整。 胎土は細砂粒を適度に含む。	
27 23— 5	高杯	脚裾径 13.7 残存高 3.5	脚部は長方形の透しが入る。脚柱部と裾部の境に凹線が巡る。裾部は、外反気味に外下方に下る。細かい櫛描き列点文を施す。	
21— 1	甕	復元口径 15.0 残存高 4.7	上外方にのびる口頸部近くで水平に外反し、凸帯を巡らす。口縁部は、外上方にのびる。 端部は丸い。口縁部に縦方向の櫛描き文を密に施す。	
2	甕	復元口径 13.7 残存高 4.1	口頸部と口縁部の境に凸帯が巡る。口縁部は外上方にのび、端部はわずかに外反する。口縁部と口頸部に、細かく密に櫛描き文を施す。	
3	甕	復元口径 17.0 残存高 5.5	口頸部は上外方にのび、口縁部近くで水平に外反し、凸帯が巡る。口縁部は外上方にたちあがり、中位から内弯気味に外上方にのびる。	
4	甕	復元口径 13.9 残存高 4.0	上外方にのびる口頸部は、口縁部近くで水平に外反し、凸帯が巡る。口縁部は外上方にのびる。櫛描き文は左下へ斜に８～10本単位で行なう。	
5	甕	復元口径 12.8 残存高 3.3	口頸部から外上方にたちあがる口縁部は、端部付近でさらに外反する。 細かい櫛描き文は６～７本単位で入る。	
6	甕	復元口径 14.8 残存高 5.3	口縁部は、口頸部から内弯気味に上方にたちあがり、長く外上方にのびる。 櫛描き文は、やや間隔をあけて施す。内外面とも黒緑色の釉がかかる。	
7	甕	復元口径 12.5 残存高 6.4	口頸部は外上方にのび、口縁部付近で外反し、凸帯を有する。口縁部は外上方にのび、端部は丸い。口縁部・口頸部ともにヘラ描き文を縦方向に等間隔に施す。	

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
21—8	甕	復元口径 13.8 残存高 5.0	口頸部は外反気味にのび、口縁部付近に凸帯を巡らす。口縁部は外上方にのびる。 器壁は端部に近づくにつれうすくなる。細かい櫛描文が入る。	
9	甕	復元口径 14.6 残存高 4.1	口頸部には、間隔を開けたヘラ描き文を縦方向に入れる。口縁部には、端部付近に櫛描き列点文を斜に入れ、その下方にヘラ描き文を不定間隔に施す。	
10	甕	残存高 9.6	口頸部は外反気味に外上方にのび、口縁部付近に凸帯が入る。口頸部の上部2／3に細かい櫛描き文を縦方行に密に施した後、1条と2条の凹線を巡らす。	
11	甕	胴部径 9.3 残存高 7.6	口頸部の残存部上半に細かい櫛描き文を入れた後、文様帯の直下に一条の凹線を巡らす。 肩部と胴部の境に凹線が巡り、その下に櫛描き列点文を施す。	
12	甕	胴部径 8.9 残存高 6.2	肩部は内弯気味に外下方に下る。胴部は下方に下り、底部に丸く続く。胴部中央の櫛描きの文様帯に円孔を穿つ。	
13	甕	胴部径 7.7 残存高 5.7	肩部は、12に比較して、張りが少ない。2条の沈線に挟まれた列点文の文様帯に円孔を穿つ。器壁は全体に厚い。	
14	甕	胴部径 8.0 残存高 5.4	肩部は、下外方に下る。胴部最大径は中央よりやや上に位置する。底部は丸く、中央がやや平たい。肩部下に一条の凹線を巡らし、凹線上に円孔を穿つ。	
15	甕	胴部径 9.2 残存高 6.9	肩部は内弯気味に下り、胴部付近に深い凹線が巡る。胴部から底部は丸く球形を成す。円孔は凹線にかけて穿つ。	
16 16—3	甕	胴部径 9.2 残存高 7.6	肩部は下外方に下り、胴部付近に凹線が巡る。胴部最大径は沈線下に位置する。胴部から底部は球形を成す。胴部の穿孔は、上方から斜に入れる。	
17 16—4	甕	胴部径 8.1 残存高 6.7	肩部は下外方に下り、胴部は内弯気味に下方に下る。底部の器壁は厚く、中央は平坦である。沈線はみられない。穿孔は大きく丸く穿たれている。	
18 16—2	甕	胴部径 10.5 残存高 7.8	肩部は下外方に下り、凹線が巡る。胴部は球形を成す。底部には、脚台の接合痕が残る。 胴部の1／4が欠損している。残存部に3ヶ所ヘラ記号を有する。	
19 16—1	甕	胴部径 10.5 残存高 7.8	肩部は下外方に下り、凹線が巡る。胴部は球形を成す。底部には、脚台の接合痕が残る。 胴部の1／4が欠損している。残存部に3ヶ所ヘラ記号を有する。	XXX
20	壺蓋	口径 10.6 器高 2.8	口縁部は、外下方に下り、端部は外反し、下方に面を成す。天井部は低い。外面は、回転ナデ調整後、天井部に手持ち静止ヘラケズリを行なう。	
21	壺蓋	口径 8.0 器高 2.9	口縁部は、下方に下る。端部は場所によって整形が異なる。口縁部から天井部にかけて丸くたちあがる。天井部中央は平坦になり、器壁は厚く、調整は荒い。	
22	壺蓋	復元口径 8.7 残存高 3.7	口縁部は下方に下り、端部は外反する。天井部は、内弯しながら上方にのびる。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成はふつうで灰色を呈する。	
23	壺蓋	復元口径 11.9 残存高 3.5	口縁部は下方に下る。端部は内傾する平面を成す。天井部は、カキ目調整を施す。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。灰色を呈する。	
24	壺蓋	復元口径 11.0 残存高 3.9	口縁部は下方に下る。端部は内傾する面に凹線が巡る。天井部は高い。 胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
25	壺蓋	復元口径 10.8 器高 3.8	口縁部は外下方に下る。端部は器壁がうすく、わずかに外反する。天井部は高く、中央部は平たい。胎土は砂粒を多く含む。	
26	壺蓋	復元口径 10.8 器高 3.8	口縁部は外下方に下る。端部は器壁がうすくなり、わずかに外反する。天井部は高く、中央部は平たい。胎土は砂粒を多く含む。	
27	壺蓋	復元口径 9.2 器高 3.5	口縁部は外下方に下る。端部は丸い。天井部は高く丸い。天井部中央のみヘラケズリで他は全面回転ナデとナデ調整を丁寧に行なう。胎土は精良である。	
28	短頸壺	復元口径 7.1 胴部最大径13.8 残存高 6.7	口縁部は、基部より上方に短く直立する。端部は丸い。 肩部は外下方に下り、一条の凹線を境に屈曲して内弯しながら下る。 焼成は良好で堅緻。外面全面と内面の口縁部と底部付近に釉がかかる。	
29	短頸壺	復元口径 6.3 胴部最大径12.5 残存高 7.1	口縁部は、基部より上方に短く直立する。 肩部は外下方に下り。胴部は屈曲して下内方に下る。底部にいくにつれ厚くなる。 胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。焼成良好で灰色を呈する。	
30	短頸壺	復元口径 9.4 胴部最大径15.5 残存高 6.8	口縁部は短く、基部より上方に直立する。端部は丸い。 肩部は張り気味に外下方に下り、屈曲して内弯気味に下る。 胎土は微砂粒と2mm前後の砂粒を少量含む。灰褐色の外面に暗緑色の釉がかかる。	
31	短頸壺	復元口径 7.2 胴部最大径14.1 残存高 7.3	口縁部は、基部より短く、上方に直立する。端部はやや鋭い。 肩部はやや丸味をもち、外下方に下り、屈曲して内弯しながら底部に至る。 胎土は精良で焼成も良好である。肩部に重ね焼きによる色調の変化がみられる。	

図面番号 図版	器種	法　量（cm）	所　　見	ヘラ記号
21—32	短頸壺	復元口径　8.3 胴部最大径15.6 残存高　7.3	口縁部は、短く上方につまみあげられている。 肩部は張り、内弯した後、下内方に下る。肩部に重ね焼きの痕跡が残る。 焼成良好で堅緻。外面には釉がかかる。	
33	短頸壺	復元口径　7.5 胴部最大径14.2 残存高　5.9	口縁部は、基部より直立し、端部は内傾する。 肩部は、長く下外方に下り、屈曲して内弯しながら下る。 胎土は精良で焼成も良好である。	
22—1 16—6	短頸壺	復元口径　8.4 胴部最大径14.3 器　高　9.0	口縁部は、短かく直立する。 肩部は外下方に下り、胴部は内弯しながら底部に至る。底部は丸い。胴部から底部にかけて細かいカキ目調整を行なう。内面胴部以下は、不定方向ナデ調整を行なう。	
2	短頸壺	復元口径　8.6 胴部最大径14.1 残存高　5.9	口縁部は、内傾気味にたちあがる。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し内弯しながら下る。 焼成は良好で堅緻。重ね焼きのため、肩部と胴部の色調が異なる。	
3	短頸壺	復元口径　9.3 胴部最大径10.6 残存高　6.6	器壁の厚さは一様では無く、器形も多少歪んでいる。 口縁部は、短かく上方に外反する。肩部から胴部は内弯しながら下る。胴部以下にヘラケズリ調整を行なう。口縁部の一部と肩部に暗緑色の釉がかかる。	
4	短頸壺	復元口径　9.2 胴部最大径12.1 残存高　6.2	口縁部は、外反気味にたちあがる。 肩部は、外下方に下る。胴部中央に最大径が位置する。 胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。外面に釉がかかる。	
5 16—7	短頸壺	口　径　10.2 胴部最大径12.1 器　高　7.7	口縁部は基部より外反し、端部は外傾する面を成す。 肩部は外下方に下り、胴部は内弯しながら底部に至る。肩部から胴部上半までカキ目調整を行なう。底部内面は雑なナデ調整、他面は回転ナデ調整である。	
6 16—8	短頸壺	口　径　7.9 胴部最大径11.2 器　高　7.0	口縁部は、基部より上方にのび、端部は外反する。 肩部は外下方に下り、内弯しながら底部に下る。肩部と胴部最大径付近までカキ目調整を行なう。底部は回転ヘラケズリ後、中央にヘラ記号を入れる。	＋
7	短頸壺	復元口径　9.2 胴部最大径12.1 器　高　8.5	口縁部は上外方にのび、端部はわずかに外傾する面を成す。 肩部は外下方に下り、胴部から底部まで内弯しながら下る。底部にカキ目調整を行なう。 胎土は細砂粒を少量含む。少々焼け歪む。	
8	短頸壺	復元口径　9.2 胴部最大径11.8 器　高　7.3	口縁部は外反気味に上方にのび、端部は外方に張り出し、上端は面を成す。 なだらかに外下方に下る肩部には、カキ目調整がみられる。胴部から底部は、内弯しながら下内方へ下る。外面より内面の方がよく焼けている。	
9	短頸壺	頸部径　7.0 胴部最大径11.1 残存高　7.6	口縁部は上方にのびる。端部は欠損している。 肩部は外下方に張り出し、胴部は屈曲し下内方へ下る。肩部から胴部にかけて、ヘラ記号の一部が残る。胴部から底部にかけて、異物が熔着している。	ノ
10 16—5	短頸壺	口　径　9.2 胴部最大径12.0 器　高　6.0	口縁部は直立した後、中位から外反する。 肩部は、内弯気味に外下方に張り出す。胴部は、屈曲して下内方に下る。胴部幅に比して器高が低い。焼成は良好で堅緻であるが、肩部に釉と異物が熔着している。	
11 17—1	短頸壺	胴部最大径12.3 残存高　5.3	口縁部は、基部より欠損。 肩部は、外下方へ短く張り出す。胴部は屈曲し下内方へ下る。底部は平坦である。 5mm前後の砂粒を少量含む。焼成は不良で軟質。黄橙色を呈する。	
12	短頸壺	復元口径　7.6 胴部最大径11.3 残存高　6.5	口縁部は、短かく上方にのびる。端部はわずかに外傾する面を成す。 肩部はなだらかに外下方へ下る。胴部は内弯しながら底部に下る。 胎土は砂粒を少量含む。焼成はやや甘い。灰白色を呈する。	
13	短頸壺	復元口径　8.8 胴部最大径12.1 残存高　7.3	口縁部は外反し、端部は丸みをもって外傾する。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し、内弯しながら底部に至る。 焼成は良好で堅緻。黄灰色を呈する。	
14	短頸壺	復元口径　7.7 胴部最大径10.5 残存高　6.8	口縁部は、短かく外反し、端部は外傾する面を成す。 肩部は、なだらかに胴部につづく。胴部は内弯気味に下方に下る。 胎土は、砂粒を少量含むが密である。焼成は不良で軟質。灰白色を呈する。	
15	短頸壺	復元口径　8.4 胴部最大径12.1 残存高　6.4	口縁部は直立した後、中位から外反する。端部は外傾する丸味をもった面を成す。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し、下内方へ下る。 胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好で灰色を呈する。	
16	短頸壺	復元口径　9.8 胴部最大径11.1 残存高　7.7	口縁部は、外上方にたちあがり、中位から外反する。端部は外傾する面を成す。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し、内弯しながら底部に至る。胴部にヘラ記号がみられる。口縁部から底部にかけて、暗緑色の釉が厚くかかるところがある。	∪

図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
22—17 17—2	短頸壺	口径 7.0 胴部最大径 9.2 器高 6.8	口縁部は、外上方にたちあがり、端部は丸い。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し、内弯気味に下り、丸い底部につながる。底部から胴部全面に回転ヘラケズリ調整を行なう。底部内面に指頭痕が残る。	
18 17—3	短頸壺	復元口径 9.4 胴部最大径11.7 器高 6.5	口縁部は基部から直立し、端部は外方に張り出し、上端は面を成す。 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胴部は内弯しながら下る。底部は広く、外面は回転ヘラケズリ、内面は強いタッチでナデ調整を行なう。胎土は細砂粒と1.2mmの小石を含む。	
19	短頸壺	復元口径 8.0 胴部最大径11.2 残存高 6.3	口縁部は、上方にたちあがり、端部はわずかに外反する。 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胴部は屈曲し、下内方に下る。底部外面はヘラケズリ調整後、うすく粘土を貼付し、再びヘラケズリを行なう。	
20	短頸壺	復元口径 6.9 胴部最大径11.5 残存高 6.9	口縁部は、やや長く上方にたちあがる。端部はうすくなり丸い。 肩部は外下方に張り出し、胴部で屈曲し、内弯しながら下る。 焼成は良好で堅緻。外面に黒緑色、内面には黄褐色の釉がかかる。	
21	短頸壺	復元口径 7.8 胴部最大径12.9 残存高 7.9	口縁部は、上外方にたちあがり、端部で外反する。 肩部は、丸味を有し、外下方に下る。胴部は、内弯しながら下り、厚味を増す底部につづく。胎土は細砂粒を若干含む。焼成は良好で灰色を呈する。	
22	短頸壺	復元口径 7.8 胴部最大径12.0 残存高 7.3	口縁部は、上外方にのびる。 肩部は外下方に下り、内面に浅い段を有して、胴部につづく。胴部は内弯しながら下る。 内外面ともに調整は丁寧で器面は平滑であるが、外面に焼土や小石が熔着している。	
23	短頸壺	復元口径 6.8 胴部最大径 8.2 残存高 4.6	口縁部は、短く、上方にたちあがり、端部は外傾する面を成す。 肩部はなだらかに胴部へとつづく。 胎土は緻密である。焼成は良好で堅緻。灰色を呈する。	
24	短頸壺	復元口径 5.0 胴部最大径 5.8 残存高 3.5	口縁部は、上外方にたちあがり、端部に近づくにつれ器壁がうすくなる。 肩部は、丸く外下方に下り、胴部は下内方に下る。 胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で灰色を呈する。	
25	短頸壺	復元口径 8.2 胴部最大径 8.8 残存高 5.4	口縁部は上外方にたちあがる。器壁は中位で内外面に肥厚し、端部で再びうすくなる。 肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し下内方に下る。 胎土は砂粒を少量含むが緻密である。焼成は堅緻で内外面に緑褐色の釉がかかる。	
26 17—4	短頸壺	口径 8.7 胴部最大径13.0 器高 9.4	口縁部は、長く直立する。器壁は、上方にいくにつれ厚くなり、端部は丸い。 肩部は、外下方に張り出し、胴部で屈曲し、内弯しながら下る。底部は丸く、強いタッチでヘラケズリを行なう。内面は全面回転ナデ調整である。焼成良好で堅緻。黒灰色を呈する。	
7—27	壺	復元口径 9.4 胴部最大径13.8 残存高 7.9	口縁部は、上方にたちあがる。器壁は基部付近がうすく、中程より徐々に厚くなり、端部は丸い。肩部は外下方に下り、胴部で屈曲し、内弯気味に下る。 胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻。外面は灰色、内面は黄灰色を呈する。	
28	壺	復元口径 10.1 胴部最大径14.2 残存高 6.9	口縁部は上方にたちあがり、中程からわずかに外方に傾く。端部は丸い。 肩部は下外方に張り出す。肩部から胴部は屈曲して下内方へ下る。 焼成は良好で堅緻。口縁部内面と外面全面に暗緑色の釉がかかる。	
29 17—5	壺	口径 9.1 胴部最大径13.4 残存高 12.2	口縁部は、上方にのびる。 肩部は外下方に下り、胴部は内弯気味に下り、底部につづく。丸い底部の中央には脚台の接合痕が残る。外面全面に回転ナデ調整を丁寧に行なう。	
30 17—6	壺	口径 8.5 胴部最大径13.7 残存高 11.1	口縁部は、外反気味にたちあがり、端部付近で器壁がうすくなり直立する。 肩部は、丸味をもって下外方に下る。胴部は下内方に下り、手荒く回転ヘラケズリを行なう。胴部以下器壁の厚さは一様ではない。焼成は良好で堅緻。	
31	壺	復元口径 10.0 胴部最大径17.3 残存高 9.1	口縁部は、上方にたちあがる。器壁は厚く、端部は丸い。 肩部はなだらかに下外方に下り、胴部は内弯気味に下方に下る。器壁の厚さは、ほぼ一様である。胎土は微砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻。外面に暗緑色の釉がかかる。	
23—1 18-A・B	提瓶	口径 7.4 胴部最大径19.2 残存高 23.5	口頸部は、外反気味にたちあがり、中程に鈍い稜線と一条の凹線が巡る。口縁部は、わずかに外方に傾きながら上方にのびる。肩・胴・底部は、正面ではやや長い球形を呈し、側面では、背面中央が平坦な楕円形を呈する。肩部に下方へ屈曲した1対の把手が付く。	
2 18-C・D	提瓶	口径 5.7 胴部最大径17.7 器高 21.7	口頸部は直立し、口縁部は内弯気味にのびる。 肩・胴・底部は、正面ではほぼ球形を呈する。側面では背面が平坦で、正面は、中ふくらみの器形を呈する。肩部に下方へ屈曲した左右一対の把手が付く。体部はカキ目調整。	
3	提瓶	口径 6.2 残存高 10.9	口頸部は外反気味にたちあがり、口縁部は上方にのび、端部に向って器壁はうすくなる。 肩・胴部は下外方に内弯して下り、以下欠損。肩部に中折れの把手が左右に付く。	
4	提瓶	口径 9.4 残存高 17.3	口頸部は外反してのび、口縁部は上・下・外方に鋭く張り出す。肩部はなだらかに下外方に下り、把手がつく。体部に細かいカキ目調整を行なう。焼成良好で黒灰色を呈する。	

図面番号 図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
23—5	提瓶	口径 8.6 残存高 7.0	口頸部は外反しながらたちあがり、口縁端部は外方にのび、面を成す。肩部は、内弯しながら下外方に下り、把手が付く。口頸部の接合部は丁寧にナデている。	
6	提瓶	復元口径 8.9 残存高 5.5	口頸部は、直立した後上外方にのびる。口縁端部下に凸帯を巡らす。口縁端部は外傾する面を成す。肩部は下外方に下る。胎土は微砂粒を含むが精良である。	
7	提瓶	口径 4.0 残存高 6.3	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部は内弯気味に上方にのびる。 肩部は内弯しながら下外方に下り、環状肥手が付く。器形に比べて器壁は厚い。	
8	提瓶	復元口径 3.1 残存高 4.6	口頸部は、上方にたちあがる。口縁部はわずかに外傾し、端部は上方にのびる。 肩部は外下方に下り、先端が細くなる把手が付く。	
9	提瓶	口径 4.6 残存高 4.1	口頸部は基部が厚く、口縁端部まで上外方にのびる。 肩部は外下方に下る。口頸部の接合後の調整は雑である。胎土は精良。	
10	提瓶	口径 5.9 残存高 11.6	口頸部は、外反しながら、上方にたちあがる。口縁端部は上方にのびる。 肩部はなだらかに下外方に下る。焼成は良好で、ところどころ暗緑色の釉が厚くかかる。	
11	提瓶	口径 5.5 残存高 9.8	口頸部は、丸い口縁端部まで上外方にのびる。肩部は、内弯しながら下外方に下り胴部につづく。器壁は厚く口頸部と胴部中央の接合後の内面はほとんど未調整である。	
12	提瓶	口径 7.0 残存高 10.4	口頸部は、上外方にたちあがり、口縁部は内弯気味に上方にのびる。 肩部は、丸味をもって下外方に下る。体部はカキ目調整後、縦方向にハケ目を入れる。	
13	提瓶	口径 10.5 胴部最大径22.8 残存高 17.1	口頸部は、上外方にたちあがり、口縁部はさらに外反しながらのびる。口縁部は焼け歪んでいる。肩部は、内弯気味に下外方に下り、把手がつく。体部は正面・背面とも、細かいカキ目調整を行なう。別個体の破片が熔着している。	
14	提瓶	胴部最大径18.4 残存高 18.2	口頸部は上方にたちあがる。口縁部は欠損している。 肩・胴・底部は正面からはほぼ球形を呈する。肩部に把手がつく。	
24—1	横瓶	復元口径 11.4 残存高 5.3	口頸部は基部より直立し、口縁部は外反し、端部は丸く肥厚する。 肩部は、外下方に下る。外面はカキ目、内面は円弧タタキ調整を行なう。	
2 19—2	横瓶	口径 12.7 残存高 6.8	口頸部は、上外方にたちあがる。口縁部は外反しながらのび、端部は外下方に折れ曲り、玉縁状を呈する。肩部の外面は格子状タタキ、内面は円弧タタキ調整を行なう。	
3	横瓶	復元口径 9.7 残存高 7.6	口頸部は、内傾した後、上外方に長くのびる。端部は、上方にのびる。 肩部外面は格子状タタキ、内面は円弧タタキ調整を行なう。焼成良好で堅緻。	
4 19—1	壺	口径 12.0 残存高 14.3	口頸部は、外反しながらのびる。口縁端部は外下方に折れ曲り、玉縁状を呈する。肩部から胴部は、内弯しながら下る。外面は平行タタキの上からカキ目、内面は円弧タタキ調整。	
5	横瓶	復元口径 8.4 残存高 12.5	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は上外方にのび、端部は玉縁状に肥厚する。肩部は、内弯しながら下外方に下る。外面はタタキの上にカキ目、内面円弧タタキ調整を行なう。	
6 19—3	ねり鉢	底径 9.0 残存高 7.0	体部は、上外方へのびる。底部は、外方へ張り出し平坦である。器壁は厚く、体部の約2倍あり、中央に1孔を穿つ。体部外面はやや粗いカキ目調整を行なう。	
7	ねり鉢	残存高 7.1	体部は上外方にのびる。底部は欠損している。外面はカキ目、内面はヨコナデ調整を行なう。胎土は、細砂粒を含み密。焼成良好で堅緻。	
8 19—5	ねり鉢	底径 11.0 残存高 11.2	体部は、直立気味に上外方にのびる。底部は外方へ張り出す。底部と体部の接合部内面は厚い。底部中央に1孔を穿つ。黒緑色の釉が厚くかかる。	
9	ねり鉢	残存高 5.8	体部は上外方にのびる。底部は体部との接合部で剝離しており、指頭痕が残る。 底部内面は、器壁が厚くなり、丸底状になっている。外面はカキ目調整を行なう。	
10 19—4	ねり鉢	底径 9.3 残存高 6.0	体部は上外方にのび、外面はナデ、内面は回転ナデ調整を行なう。底部内面は丸底状を呈しナデ調整、底部の土板は、側面と底面をヘラケズリ調整している。	
11	器台	復元口径 21.4 残存高 7.7	体部は、内弯しながら上外方にのび、口縁部でわずかに外反し、端部を下方に折り曲げる。 体部下半は、粗いヘラケズリ調整を行なう。胎土は細砂粒を多く含む。以下欠損。	
12	器台	復元口径 22.8 残存高 8.2	体部は、内弯気味にたちあがった後上外方にのび、口縁端部は、下外方に折り曲げ先端は丸い。体部外面はカキ目調整を行なう。以下欠損。	
13	器台	復元口径 24.6 残存高 8.2	丸い底部から体部は、外上方にのびる。口縁部はわずかに外反し、端部は上方に肥厚し、外側に凹線が巡る。外面全面に細かいカキ目、内面は円弧タタキをナデですり消している。	
14	器台	復元口径 25.5 残存高 6.1	体部は内弯しながらたちあがり、口縁部は外方へのび、外面に1条の凹線が巡る面を成す。 底部付近の外面に平行タタキ、内面に円弧タタキを行なう。	
15	器台	復元口径 25.1 残存高 7.0	体部は、上外方へのびる。口縁部は、外反し下方へ肥厚し、外側に面を成す。 ヘラ描き文とその直下に2条の浅い沈線を施す。	

図面図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
24—16	器台	残存高 9.0	脚部破片。上下に2条の沈線が巡り、その間に櫛描き列点文と長方形透しを入れる。下方の沈線帯の下には、三角形の透しが入る。器壁は厚く、砂粒を適度に含む。	
17	器台	底径 20.8 残存高 11.3	脚部は、下外方に下り、裾部でやや内弯する。端部は内傾し、内側で接地する。裾部の内外面に1条の凹線が巡る。焼成は良好で黒色を呈する。	
18	壺	復元口径 11.7 残存高 4.1	口頸部は、基部より内傾気味にのび、口縁端部は内傾する面を成す。肩部は、外下方に下る。内面は、円弧タタキを行なう。外面は釉が厚くかかる。	
19	甕	復元口径 20.8 残存高 6.4	口頸部は、上外方にたちあがり、口縁部は外反してのび、端部は上下に肥厚する。肩部は、外下方に張り出すが、焼け歪んでいる。頸部にヘラ記号がみられる。	＋＋
25—1 20—1	甕	復元口径 16.5 残存高 5.7	口頸部は上方にのび、口縁部は外反する。端部は外方に丸く肥厚し、上端に浅く沈線が巡り、内面にも凹線が入る。肩部外面はタタキの後にカキ目、内面は円弧タタキを行なう。	＋＋
2	甕	復元口径 16.2 残存高 6.1	口頸部から口縁部まで、外反気味に上外方にのびる。口縁端部は、外反しながら上下に丸く肥厚する。肩部は下外方に下る。頸部にヘラ記号がみられる。	＋＋
3	甕	復元口径 17.2 残存高 9.6	口頸部は直立した後、口縁部は外反する。端部は下方にやや肥厚する。肩部は、丸味をもって下外方に下る。外面はタタキの後にカキ目、内面は強いタッチで円弧タタキ。	＋＋
4	甕	復元口径 17.8 残存高 8.3	口頸部は外上方にたちあがり、口縁部は外反し、端部は外上方に丸い面を成す。内面に凹線が巡る。肩部は外下方に下り、ヘラ記号の一部を有する。	＋＋
5	甕	復元口径 16.5 残存高 4.9	口頸部から口縁部まで、上外方にのびる。端部はわずかに外反し、外方に肥厚する。焼成はやや甘く、赤橙色を呈する。頸部にヘラ記号がみられる。	＼
6	甕	復元口径 18.3 残存高 6.8	口頸部は上外方にたちあがり、口縁部はやや外反する。端部は外方に丸く肥厚する。肩部外面はタタキの後、カキ目調整を行ない。さらにヘラ描き文が入る。	／／／／／
7	甕	復元口径 15.0 残存高 6.9	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反気味に上外方にのびる。端部は外下方に肥厚する。胎土はほとんど砂粒を含まず緻密である。焼成不良で軟質。頸部にヘラ記号がある。	／／
8	甕	口径 15.9 残存高 6.0	口頸部は内傾気味にたちあがり、口縁部は外反しながら上外方にのびる。端部は、外方に肥厚する。肩部の内外面に強いタッチでタタキを行ない、外面はさらにカキ目を施す。	／／
9	甕	復元口径 19.7 残存高 15.5	口頸部は、くの字状に外反し、口縁端部は外方に丸く肥厚する。肩部は、なだらかに外下方に下り、胴部は内弯気味に下る。外面はタタキの上から細かいカキ目、内面は円弧タタキ調整を行なう。	＼
10	甕	復元口径 24.9 残存高 5.7	口頸部は上外方にたちあがり、口縁部はさらに外反する。口縁端部は外下方に肥厚する。肩部は外下方に下る。口縁部内外面と肩部に釉がかかる。頸部にヘラ記号がみられる。	／／
11	甕	復元口径 22.1 残存高 8.8	口頸部は、一旦短かく直立した後、外反しながらのびる。口縁端部は、外方に肥厚し玉縁状を呈する。肩部は外下方に下る。外面は暗緑色の釉が厚くかかる。肩部にヘラ記号が有る。	×
12	甕	復元口径 20.5 残存高 8.5	口頸部は、外上方にのびる。口縁部は外反し、端部は、外下方に張り出す。肩部は丸味をもって外下方に下る。胎土は精良である。焼成は不良で軟質。白灰色を呈する。頸部にヘラ記号がある。	＼
13	甕	復元口径 24.7 残存高 4.7	口頸部は上方にたちあがり、口縁部はやや外反する。口縁端部は、外方へ丸く肥厚する。胎土は、2～5㎜の砂粒を少量含む。焼成不良で軟質。灰白色を呈する。	
14	甕	復元口径 17.8 残存高 10.0	口頸部は内傾気味にたちあがった後外傾し、口縁端部は外傾する面を成し、直下に断面三角形の稜を有する。肩部内面に円弧タタキを重ねて行なう。	
15 20—3	甕	復元口径 25.5 残存高 11.0	口頸部は上外方にたちあがり、口縁部はわずかに外反し、外方に張り出す。端部は上方と外方に面を成す。肩部外面には平行タタキ、内面は円弧タタキの上をゆるくヨコナデ調整している。	
16	甕	復元口径 17.4 残存高 5.7	口頸部は、上外方にたちあがり、肩部との境に沈線が巡る。口縁部は外反し、端部は丸い。焼成は不良で軟質。乳白色を呈する。	
17	横瓶	口径 13.6 残存高 5.0	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反し下方に肥厚する。肩部の口頸部付近は、接合後、ヘラケズリ調整を行なう。口頸部の内面にヘラ記号がある。	｜
26—1	甕	復元口径 17.7 残存高 9.4	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部は外傾する面を成し、直下に断面三角形の稜が巡る。肩部は下方に下り、外面は平行タタキの上からカキ目調整を行なう。	
2	甕	復元口径 16.9 残存高 7.2	口頸部から口縁部は、上外方にのび、端部は外方に丸く肥厚する。肩部は、なだらかに外下方に下る。外面はカキ目調整を行ない、内面はタタキをヨコナデで消している。	
3	甕	復元口径 20.9 残存高 7.0	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸い。肩部外面は平行タタキ、内面は円弧タタキを行なう。胎土は、砂粒を多く含む。焼成良好で堅緻である。	
4	甕	復元口径 17.3 残存高 7.7	口頸部は上方にのび、口縁部は外反する。端部は上下に肥厚する。肩部は、丸味をもって下外方に下る。外面タタキの上に細かいカキ目、内面はやや大きい円弧タタキを行なう。	／／

図版番号	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
26—5	甕	復元口径 22.2 残存高 8.0	口頸部は、一旦内傾した後、上外方にのびる。口縁部は、強く外反する。端部は上方にのびる。肩部は、外下方に下る。部分的に焼成不良のところがある。	
6 20—2	甕	復元口径 24.7 残存高 7.8	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は上外方にのびる。端部直下に、断面三角形の稜線が巡る。胎土は比較的精良である。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。	
7	甕	復元口径 22.6 残存高 7.9	口頸部は、短かく直立した後、外上方にのびる。口縁部は、強く外反し、端部付近から外方に肥厚する。端部は上方に鋭くのびる。肩部の頸部との接合部付近の器壁は厚い。	
8	甕	復元口径 25.7 残存高 8.6	口頸部は、上外方にのびる。口縁部は、外反し、端部付近で外方に肥厚する。 焼成は良好で堅緻。外面と口縁部内面に黒褐色の釉が厚くかかる。	
9 20—4	甕	口径 21.4 残存高 10.8	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は上外方にのび端部で強く外反し、下方に肥厚する。 肩部は、内弯気味に下外方に下る。外面に平行タタキ、内面に円弧タタキを密に強く施す。	
10 20—5	甕	口径 14.1 胴部最大径23.5 残存高 26.7	口頸部は、一旦短く内傾した後、上外方にのびる。口縁部は、外反気味に上外方にのびる。 端部は下方に丸く肥厚する。肩部は丸く下外方に下る。胴部は内弯しながら下り底部に至る。肩部以下、外面は平行タタキの上にカキ目調整。内面は円弧タタキを強く密に行なう。	
11	甕	復元口径 19.5 残存高 6.0	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部は端部付近で外方に肥厚し、上方と外方に面を成す。肩部外面は平行タタキの上に細かいカキ目調整、内面は円弧タタキを行なう。	
12	甕	復元口径 17.5 残存高 6.7	口頸部は上外方にのび、口縁部は外反する。端部は外上方に肥厚し、1条の沈線が巡る外傾した面を成す。肩部外面は平行タタキの上にカキ目、内面は円弧タタキを行なう。	
13	甕	復元口径 14.8 残存高 5.5	口頸部は上外方にのび、口縁部は短かく外反し、上下に肥厚し下方の端部は丸い。 胎土は精良である。焼成不良で軟質、灰白色を呈する。	
14	甕	復元口径 14.5 残存高 5.9	頸部から口縁部は上外方にのび、端部は外傾する面を成す。端部直下に断面三角形の稜線が巡る。肩部外面は格子状タタキ、内面は円弧タタキを行なう。	
15	甕	復元口径 16.3 残存高 5.8	口頸部は、内傾気味にたちあがった後、上外方にのびる。口縁部は、外反する。 肩部は、外面に格子状タタキ、内面は円弧タタキの上を強くナデ調整している。	
27—1	甕	復元口径 11.3 残存高 6.0	口頸部は上方にのび、口縁部は外反する。端部付近は、外下方に肥厚し面を成す。肩部はなだらかに外下方に下る。外面は細かいカキ目調整を行なう。焼成はやや甘く、淡灰色を呈する。	
2	甕	復元口径 13.0 残存高 6.2	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部は外方に肥厚し、先細りとなる。肩部は下外方に下る。肩部内面を強くヨコナデしている。	
3	甕	口径 13.6 残存高 8.5	口頸部は上方にのび、口縁部は外反する。端部付近は外下方に肥厚し面を成す。肩部はなだらかに外下方に下る。外面は細かいカキ目調整を行なう。焼成はやや甘く淡灰色を呈する。	
4	甕	復元口径 13.4 残存高 10.2	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部は外方に丸く肥厚し、下方に折り曲げる。肩部は丸味をもって下外方に下り、胴部は内弯気味に下る。	
5	甕	口径 13.0 残存高 9.4	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外上方にのびる。端部は外方に肥厚し、丸味をもった面を成す。肩部は下外方に下り、胴部は屈曲し、内弯気味に下る。	
6	甕	復元口径 15.2 残存高 5.9	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は上外方にのびる。端部は、強く外反する。肩部は、丸味をもって、下外方に下る。外面はカキ目、内面は円弧タタキを行なう。	
7	甕	復元口径 15.4 残存高 8.0	口頸・口縁部は、上外方にのびる。口縁端部は上方・下外方に鈍く肥厚する。肩部は、下外方に下り、胴部はわずかに内弯する。胎土は、砂粒を少量含む。	
8	甕	復元口径 13.4 残存高 10.5	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は外反する。端部付近は上外方に肥厚する。肩部は、丸味をもって下外方に下る。胴部は下方に下る。胎土は、砂粒を多く含む。	
9 20—6	甕	復元口径 16.0 残存高 11.0	口頸部は、上外方にのびる。口縁部は、強く外反する。端部は、下外方に肥厚する。肩・胴部は、内弯気味に下外方に下る。外面はタタキの上にカキ目、内面はタタキの上をヨコナデ。	
10	甕	復元口径 18.7 残存高 8.7	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部は端部付近で外下方に肥厚する。肩部は内弯しながら下外方に下る。外面はタタキの上にカキ目、内面はタタキの上をヨコナデ調整。	
11 20—7	甕	復元口径 17.7 残存高 9.8	口頸部は、くの字状に外反する。口縁部は強く外反し、外傾する端部の上下端に沈線が巡る。肩部は内弯しながら下外方に下る。肩部の頸部付近に段がつく。	
12	甕	復元口径 15.2 残存高 6.0	口頸部は上外方にのび、口縁部は外反し、端部を下方へ折り曲げる。肩部は、下外方へ下る。胎土は砂粒を含まず、緻密である。焼成不良で軟質、乳橙色を呈する。	
13	甕	復元口径 17.6 残存高 7.0	口頸部は短かく上方にのび、口縁部は外反し、端部は上外方にのび、外傾する面を成す。 肩部は、外面に平行タタキの上からカキ目、内面は円弧タタキを密に行なう。	
14	甕	復元口径 14.7 残存高 8.2	口頸・口縁部は、くの字状に外反し、端部付近は外方に肥厚し、外方に丸い面を成す。肩部は、丸味をもって下外方に下る。内面は円弧タタキの上からヨコナデ調整を丁寧に施す。	

図面番号 図版	器種	法　量（cm）	所　　見	ヘラ記号
27—15	甕	復元口径　20.9 残存高　8.3	口頸部は一旦短かく内傾した後、口縁部は外反し、端部付近で外方にのび、端部は上方に向かう。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。	
16	甕	復元口径　17.7 残存高　9.4	口頸部の器壁は厚く、くの字状に外反する。口縁部は、内面側の器壁がうすくなり、外反し、端部は下外方に折れ曲がる。口頸部外面と肩部内面は黒色で、他面は灰色を呈する。	
17	甕	復元口径　16.7 残存高　7.1	口頸部は上外方にのび、口縁部は外反し、外下方に肥厚し、端部は上方に鋭くのびる。肩部は、下外方に下る。外面は平行タタキの上にカキ目、内面は円弧タタキの上にヨコナデ調整。	
28—1 20—8	甕	復元口径　23.7 残存高　13.3	口頸部は、外反しながらのびる。口縁部は、さらに強く外反し、外方にのびる。端部は丸い。肩・胴部は、内弯しながら外下方に下る。肩部下に2条の沈線が巡り、沈線上に上向きの把手が付く。	
2	甕	復元口径　12.8 残存高　7.3	口頸部は、外傾気味に上方にのびる。口縁端部は、中央がわずかに窪む平面を成す。肩部は丸味をもって下外方に下る。口縁部から肩部まで、肩部はタタキの上からカキ目を行なう。	
3	甕	復元口径　16.3 残存高　8.2	口頸部は、内傾気味に上方にのびる。口縁端部は、外端付近に沈線が巡る平面を成す。肩部は下外方に下り、胴部はわずかに屈曲して、下外方に下る。	
4	甕	復元口径　18.4 残存高　5.3	口頸部は内傾しながら上方にのび、口縁部はわずかに内弯する。端部は内傾する平面を成す。肩部は下外方に下る。内外面に黒緑色の釉がかかる。	
5	甕	復元口径　31.0 残存高　8.1	口頸部は、外反しながら上外方にのび、2条の沈線が巡る。口縁部は大きく外反し、端部は下方に折り曲げ、下端面に沈線を入れる。	
6 21—1	甕	復元口頸　42.7 残存高　18.0	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁端部は上下に鋭くのびる。口頸部中央に1条、口縁部下に2条、さらにその中程に2条の凹線が巡り、凹線帯間に細かい波状文が施されている。	
7	甕	復元口径　51.2 残存高　12.7	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部は外方に短かくのびる。端部は上方に鋭く肥厚し、下端に凸帯を貼付している。口縁部下に1条、頸部に2条の凹線帯を2本と櫛描き列点文帯を2段施す。	
8	甕	復元口径　54.8 残存高　9.4	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部は角度を変え上外方にのびる。上端は、両端が丸い平面を成す。口縁部に1条、頸部に2条の凹線帯を2段と短かい櫛描き列点文帯を2段施す。	
29—1	甕	復元口径　47.7 残存高　17.2	口頸部は基部付近は厚く、外反しながら上外方にのび、口縁部は端部付近で強く外反する。端部は上方に鋭くのび、下端に凸帯を貼付している。口頸部には、3段の凹線帯とその間にヘラ描きの文様帯が入る。	
2 21—3	甕	復元口径　48.1 残存高　17.8	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部はさらに外反し、端部は上方にのび、下端には沈線と凸帯が巡る。頸部には、2条の凹線帯を3段と、ヘラ描きの文様帯を2段施す。	
3	甕	復元口径　58.0 残存高　17.6	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部付近でさらに強く外反する。端部は上方にのび、外下方に肥厚し外傾する平面を成す。文様帯の配分は2と同じである。	
4	甕	復元口径　59.3 残存高　13.6	口頸部は、強く外反しながら外上方にのびる。口縁部はさらに外反し、端部は下外方に肥厚させ、下端に凸帯を貼付する。口縁部下に1条の凹線と頸部に2条の凹線帯とヘラ描き文を2段づつ施す。	
30—1	甕	復元口径　49.5 残存高　8.7	口頸部は上外方にのび、口縁端部は外方に肥厚し、上端中央と外端に凹線を巡らす。口縁部下に2条の凹線と、頸部に櫛描き文を施す。胎土は砂粒を多く含む。	
2	甕	復元口径　56.0 残存高　16.1	口頸部は、大きく上外方にのびる。口縁部は、外方に肥厚し、1と同様上・外端部に凹線が巡る。2条の凹線帯を3段、櫛描き文帯を2段施す。	
3 21—4	甕	復元口径　55.1 残存高　18.1	口頸部は上方にのびた後外反し、口縁端部は外方に肥厚し凹線が巡る。口縁部下の1条の凹線の下から頸部中央まで3本1単位の櫛目を密に入れた後、凹線帯を2段施す。	
4	甕	復元口径　51.6 残存高　6.4	口頸部は外上方にのび、口縁部は外反する。口縁端部は上下に肥厚し、外方に面を成す。口縁内面に、浅い凹線が巡る。胎土は細砂粒を多く含む。	
5 23—7	甕	復元口径　44.2 残存高　7.1	口頸部は、外反しながらのびる。口縁部は、角度を変え直立気味に上方にのび、端部は下外方に肥厚し、外傾する面と凹線の巡る面を成す。口縁部下には波状文を施す。	
6	甕	復元口径　40.9 残存高　6.2	口頸部は上外方にのび、口縁部付近で外反する。口縁部は角度を変えて上外方にのび、上端は肥厚し、わずかに外傾する面を成す。口頸部に凹線帯と波状文・列点文を施す。	
7	甕	復元口径　28.8 残存高　6.9	口頸部は、外反しながら外上方にのび、凹線を境に口縁部は上方にたちあがる。端部は肥厚し、内傾する平面を成す。口頸部に、凹線帯に挟まれて波状文と列点文を施す。	
31—1	甑	底　　径　12.8 残存高　16.9	体部は上外方にのびる。胴部中央に一条の凹線が巡る。凹線上に把手がつくものと思われる。底部の内外面をヘラケズリで整形している。胎土は細砂粒を多く含む。	
2	甑	残存高　4.9 残存幅　4	直線的にのびる体部の一部と中程から上方に曲がる把手である。胎土は、細砂粒を多く含む。焼成はやや甘く灰白色を呈する。	
3	把手	長　　さ　4.4	基部は太く、中窪みの後、上方にのびる。胎土は砂粒をあまり含まず精良である。	
4	把手	長　　さ　3.4	基部は太く、中程でやや屈曲し先細りとなる。焼成良好で堅緻、黒灰色を呈する。	

図面番号 図版	器種	法量(cm)	所見	ヘラ記号
31—5	甑	残存幅 6.4	甑の底部である。大きな円孔の一部と、直径7㎜の小孔が穿ってある。 胎土は細砂粒を含むのみで、比較的精良である。	
6	把手	長さ 6.9	両端が曲がり、肩部等に接合する把手である。胎土は砂粒を若干含むのみで精良。	
7 22—1	瓶子	残存高 8.9	口頸部は、上外方にのびる。口縁部は欠損している。肩部と口頸部との接合部付近は厚く、胴部にかけて内弯気味に下るにつれてうすくなる。胴部外面にカキ目調整を施す。	
8	瓶子	残存高 11.9	肩部上端以上は欠損している。肩部は、丸味をもって外下方に下り、胴部は屈曲して下内方に下る。底部は凹凸をもった平底である。	
9	瓶子	胴部最大径12.1 残存高 11.0	口頸部は、肩部との接合部から器壁がうすくなり、上方へたちあがる。肩部は内弯しながら下外方へ下り胴部は下内方へ下る。胴部外面にヘラケズリ調整をする。ヘラ記号の一部がみられる。	×
10 22—2	壺	口径 16.3 残存高 8.7	口頸部は、内傾気味にたちあがった後、上外方にのびる。口縁部は強く外反し、端部は下方に断面三角形を呈して肥厚する。頸部外面にカキ目調整を行なう。	
11	壺	口径 10.0 残存高 14.1	口頸部は上方にたちあがり、口縁部は強く外反するが、部分的に焼け歪んで折れ曲がっている。肩部は丸く下外方へ下り、胴部は内弯しながら下る。体部外面にカキ目調整を行なう。	
12 22—3	壺	残存高 13.5	口頸部は上外方にのびる。口縁部は欠損している。肩・胴・底部は、ほぼ球形を呈する。胴部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ、胴部上半以上は回転ナデと部分的にナデ調整を行なう。	
13	壺	胴部最大径16.5 残存高 8.5	口頸部は、直立する基部のみで上方は欠損している。肩部から胴部は、ほぼ球形を呈する。底部は欠損している。胴部下半にヘラケズリを行なった後、全面に回転ナデ調整をする。	
14	埦	復元口径 9.3 残存高 6.7	口縁部は内傾気味にたちあがり、端部は内傾する面を成す。体部は、内弯しながら下る。体部中央に2条の凹線が巡る。	
15	埦	復元口径 10.6 残存高 8.8	口縁部は、内傾しながら上方にのびる。端部は丸い。体部は下外方へ下り、底部は欠損している。口縁部下に1条、その下に2条の鈍い沈線と中程で下方に折れ曲がる把手を有する。	
16 22—7	陶棺	残存幅 7.5 残存高 10.8	陶棺の身の側面の一部と思われる。横方向に断面四角形の凸帯を貼付している。縦方向の凸帯は、はずれている。胎土は砂粒を多く含み粗い。	
17 22—6	陶棺	残存幅 10.3 残存高 8.0	16と同じく、陶棺の身の側面の一部と思われる。縦・横に凸帯を貼り付けている。外面に平行タタキ、内面に円弧タタキがみられる。胎土は砂粒を多く含む。	
18	埦	復元口径 12.3 残存高 4.2	口縁部は、上外方にのびる。体部は、内弯しながら下り、2条の鈍い凹線が巡る。底部は平底状を呈する。口縁部は少々焼け歪む。	
19	埦	口径 10.7 器高 4.2	口縁部は上方にのび、端部は鋭く外方にのびる。口縁部と体部の境は鈍い段がつき、体部は下内方に下る。底部はほぼ平底でカキ目調整を行なう。	
20	埦	口径 11.1 器高 4.6	口縁部は、直立にのび端部はうすい。体部は、内弯しながら底部に下る。底部は平底である。口縁部下に沈線を巡らすことにより稜が張り出す。さらに下に鈍い凹線が1条巡る。	
21	埦	口径 12.5 器高 5.3	口縁部は内面に凹凸を有して上方にのび、端部は丸い。体部は、下内方に下る。底部は、雑な不整方向ナデを施した平底である。胎土は砂粒を多く含む。	
22	蓋	口径 7.6 器高 2.8	天井部はなだらかに下る。器表はヘラケズリを丁寧に行ない平滑である。端部からかえりにかけて器壁は厚く、かえりの端部は鋭く上方にのびる。	
23	蓋	口径 8.9 残存高 2.8	天井部は、なだらかに下り、器表は平滑である。内傾するかえりとの間に沈線が巡る。かえりの端部は、下方に下り接地する。胎土は、砂粒をほとんど含まず精良である。	
24 22—4	蓋	口径 7.9 器高 3.4 つまみ径 2.5	天井部はなだらかに下り、端部は丸い。内面の器表はマキアゲの凹凸が残り、端部付近に内傾するかえりを有する。かえりで接地する。器壁は全体的に厚い。天井部中央に上面中央がわずかに窪むつまみが付く。	
25 22—5	蓋	口径 8.3 器高 3.9 つまみ径 2.7	天井部はなだらかに下り、内面にかえりを有するあたりから、外方へ長くのびる。かえりは内傾し、端部は鋭い。天井部中央に上面凹状のつまみが付く。 胎土は砂粒を含みやや粗い。焼成は良好で釉がかかる。	
26	蓋	口径 8.0 器高 3.1 つまみ径 3.0	天井部はなだらかに下り、内面にかえりを有するあたりから、外方へのびる。かえりは内傾し、端部はうすく鋭い。天井部中央に、扁平なつまみが付く。かえりの外面に別個体の口縁部の一部が熔着している。	
27	蓋	口径 9.4 器高 4.0 つまみ径 2.1	天井部はなだらかに下り、端部は外方に鋭くのびる。内傾するかえりの基部は厚く、端部は鋭い。天井部中央に上面がやや窪む小ぶりのつまみが付く。外面には、釉と窯壁が熔着している。	
28	蓋	つまみ径 4.9 残存高 3.7	天井部はなだらかに下り、内面は円弧タタキの後、磨り消しナデ調整を行なう。 基部が高く、上面が平坦で大きなつまみが付く。	
29	土鈴	残存高 4.7	球形の体部の底に長方形のスカシと小さな円孔を穿つ。	

第V章　ま　と　め

今回の調査で検出した窯は残存状態が悪く、窯体の規模、構築法など詳細にできなかった点もあるが、若干考えられることを述べ、まとめにかえたいと思う。

まず窯体の規模であるが、検出した状態で焼成部の大半が削平され、また北側側壁も崩壊しており正確な数値はだせない。ただ現状より、長さ３～４ｍ、高さ２～３ｍは追加され、全長10ｍ前後、最大幅 2.5ｍはあったものと推定される。

立地に関しては、検出した状態が現地形の頂点にあたり、前述したように著しく地形が損われている。しかし、何れにせよ頂上変換点斜面を利用して頂上に煙道部が出るように設定していることは確かである。設定場所は凸状に延びた丘陵の先端斜面上部に地形に沿って、東西に中心軸を置き、灰原を中窪みの扇形に整形している。設定場所として凸状の地形を選ぶのは、２－２、２－10、２－18、２－19、２－23、２－24窯[註1]など、桜井谷古窯跡群中一般的にみられる傾向であるが、頂上部に立地するのは島熊山窯跡、２－27窯跡[註2]、合計３例しかなく、なぜ頂上付近斜面に設定したのか疑問がもたれる。生産に伴う諸作業、例えば水、薪、製品の搬出入など、理解に苦しむ点もあるが、それ以上に利点となるべきものがあったはずである。その１要因として製品の焼き上がりを重要視したとみたならば、火廻りを良くするため、吹き上げる風を利用し、焼成温度を上げる意図が配慮されていたと考えられるなど、諸要素があるものと思われる。

構築法は、残存状態から半地下式の構造をもつものと推定される。桜井谷古窯跡群中、多くがこの構造と思われるが、２－18[註3]、２－23[註4]など地下式構造をもつものも報告されている。

この窯の構造で特徴的なのは、第１次窯の前庭部である。焚口前面を長さ２ｍ、幅4.6ｍ、深さ 0.3ｍの楕円形に掘り、掘った土を盛り上げ、灰原斜面と区画している。また南肩部分には斜め方向に杭状の痕跡が検出された。想像を逞しくすれば、覆い屋根状のものがあったことを推定させる。雨露を凌ぎ、また火を焚きやすいように、灰を掻き出しやすいように工夫されていたものであろうか。この時期の窯には燃焼部から焚口にかけて舟底状ピットと呼ばれるものがあるが、それとは別の性格のようである。この落ち込みも第２次窯の最終操業期では使用されていない。

第１次窯と第２次窯の関係であるが、灰原層位と出土遺物の検討から時間差はほとんど認められない。灰原斜面では第２次窯の灰層の下部に第１次窯の窯体混りの層が堆積し、層位を明確に区別できるにもかかわらず、遺物に型式差が認められないことより、第１次窯は短期間の使用でなんらかの理由により、操業できなくなり、第２次窯は中軸を北寄りに移し、構築しなおしている。以後、継続的に使用されたようである。同じような例は２－24窯でも確認されている。[註5]また反面、断続的に使用され、空白期間を置く窯が２－18窯と上野青池南畔窯跡にある

ことが知られている。

このような結果を踏まえ、桜井谷古窯跡群内での操業移動がどのようにされていたのか明らかにしていかなくてはならないが、大部分の窯が消滅してしまった現在、そのいかなる道も閉ざされている。

本窯での出土遺物の統計をみると、杯や甕についで、提瓶の多いのが目につく。他の窯で灰原を全掘している例がないので明確にはできないが、この窯跡群では個々の窯において特徴を現わす器種がみい出せそうである。また器種や調整手法においても、甑や静止ヘラケズリの採用など、陶邑と趣きを異にするものも存在するなど興味を引く点もある。

以上、今回の調査から考えられることを述べてみたのであるが、基本的な問題として、生産者集団の居住地、産品の搬出経路など明らかにしなければならない問題が山積されている。このような基本的な問題を一つ一つ解明して、総合的判断を下す上において、本報告では現在までの資料から編年作業の試案を、また胎土分析の報告を合わせて載せさせていただいた。このように桜井谷古窯跡群の研究は緒に付いたばかりであり、以後進めていかなければならないが、大部分の窯跡が消滅してしまった今、遅き観がしないでもない。　　（柳本）

註１　島田義明「桜井谷窯跡群２―19窯跡・２―24窯跡」桜井谷窯跡群発掘調査団　1977
　２　豊中市緑ヶ丘５丁目で共同住宅建設工事に伴う調査で検出。昭和58年１月～２月調査
　３　島田義明「下村町池窯跡」　豊中市教育委員会　1974
　４　註１に同じ
　５　註１に同じ

付載1

摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年

木下　亘

Ⅰ　序

千里古窯跡群は、大阪府豊中市・吹田市・箕面市・茨木市を中心に広がる千里丘陵に営まれた須恵器窯跡群である。窯跡は、主に豊中市側と吹田市側に二分して分布しており、各々、桜井谷古窯跡群・吹田古窯跡群と呼称されている。また、これらの総数は、百基に近いものと考えられる。ここで述べる桜井谷古窯跡群は、吹田古窯跡群よりも、時期的に操業開始が遡るもので、主に豊中市域の北部、千里川水系沿の段丘上に立地している。

当該地域に対する調査研究は、比較的早く明治時代中頃、ウィリアム・ゴーランド[註1]によって開始されたといえる。以後、大正年間には笠井新也[註2]・桜井義彰氏[註3]等により、窯跡の分布調査、遺物の収集などが精力的になされている。しかし窯跡に対しての積極的な発掘調査までは、この段階ではなされていない。その後暫くの間、当窯跡群に対する研究は途絶えることになる。再び調査が活発化するのは、戦後になり千里丘陵内部にまで開発が及ぶようになってからである。

豊中市域では、現在までに11基の窯跡について部分的なものをも含めて何らかの形で発掘調査が行なわれ、資料の蓄積がなされている。それによって、やや大雑把ながらも当窯跡群における生産開始期より終焉までの器種の変遷を知ることができ、当窯跡群の特徴も次第に明確になりつつある。

中でも須恵器の編年については、大阪府下ではすでに陶邑古窯跡群において詳細な研究[註4]がなされており、当地域に関しても従来陶邑古窯跡群での成果に準拠した編年研究がなされて来た。しかるに従来蓄積されて来た資料を分析した結果、当地域においては陶邑編年が必ずしもそのまま当て嵌まらない部分が存在することが明らかとなった。

したがって本稿では、従来の調査成果を踏まえた上で、当地における須恵器の編年を呈示するとともに、たとえ近接地における編年とはいえ陶邑との相違点を取り上げ、今後の研究に資したい。

なお須恵器編年を行なうにあたって、出土遺物の大半を占める灰原は、層位的にも不安定で、編年作業を行なう上では明確な基準とは認め難い。それに対して、窯体内から出土する須恵器は、焼成中に天井部が崩壊した例など極一部を除いてはあまり多いとはいえない。しかし窯体内では焼成毎の床面補修などにより、その間層に残された遺物が編年の上で極めて有効な指標となり得ることが指摘されている[註5]。よって本稿においても、出来得るかぎり窯体内出土のものを基準としたが、窯体内部までの徹底した調査の少ない現在、窯体内出土のものを指標として、灰原出土遺物も検討の対象とすることにした。よって今後の調査の進展によっては、若干の修正が必要となる点も出て来ると思われるが、大局的には問題ないと考えている。

本稿で取り扱かった資料の出土窯跡は、以下の通りである。

1　2—2（下地蔵ヶ岡）窯跡　豊中市宮山町4丁目

2　2—16（羽鷹池東畔）窯跡　同上野坂2丁目

3　2—18（下村町池）窯跡　同桜の町6丁目

4　2—23（永楽荘）窯跡　同永楽荘4丁目

5　2—26窯跡　同北緑丘1丁目

6　2—10（新池北畔西）窯跡　同西緑丘3丁目

7　2—27（島熊山）窯跡　同新千里南町1丁目

8　2—17（坊主山）窯跡　同少路2丁目

9　2—25窯跡　同西緑丘3丁目

10　2—24窯跡　同北緑丘2丁目

11　2—19窯跡　同北緑丘2丁目

12　2—19—2窯跡　同北緑丘2丁目

Ⅱ　各型式の特徴

本項では、当窯跡群における土器の変遷について、その特徴を記していきたい。そのさい基本的な型式区分については、陶邑古窯跡群でなされている型式、段階という概念[註6]を導入し分類を行なった。そのために当窯跡群出土遺物を大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4型式に区分し、それらを更にⅠ型式を3段階、Ⅱ型式を5段階に細分した。なおⅢ・Ⅳ型式については資料的な制約があり、その細分は保留せざるを得なかった。

まず当窯跡群における型式区分となる遺物の変化について述べると、

Ⅰ型式　当窯跡群の生産開始期より、蓋杯が大型化するまで

Ⅱ型式　蓋杯の大型化より、これに宝珠つまみが出現する前段階まで

Ⅲ型式　宝珠つまみの出現から、杯蓋内面のかえりが消失するまで

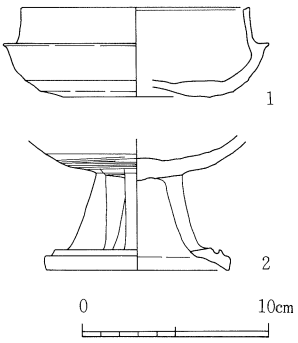
Ⅳ型式　杯蓋内面のかえりが消失した以降

以上の様に各型式を設定したが、これらは陶邑古窯跡群でなされた区分と基本的に違うものではない。

Ⅰ型式Ⅰ段階の須恵器（第1図）

すでに述べたようにこの段階の土器は、当窯跡群における操業開始期に相当する。2—2号窯跡の窯体内と灰原より出土しているが、量は少なく図示できた器種はわずかに杯身と高杯だけである。

杯身は立ちあがりが高く2cm近いものが多い。口縁端部はやや内傾するが平坦面を形成しており、端部の作りは鋭い。受部は薄手でほぼ水平



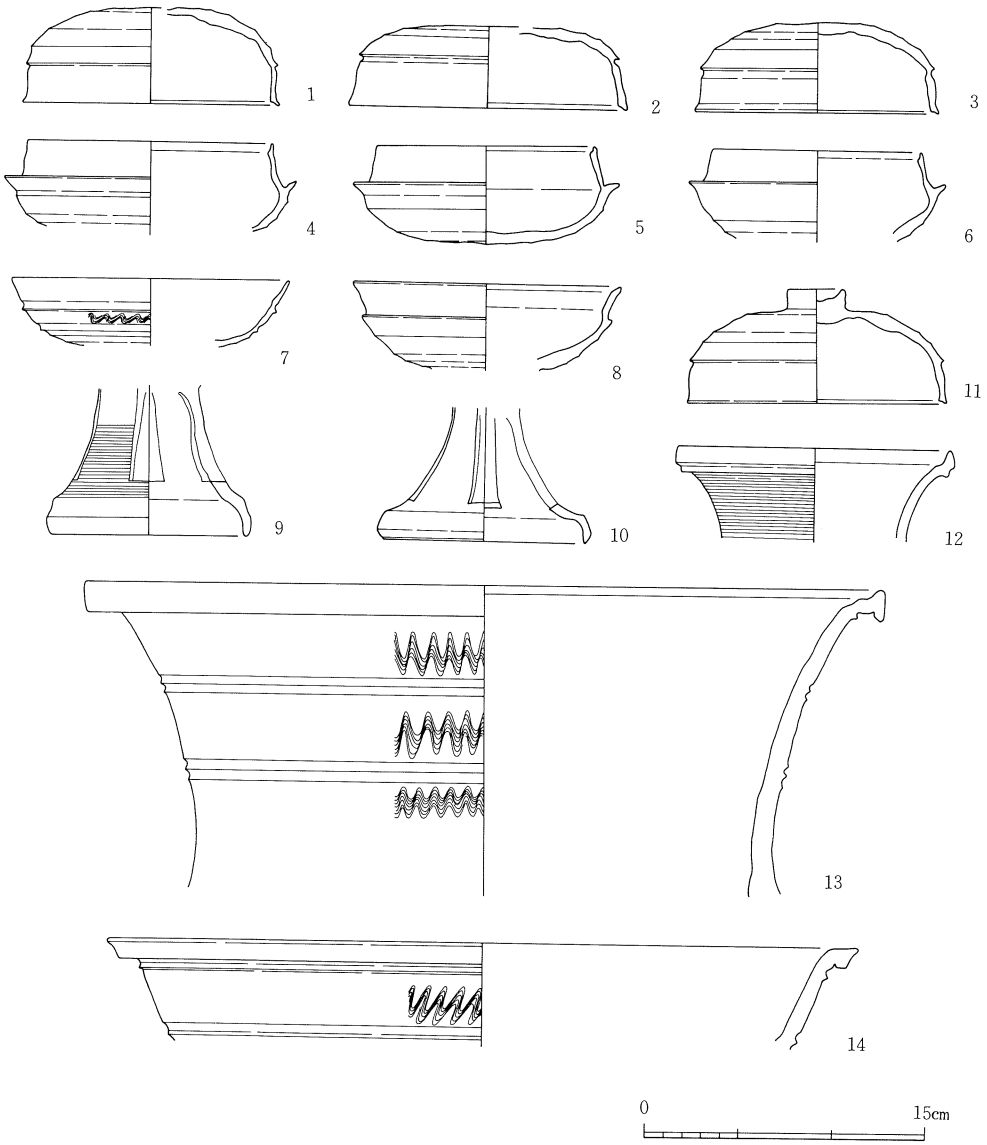
第1図　Ⅰ型式1段階

になるか、またはやや上方に伸びる。体部は腰が張り一見平底に見える。底部には回転ヘラ削りが底部の⅔以上に施される。また削りの幅は狭く1cm位である。底部内面は、ナデにより仕上げられる。

高杯は、短脚のものが知れるだけであり全体は不明である。図示したものは、短脚高杯の脚部で、透し窓を三方向に均等に穿つ。透し窓の形状は、長方形を呈する。脚裾部は稜を持ち段をなす。杯部底面は回転ヘラ削りの後、カキ目調整を加えている。

この段階の土器は一般に検出数が少なかったため、その他の器種については不明な点が多い。

Ⅰ型式2段階の須恵器（第2図）



第2図　Ⅰ型式2段階

桜井谷における生産が拡大しつつある時期で、窯の数も増加してくる。前段階に比べて形態に鋭さを欠く所が見られるが、ヘラ削りなどはまだ入念になされるものが多い。

蓋杯（1～6）杯蓋は、口縁端部が凹状をなしかつ内傾するものが多い。天井部と口縁部を界する稜線は鋭く突出している。天井部の回転ヘラ削りは全体の⅔ほどに施される。天井部は全体的に丸味を有する。内面は中央を一方向にのみナデ調整を行なう。

杯身はその立ちあがりが高く、2㎝前後を維持する。口縁端部は内傾し、凹面を形成し、明瞭な段となっている。受部は前段階の場合と同様に器壁が薄く、やや上方に伸びる。手法上からみても、底部外面の回転ヘラ削りは、底部の⅔前後に施されており、さほど粗雑な感は受けない。内面はその底面を一方向に向かってナデ調整を行なう。全体に受部より下半の腰が張ったものが多く、底部の平坦なものから丸味をもったものへと過渡的な様相を呈している。

高杯（7～10）有蓋・無蓋の区別があるが、有蓋のものの資料にはあまり恵まれていない。

無蓋高杯は、杯部が浅く口縁部が広く外反するもので、作りがやや粗雑である。体部には文様帯を有するものと、有しないものとがある。文様帯は鈍い稜線によって区切られ、その中に波形の整った波状文を施す。おそらくこの種の土器には文様帯上に、把手を貼付するものであると考えられる。製作手法では有文・無文の両者ともに底部は回転ヘラ削りにより、内面はナデにより仕上げられている。脚部は裾部が段をなして屈曲し、全体はラッパ状に開く。透し窓は三方または四方に穿けられるが、一般に四方のものが多い。透し窓の形状は長方形のものが多く、一部三角形のものも認められる。外面はカキ目調整を行なうものが多い。透し窓の数に四方のものが多い点は、同時期の陶邑でのあり方に対して古い要素を残しているといえる。

有蓋高杯は断片的な資料しか得られていないが、杯部は蓋杯の杯身とさほど形状に差異は認められない。脚部は裾部を内側に折り曲げる短脚のものが知られている。透し窓は円形で、外面にはカキ目調整が施される。これに伴うと考えられる蓋(11)は、蓋杯につまみを付したものである。つまみの形状にはやや特異なものが認められ、円柱状を呈し中央のくぼんだものが存在する。

甕（12・13）杯蓋と同様、出土量の多い器種であるが、その大きさから大小に二分することができる。

小型甕は口頸部がハの字状に外反し、端部で段をもち屈曲する。頸部にはカキ目調整が施されるものが多い。

大型甕は口頸部が緩やかに外反し、口縁端部は段をなし、断面三角形を呈する。頸部には二条一対の凹線を二ヶ所に巡らし、文様帯を3段に区分している。しかもそれぞれの文様帯の中に櫛描波状文を施している。それ以降の甕における櫛描波状文が、二条施されるのが通例であるのに対し、かなり装飾的であるといえる。

器台（14）断面的な資料しか得られていないが、鉢部はやや浅くなるようである。口縁は外上方へ屈曲し、段をなしており、端部は丸味をもって収められている。口縁下には凹線によっ

て文様帯を画し、その中央に櫛描波状文を施している。櫛描波状文は一条のみで、二条施した例はない。

Ⅰ型式3段階の須恵器（第3図）

1段階から2段階までの土器は比較的鋭い作りであったが、3段階になると器形の在り方に乱れが見られ、粗雑化してくる。特に前段階では杯蓋の口径13～15cm、杯身の口径12～13cm前後を維持していたものが、この時期になると一挽に縮小化の傾向を辿る点が注目される。

蓋杯（1～6）杯蓋は口径12～13cm前後のものが一番多く見られる。器形には口縁端部が凹面をなし段を持ったものから、凹面をなすが全体的に丸味を持った口縁端部へと変化しつつある。天井部と口縁部を界する稜線は鈍く、その突出が弱くなっており形骸化が進んでいるといえよう。また天井部の作りは全体に丸味を有し高さを増す。手法から見ると、天井部の回転ヘラ削りは、全体の⅔までは及ばなくなる。内外面共に回転ナデ手法によって仕上げられ、内面の中央部のみ一方向にナデを施している。

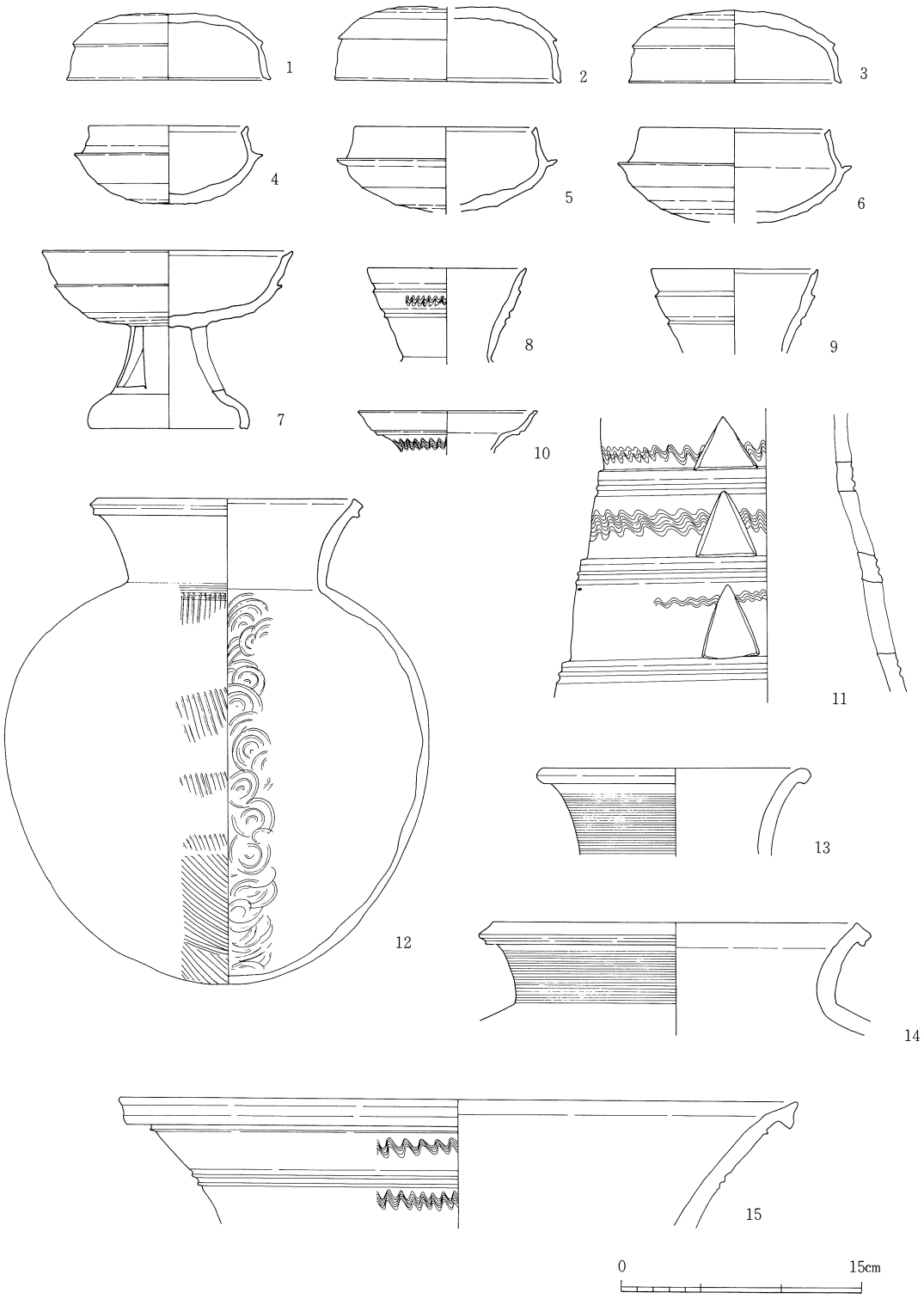
杯身は口縁部の立ちあがりが全て内傾するようになり、その高さも2cmを割るものが大半である。口縁端部は内傾し段をなすが、鋭さに欠け丸味が出てきている。受部はやや上方に伸び、厚みを増してくる。底部は丸味を有し器高も高くなる。手法上からみると、底部に施される回転ヘラ削りの範囲が杯蓋と同様に底部の⅔を割っている。また内外面ともに回転ナデ手法によって仕上げられている。杯蓋・杯身ともに、内面中央部に青海波文の叩き痕を残すものが若干認められる。内面中央部にのみ一方向に走るナデが見られる。

高杯（7）短脚と長脚の二種があるが後者については良好な資料を得ていない。また有蓋のものも現在では明瞭でない。7は短脚の無蓋高杯で、杯部は杯蓋を反転した形状を呈するが、口縁部は外反する。口縁端部は若干凹面をなしながら内傾し、杯部は浅い。杯部外面には一条の稜線を巡らすが、丸味をもった鈍いものである。製作手法上からみると底面の約半分を回転ヘラ削りによって仕上げ、内面は回転ナデによって仕上げる。

脚部は緩やかに外反し、脚裾部は段状に屈曲する。しかしその段も稜線をなすほど強いものではなく、緩やかな丸味を有す。脚端部も杯部と同様に丸味をもっており、鋭さは全くない。透し窓は三方向に穿たれるものが大部分で、四方向のものは極少量である。またそれらの配置は均等性を欠き、透し窓の形態も長方形のものが多い。

瓶（10）10は口縁部のみの破片で、おそらく小型瓶であろう。外反する頸部から段をなし、さらに外反する口縁部へとつながり、口縁端部は面を成している。頸部には櫛描波状文が施される。また内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

直口壺（8・9）外反する口縁部を有し、口縁端部は内傾し僅かな段をもつものと、単に丸く仕上げるものとがある。頸部外面は、二条の沈線による文様帯を構成し、中に櫛描波状文を施すものと、無文のものがある。手法上からみると、内外面ともに回転ナデによって仕上げら



第3図　Ⅰ型式3段階

れている。頸部以下の形状については復原すべき根拠を欠くが、おそらくほぼ球形の胴部を呈するものと思われる。陶邑古窯跡群では、直口壺はＴＫ47型式までは続くもののその中心はＴＫ23型式にあるとされる点、若干、古相を残しているといえる。

器台（11）検出数が少なく、器形全体のわかるものがない。脚部は裾部に向かって緩やかに開くが、その反りは鈍く裾部の口径も小さいものである。透し窓は三角形で縦一列に配されるが、段によって透し窓の高さが異なり統一を欠く。しかも透し列は三方向にあけられ、前段階の土器に比べると減少する傾向にある。文様帯は段をなす部分に二～三条の沈線を巡らし区画し、その中に各々一条ずつの櫛描波状文を施す。その波状文も波形は比較的整っているが、一部で全周しきらない部分が生じ、つくりの粗雑さは隠しきれない。製作手法から見ると、内外面ともに回転ナデにより調整されている。

甕（12～15）器形に大小の二種がある。頸部に文様帯のない小型甕は、口縁部が外反し、口縁端部が段状の稜線をなすものと、段をなしながらやや肥厚し、丸味をもって収めるものなどが認められ、細部については必ずしも一様ではない。胴部は緩やかなカーブをもってほぼ球形につくられ、その最大径は器高の約半分にある。頸部は施文されることはなく、回転ナデのみのものと、その後にカキ目調整を行なうものとがある。これら二者の中では、後者の例が多い。胴部および底部は、外面に平行叩きがみられ、内面は青海波文の痕跡を残す。底部外面は各方向から平行叩きがなされている。また叩きの後にカキ目調整を施したものも多い。

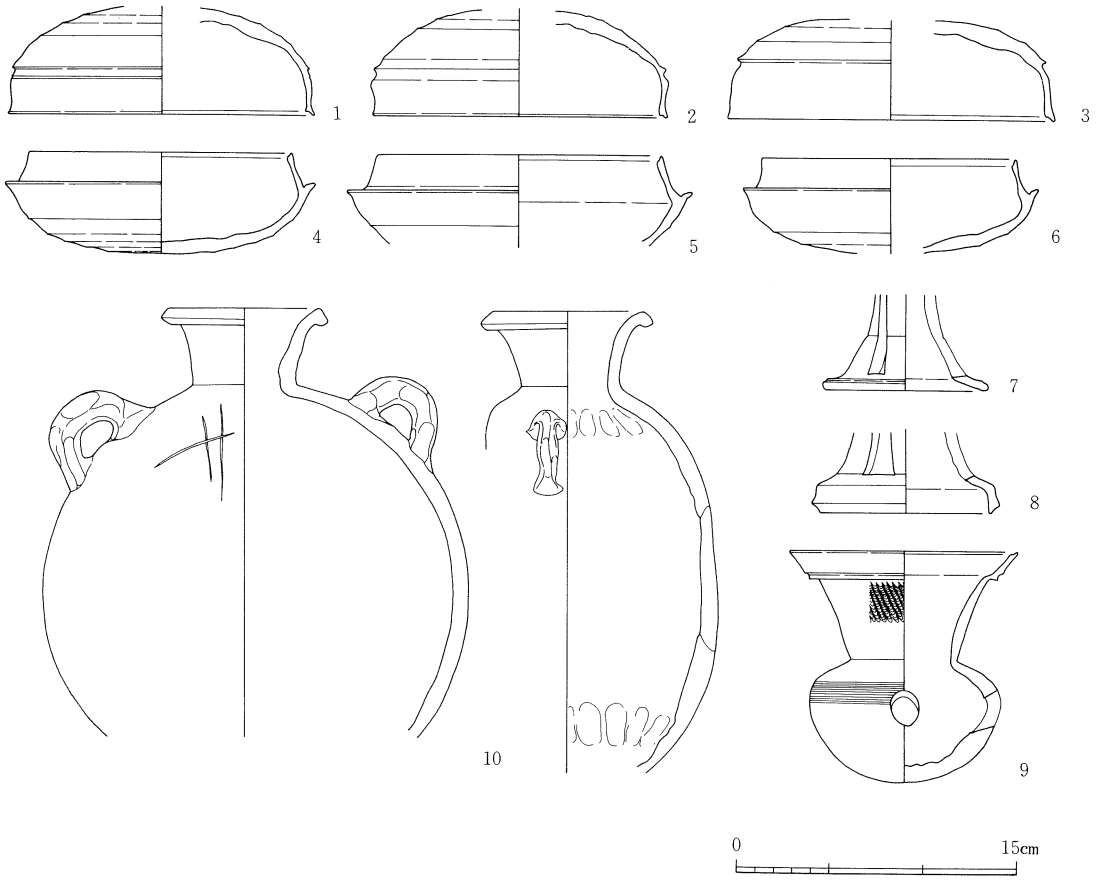
大型甕は口径部が外反し、口縁端部は上下に屈曲させた段をなしている。口縁端部の内面は凹線が巡る。頸部外面は二条一対の沈線で、上下に分け文様帯を構成する。その中央に波形の整った櫛描波状文を各々配す。胴部については破片が多く、全体の形状は不明な点が多い。手法上からみると外面は平行叩き、内面は青海波文を残す点において小型甕と何ら変わるものではない。

Ⅱ型式１段階の須恵器　（第４図）

前段階までは一般に口径が縮小した蓋杯が主体をなしていたが、この時期になると一挙に大型化する。これに伴って他の器種も大型化する傾向がみられる。

蓋杯についていうと前段階以来の退化傾向は一層進み、口縁部立ちあがり、口縁端部、稜線などに粗雑さが見られる。

蓋杯（１～６）杯蓋は口径平均16cm程度になり一般に大型である。口縁端部は凹面をなし明瞭な段を有するが、丸味をおび鋭さはない。天井部と口縁部を分ける稜線は、その突出が弱くなると共にその先端が丸味を持っている。口縁部は緩やかに外反するものと、屈曲し外反するものなどが認められる。天井部は高く丸味を有し、５cm以上の器高をもつものが大部分である。製作手法は、天井部に施される回転ヘラ削りの範囲が天井部の半分ほどになっており、調整の省略化が著しい。内外面ともに回転ナデにより調整され、内面中央部のみ軽く一方向にナデを



第4図　Ⅱ型式1段階

行なう。

杯身は口縁部立ちあがりが更に強く内傾するが、その高さは前段階程度を維持する。口縁端部は内傾し段をもつが、杯蓋同様丸味をもっている。受部は外上方に伸びるが、器壁は厚く丸味を有する。底部は全体の半分程度を回転ヘラ削りする点、杯蓋の製作手法と変わるものではない。

高杯（7・8）良好な資料に恵まれないが、脚部の資料がいくつか得られている。何れも短脚高杯で、脚裾部に向かい外反するもの、裾部で屈曲し段をなすもの、裾部を肥厚させ丸く仕上げるものなどがある。透し窓は長方形で三方向に配するものが多い。手法上からみると回転ナデによるが、杯部との接合部附近では内面にしばしばしぼりの痕跡を残すものが見られる。

有蓋高杯は小型のものが知られる。脚部は裾部を内側に肥厚させ段をなす。脚部外面はカキ目調整を行なう。また透し窓は円形で三方向に配されるものが多い。

瓶（9）頸部は外反し口縁部で段をもち更に外反する。口縁端部は内傾し凹面を成すが、先端は丸く仕上げる。頸基部は太さを増し、頸部上半には細かく密な櫛描波状文が施される。そのタッチは波形の先端が尖り鋭い。また口縁部、頸部、胴部共、全く施文しないものも存在する。胴部は扁平化の傾向を示し、その最大径は半分より上にある。胴部中央の穿孔は不整な円

形で粗雑である。

提瓶（10）この段階より出現する器種で、円形の胴部に頸部を接合させている。頸部は緩やかに外反し口縁端部は肥厚させ先端は丸く仕上げる。胴部は緩やかなカーブを描く面と、肩部より屈曲し平坦となる面がある。肩部には環状の把手が充分把手として機能するものである。胴部の成形は、中央部を粘土円板で塞ぎ仕上げるもので、その内面には成形時の指頭痕、接合痕を明瞭に残す。胴部外面は粘土円板の接合部を中心にカキ目調整が施される。

甕　前段階と差異は認められない。小型甕は頸部にカキ目調整を行なうものが多い点も同様である。

大型甕については口頸部の資料が少なく充分な観察ができない。

Ⅱ型式2段階の須恵器（第5図・第6図）

桜井谷における須恵器生産がピークに達した段階であり、窯跡数も次段階とともに一番多い。窯は同一斜面に並列して築かれ、千里川水系沿に広く分布する。窯体はその全長・幅などが増大し、操業の大規模化を窺うことができる。またその製品は以前にも増して量産される結果、一挽に製品の粗雑化が進展する。それは胎土に砂粒を多く混入し、粘土の選別にも注意が払われない点などからも推察される。装飾の面では櫛描波状文に加え、櫛描列点文、ヘラ描文などが多くなる点が注意される。

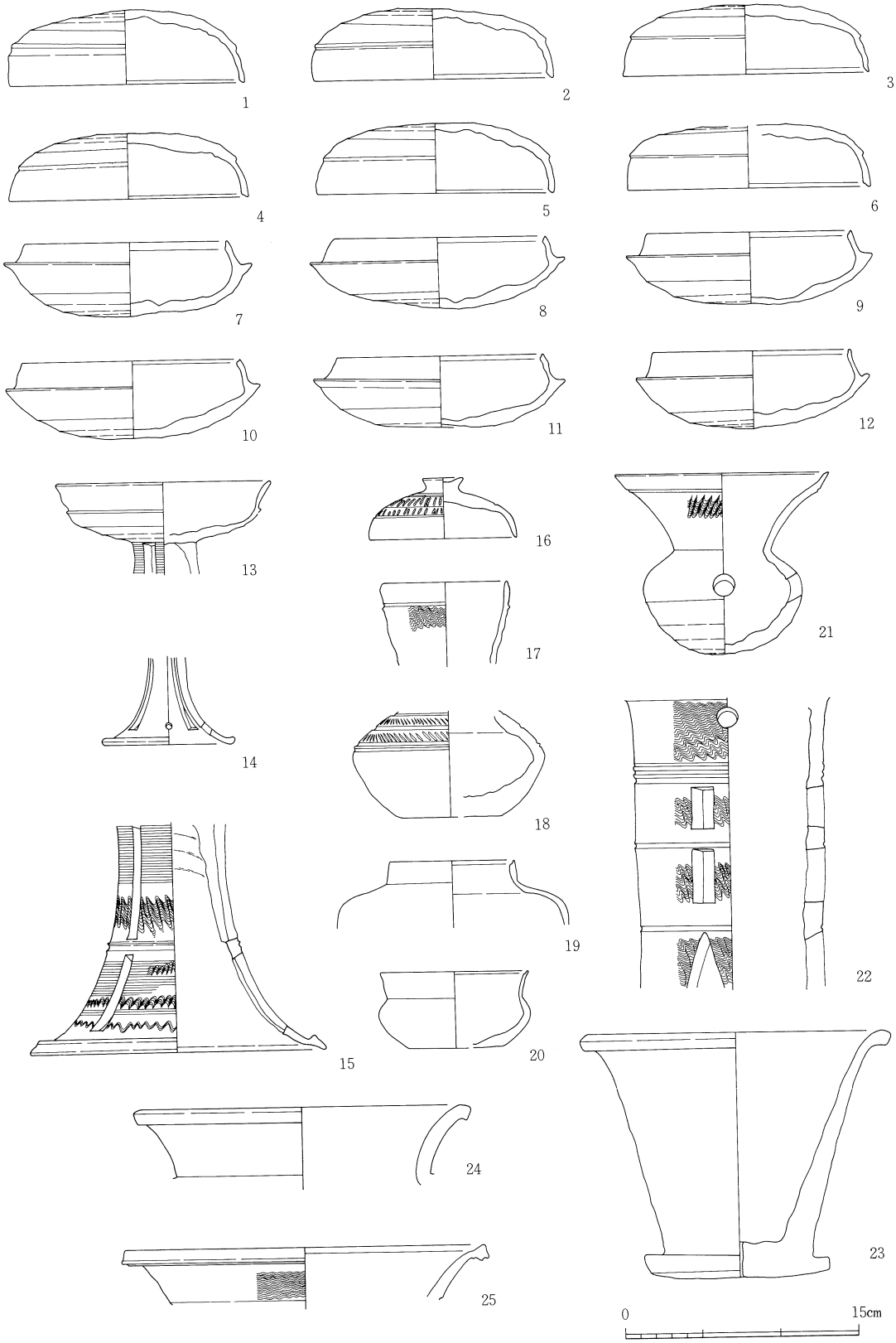
蓋杯（1～12）大型である点は前段階と変わらない。杯蓋は口縁端部が内傾し段をなすが内傾度が強い。口縁部と天井部を分ける稜線は、鈍く僅かに突出する。天井部は扁平化が進み前段階のように高く、丸い天井部をなさない。手法上から見ると天井部に施される回転ヘラ削りは、天井部全体の半分前後となり、削りも荒い。それとともに器壁の厚さも増加し、全体に鈍い感を与える。

杯身は口縁部立ちあがりの内傾化が更に進み、その高さも1.5cm前後となる。口縁端部は内傾し段をなすが、先端は丸味を有す。受部は底部と明瞭に区分できず、底部の延長として受部が作出されている。手法上では底部の回転ヘラ削りは底部全体の半分前後に施される。器壁が厚く鈍い点、器高が扁平となる点などは杯蓋と同様である。

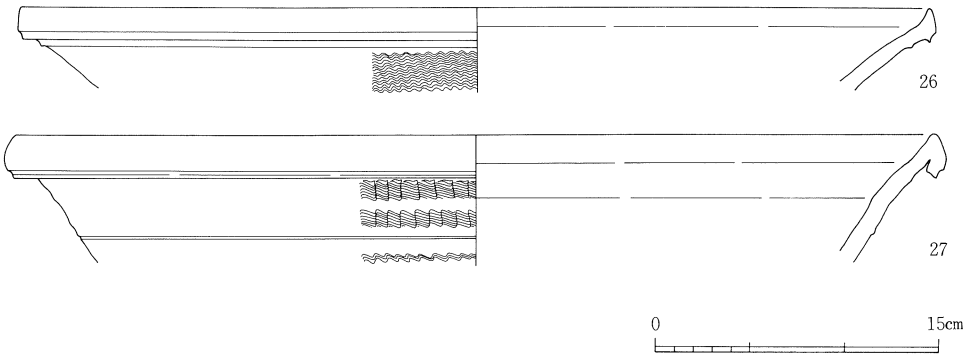
高杯（13～15）高杯にも大型化が進み、長脚一段透しのものは減少する。大型・小型の区別があるが、大きさにはバラつきがある。透し窓の形態や配置また文様などもバラエティーに富む。

有蓋のものは資料が不足しており判然としないが、引き続いて生産されていることは疑いない。

大型高杯の杯部は杯蓋を小型化した形状を呈す。口縁端部は丸く仕上げられ段をなさない。底部と口縁部を界する稜線は、杯蓋に比べ鋭いものが多い。底部は回転ヘラ削りにより調整される。大型高杯の脚部は、基部が太く安定感があり、脚部中央より広く外反し裾部で肥厚させ



第５図　Ⅱ型式２段階



第6図　Ⅱ型式2段階

段をなし、先端は丸く仕上げる。脚部中央に一条ないし二条一対の沈線を巡らし、これにより透し窓を二段に分割する。透し窓は長方形で三方向に配置される。中には上段と下段でそれを更に交互に配置するものもある。透し窓は切り込み面を丁寧に面取り調整するものが目立つ。手法上では回転ナデの後カキ目調整が特に杯部との接合部付近に施される例が多い。各段に施される櫛描波状文は、一条から数条に及ぶものまで見られ装飾的である。

小型高杯の脚部は緩やかに外反し、裾部をやや上方につまみ上げ丸く収めるもの、段をなし下方へのびるものなどがある。何れも脚端部は丸く仕上げる。透し窓は長方形で基本的に三方向に配置されるが、中にはその間に円形透しを入れるもの、また三角形透しのみのものなどがある。小型高杯の脚部に関しては文様は施されない。

有蓋高杯の蓋は杯蓋に中央のくぼんだつまみを付したもので、つまみの周囲に櫛描列点文を施す例も見られる。

瓿（21）頸部は大きく外反し口縁部で屈曲外反する。口縁端部は若干段をなす。胴部は扁平化の傾向を示し、最大径は中央に位置する。底部は粗雑な回転ヘラ削りが施される。頸部上半には波形の整わない櫛描波状文が施される。胴部は施文されることはない。円孔は胴部中央に上方から穿孔される。

壺（17～20）短頸と長頸、有蓋と無蓋の区別がある。

短頸壺は頸部が直立するもの、外反するものなどがある。何れも肩が張り一見平底風である。肩部にはヘラ描による文様帯をもつものがある。

長頸壺は口縁下に沈線を巡らし、その直下に櫛描波状文を施すものがある。

有蓋壺の蓋は数が少ないが、天井部は稜線をもたず丸味をもち、中くぼみのつまみを付したものである。つまみの周囲に二段に櫛描列点文を施すものもある。

器台（22）鉢部は浅く外面は平行叩き、内面は青海波文を残す。脚部は鉢部との接合部分から外反するものはなく、直線的にのびた後裾部で内弯ぎみに外反し脚端部に至るものが多い。脚部は一条から三条ほどの沈線により界され文様帯をつくる。透し窓は三方向で、長方形・三角形・円形などを取りあわせ、直線的に配置する。各段ともに櫛描波状文が施される。他の器種と同様に装飾的である。櫛描波状文は波形が整わず、流れる部分も見られ粗雑な部分が多い。

鉢（23）他の器種の大型化に呼応し鉢も以後のものに比べ一般に大型である。

すり鉢は口縁部が外反し口縁端部は肥厚させ丸く仕上げる。底部は器壁が厚く円板状を呈す。底部の中央部には小さい円孔を貫通させる。胴部に文様は全く施されない。

甕（24～27）蓋杯と共に多量に出土する点は以前と変わりない。口縁部の形態が一番バリェーションに富む時期である。器形の大小から二種に分けられる。

小型甕は外反する頸部を口縁端部で肥厚させ丸く仕上げるもの、肥厚させ凹凸をなすものなど様々である。頸部は櫛描波状文を施すものと無文のものの二種類がある。

大型甕は外反する頸部を口縁端部で肥厚させながら直立させ、先端を丸く仕上げるもの、垂下させ、凹凸をつくるものなどがある。頸部は一条ないし二条一対の沈線により文様帯を界しその上下に櫛描波状文を施す。櫛描波状文を文様帯上に二条ずつ施文し、合計四条の櫛描波状文で飾るものも少なくない。胴部は外面平行叩き、内面青海波文を残しスリ消し調整などは全く認められない。外面はカキ目調整がなされるものもある。

その他の器種　上述の器種以外にはあまりないが、当段階で出現する器種の一つに甑があげられる。

甑は断片的で全体の形態は不明な点が多いが、底部から口縁部に向かって外反し、胴部中央には左右に角状の把手を付している。把手は各々切り込みが入れられており、陶邑古窯跡群で見られる初期の甑に類以する。

Ⅱ型式3段階の須恵器（第7図・第8図）

前段階に比べ蓋杯の口径が縮小傾向にある。杯蓋にみられた稜線が消失し、かろうじて凹線としてその痕跡を留めるもの、その姿を全く消したものが混在する。一般的に天井部は丸味を有する。その生産は前段階同様、当窯跡群の盛行期にあたっており、窯の分布は広くその数も多い。

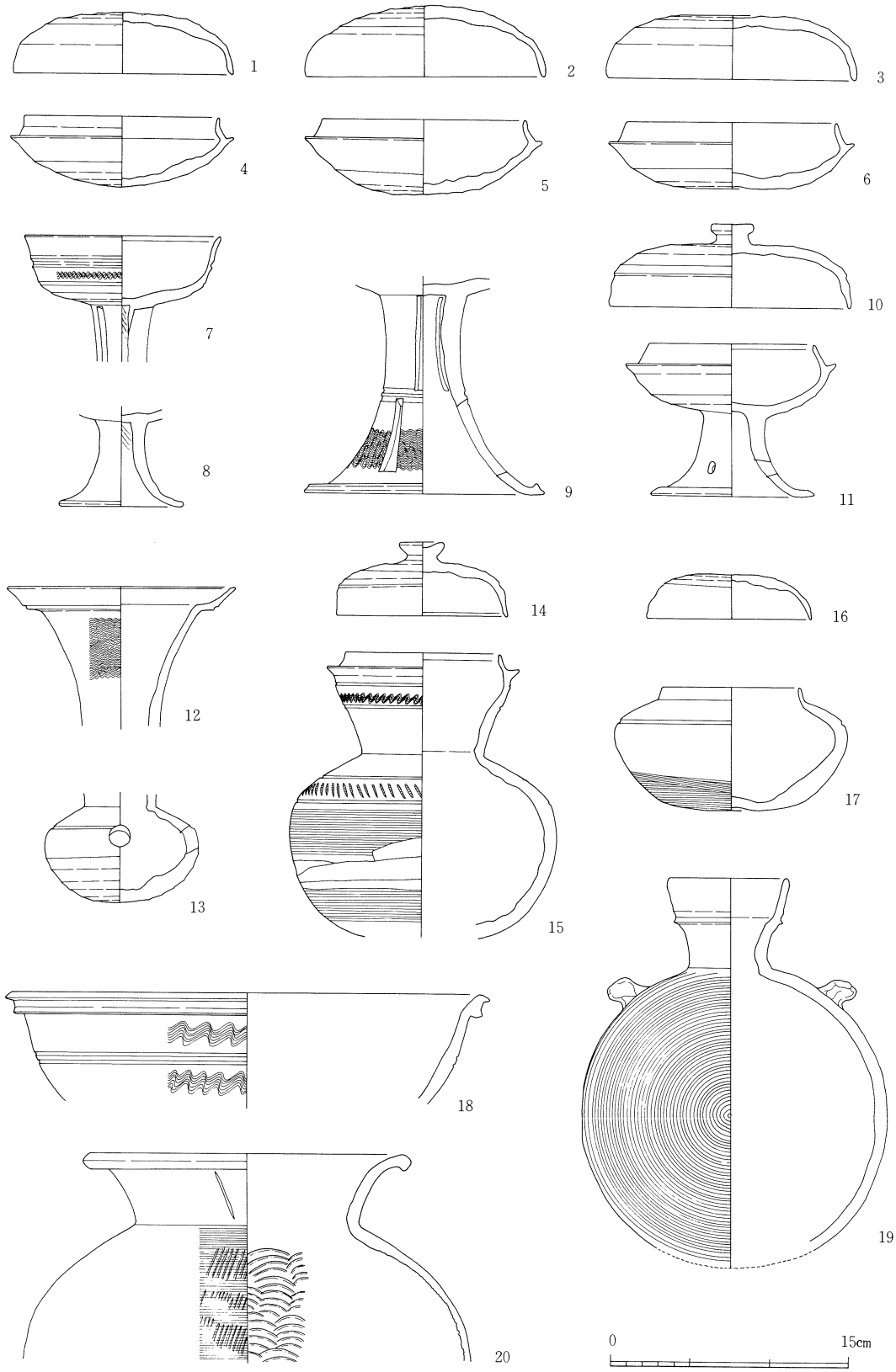
蓋杯（1～6）杯蓋・杯身共に口径が縮小する。

杯蓋は口縁部と天井部を分ける稜線が僅かに凹線として残存するもの、それさえも消失したものなどがみられる。天井部は緩やかなカーブを描き口縁端部に至る。口縁端部は丸く仕上げられ段はなさない。天井部に施される回転ヘラ削りは、その範囲が狭くなる。

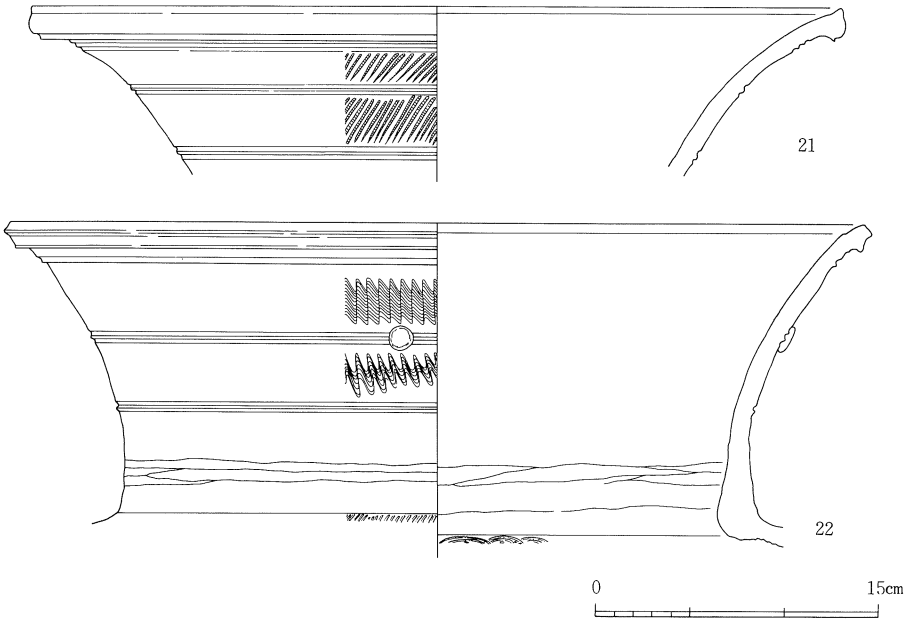
杯身は口縁部立ちあがりが内傾し、高さも低くなる。口縁端部は丸く仕上げられ、段はなさない。底部に施される回転ヘラ削りは、底部の約半分ほどになる。

高杯（7～11）器形の大小及び蓋の有無により区別される。

無蓋高杯の杯部は、緩やかに外反し口縁端部に至るもので、口縁端部は丸く仕上げられる。杯部外面には二条の沈線を巡らし、その中に櫛描波状文、乃至は櫛描列点文を施す。底部は回転ヘラ削りにより、他は回転ナデにより調整される。脚部は杯部との接合部分が細く、比較的長く緩やかに外反する。裾部では更に大きく外反する。透し窓は三方向に配置され長方形を呈



第7図　Ⅱ型式3段階



第8図　Ⅱ型式3段階

す。脚部中央に一条ないし二条の沈線が巡り、脚部を上下に分割する。これにより透し窓は上下に分けられる。その配置は上下に直線的に配されるもの、上下で交互に配されるものの二種がある。文様は前段階のように上下各段に施されることはなく、下段に櫛描波状文が一条施されるのが一般的である。

有蓋高杯の透し窓は、ほぼ円形のものに限られる。これに伴う蓋は天井部中央に中心が平坦、或は若干凹面をなすつまみを付したもので、その形態は杯蓋と同じである。しかし一般的に口縁部と天井部を分ける稜線が残存する傾向が強い。天井部は回転ヘラ削りにより調整されるが、その後カキ目調整を行なう例も多い。

瓶（12・13）頸部は長くかつ大きく外反し、口縁部で段をなし更に外反して口縁端部に至る。口縁端部は、段をなすものと丸く仕上げるものとがある。頸部上半には幅の狭い櫛描波状文を密に施すものと、頸部中央に凹線を巡らし、その上下に櫛描列点文を施すものとが存在する。胴部は若干扁平で、肩部に一条の沈線を巡らすもの、二条の沈線を巡らし、その中に櫛描列点文を施すものなどが出現する。胴部中央の文様帯上には、円孔が穿孔される。手法上では底部に回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデにより仕上げる。

壺（14～17）短頸と長頸の二種がある。

短頸壺は前段階と大差ないが、肩部に一条の沈線を巡らすものが多い。底部は回転ヘラ削りにより調整し、後にカキ目調整を加えたものも多い。蓋の形状は杯蓋を縮小したもので、手法上からも差異はない。また天井部はカキ目調整で仕上げるものが存在する。

長頸壺は有蓋のものが知られる。頸部は外反し、口縁部立ちあがりは内傾する。口縁端部は凹面をなす。受部は水平にのび器壁が厚い。頸部は二条の沈線により文様帯を構成し、その中

に櫛描波状文を施す。胴部はほぼ球形を呈し、肩部に二条の沈線により文様帯を作る。その中には櫛描列点文が施される。肩部以下はカキ目調整と手持ちヘラ削りにより仕上げられる。このような有蓋壺は陶邑古窯跡群ではKM 233号窯にみられる。時期的にはⅠ型式中頃のものであり当窯跡群出土例とはかなり時間的な差がある。

器台（18）鉢部が浅くなる傾向にある点は変わりない。

口縁部は段をなし稜線を作り出すものが多い。鉢部中央は二条一対の沈線により界され、その上下に櫛描波状文を施すものと、全く無文のものが存在する。脚部との接合部付近は外面平行叩き、内面青海波文の痕跡を残す。脚部に関しては前段階と大差ないが、文様に櫛描列点文が新たに加わる点が注意される。

提瓶（19）頸部は以前に比べ長く上方にのび、頸部中央で稜線をもって屈曲し口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げ段をなさない。円形の胴部は側面よりみると、一方が丸味をもったカーブを描き、他方は扁平もしくは若干凹面をなす。丸味をもつ面には細かいカキ目調整が施される。肩部に付される把手は環状を呈するものが減少しカギ状または突起状のものが多くなる。

甕（20～22）器形の大小から大型、小型の区別がある。

小型甕は外反する頸部を有し、口縁端部で肥厚させ丸く仕上げるもの、肥厚させながら段をなし、口縁端部内面にかえり状の稜線をもつものなどが知られる。肩部は一般的に肩が張らずなだらかなカーブを描く。胴部外面は平行叩きの後カキ目調整を加える。この段階の小型甕は胴部外面のカキ目調整が、かなりの比率で認められる。また内面は青海波文をそのまま残す。小型甕ではこの段階で新たに直立する短い頸部を有し、口縁端部を内傾させ段をなすものが出現する。

大型甕は緩やかに外反する頸部を有し、口縁端部は肥厚させ断面三角形の凸帯を巡らせたもの、丸味をもって肥厚させるものなどが存在する。外面は二条一対の沈線を二段に巡らし文様帯を構成する。文様はその上部二段に櫛描波状文や櫛描列点文を施すのが一般的であるが、上下で両者を使いわける例もある。また中央の沈線上に円形浮文を貼付する例も少数ながら認められる。頸部に浮文を貼付する例は陶邑古窯跡群においても例が少ないが、Ⅰ型式に属する土器の中に若干見られる。手法上からは口頸部は回転ナデによるが、肩部との接合部分外面をヘラ状工具によりナデを行なうものがしばしば見られる。肩部はあまり張らず、外面平行叩き、内面青海波文を残す。また胴部内面では、粘土紐の接合部分のみをカキ目調整する例も知られる。

その他の器種　上述以外の器種に甑・横甑などが見られるが、遺物全体に占める割合は少ない。

甑はこの段階では少数ながらも必ず出土する器種である。口縁端部に向かい緩やかに開く胴部をもち、底部は平坦である。胴部外面は平行叩きの後カキ目調整が入念に加えられ、一部叩き目が完全に消される部分も見られる。胴部内面は青海波文を残すが、中央部では青海波が重複せずに一列に並び残っている。底部附近は手持ちヘラ削りにより荒く削られる。底部の孔はいわゆる多孔式のもので、おそらくは五個程度の孔を有していたと推量できる。なお、その穿

孔面は非常に鋭利で、例えば刀子などの鉄製利器の使用が考えられる。

横瓶は、口頸部については小型甕のそれを縮小させた形状を呈す。胴部は俵型を呈するものと、肩部で段をもち屈曲するものが知られる。手法上から見ると、胴部外面は平行叩きの後中央部のみカキ目調整するものと、全面にわたりカキ目調整で仕上げるものとが存在する。胴部内面は全て青海波文をそのまま残している。

その他に亀甲型陶棺の身の部分が出土している。細片のため全体の形状は判明しないが、外面は荒い刷毛目調整を加えた上に凸帯を巡らしたもので、内面は青海波文を残す。

Ⅱ型式4段階の須恵器　（第9図・第10図）

蓋杯に見られる退化傾向は、さらに進展し、器形の扁平化も著しい。

蓋杯（1～6）杯蓋は前段階と大差は認められない。天井部は緩やかなカーブを描き、口縁端部は丸く仕上げる。凹線として辛うじて残存していた稜線は、全く姿を消している。天井部は頂部のみを浅い回転ヘラ削りにより調整し、他は回転ナデ仕上げである。

杯身は口縁部立ちあがり部分の器壁が厚く、高さも1cmを割るものが大部分である。口縁端部は丸く仕上げられ、段は成さない。底部は扁平になり、その約半分を回転ヘラ削りにより仕上げる。

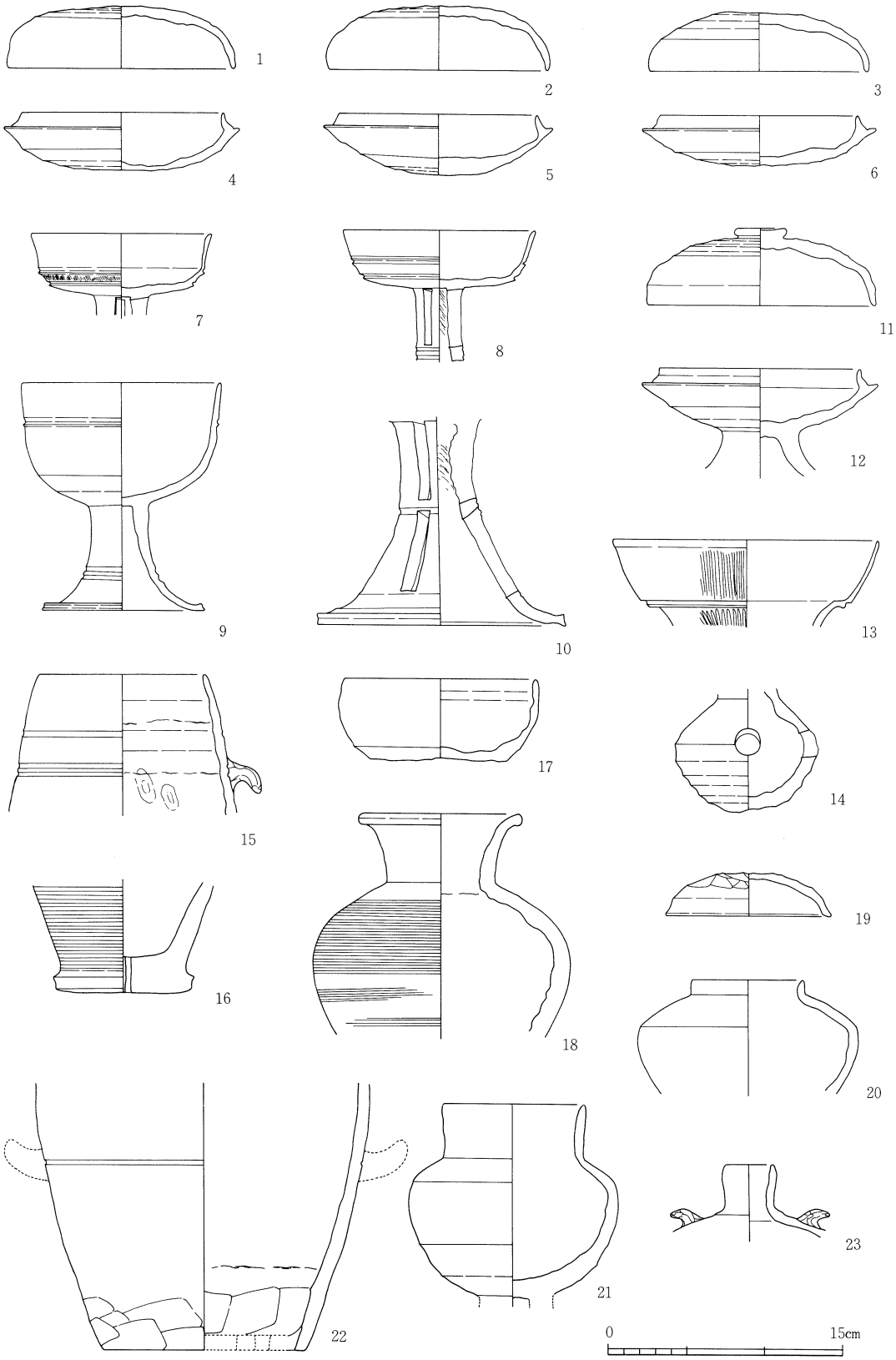
高杯（7～12）器形の大小、および蓋の有無によって大別される。

小型の無蓋高杯は、扁平な杯底部より一気に口縁部を立ちあがらせたもので、中央に沈線によって界される文様帯をもつ。文様では櫛描波状文は全く見られず、櫛描直線文、櫛描列点文が主流である。また沈線は施すが、無文のものも存在する。脚部の形態は、中央部まで直線的に下がり、裾部で外反して広がる。裾端部は、内面にカエリ状に段をもつものと、外側にはねあがるものとが存在する。脚部はその中央部を二条一対からなる沈線により、上下に分かち、透し窓をそれぞれに配する。前段階まで一般的に見られた三方透しは減少傾向にあり、二方透しが多く見られるようになる。また脚部外面に見られた櫛描波状文などの文様は、全く施されなくなる。

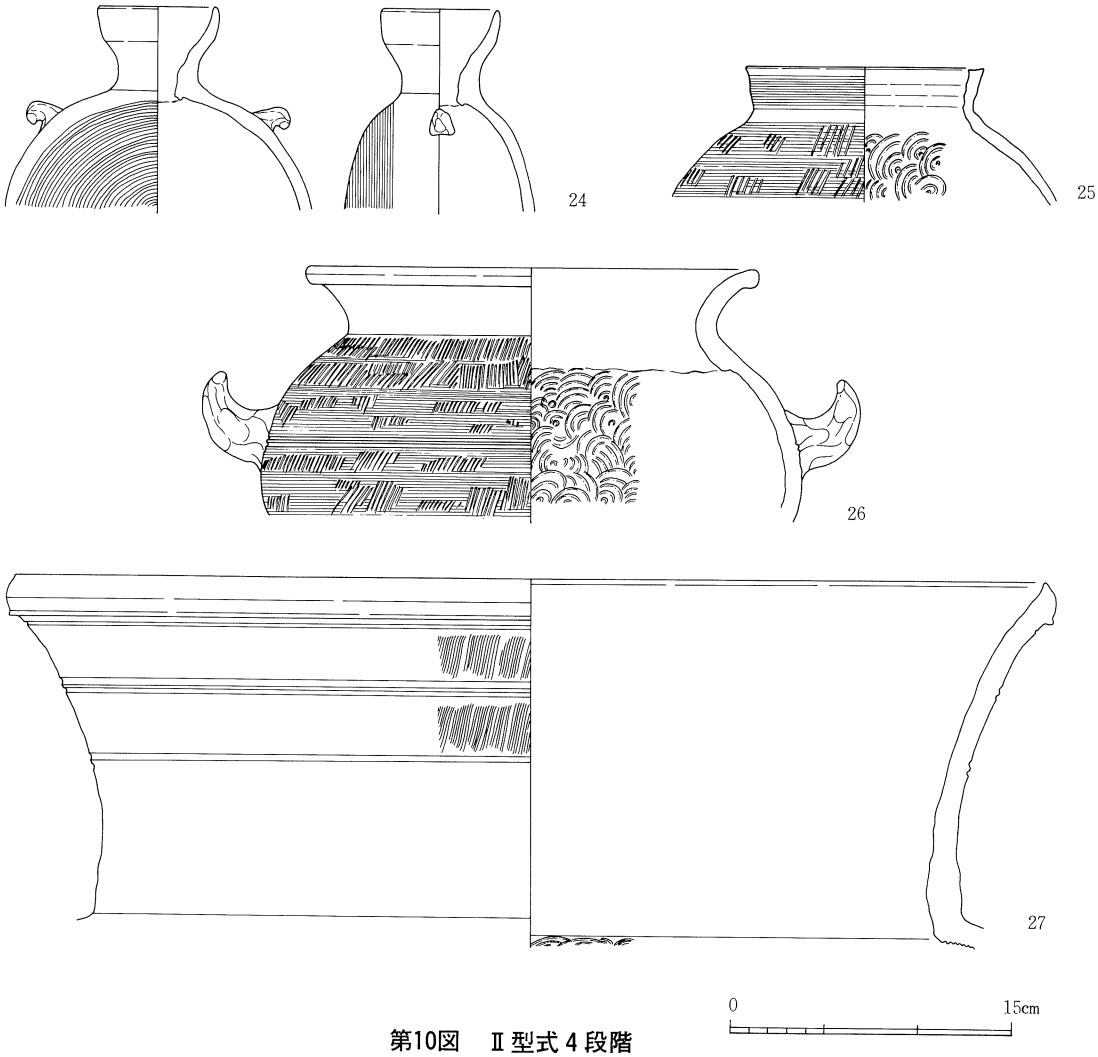
大型の高杯もほぼ同様であるが、脚部の透し窓はまだ三方に配されるものが多い。また高杯というよりは、脚付椀とでもいうべき器種も認められている。

有蓋高杯では、大型のものは知られていない。杯部は杯身の形態と全く差がない。脚部は接合部より大きく外反し、透し窓は配されない。蓋の形状は杯蓋と大差ないが、口縁部と天井部を分ける稜線をまだ若干意識しているように思われる。天井部中央には、扁平で中央が凹面を成すつまみを付す。天井部は回転ヘラ削りによるが、その後カキ目調整を加えたものも多い。

瓶（13・14）頸部は細く、口縁部に向かい大きく外反する。口縁部は前段階に比較して非常に発達しており、頸部から段または稜線を成して、さらに大きく外反し口縁端部に至る。頸部にはヘラ描直線文、櫛描直線文が施され、口縁部にも同様の文様が施文される。口縁端部は丸く収



第９図　Ⅱ型式４段階



第10図　Ⅱ型式４段階

め、全体的に器壁は薄く仕上げられる。胴部は球形を呈し、最大径はその中央に位置する。肩部に一条の沈線を巡らすものもあるが、大半は何の手も加えない。また胴部には文様は施されない。胴部中央には比較的大きな円孔が上方より穿孔される。底部は回転ヘラ削りを行ない、他は回転ナデにより調整される。

壺（18～21）蓋の有無、脚の有無により細分しうる。

短頸壺は蓋を伴うものと、伴わないものがある。前段階の肩が張り、角を持って屈曲するものや、沈線を巡らすものなどは減少し、角をなさず、緩やかな肩部を有するものが多くなる。

これに伴う蓋は、前段階と形態上は変化ないが、手法上では、天井部を手持ちヘラ削りによって仕上げるものが見られるようになる。また回転ヘラ削りの後、カキ目調整を加えるものも引き続いている。

蓋を伴わないものは、肩部から頸部への屈曲度が強い。胴部は扁平なもの、球形を成すものなど、種類が多い。肩部、底部にカキ目調整を行なうものが存在する。

長頸壺は小型甕の口縁部と同じ形態をもつもの、長く直立した口縁部をもつものなどがあ

り、三方向に透し窓を配した脚を伴うものが存在する。またこの段階で、肩部に人形、動物などの装飾を伴う脚付の広口子持壺が数少ないながら、生産が開始されている点が注意される。

提瓶（23・24）全体に小型のものが目立つようになり、Ⅱ型式初頭に見られた大型のものは見られない。胴部は円形を呈し、両側面ともにふくらみを持っており、一側面を扁平に仕上げるものは希である。片面はカキ目調整、その裏面は回転ヘラ削りがなされる。口縁部は直立するように立ちあがり、外反するものは見られない。また頸部途中で段を成したり、稜線を持つものは見られなくなる。把手はカギ状または突起状のものが大半で、環状を呈するものは見られない。

鉢・椀（15～17）すり鉢は従来のものとほとんど変化を見出せない。平底の底部には一個、或は数個の穴を穿孔させ、胴部には荒いカキ目調整を行なう。胴部には一条から二条の沈線を巡らす鉢も若干見られる。手法上では、底部周辺のみヘラ削りし、底部はナデによって仕上げる。

胴部から口縁にかけて直線的に内傾する把手付椀も、少数ながら認められる。把手はカギ状を呈し、その先端は下を向く。

甕（25～27）器形の大小により、大型・小型の区別がある。小型のものは、外反する頸部を有し、口縁端部で丸く肥厚させる。胴部は外面平行叩き、内面青海波文をそのまま残す。なお外面は叩きの後カキ目調整するものが、あいかわらず多く生産されている。また直立する短い頸部を有する甕も、前段階より引き続いて生産されている。なお胴部やや上位に、二個のカギ状の把手を付したものが見られる。把手の部分には、二条の沈線が巡っており、当段階における甑のあり方と共通性が見出せる。

大型甕は直立ぎみの頸部が口縁部で外反し、口縁端部で段を成して稜線を作る。さらに肥厚させながら、先端はやや尖りぎみに仕上げる。頸部外面には二条ないし三条一対の沈線を二段または三段に配し、文様帯を構成する。上二段に施文されるが、文様は櫛描直線文が最も多く、ヘラ描直線文、櫛描列点文がこれに次ぐ。なお上段に櫛描波状文、下段に櫛描列点文というような折衷のものも少数混じえている。胴部は外面平行叩き、内面青海波文を残しており、外面にカキ目調整が見られる例があるが、小型甕のように多くはない。

その他の器種　前段階と同様、少数ながら甑が存在している。生産数が少ないためか、個体間の差があるが、基本的には直線的に外反する胴部をもち、平底多孔式である。

把手の部分に一条の沈線が巡っている。底部内外面は、手持ちヘラ削りにより調整している。

他に陶棺の破片が少なからず見出される。大部分は四柱式陶棺であると考えられ、当窯址群と位置的に重複し、内部主体に陶棺を多く収めている太鼓塚古墳群との関係で注目される遺物である。

陶棺の外面は、荒い平行叩きののち刷毛目調整がなされ、内面は青海波文が多く残存している。蓋、身、脚ともに細片が多く、全体の形状が知れるものはない。

また特殊なものとして鈴が出土している。球形をなす鈴の部分に棒状の柄をつけたもので、

中に小石を入れている。

Ⅱ型式5段階の須恵器　（第11図・第12図）

桜井谷における須恵器生産が衰退する時期である。この段階以後、窯の数は激減し、その操業は単発的で、小規模なものになる現状がうかがわれる。

また器形も、蓋杯を始めとして著しく小型化し、今まででは最小となる。

蓋杯（1～32）杯蓋、杯身ともに口径が10cm前後となる。杯蓋は口径10～12cmの間で、天井部は丸味を持ち、口縁端部は丸く仕上げる。天井部はヘラ削りなどの調整を行なうものが少なく、大半が未調整で粗雑な仕上げである。杯身は口径10cmを割るものが多く、形態は前段階と基本的に変わらない。短く弯曲する口縁部立ち上がりは、その端部が鋭いものが多い。また受部は上方へ比較的長く突出しており、口縁部立ち上がりが結果的に受部に隠れてしまう例も見られ、立ちあがりの消失を感じさせる。底部は杯蓋ほどの丸味は持っておらず、また手法上からも大半が未調整のままである。

高杯（33～35）蓋の有無により大別されるが、有蓋のものは出土数が少ない。無蓋のものは脚の長短で分類しうるが、以前のように大型のものは存在しない。短脚のものは浅い杯部に大きく外反する脚部を接合したもので、脚裾部は内側にかえり状に稜線をもつものが多い。

長脚高杯の杯部は、外面中央に沈線を一条巡らすが、文様は全く施されない。また脚部はその中央部或はやや上部を一条ないし二条の沈線によって区切り、それぞれ透し窓を配している。しかし、その透し窓も前段階のように長方形に切り取るものではなく、単にヘラで切り込みを入れたにすぎず簡略なものである。

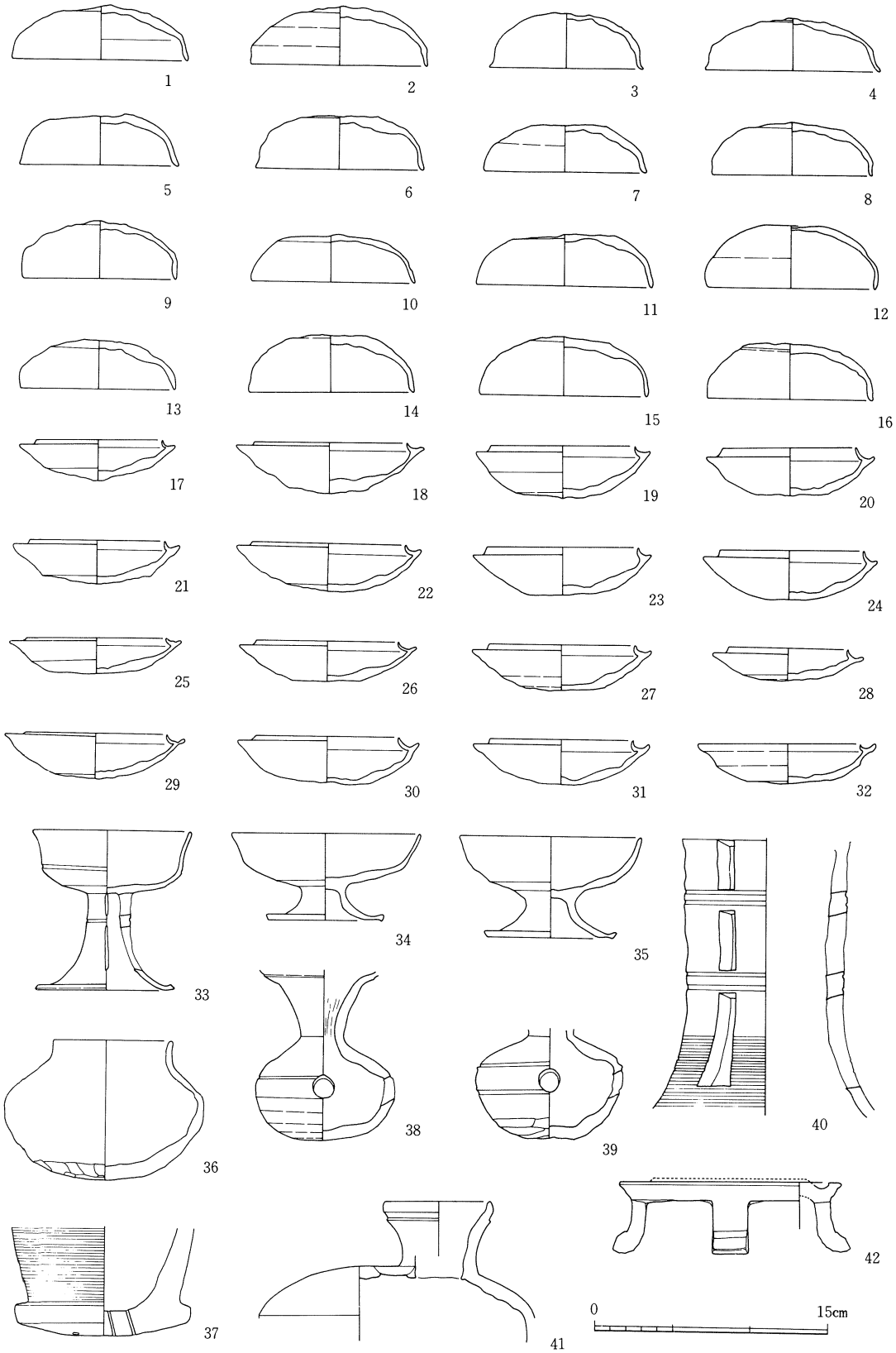
瓶（38・39）小型であることに変わりはない。頸部は緩やかに外反し口縁部に至るが基部が細い。前段階に見られた如き、長く大きく外反する頸部は見られない。また口縁部、頸部に見られた文様は全く認められなくなる。胴部はほぼ球形を呈し、肩部に一条の沈線を巡らすもの胴部中央に二条の沈線を巡らすものなどがある。しかし、その中に文様が施されることはない。胴部中央には、上方より円孔が穿孔される。底部は浅い回転ヘラ削りが見られる他に、手持ちヘラ削りが見られる。

壺（36）全体的に生産量は少ないが短頸・長頸の二種がある。

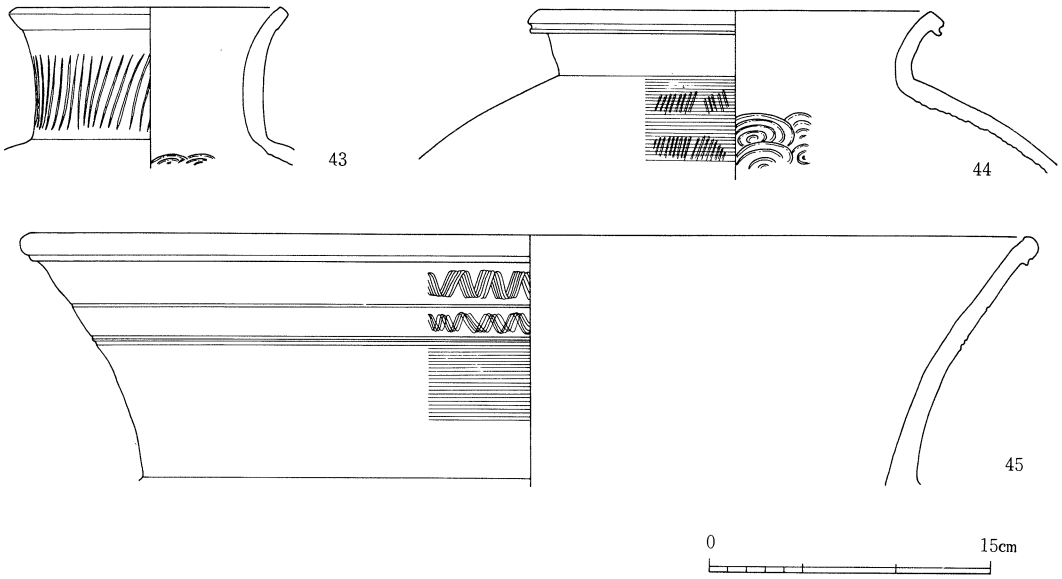
短頸壺は従来のものと大差ない。肩部はなだらかで段をなさない。また沈線を巡らすものも全く存在しない。手法上では、底部を瓶と同様に手持ちヘラ削りにより仕上げるものが認められる点が注目される。

長頸壺に関しては資料が不足しており判然としない。

提瓶・平瓶（41）提瓶は出土量が非常に少なく判然としないが、他器種と同様に小型化が進んでいる。肩部に付されていた把手はボタン状の粘土を張りつけただけのもの、更には全く付さないものへと変化する。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
15cm

第11図　Ⅱ型式５段階



第12図　Ⅱ型式5段階

平瓶も同様に出土量が少ない。胴部は丸味をもっており、肩部は段を成さない。手法上では、胴部を粘土円板でふさぎ、口縁を接合する点など提瓶と変わるものではない。

鉢（37）すり鉢はその形態、手法ともに以前と何ら変わるものではなく、底部に見られる穿孔も、一個から数個のものまで認められる。

器台（40）出土量が少なく判然としないが、筒長の脚部を二条一対の沈線によって数段に界し、各段に透し窓を三方向に配したものである。文様などは何ら施されない。また裾部にのみカキ目調整がなされるものもある。

甕（43～45）器形の大小により大別される。

小型甕は前段階と大差はない。直立ぎみに外反する頸部に、ヘラ描直線文が見られる例もある。大型甕は口縁部および文様に変化が認められる。頸部は大きく外反し、口縁部で段、或は一条の稜線を成し、肥厚ぎみに丸く収めるが、若干、稜線より先端まで長くなりつつある。頸部は一条或は二条一対の沈線によって、二段に界され文様帯を作る。

文様は従来見られていた櫛描直線文、櫛描列点文などが減少し、櫛描波状文が復活してくる。しかし、その波状文は櫛の単位が荒く、以前とはタッチがかなり異なるものである。

その他の器種　その他の器種として、硯、陶棺、塼などがあげられる。硯は全て円面硯である。透し窓を施さない簡単な作りのものと、入念にヘラ削りされた脚を四個つけたものとがある。

陶棺は全て四柱式陶棺と考えられ、蓋、身、脚など各部分が出土している。外面は荒い刷毛目調整が成されている。

塼は法量がやや異なるものも含まれるが、凡そ幅13cmほどである。全てレンガ状の長方形の塼で、方形塼は含まない。表裏ともに不定方向の平行叩き、或は青海波文を残しており、側面

はヘラにより、面をととのえた痕跡をもつものも存在する。

Ⅲ型式の須恵器

桜井谷における操業が途絶える時期である。Ⅲ型式の中で新たに操業が開始される窯はほとんどなく、Ⅱ型式からの延長として少量の焼成が行なわれているのみである。

よって遺物の量も少なく、出土層位なども不安定で、器種のセットなどもうまくとらえられない部分が多い。よって前型式のように、各段階に細分することは不可能なため、Ⅲ型式を凡そ前半部と後半部に分けて記述していくこととする。

杯蓋と杯身の形態が全く逆転する時期にあたる。

Ⅲ型式前半の須恵器（第13図）

蓋杯（1～11）前段階の杯蓋を逆転させ、天井部に宝珠つまみを付したものである。内面のかえりは、受部端よりも下方にのびている。天井部は、その半分弱を回転ヘラ削りにより仕上げるものが大半である。つまみは貼りつけによっており、後にナデにより仕上げられている。

杯身は、平底で緩やかに外反する口縁部を有するもの、やや丸味をもった底部を有するものの二者が知られている。両者ともに底部は回転ヘラ削りにより仕上げる。杯身では平底を成すものが、やや後出であると考えられる。

高杯（12～14）小型のものが若干得られているだけである。全て低脚の高杯である。杯部は杯身と同様であるが、底部に回転ヘラ削りを施すものと、施さないものとが存在する。脚部は短く、裾部で外反するもので、脚端部は丸く収めるものと、段を成すものとが認められる。

瓶（15）口頸部については、良好な資料を得ていないが、胴部は扁平で、肩部から胴部中央にかけて一条ないし二条の沈線を施し、文様帯を作り出している。文様帯内には櫛描列点文が施される。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられる。またその後に、脚台がつけられるのは、従来の瓶には見られなかった点である。脚台は脚端部の形状が明確でないが、大きく外反し、短く終わるものと考えられ、透し窓などを伴うものではない。胴部中央の文様帯上に、外面やや上方より穿孔がなされる。

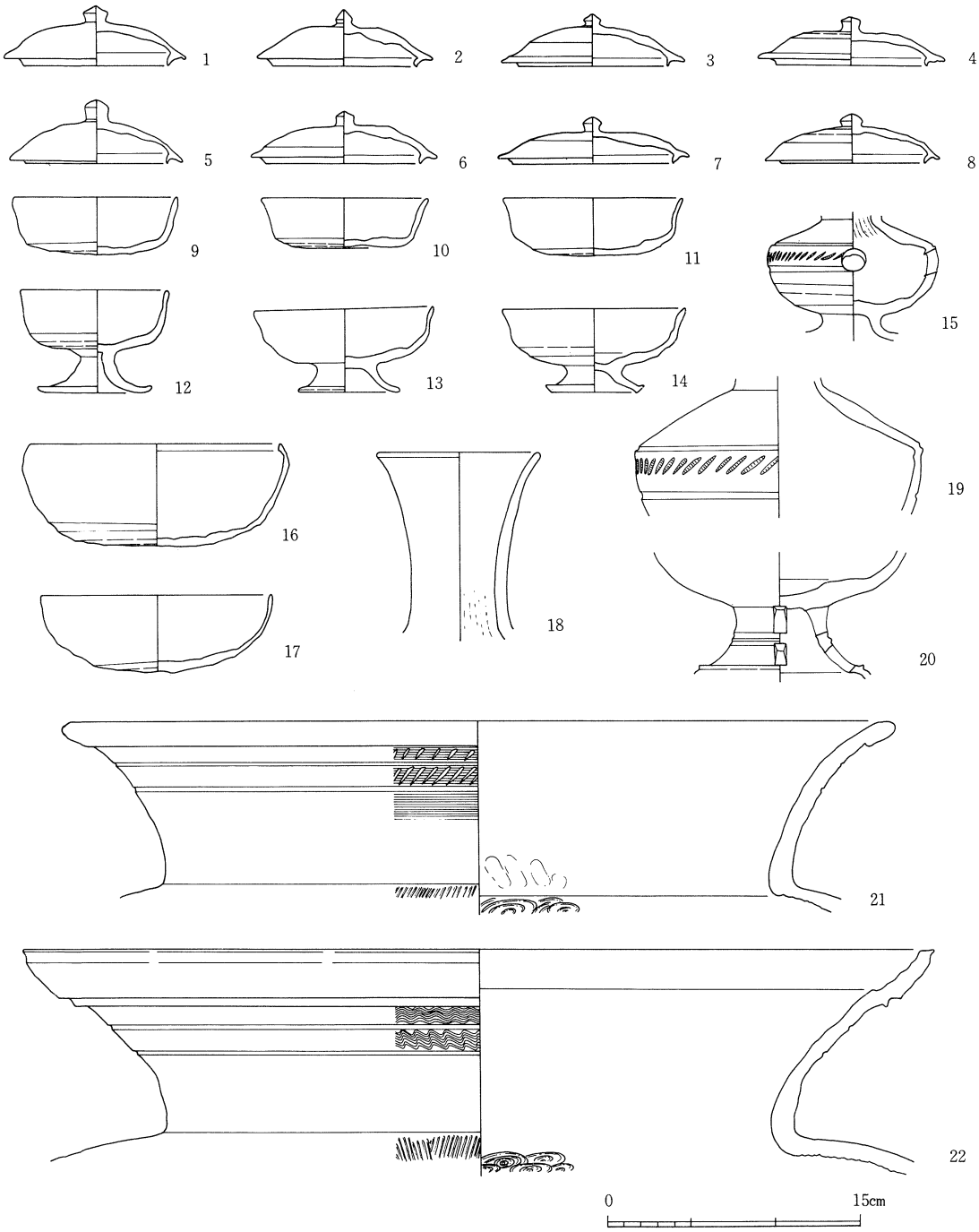
壺（18～20）長頸の脚付壺が知られている。口頸部、胴部、脚部とも断片で、全体の形態は確定できないが、凡そ以下のような形態を復原できる。

口縁部は長く直立し、端部で緩やかに外反する。頸基部の太さに大小がある。肩が張らず中央で屈曲し段を成す。胴部中央は二条の沈線で界され、文様帯が作り出される。文様は櫛描列点文を若干荒く施文する。脚部は緩やかに外反し脚裾部で段を成し屈曲する。脚部中央には一条ないし二条の沈線を巡らし、その上下に二方向に長方形の透し窓を配す。

鉢（16・17）あまり多い器種ではない。内弯気味に立ちあがる口縁部を有し口縁端部が内傾し稜線をもつもの、単に丸く仕上げるものなど存在する。底部は丸味をもち、回転ヘラ削りが

施される。底部内面は一方向にナデ調整を行なう。この種の鉢は、後に出現する鉄鉢型土器の素型ともいえる形態を呈している。

甕（21・22）器形の大小により大別される。小型甕は従来と大差ない。それに対して、大型



第13図　Ⅲ型式（前半）

甕は口縁部に大きな特徴をもっている。

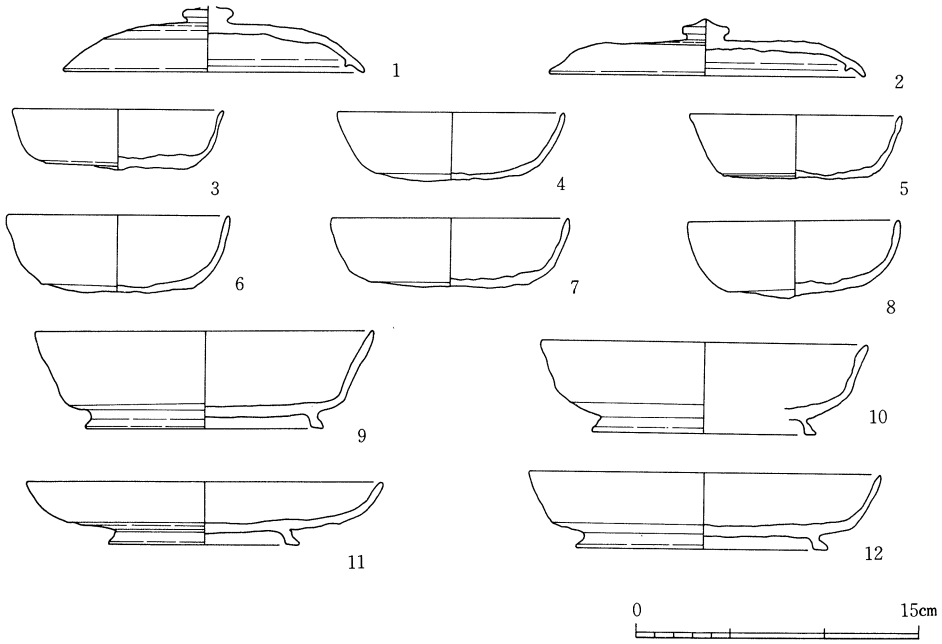
頸基部より緩やかに外反し、口縁部で段を成している。この段より口縁端部までがかなり幅をもっており、一見すると幅広の縁を巡らしたように見える。またこの部分が文様帯となって波状文などが施される場合も認められる。頸基部から口縁端部までの高さが従来のように高くなく、低い点も注意される。頸部上半は沈線により二つの文様帯を構成し、中に荒い櫛描波状文、或はヘラ描列点文などを施す。文様帯は頸部の高さが短い点に呼応して、幅が狭くなっている。また口縁部の縁状部分にも施文されることが多い。胴部には外面平行叩き、内面青海波文が残っている点は従来通りである。

Ⅲ型式後半の須恵器（第14図）

蓋杯、盤などが小量知られるだけである。

蓋杯（1～10）杯蓋は口縁部内面のかえりが、受部の中に隠れる。天井部は丸味をもつものと、扁平なものの両者が存在する。これが時間的推移としてとらえられるかどうかは、当窯跡群内で検証することは出来なかった。天井部中央には、中心が突出する擬宝珠様つまみが付される。つまみと天井部の接合部は、比較的深く入り込んでいる。つまみは接合の後、その周円をナデによって仕上げている。天井部はその半分を回転ヘラ削りによって仕上げられる。

杯身は高台の有無で二種に分類される。高台の無いものは、緩やかに外反する口縁部を有し、口縁端部は丸く収めている。底部から口縁部にかけても、角をもつものはなく、丸味をもっている。また底部は全て未調整である。



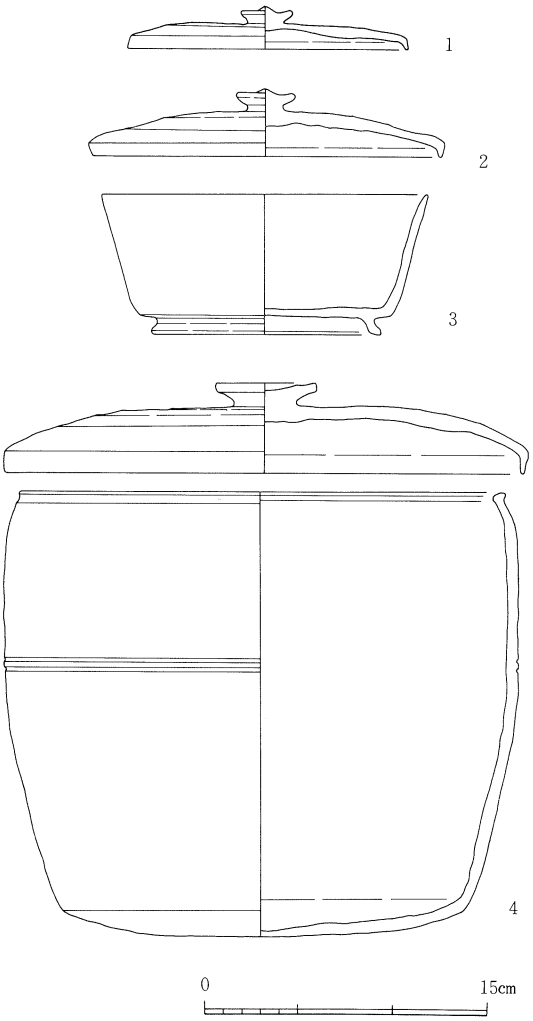
第14図　Ⅲ型式（後半）

高台を伴うものは、高台部分からやや上方に外反し、さらにそこで丸味をもってカーブし、口縁部へ直線的にのびる。高台は八の字型にふんばり、底部は回転ヘラ削りが施される。

盤（11～12）杯身に比較して総体的に口縁部の立ちあがりが、低いものを盤として一括した。中には高台付の皿の方が良いと思われるものもある。口縁部の立ち上がりが低い他は、杯身と形態、手法で差異はない。

Ⅳ型式の須恵器（第15図）

杯蓋内面のかえりが消失する段階であり、この時期をもって当窯跡群は終末を迎える。現在Ⅳ型式に属する須恵器を出土する窯は、一基のみしか確認されていない。またⅣ型式になって新たに操業される窯は見あたらず、Ⅲ型式より続いて焼成されたものである。何れにしても、この時期ではⅡ型式各段階に見られたような活発な生産はなされておらず、その操業は単発的でその経営も小規模なものであったと推察される。



第15図　Ⅳ型式

遺物としては蓋杯と火消壺形土器が知られるのみで、それらを細分することは、不可能である。1・2は杯蓋で、かえりが消失しており、天井部は丸味を有するものと、やや扁平なものの二者が存在する。天井中央部に擬宝珠様つまみが付されるが、その接合部が深くくり込む点などから、Ⅳ型式の中でも古い様相を持つものと考えられる。手法上では、天井部を回転ヘラ削りし、他は回転ナデによって仕上げている。3は杯身であるが、やや深目のものである。八の字形にふんばる高台から水平にのび、角を持って屈曲し直線的に口縁部に至る。この点はやや新しい要素をもっているといえる。4は火消壺形土器で、蔵骨器としての可能性も持っている。蓋は天井部が丸く、中央が凹面を成す大形のつまみを付したものである。天井部は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデによって仕上げられている。身は胴部中央に二条一対の凹線を巡らしている。底部は若干丸味をもっており、回転ヘラ削りにより仕上げている。

Ⅲ　結語

以上、桜井谷古窯跡群出土須恵器の各型式を更に小段階に分けて、その変遷を述べてきた。ここでは、本稿で明らかとなった当窯跡群の特徴を整理してまとめにかえたい。

まず初めに、当窯跡群とは距離的にも近く、また中枢窯的な位置を占めている大阪府陶邑古窯跡群でなされた編年との対比の問題がある。当窯跡群における最古型式が、陶邑古窯跡群のどの型式・段階に対応するのかは操業開始時期を考える上でも重要な問題である。

当窯跡群Ⅰ型式１段階の須恵器の特徴は前述の通りであるが、再度簡単に述べておくと、杯身は口縁部立ちあがりが高く、口縁端部はやや内傾するものの平坦に仕上げられている。受部は薄手で水平に伸びる。また手法上から見ると、底部に施される回転ヘラ削りは、その削り幅が狭く入念に施されている。これらの形態・調整手法などの諸特徴を、陶邑古窯跡群のものと対比すると、最も定型化、或は統一化が進展した時期としてとらえることができる。よって田辺昭三氏の言うＴＫ208型式、中村浩氏のⅠ型式３段階に相当するものといえよう。したがって当窯跡群操業開始時期は、従来考えられていたＴＫ23型式（Ⅰ型式４段階）並行[註7]よりも若干遡ることとなった。またⅡ型式１段階は蓋杯の大型化よりＭＴ15型式（Ⅱ型式１段階）に、Ⅲ型式前半は宝珠つまみの出現によりＴＫ217型式（Ⅲ型式１段階）に、Ⅳ型式初頭は蓋杯内面のかえりの消失によりＭＴ21型式（Ⅳ型式１段階）にそれぞれ対比しうると考えられる。

しかしながらⅢ型式・Ⅳ型式については、窯跡自体が僅少な点に加えて、遺物の出土状況・出土量などにも資料的な制約があるため、全体的な把握がなし得ないのが現状である。

それでは次に器種組成などの面から、当窯跡群に特徴的な点を抽出したい。

まず器種についてであるが、Ⅰ型式各段階は資料が少ないこともあり、その特徴はつかみにくい。しかし短脚高杯の透し窓にかなりの比率で四方透しが見られる点は注意すべきである。陶邑古窯跡群においては、ＴＫ23型式（Ⅰ型式４段階）以後四方透しはほとんど見られない[註8]とされる点からすれば、形態に古い様相を残しているといえる。さらにⅠ型式では直口壺が注目される。直口壺は当窯跡群の編年ではⅠ型式３段階に出現する器種である。陶邑古窯跡群ではⅠ型式を通じて直口壺は見られるが、その生産の中心はＴＫ208型式からＴＫ23型式にある。その点、当窯跡群出土の直口壺は、型式的には後出するものである。

Ⅱ型式になると、爆発的に窯跡の数が増加しており、遺物の特徴をつかみやすい。Ⅱ型式では、この時期に特徴的に出現する器種がいくつか認められる。その一つに甑が上げられる。甑は当窯跡群の編年では、Ⅱ型式３段階～４段階にかけて集中的に見られる器種で、その前後段階には全く出土を見ないものである。出土量こそは蓋杯・甕などに比べれば極少量でしかないが、この時期の窯跡には必ず認められる器種である。甑の特徴としては、平底で多孔式である点と、胴部中央に相対称に付けられる把手部分に一条の沈線が必ず巡らされる点である。このような特徴を具備した甑は、陶邑古窯跡群ではＴＫ73号窯を初めとしてＴＫ85号窯・ＴＫ87号窯等[註9]極初期の窯にのみ見られるものである。ただし陶邑産の甑が口径30cm、器高40cmほどを各

々はかるのに対し、当窯跡群出土甑は一般的に小ぶりである。何れにしても当窯跡群出土甑に関しては、形態上はかなり初源期のものの特徴を残していると考えられ、何故この時期に古相を留めた形で出現するのか、周辺の集落などでのあり方も含めて今後の検討課題としたい。

このように、当窯跡群Ⅰ型式～Ⅱ型式においては各器種とも形態に古い様相を残していることが判明した。特に蓋杯・高杯などは、同時期の陶邑古窯跡群のものと対比した場合それが顕著である。すなわち杯蓋はⅡ型式2段階までは、口縁端部に段をもち、稜線の残存が認められ、また短脚高杯では四方透しがⅡ型式初頭まで残る点などが指摘できる。

さらに調整手法の面から検討してみると、当窯跡群Ⅱ型式後半からⅢ型式にかけて短頸壺蓋・壺・瓿などの天井部、或は底部に手持ちヘラ削りが復活してくる点が注目される。手持ちヘラ削りは、初期須恵器に多く用いられる調整手法であり、特に陶邑古窯跡群においては、ＴＫ73型式からＴＫ216型式の古段階にかけて、蓋杯を中心に認められる。蓋杯以外の壺・瓿などの底部には、この手法は若干後のⅠ型式後半、ＴＫ23型式まで残存するとされる。しかしながら当窯跡群においては、Ⅱ型式後半以前の各段階には、この調整手法は全く見られない。この手法をもつ確実な遺物は、数量こそ少ないものの、この型式以降Ⅲ型式に属する窯跡において現われる。この点からすれば、当窯跡群においては器種によりかなり後まで、古い調整手法が残存しているといえる。

最後に、当窯跡群の性格を考える上で注目すべき埴輪・陶棺・塼などの出土遺物について触れておきたい。この内、前二者は墓制の一環を担うものである。埴輪は上野青池南畔窯跡[註10]が埴輪窯を後に須恵器窯に転用した例として注目される他に、桜塚下原窯跡[註11]でも埴輪の焼成が見られるとされる。何れにしても埴輪生産に関しては、恒常的なものではなく、臨時の生産が主であったと考えられる。

陶棺は当窯跡群と分布地域を同じくする太鼓塚古墳群に多く見られるもので、従来より須恵器工人との関連が強く説かれている。

陶棺の中でも古く位置づけられる亀甲型陶棺は、中井山3号墳[註12]より検出されている。窯跡では2―17号窯跡より残片が検出され、時期はほぼⅡ型式3段階に対応すると考えられる。Ⅱ型式4～5段階に比定される2―25号窯跡では、多量の四柱式陶棺が出土しており、それぞれの製作時期を知ることが出来る。陶棺については、これらの段階で生産が終了しており、Ⅲ型式以降へは継続しないと考えられる。陶棺に関しては、陶邑古窯跡群で見られるより、はるかに多く焼成されているといえる。

塼は2―25・2―24・2―19の各窯跡から出土している。窯跡により個体のばらつきが見られ一貫していない。供給先としては、寺院関係の可能性が考えられるが、至近距離にある金寺山廃寺[註13]では、現在までにその出土を見ていない。

以上、当窯跡群Ⅰ型式～Ⅳ型式まで陶邑古窯跡群における編年観と対比するとともに、形態・調整手法の面や特殊な遺物について比較してみた。この点、当窯跡群出土須恵器は、形態に

古い特徴を残すものが多く、器種ではⅠ型式後半からⅡ型式初頭にかけて直口壺が、Ⅱ型式後半で甑というように古い器種の出現が見られる。さらに調整手法の面でも、Ⅱ型式後半の壺・瓿などを中心に手持ちヘラ削りの残存が知られ、形態・調整手法ともに古い要素を残す部分が少なくない。また特殊な遺物として陶棺が多量に焼成されている点も注意する必要がある。

このように、桜井谷古窯跡群は六世紀代において、須恵器生産の面では陶邑古窯跡群と共に中枢的な位置を占め、かつ地理的にも最も陶邑古窯跡群と近接した地方窯でありながら生産される須恵器は同時期の陶邑古窯跡群のあり方とは異なっている。このことは出土須恵器の器種・形態・調整手法などに見られる技術の停滞性・保守性から窺われる。

本稿では、桜井谷古窯跡群の編年を行なうにあたって基本的な編年観は、陶邑古窯跡群でなされたものを参考とした。しかしながら器種組成或は技術面からみると、両地域は同じ生産圏にあるといえども、地域差が認められる。よって陶邑編年をそのまま当地域に当て嵌めることには無理のあることが判明した。

同じ大阪府内という近接した地域でありながら、その編年にかなりの差が認められる以上、さらに離れた地域における須恵器編年を全面的に陶邑編年に依拠することには問題があろう。

今回は千里古窯跡群として包括される地域の内、特に豊中市桜井谷古窯跡群出土須恵器を中心に編年を行なった。よって吹田地区の窯跡に関しては触れることが出来なかった。

今後はさらに隣接する両地区の出土遺物の対比を通じて、遺物の特徴の検証を進め千里古窯跡群の実態を検討していきたい。

最後に、本稿をまとめるにあたり下記の方々から様々な御指導・御教示を賜わった。記して深く感謝申し上げます。

伊藤潔・乙益重隆・小野田正樹・邊見端・吉田恵二　　（敬称略・五十音順）

註1　William Gowland 「The Dolmen and Burial Mound in Japan」『Archaeologia』vol. LV Westminster 1897

2　笠井新也「攝津國櫻井谷村に於ける古代製陶所の遺蹟及びその遺物に就て」『考古学雑誌』第5巻第11号 1915「攝津國櫻井谷村に於ける古代製陶所の遺蹟及びその遺物に就て（補遺）」『考古学雑誌』第6巻第1号 1915

3　桜井義彰　「攝州櫻井谷村古代窯址に就て」『考古学雑誌』第7巻第3号 1916

4　平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群Ⅰ」1966
中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

5　中村浩　前掲書　註4

6　中村浩　前掲書　註4

7　田辺昭三「須恵器生産の諸畫期」『日本美術工芸　392』日本美術工芸社 1971

8　平安学園考古学クラブ　前掲書　註4

9　大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告第30輯 1978

10　小林行雄・藤沢一夫「埴輪と祝部の窯跡」『考古学』第5巻10号 1934

11　藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1巻第1章第3節 豊中郷土文化研究会 1961

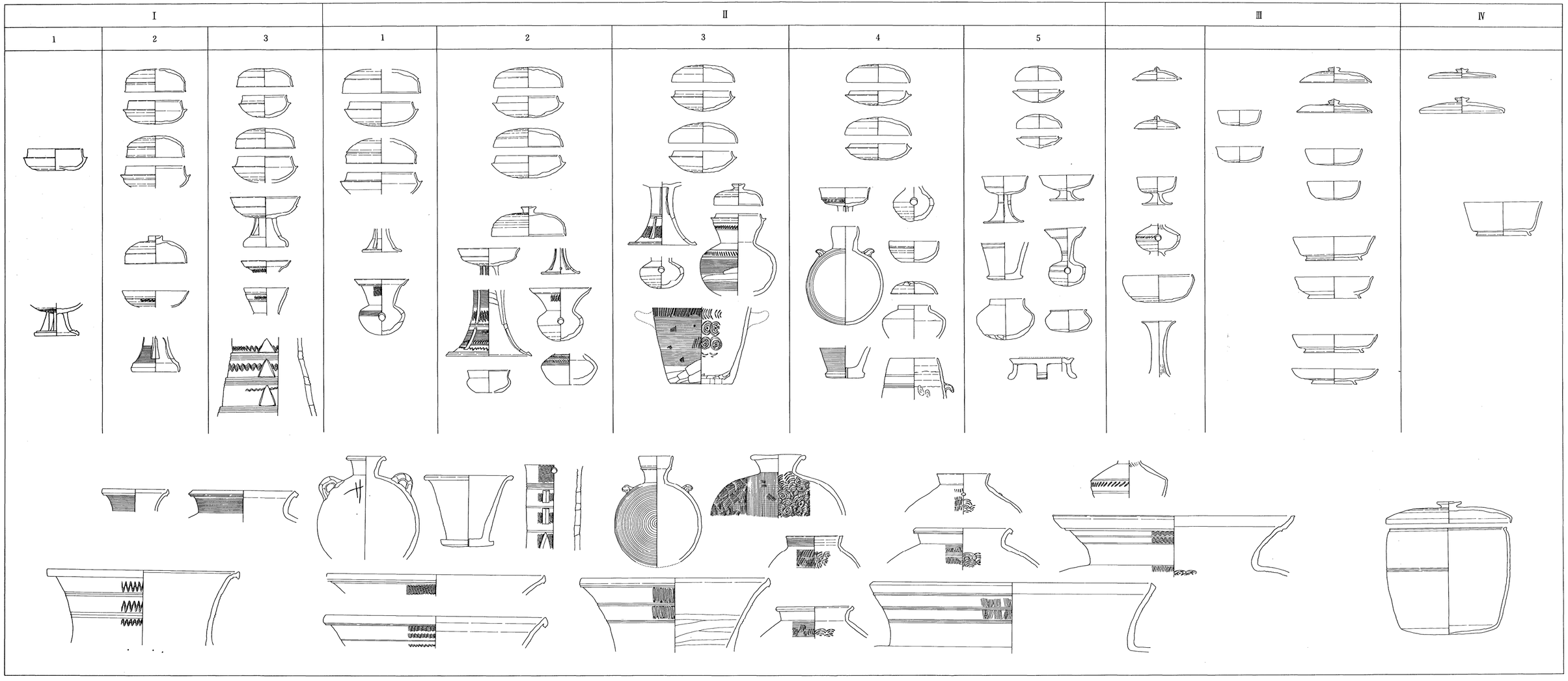
12　昭和40年　豊中市教育委員会発掘調査
13　藤沢一夫「古墳と氏寺－宮山古墳群と金寺山廃寺－」『豊中市史』第１巻第１章第３節７　豊中郷土文化研究会　1961

付記

昭和58年１月より実施された、府営千里・緑ケ丘団地建設に伴う発掘調査に於いて、新たにⅣ型式に属する窯跡が検出された。

当該期の窯跡は、従来１基のみしか知られておらず、桜井谷古窯跡群の終末を考える上で極めて重要な資料を呈示することとなった。

本稿に於いても、不充分であったⅣ型式を埋める資料として有効であると考えるが、校了後の為、その成果を生かすことが出来なかった。今後更に検討を重ねていきたいと考える。



桜井谷窯跡群編年

桜井谷窯跡群出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学教授　　三辻　利一

1　はじめに

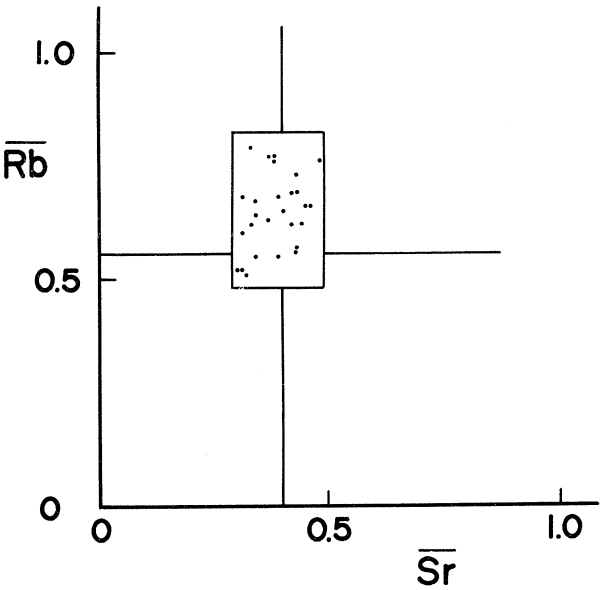
胎土分析により須恵器の産地を推定するためには、前以って、窯跡出土の須恵器片を多数分析しておき、その化学特性の相違からいくつかの窯跡群グループに整理しておく。次いで、遺跡から出土した須恵器を分析し、その化学特性からどの窯跡群グループに対応するかを調べる。その結果、全ての化学特性が対応する窯跡群グループが産地であると推定される。このような訳で須恵器の産地を知るためには、窯跡出土須恵器の分析データを集積しておくことは必要である。本報告では豊中市桜井谷窯跡群、および下村町池窯出土須恵器の胎土分析のデータを報告するとともに、利倉西遺跡出土須恵器の産地推定を試みた。

2　実験法

試料片はすべて、その表面を超硬質の研磨機で研磨し、付着汚物を除去したのち、超硬質乳鉢で 100～ 200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は圧縮機でコイン状にプレス成形して蛍光X線分析用試料とした。蛍光X線スペクトルの測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置が用いられた。土器中のSi（けい素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）の6元素が定量された。定量分析には標準試料として岩石標準試料ＪＧ－１が使用された。データは岩石標準試料ＪＧ－１で規格化した値で表示された。$\overline{Rb}$、$\overline{Sr}$などは規格化値であることを示す。

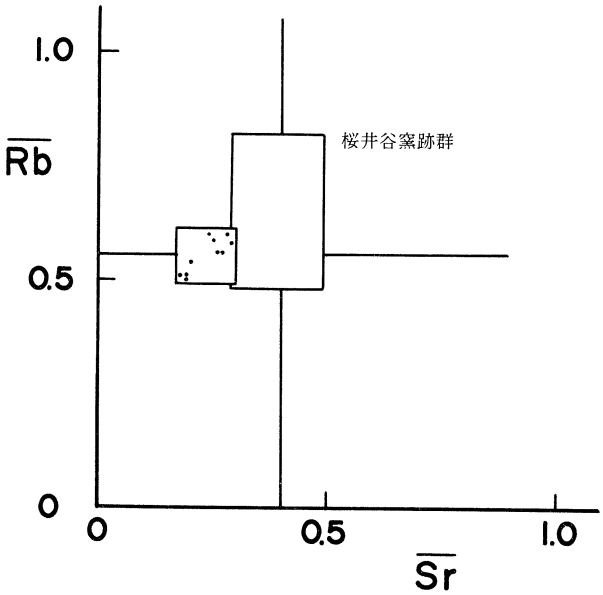
3　分析結果

図１には、桜井谷２－17窯、２－23窯、２－25窯出土須恵器のRb－Sr分布図を示してある。Rb－Sr分布図を用いて各地の須恵器の特性を示すのは、全国の窯跡出土須恵器を約5000資料分析した結果、この分布図が地域持性をもっともよく表示することが分かったからである。[註1・2] 分布図中、中央に引かれた新座標軸は各々、全国の須恵器のRb、Srの平均値である。図１から、桜井谷窯跡群の須恵器はRb量が少し多くSr量は全国平均並みであり、まとまって分布することが分かる。しかし、２－17



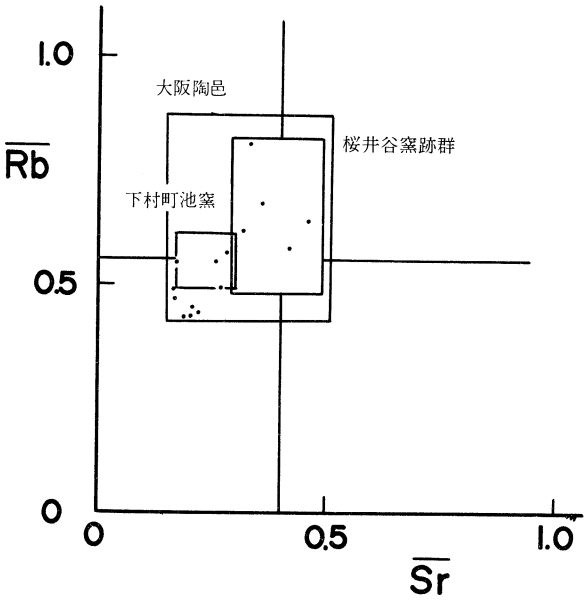
第１図　豊中市桜井谷窯跡群

窯、２―23窯、２―25窯間の相互識別はできなかった。一方、図２には下村町池窯須恵器のRb―Sr分布図を示してある。下村町池窯の須恵器もよくまとまって分布する。しかし桜井谷窯跡群群の須恵器に比較してSr量が少なくその結果、それらの間の相互識別が十分可能であることが分かった。このように桜井谷窯跡群と下村町池窯とは比較的近距離にありながら、Sr量が異なり相互識別できることが分かった。Sr量は近距離の窯間で異なることは、これまでにもしばしば観測されて来た。



第２図　豊中市下村町池窯

次に利倉西遺跡出土須恵器の産地をRb―Sr分布図上で推定してみよう。図３には、利倉西遺跡出土須恵器のRb―Sr分布図を示してある。５点は桜井谷窯跡領域に入るが残りは入らない。したがって、５点は桜井谷窯跡群産の可能性がある。しかし残りの10点は桜井谷窯跡群産の可能性はない。また図３には、大阪陶邑の20基の窯から出土した約 200点の分布データより大阪陶邑領域を定めてある。そうすると、利倉西遺跡の15点の須恵器はすべて大阪陶邑領域にも入り、大阪陶邑産である可能性があることも示す。したがって、桜井谷窯産か、大阪陶邑産であるかは胎土分析では決定できず、他の方法によらなければならないことが分かった。



第３図　利倉西遺跡出土須恵器

図４には、K―Rb相関図を示してある。全国の窯の須恵器について、KとRbは正の相関があることが知られている。[註1・2] 桜井谷窯跡群、および下村町池窯の須恵器にも、ほぼ正の相関関係があることが分かる。しかし両グループの相互識別には余り有効ではないので、利倉西遺跡の須恵器のK―Rb相関図は示していない。

図５にはCa―Sr相関図を示してある。CaとSrの間にも、全国の窯について正の相関があるこ

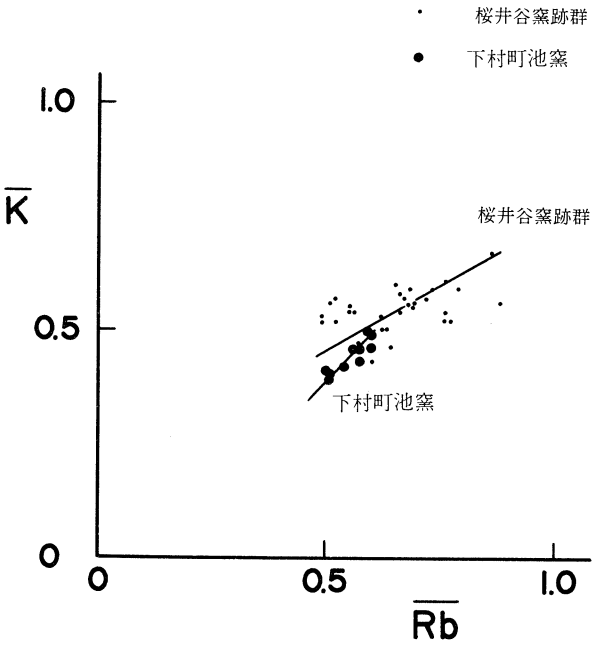
とが知られている[註1・2]。図5より、桜井谷窯跡群と下村町池窯の須恵器には各々CaとSrの間に正の相関が成立することが分かった。この図では両グループが少し離れて分布するので、利倉西遺跡の須恵器の産地推定に使用してみた。図6には利倉西遺跡出土須恵器のCa—Sr相関を示す。そうすると、Rb—Sr分布図同様、5点が桜井谷ライン近傍に分布し、残りは下村町池窯ライン近傍に分布する。このことは大部分の利倉西遺跡出土須恵器の胎土は下村町池窯の須恵器胎土と類以していることを示す。しかし利倉西遺跡と下村町池窯とは時期的にずれるため、下村町池窯の近くに利倉西遺跡と同時期の未発掘の窯があるのかもしれない。

なおSi（けい素）とFe（鉄）の分析値からは桜井谷グループと下村町池窯との相互識別はできなかったので、分析データは割愛した。

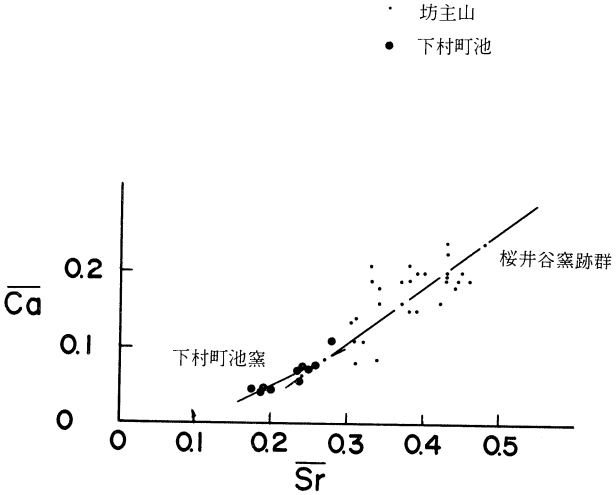
引用文献

註1　三辻利一；考古学研究才28巻才2号 96— 108（1981）

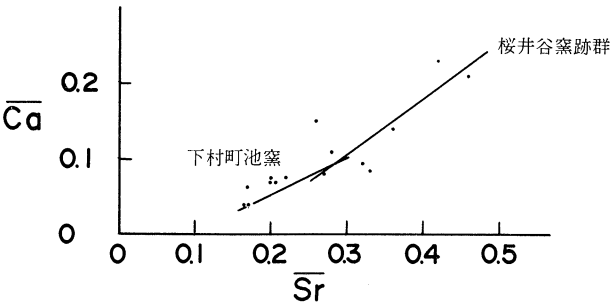
註2　三辻利一；自然　才36巻才6号 52—61（1981）



第4図　桜井谷窯跡群出土須恵器のK—Rb相関



第5図　桜井谷窯跡群出土須恵器のCa—Sr相関



第6図　利倉西遺跡出土須恵器

図　　版

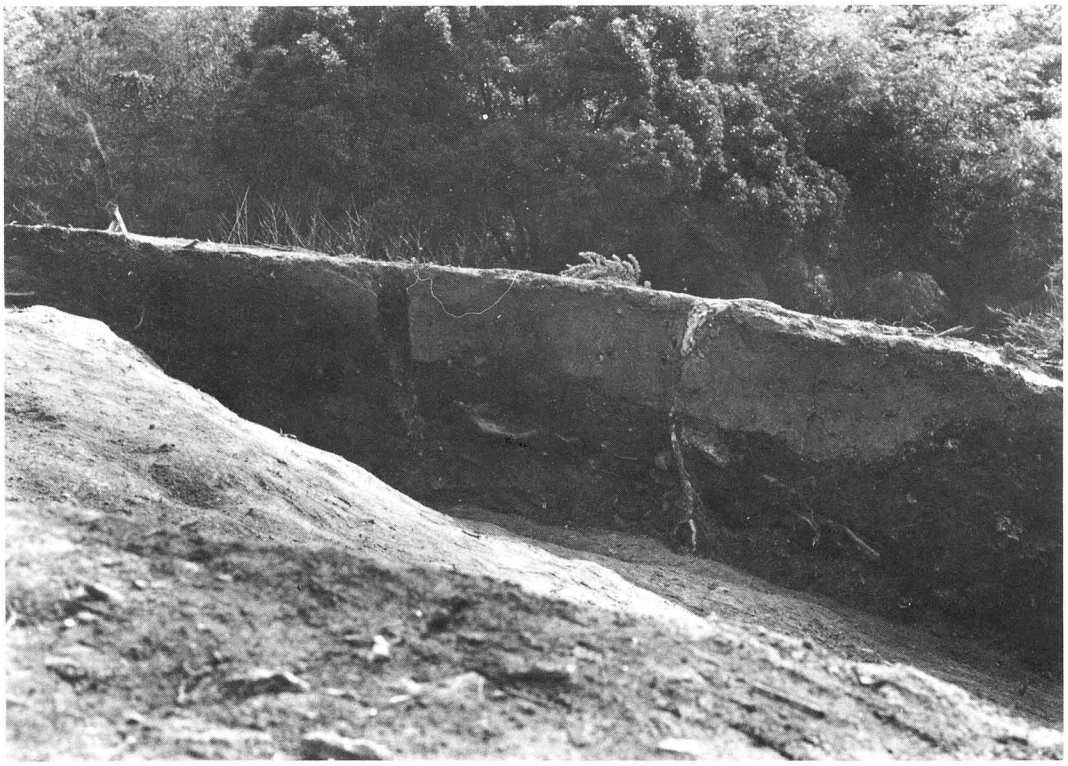
(1) 調査地遠景

(2) 灰原斜面

(1) 灰原遺物出土状態

(2) 灰原遺物出土状態

(1) 灰原断面

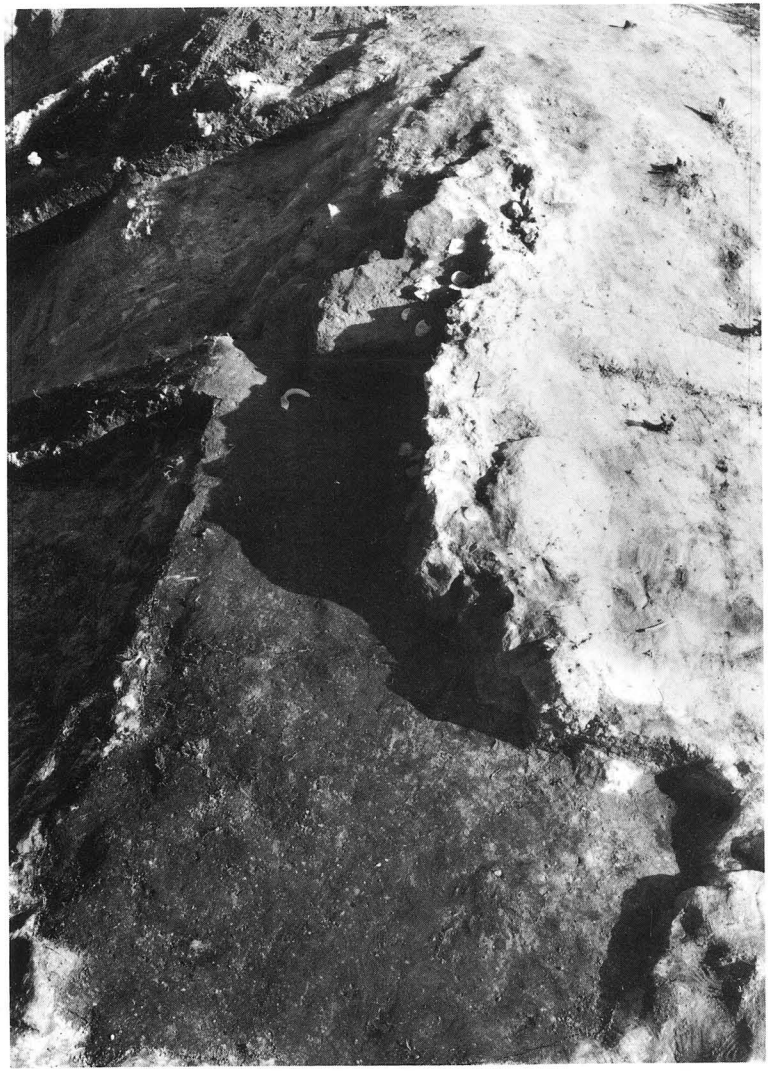


(2) 灰原断面

図版4

TN2—17

(1) 窯跡検出状況



(2) 最終時期窯跡

(1) 最終時期遺物残存状態

(2) 前庭部断面

(1) 焼成部断面(ヨコ)

(2) 焼成部断面(タテ)

(1)　焼成部断面(ヨコ)

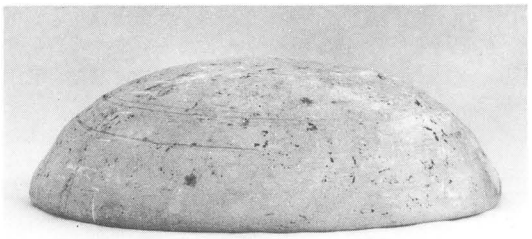
(2)　燃焼部窯体断面

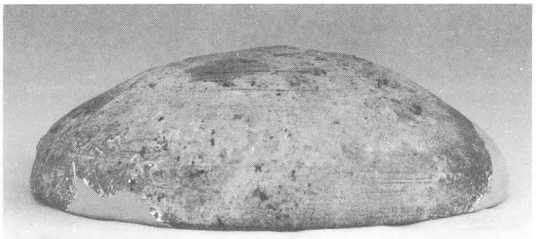
図版8　TN2—17

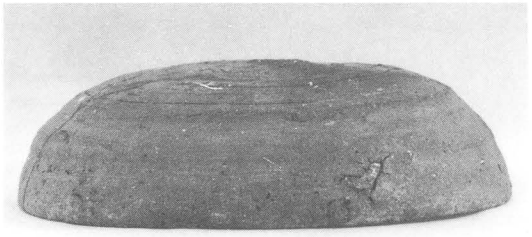
(1)　1次窯跡全景

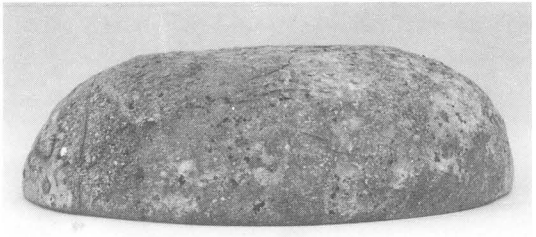
(2)　1次窯跡（たちわり後）

図版9　TN2—17　窯体内出土遺物

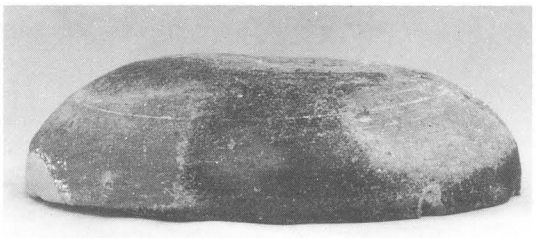

1


2

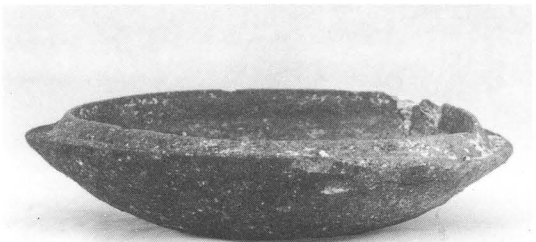

3

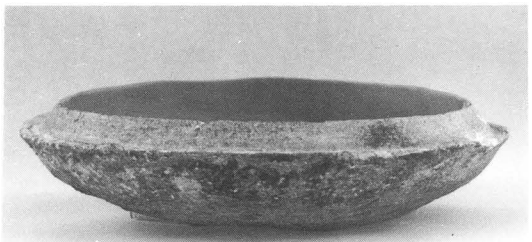

4

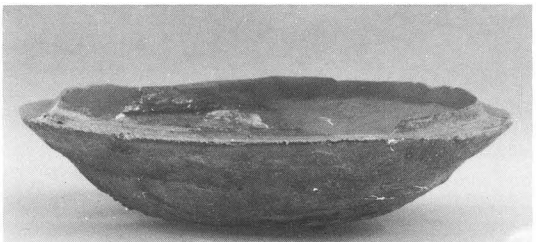
5

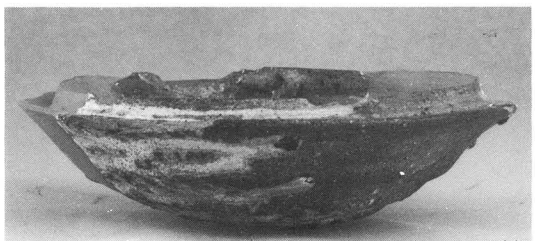

6

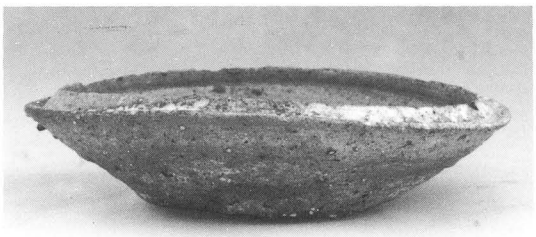
7


8


9


10


11

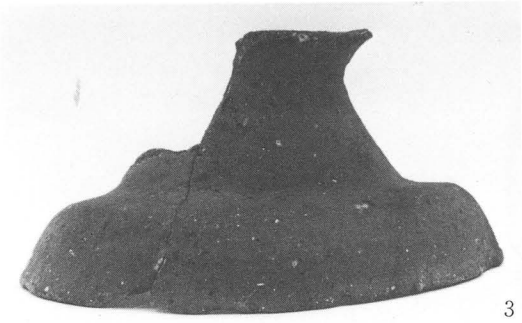

12

1～6坏蓋・7～12坏身

図版10　TN2—17　窯体内出土遺物

1

2

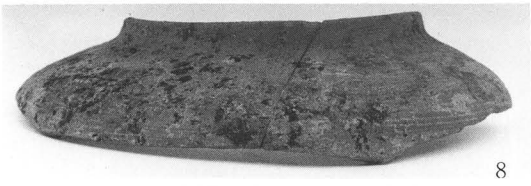

3

4

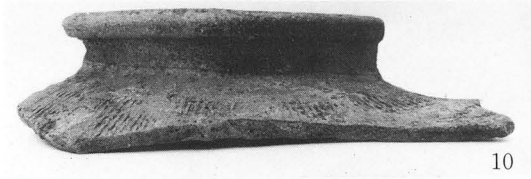
5

6

7


8

9

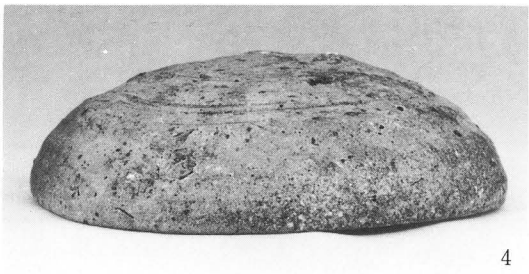

10

1有蓋高坏蓋・2有蓋高坏身・3脚台・4～7甕・8～10壺

1

2

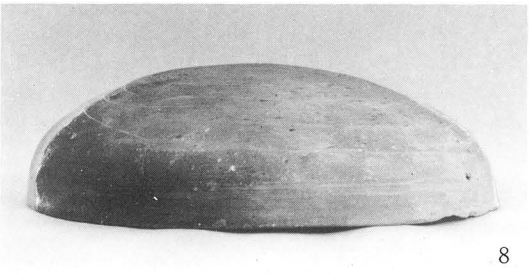
3


4

5

6

7


8

9

10

11

12

1～12坏蓋

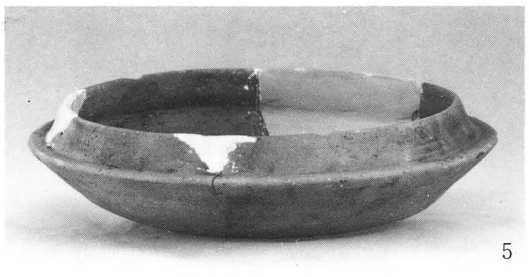
図版12　TN2—17　灰原内出土遺物

1

2

3

4


5

6

7

8

9

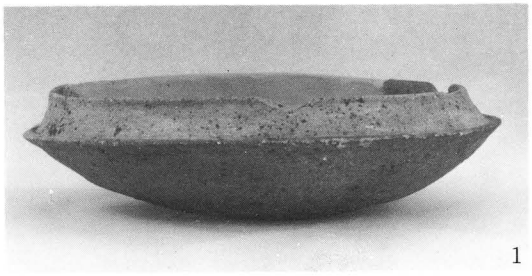
10

11

12

1～4坏蓋・5～12坏身

図版13　TN2—17　灰原内出土遺物


1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

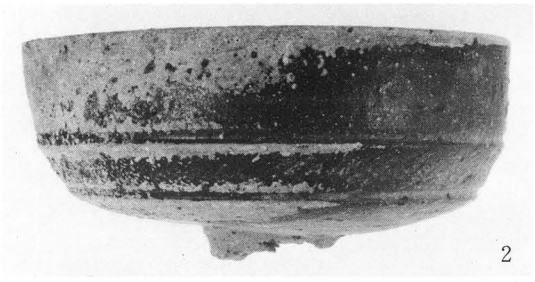
11

12

1～12坏身

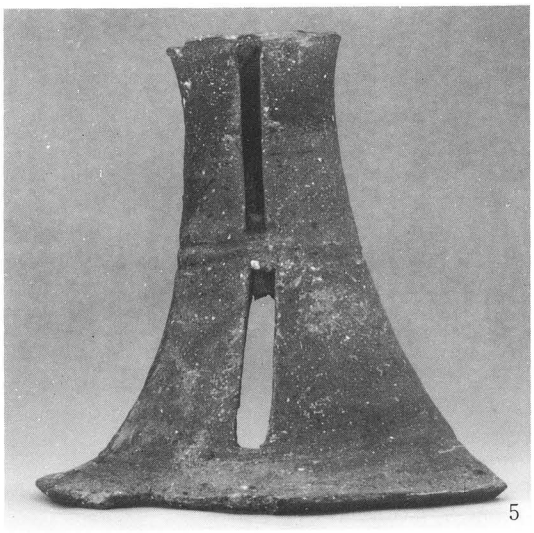
図版14　TN2—17　灰色内出土遺物

1


2

3

4


5

6

7

8

1、2無蓋高坏・3、4有蓋高坏蓋・5～8高坏脚部

図版15　TN2—17　灰原内出土遺物

1

2

3

4

5

6

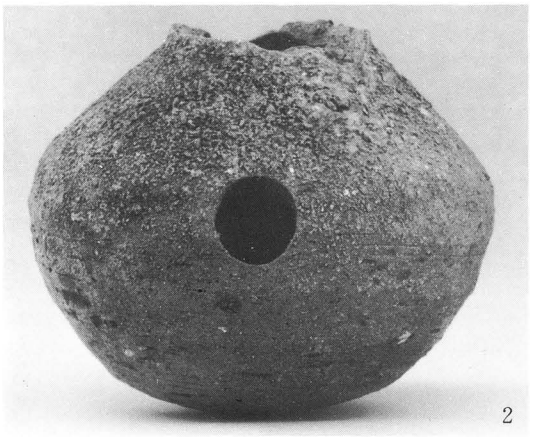
7

8

1～6高坏脚部・7、8脚台

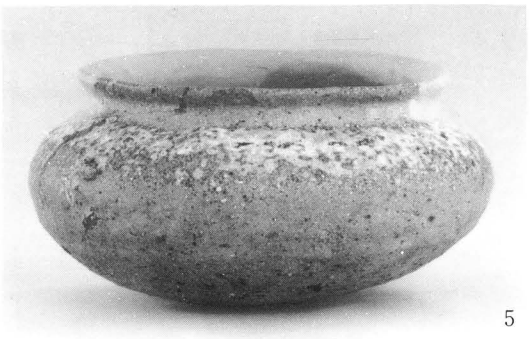
図版16　TN2—17　灰原内出土遺物

1

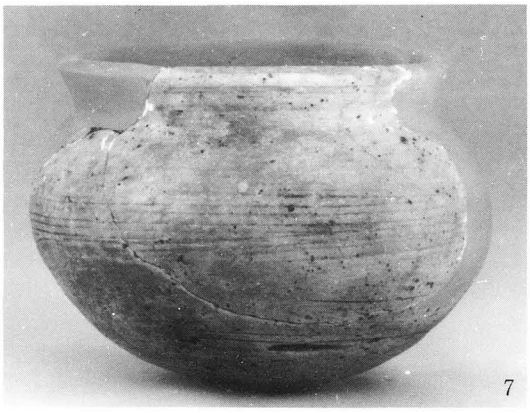

2

3

4


5

6

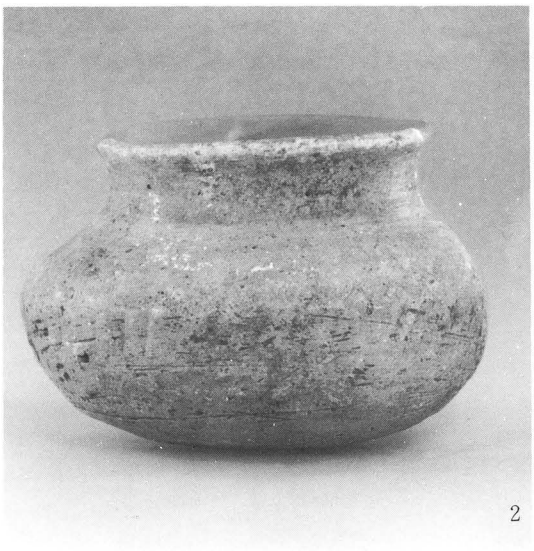

7

8

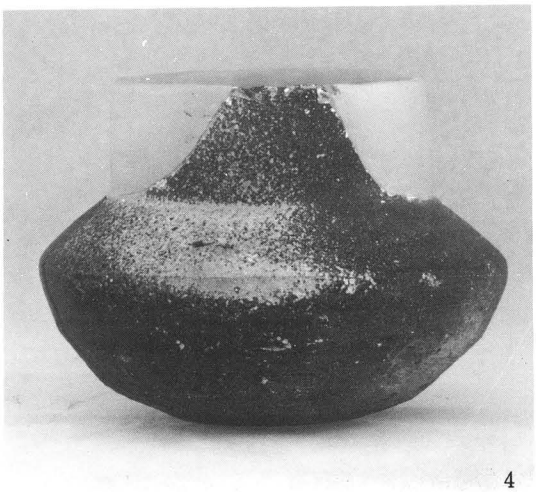
1脚台付壺・2～4瓶・5～8短頸壺

図版17　TN2—17　灰原内出土遺物

1


2

3


4

5

6

1～3短頸壺・4、6壺・5台付壺

1

2

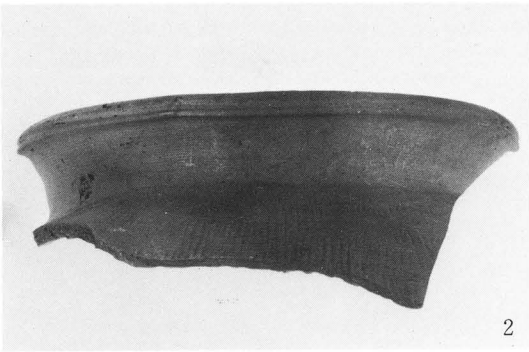
1、2提瓶

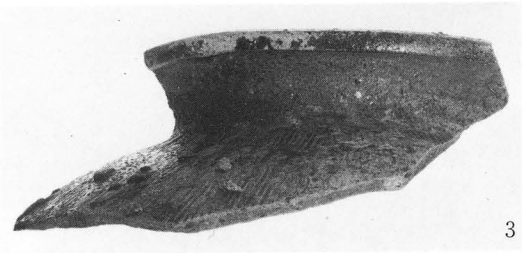
図版19　TN2—17　灰原内出土遺物

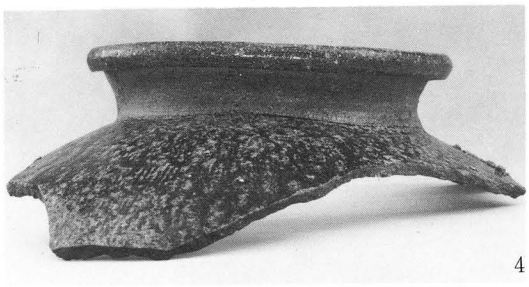
1、2横瓶・3～5ねり鉢

図版20　TN2—17　灰原内出土遺物

1


2


3


4

5

6

7

8

1～7甕・8把手付き甕

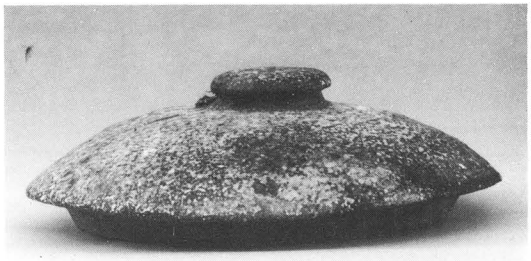
1～4 大甕

1

2

3

6


4

5

7

1長頸壺・2壺・3短頸壺・4、5蓋・6、7陶棺

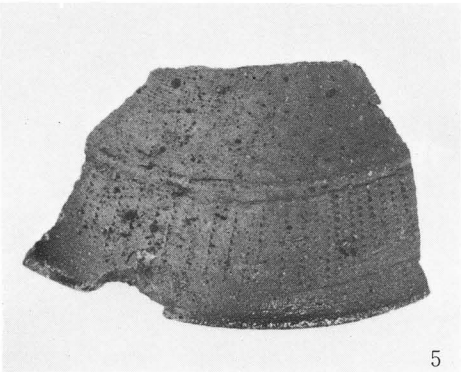
図版23　TN2—17　灰原内出土遺物

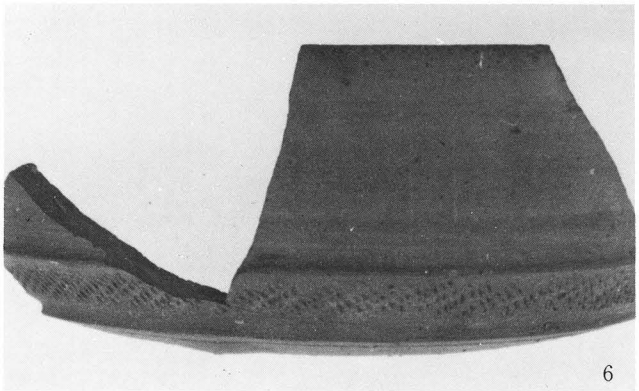
1

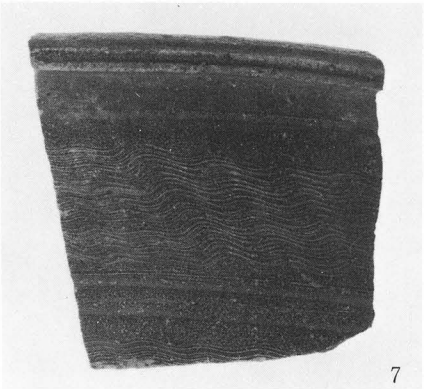
2

3

4


5


6


7

1 装飾動物・2、3 装飾人形・4～7 装飾文様

豊中市文化財調査報告　第９集
桜井谷窯跡群２―17窯
1983年３月
発行　少路窯跡遺跡調査団
編集　〃
印刷　㈱中島弘文堂印刷所